

伊場遺跡発掘調査報告書 第7冊

伊場遺跡遺物編 5

1990

浜松市教育委員会

伊場遺跡発掘調査報告書 第7冊

伊場遺跡遺物編 5

凡　例

1. 本書は、伊場遺跡で大溝と呼んだ遺構から出土した土器に関する報告書として刊行する。第2次調査から第7次調査までに大溝内第X～VI層の各上層から検出された土器に関する報告で、伊場遺跡の正式な報告書第7冊として刊行するものである。
2. 採図のうち土器の実測図は、須恵器が1／3、土師器が1／4の縮尺となることを、原則とした。判紺の性格上、一部採図については縮尺率を統一出来なかったので、土器の実際の大きさは、図中に示したスケールと土器観察表のデーターを参考にされたい。
3. 遺構図については、既刊の報告書に掲載した図に必要部分を補筆し使用するように努めた。
4. 写真図版のうち土器に関するものは全て浜松市博物館学芸員の漆畠敏が撮影し、遺構に関するものについては、発掘調査時に各調査員が撮影したものを使用した。土器の縮尺率は同一ではない。
5. 土器の復元・実測・写真撮影などの整理作業は、金児きみ子、田辺穂子、河野亞都子、名倉乙矢、金出光代、堀尾昌代、中村理恵子、横山二枝子の協力を得た。
6. 本文・土器観察表は、漆畠が浜松市博物館館長向坂剛二及び学芸員諸兄の助言を得て執筆したが、文責は漆畠にある。
7. 本報告書の遺構記号については、既刊の調査報告書に従った。
KD—住居跡 KP—小穴 KI—祭祀遺構 KT—溝状遺構 KG—井戸 KC—方形周溝墓
8. 本報告書に使用した図版・写真は、全て浜松市博物館で保管している。

伊場遺跡発掘調査報告書第7冊

伊場遺跡遺物編5

目 次

第1章 遺跡の概要

大溝の生成から古墳時代まで	1
---------------	---

第2章 古墳時代大溝内土層

第1節 大溝の生成とその層位	4
第2節 X層(D層)	5
第3節 IX層(C層)	5
第4節 VIII層	6
第5節 VII層	7
第6節 VI層	7

第3章 出土上器

第1節 記載法・出土状況について	10
第2節 観察表について	14
第3節 土器の時期分別	15
a) 須恵器	15
• A群	15
• B群	15
• C群	16
• D群	16
• E群	16
• F群	17
• G群	17
• H群	18
• I群	18
• J群	18
b) 土師器	18
イー7区出土X層上器について	18
VII・VI層出土土器について	18
• 坯	18
• 塚	18
• 皿	19
• 高坏	19
• 模倣坏	20

・鉢	20
・壺・小形壺	20
・壺	20
・甕	21
・瓶	22
第4節 地点別出土土器の概略	22
第4章 ま　と　め	23
註	61
参考文献	62
大溝内出土土器観察表（須恵器）	63
大溝内出土土器観察表（上師器）	99

表　　目　　次

表Ⅰ 時期分別群対象表	25
表Ⅱ 須恵器の地点別頻度表	26
表Ⅲ 土師器の器種別出土傾向	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図・位置図	3
第2図 古墳時代大溝実測図 ハイ周辺(北側部分)	8
第3図 古墳時代大溝実測図 A 1 6・1 5区周辺(南側部分)	9
第4図 大溝断面図(ハイ西縁)	10
第5図 大溝断面図(ハイ1区東縁)	10
第6図 大溝断面図(A 1 5 e区・ロイク)	11
第7図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土上土器(須恵器)実測図	19
第8図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	27
第9図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	28
第10図 大溝ロ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	29
第11図 大溝ロ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	30
第12図 大溝ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	31
第13図 大溝ハイ VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	32
第14図 大溝ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	33
第15図 大溝ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	34
第16図 大溝ハイ VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	35
第17図 大溝ハ・イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	36
第18図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	37
第19図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	38
第20図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	39
第21図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	40
第22図 大溝A 1 6 区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	41
第23図 大溝A 1 5・A 1 6区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図	42
第24図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	43
第25図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	44
第26図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	45
第27図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	46
第28図 大溝イ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	47
第29図 大溝ロ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	48
第30図 大溝ロ・ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	49
第31図 大溝ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	50
第32図 大溝ロ・ハ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	51
第33図 大溝A 1 5 区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	52
第34図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	53
第35図 大溝A 1 5 区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	54
第36図 大溝A 1 5 区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	55
第37図 大溝A 1 5 区・ホ区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	56
第38図 大溝A 1 5 区・A 1 6 区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図	57
第39図 伊場遺跡 遺構平面図(グリット表)	59

写真図版目次

- 図版 1 A : 大溝イ・ロ・ハ区VII層発掘状況 北から
B : 大溝ハ・VII層、イ・ロ・VII層発掘状況 北から
- 図版 2 A : 大溝ロ・ハ・VII層発掘状況 南から
B : 大溝断面 (VII層) (ハ4区付近)
- 図版 3 A : 大溝断面 (VII層) (ハ1区北壁)
B : 大溝断面 (イ・ホ区 大溝西縁)
- 図版 4 A : 大溝A 15・16区VII層発掘状況 北から
B : 大溝イ・ホ・A 15・16・VII層発掘状況 南から
- 図版 5 A : 大溝A 15・16・VII層発掘状況 北から
B : 大溝A 16区VII層発掘状況 北から
- 図版 6 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 2 ~ 18
- 図版 7 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 19 ~ 35
- 図版 8 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 36 ~ 68・70
- 図版 9 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 69・72 ~ 107
- 図版 10 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 108 ~ 146
- 図版 11 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 149 ~ 180
- 図版 12 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 195 ~ 218
- 図版 13 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 225 ~ 256
- 図版 14 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 257 ~ 284
- 図版 15 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 287 ~ 314
- 図版 16 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 316 ~ 346
- 図版 17 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 348 ~ 380
- 図版 18 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 381 ~ 416
- 図版 19 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 419 ~ 454
- 図版 20 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 461 ~ 498
- 図版 21 大溝VII・VIII層出土土器 (須恵器) № 500 ~ 511 (土師器) № 1
- 図版 22 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 4 ~ 20
- 図版 23 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 21 ~ 37
- 図版 24 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 38 ~ 49
- 図版 25 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 50 ~ 57
- 図版 26 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 58 ~ 71・73
- 図版 27 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 72 ~ 74 ~ 83
- 図版 28 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 84 ~ 96
- 図版 29 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 100 ~ 124
- 図版 30 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 125 ~ 148
- 図版 31 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 150 ~ 203
- 図版 32 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 221 ~ 300
- 図版 33 大溝VII・VIII層出土土器 (土師器) № 304 ~ 309

伊場遺跡発掘調査報告書第7冊

伊場遺跡遺物編 5

第1章 遺跡の概要

大溝の生成から古墳時代まで

伊場遺跡の概要については、既に刊行されている6冊の正式報告書や概報で、詳しく述べられている。今回の報告書は、遺跡内を貫流する“大溝”内で検出された土器について記述する。したがって本草では、主に遺跡内の大溝の形成に係る点に注目し遺跡の概要を述べることとする。

伊場遺跡は、浜松市の南端に遠州灘に沿って形成された“海岸平野”的三方原台地寄りに立地している縄文時代晩期から縄文時代にかけての複合遺跡である。この伊場遺跡が営まれたこの平野は、沖積性になって形成されたもので、現海岸線と平行した砂の高まり（砂丘→砂堤列）の発達した東西に連なる特徴的な『海岸平野』として知られている。

更新世末、三方原台地形成後の相対的な海水準の上昇が、台地南端の浸蝕=海食崖の形成と海中への砂礫堆積による遠浅海岸の形成へと進んだとされている。この遠浅海岸の海底には、波浪や潮流の宮力によって海岸線に平行な凹凸が形成されて発達し、海面上に砂堤列を作るまでに至った。この砂堤列は三方原台地から現海岸線までの間に6～8列が作られた〔最終水期（2～1.8万年前）～縄文海進（5～6,000年前）〕。その後の海水準の低位化によって遠浅海岸は陸地化し、砂堤列は砂丘状の微高地となり、砂堤列と砂堤列に挟まれた相対的低地は『潟』から『湿地帯』へと変化した。

この遠浅海岸の陸化は、単に海水準の相対的低下や、波浪による浸蝕と堆積だけではなく内陸河川（占天竜川＝馬込川）の運んだ土砂による埋積も関与している。隣接する国鉄工場内遺跡の調査では、三方原台地の海食崖に接して形成されている第1砂堤列と第2砂堤列の間の堤列間湿地で、粒子の細かな川砂によって埋積された土層を基盤層にして弥生時代中期の遺跡（梶子遺跡）が立地することが知られる。梶子遺跡の調査では、後期縄文土器一片が検出され、伊場遺跡では晚期縄文土器も検出されている。このように堤列間湿地の陸化は、かなり早い時期に進んだことが、近年の伊場遺跡の周辺の調査から知られるようになった。遠州灘沿岸の遠浅海岸は、砂堤列地形が形成されて以後、海水準の汎世界的な変動だけでなく、内陸河川による堆積物の埋積とあいまって陸地化が進行し、古墳時代前期には現在のような海岸平野地形が完成したと考えられている。（註1）

帶状に続く砂丘や砂堤列（砂地の高まり）は、現在でも、浜名郡可美村や浜松市新橋町・堤町・米津町等、浜松市街の南部で帶状に続く集落地として確認できる。砂堤列に挟まれた低位の地形は堤列間湿地と呼ばれ、現在でも水田耕作地となっている。戦前の地形図によると浜名郡可美村や浜松市新津町には、「蓮池」や「沼田池」と呼ばれた沼地が表記されている。この地点が“堤列間湿地”にあたる。遠州灘の海岸平野が形成される過程でかつての海面が取り残されてしまったものである。このように砂堤列上には集落が形成され、堤列間湿地は沼地や湿地となって、今日にまでその影響を残していたことが知られている。

第1図で知られるように、各時代の遺跡の分布状況も海岸平野の地理的状況に影響されて立地する。海食崖下の第1砂堤列上には、八反田遺跡（古墳時代後期）、下山田遺跡（古墳時代前期）・第2砂堤列上には伊場遺跡（弥生時代後期～室町時代）、城山遺跡（弥生時代後期～室町時代）、長島遺跡（平安時代？）・第3砂堤列上には村裏遺跡（奈良時代）、東岩林村東遺跡（奈良時代）さらに南の砂堤列上には堤町東遺跡（古墳時代前期）、新橋村東遺跡（古墳時代前期）、田尻古墳（古墳時代後期）等が立地する。海岸平野として陸地化して後、人々が農耕生活を営む上で、砂堤列間の湿地に牛廻の場を求め、微高地として残った旧砂堤列上に集落を築く生

活を続けたことは容易に推定できる。

次に、伊場遺跡の微地形についてみる。人々が最初に「伊場」を開拓し本格的な集落を築いたのは弥生時代中期である。旧砂堤列の砂層や、一部内陸河川の堆積物によって埋積された旧堤列間湿地の砂質粘土層を基盤層とする集落を築き、周辺部に残された低湿地（旧堤列間湿地）を生産の場として農耕生活を営んだ。その後、弥生時代の生活面や、生産の場として残った低湿地（旧堤列間湿地）も、洪水等による内陸河川の堆積物で埋積されてしまう。そしてさらにその後の海水準の変化は、埋積土層の堆積した旧堤列間湿地をも陸地化してしまう。この結果旧砂堤列は、そのほとんどが新たな埋積土層下に埋没してしまい、旧砂堤列上の微高地が砂層の高まりとして島状に残る地形へと変化した。こうして新たに作られた地形の上に古墳時代中期の集落や、律令時代の遺構が営まれたものである。伊場遺跡は地形的には、このように弥生時代の遺跡立地と古墳時代中期以降の遺跡立地の二つに分けて見ることが必要である。

大溝と呼んだ「道溝」は、伊場遺跡を東西に一分して北西から南東に貫流し、東海道本線の南側で東に大きく蛇行することが9次調査までの所見によって知られている。この大溝をめぐっては人工の溝か、自然河川の名残りか論議されたが、『伊場遺跡発掘調査報告書第2回』の加藤芳郎所見により「自然流水の浸蝕で作られた」溝とする見解が妥当なものと考えている。

現在では埋没してしまっているが、遺跡の基盤層である砂層（砂堤列）の状態を見ると、東西に続く帯状の砂丘にも高低差があり砂堤列が鞍部状に低くなる部分があることが知られる（註2）。弥生時代が栄えた頃には帶状の砂堤列によって画された低湿地が広がり水稲栽培が行われるのに適した地形であったと推定される。また、海岸線と平行するような砂堤列の発達した海岸平野にあって、砂堤列の高まりを寸断するこのような鞍部は、陣水などの増水時には後方の堤列間湿地から前方の堤列間湿地へ向けての「排水路」として機能したものと考えられる。

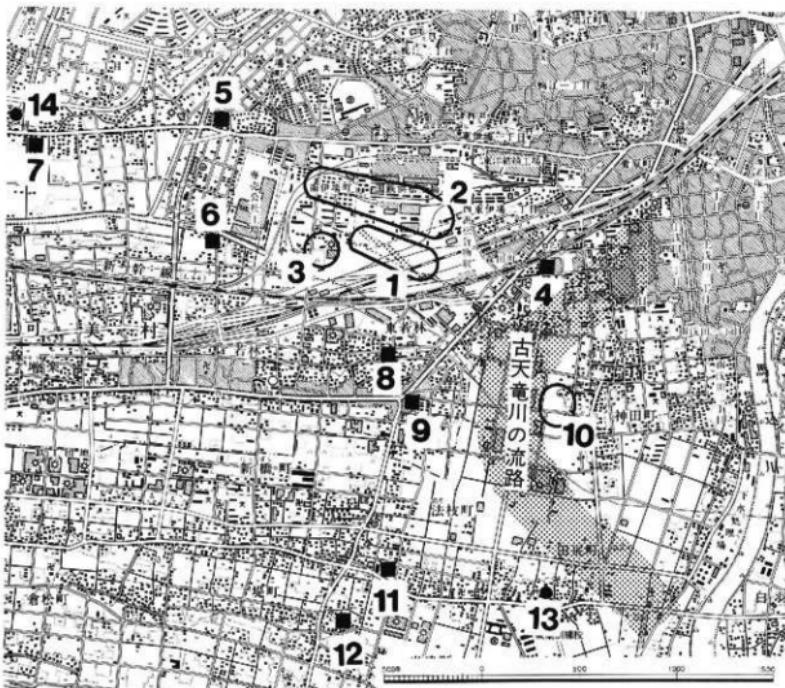
加藤の所見によれば、こうした遺跡内に見られる地形的な変化の特徴から、弥生時代には、東西に細長い旧砂堤列の鞍部が溝状凹地となっていて「溝」としては存在しなかった。古墳時代前廟の海水位低下、その後の海水位上昇という変化が想定されることから、古墳時代前期にこの凹地の部分に浸蝕が始まり「大溝」が「自然流水の浸蝕で作られた可能性」が考えられるとしている。さらに溝内に見られる、小枝の流入や偽層が目立ち大溝下半の土層を切込んで堆積しているV層以下（Ⅳ・Ⅴ層等）の上層は、「古墳時代前期から海水位の低下が始まり、同中期ごろ最も盛ってそのため生じた浸蝕力の復活で、急な水流が渦状の浸蝕を行いつつその末期に砂層を堆積させた」としている。さらに砂堤列を横断し堤列間湿地を繋ぐ「大溝の形成が始まり排水がよくなるにつれてB・C層（堤列間湿地に埋積した内陸河川の堆積物）の乾燥、固化が始まり、居住条件がととのって来たため古墳時代から律令時代にかけての大規模な遺構群の造営が可能になった」（註3）とし、大溝の形成とその後の遺構群の成立を考えている。

海岸線に平行に発達して形成された旧砂堤列も、現在市街地となっている伊場遺跡の東側の沖積平野部では確認されない。これはその後の古天竜川の流路の変遷に際し、浸蝕や堆積物による地形的変形で消滅したものと推定される。第2砂堤列は伊場から森田町（森田遺跡）まで、第3砂堤列は可美村東岩林付近まで、第4砂堤列は法枝町から田尻町にかけてまでで、それ以後までは統かない。これは、本来さらに東にも続いていた砂堤列が、古天竜川流路がある時期、現川込川より西側寄りに流下し、その營力によって浸蝕された結果と考えてよい。現在も春日町から神田町にかけて南北に長く点在する集落は、こうした古天竜川の左岸に形成された自然堤防か中洲のような微高地に営まれた集落と推測される。この微高地上には、先述したように神田町遺跡（奈良時代）が立地している。このような地形的な状況や現在の集落景観から、既刊の報告書では、かつての古天竜川の流路を森田町から可美村の東岩林—法枝町・田尻町へと曲流し東向きに流れたと推定し、第1図のように示してある。（註4）

9次調査の所見によれば、大溝は東海道本線の南側で大きく東に曲流することが分っている。この部分は地形

的には伊場遺跡や城山遺跡の乗る第2砂堤列と東若林村東遺跡・村裏遺跡などが乗る第3砂堤列に挟まれた旧堤列間湿地にあたる。この堤列間湿地に接する可美村の増葉・若林・東若林と続く集落が存在する第3砂堤列は、現在国道1号線・新幹線が走っており幅も広く比較的安定した砂堤列であることが分る。伊場遺跡を貫流した大溝は、この安定的な第3砂堤列を南北に突破することができます、砂堤列に遮られるようにして、開口部を求めて東流し、先述した『古天竜川の流路』へと流れ下ったと推測される。

こうして遠州灘にそって発達した海岸平野は、古天竜川が搬入した土砂に埋積されながらも、旧砂堤列地形の影響を今日にまで長く残しつつ変貌していったこととなつた。『大溝』も、言わば、必然的にそうした砂堤列地形に影響されて流路が決められ、その流域に沿つて、それぞれの遺跡が形成されたものと言える。



第1図 遺跡分布図・位置図

伊場遺跡周辺の遺跡

1. 伊場遺跡	弥生時代後期～奈良平安時代	8. 村裏遺跡	古墳時代後期～奈良時代
2. 国鉄工場内遺跡	弥生時代中期～奈良平安時代	9. 東若林遺跡	奈良時代
3. 城山遺跡	古墳時代末～奈良平安時代	10. 神田遺跡	奈良時代
4. 南消防署遺跡	弥生時代後期	11. 新橋村東遺跡	古墳時代前期
5. 下山田遺跡	古墳時代前期～中期	12. 堤町村東遺跡	弥生時代末～古墳時代前期
6. 長島遺跡	平安時代？	13. 田尻古墳	古墳時代後期
7. 八反田遺跡	古墳時代後期	14. 入野古墳	古墳時代中期

第2章 古墳時代大溝内土層

第1節 大溝の生成とその構造

遺跡の西側を緩やかに曲流して貫流する大溝は、東海道線の南側で大きく東に流路を変える。当初大溝は『泥炭質の粘土層』からなる幅15m深さ2m程の律令時代の『水路』と考えていた(註5)。それがその後の調査で泥炭質の粘土層より下層で古墳時代土器の包含層が確認された。大溝は調査区の北側では西に、南側では東に流路が偏り、緩やかに曲がりながら流れている古い古墳時代の流路(初期の大溝)があったことが知られるようになった。その後、流路も変わらリ律令時代には、当初考えたような緩いS字状の流路を取るようになってしまったものであった(註6)。古墳時代～律令時代への流路の変遷を図示したのが第2図右上・第39図であり、大溝を基底面まで掘り下け埋積上層を図示したのが第4・5・6図である。

第6図の断面図のように、初期の大溝(VII層形成時)に比べて律令時代の大溝(IV・V層形成時)が北側では西に、南側では東に寄って流れた様子が良くわかる。

静岡県の調査による『地質調査報告書』が、砂礫層の連なりが浜北市から国鉄浜松駅の周辺にまで確認されることから、古天竜川の旧川床がここまで続いていることを指摘している。このことから、発掘調査報告書第4図では、伊場遺跡周辺の旧堤列間湿地等に堆積した川砂や粘土について「…略…川砂の供給先が古天竜川であったと推察できる。潮流の関係からして、天竜川から海へはきだされた土砂は、通常東へ流れはずであるから、西へ川砂が運ばれたのは、第2砂堤列がある程度形成された後のことと思われる。また、土砂を運ぶにはかなりの水量が流れはずであるから、水は第2砂堤列を乗り越えたか、あるいは分断させてしまったものと考えられる。前述のように、大溝の周辺部は標高-30cm以下の低所となっているので、当然そこを水が流れただものと思われる。』と推定している。つまり、台地に入込んだ谷地形の部分で、砂堤列は谷口をふさぐ砂州となっている様子は第1図を見れば明らかであるから、背後の台地から供給される堆積物で、谷地形はもとより、台地よりの堤列間湿地も埋積され、大溝もそうした膏力の一環として形成されたと考えたものである。

旧堤列間湿地が内陸性の堆積物(川砂)によって埋積され、陸地化して弥生時代中期集落の基盤層になった。その後、弥生時代後期にかけて旧砂堤列地形をベースとした稻作栽培に適した地形の条件下で集落規模も大きくなり伊場遺跡周辺は、非常に栄えた様子が伊場遺跡や国鉄工場内遺跡等からの出土遺物や遺構から知られる。そしてさらにその後、弥生時代後期末に、海水準の変化とあいまって遺跡全体が粘土層で覆われ集落が廃絶したことと既刊の報告書で述べられたとおりである。この「粘土」は、C層と呼んだ青色粘土層で、発掘調査では遺跡のほぼ全域で検出され、厚さ70cm以上も堆積している地点もある。

いずれにしろ、弥生時代(梶原遺跡)の基盤層となった堤列間湿地を埋めた川砂や弥生時代末期に遺跡全体を覆って集落を廃絶させた青色粘土層(C層)も古天竜川等の内陸河川の流水や洪水の膏力によるものと推定される。内陸河川の自然の膏力によるその後の上層の堆積や地形的な変遷に、大溝の生成が大きく作用した。大溝は、弥生時代にあった旧砂堤列の溝状凹地(鞍部)が、自然流水によって開削された溝であったことは先に述べたが、自然河川による粘土層(C層)の堆積と固化(陸地化)、さらに大溝の生成が同時進行的に進んだものと考えられる。加藤の指摘によれば、大溝の生成とその急速による排水作用が、海水準の低下とあいまって、このC層自身の陸化傾向を促進させ古墳時代～律令時代の遺構基盤となつたことになっている。

このC層の堆積と陸地化は、古墳時代中期(5世紀中葉)には、すでに完了していたと考えられる。それは西部地区と呼んだ大溝の沿岸には、5世紀後半代の住居跡や祭祀跡が作られている。したがって5世紀後半には、すでに居住可能なまでに安定的な土層となっていた必要がある。このように初期大溝の開削とC層の堆積と固化は、伊場遺跡周辺にあっては弥生時代末期から古墳時代にかけて短期間に成されたものと考えざるをえない。

こうした大溝の生成を第4・5・6図の断面図によって見る。大溝の奈良時代層(V層)の下位で古墳時代の

上器の包含層（Ⅶ・Ⅷ層）が検出され、さらにこの包含層以下に弥生時代文化層（X）層へと整合的に連続する土層（IX層）も検出されている様子が分る。

第2節 X 層（D層）

第4・5・6図で見るよう、大溝の中心部では、堆積層の最下面の下に、基盤層となる砂層が見られる。これは言うまでもなく大溝形成以前から存在する砂層であり、大溝最下面によって削り取られた状況が、大溝の浸蝕による結果だったことは一日にして理解される。かつての植物の根が、鉄分を含んで管鉄となったものが垂直に林立して見られる純砂層で、旧砂堤列を構成する砂と考えられる。

人溝流路の両縁側では、この純砂層の上部に黒色砂層があり、さらに黒色砂層の上部には、泥炭層・青灰色・暗灰色・有機質粘土等の土層（IX層）が順次水平堆積して大溝の縁となっている。

この黒色砂層は、その上位に発達した泥炭層による影響で、砂堤列を形成している砂丘の砂や、提列間湿地を埋積した川床性の砂が黒色となっているものである。この泥炭層を含め黒色土層に接して検出される有機質粘土は、堆積する場所によって発達（厚薄）の差や泥炭に近いものから有機質粘土に近いものまで土質の差はあるが、D層とした弥生時代の文化層にあたる。D層は、伊場遺跡～国鉄工場内遺跡にかけて広く分布する上層で上器等の包含層となっている。

このD層は、大溝の土層調査でX層として確認した第5図の11～14や、第4図の弥生時代面とした暗灰色粘土層（2）にあたる。こうしたD層の黒色土層を中心にして上に接する弥生時代の文化層に対応する土層群は大溝東岸では第6図Aの45～49、第6図Bの33～37の泥炭層・白色粘土層・黒色砂層・有機質粘土層等である。大溝の西岸でこうした土層に対応する層群は、第6図Aの40～42、第6図Bでは40～41にあたる土層群である。

第3節 IX 層（C層）

大溝の古墳時代の堆積層の下に、弥生時代文化層に整合的に連続する土層がIX層である。第5図では1～10、第4図では11～15がこのIX層にあたり、人溝縁の斜面に添うようにして堆積している。こうした層は、第6図Aの大溝西縁の38灰黒色粘土層や、第6図Bの大溝東縁30・31の青灰色粘土層として確認した上層に対応するものである。第6図Aで大溝縁の立上がりははっきりせず、断面図では破線のように示したが39の青灰色粘土層の中に縁の立上がり線が入って来るものと推定できる。つまり38の灰黒色粘土層と39の青灰色粘土層は同一層位の範囲でとらえ、いずれもIX層と想定することが許される。第4図の大溝縁の立上がりも同様に分明でない点があるが、X層（D層）と大溝の切合から、1の青灰色粘土層の中に溝縁が立上がっていくことが推定できる。したがって1と11～15も同一土層の範囲と考えられる。

第6図Aの大溝西縁の39の青灰色粘土層や、人溝東縁の41の青灰色粘土層は、もともとC層と呼んだ、弥生時代の文化層（D層）を復すように堆積した粘土層である。したがって大溝縁部分に堆積しているIX層はC層に対応するものと考えている。このC層は、遺跡全体で広く確認される土層で、IIM砂丘面が低位となる大溝西側での堆積は顕著に発達している。伊場遺跡の弥生時代集落は、洪水に伴って堆積したと思われるこのC層に覆われて廃絶したと考えていることは先に述べたとおりである。（註7）

IX層（C層）の堆積状況を4ヶ所の断面図で見ると、第6図Aの西縁、第6図Bの東縁、第5図の東縁、第4図の西縁では、いずれも大溝の縁斜面にそって大溝の内側に向かって傾斜した堆積土層となっていることが分かる。

ただ第6図Aの東縁と第6図Bの西縁ではC層と考えられる44・45の青灰色粘土は水平堆積している。C層が水平堆積している部分では、いずれも古墳時代末～奈良時代の時期の大溝縁が、C層を削り取るようにして接している。これは古墳時代末～奈良時代の時期（Ⅵ～V層の堆積期）に大溝流路が第6図Aでは東側に、第6図Bでは西側に寄って流れ大溝縁を浸蝕した結果と考えてよい。

のことから、初期大溝は砂丘（砂堤列）間の地陥部を開析して流れ、溝状窪地をしていた。その後、IX層（C層）が、遺跡全体を覆うようにして広範囲に堆積した。その際、初期大溝部分では、溝縁の斜面に添うように（溝の中心部に傾斜して）、IX層（C層）が堆積した。さらにその後（古墳時代末～奈良時代）流路が、発掘区北側では西寄りに、南側では東寄りに変化し、溝縁を浸蝕した。その浸蝕が、初期大溝斜面に添って堆積したIX層（C層）を削り取ってしまった。したがって、現在確認される形状は、第6図Aの西縁、第6図Bの東縁、第5図の東縁、第4図の西縁では、本末の溝の内側に向かって傾斜したIX層（C層）の堆積が残され、第6図Aの東縁や第6図Bの西縁部分では、流路の変遷が、この傾斜堆積したIX層（C層）を部分的に浸蝕した結果と考えた。

このように、旧砂堤列、X層（D層）、IX層（C層）の堆積及び浸蝕等の地形的変化、さらに大溝内の堆積土層の相互の関係を考えたとき、大溝の形成には、海水準の変化や内陸河川の自然の嘗力によるものと根拠とすることが、より妥当性をもった理解と考え『大溝は自然の河川』と結論付けた。（註8）

第4節 VIII層

第6図で見るように、律令時代の大溝の下位に堆積している層で、第6図Aでは東側を、第6図Bでは西側を律令期大溝で削り取られている。堆積層はかなり厚く2~2.5m以上となる部分もある。第6図Aでは26~37、第6図Bでは17~28の各土層群がこのVIII層にあたる。27微砂質暗灰色粘土の互層・30微砂質青灰色粘土の互層・32灰色砂質粘土・19暗灰色含有機物粘土層と青色微砂質粘土の互層・21含有機物粘土層と砂層の互層・22微砂質含有機物粘土層の互層・24青色微砂層と断面図に表記されているように、粒子の細かな砂、微砂質粘土、有機粘土等が、それぞれ重なり合ったり、相互に切合ったりした偽層の目立つ土層の構成となっている。

VIII層全体は、先述のように厚く発達した層であり、構成する土質からさらに細分可能である。VIII層上部で、暗灰色の微砂質粘土を主体とする土層をVIIIa層とした。第6図Aでは26~29、第6図Bでは17~20の各土層がVIIIa層にあたる。VIIIa層の下位で微砂質の有機粘土を中心とした土層をVIIIb層とした。第6図Aでは30~34、第6図Bでは21~27がVIIIb層となる。さらに下位で大溝最下層を構成する、粒子の粗い砂層をVIIIc層とした。第6図Aでは35~36の砂層、第6図Bでは28の有機粘土と砂層で互層を構成している土層がこれにあたる。

このVIII層中で、杭列（KF2）が検出されている。ほぼ等間隔で打込まれた杭に横木を渡した杭列で、大溝岸斜面に長さ12mに渡って確認された。杭列の作られた位置が、大溝の縁寄りにあったことから護岸用の木柵列と考えている（註9）。この柵列のある岸沿いには、住居跡・祭祀跡・方形周溝墓・高床式倉庫？（註10）が検出されている。木柵列の内側で検出されたVIIIc層の年代が、これ等岸沿いの遺構群と同時期と推定されるため『発掘調査報告書第2回』では、岸近くに存在する住居跡等に対する護岸用の木柵列と考えている。

VIII層からは、土師器や須恵器が検出されるが、何らかの遺構に伴って集中的に検出されること無かった。VIII層を包含層とした土器の検出であり、溝内には、先述したKF2以外に、この時期の遺構は発見されていない。第39図に示したように、この時期には大溝沿いに住居跡・祭祀跡・方形周溝墓・高床式倉庫？等が多数検出されている。したがって、VIII層内で発見される多くの遺物は、こうした遺構群から供給されたと考えている。

また、KT201が大溝と接する地点では律令時代の削立柱遺構がある。これら遺構群の保護を考慮して、この部分は発掘せず、KT201内の堆積土層と大溝VIII層との関係を直接的な断面観察によって確認してはいない。しかし、平面的な位置関係や土質から、KT201内に堆積した上部層の微砂質粘土層が大溝内のVIII層との対応が考えられている（註11）。旧堤列間湿地等に堆積している川床性の砂や古天竜川の氾濫等に伴って運ばれた土砂が、大溝に流入するKT201等の小溝を介して大溝内に堆積したことが想定される。

第5節 VII 層

粘土と砂が互層となり偽層の発達した下位の堆積層と類似した堆積土層となっている。しかし、VII層では、粒子の粗い砂層であり、木葉、木片、流木等の植物遺体が分解しないで説入するが多く、厚さが1mにも及ぶ部分もあり堆積層と同様に発達した堆積層と言える。こうした粗い砂、粘土、有機粘土が、雜多に入り乱れ木片、流木等の植物遺体が混入する堆積状況から、かなり強い流水に伴った堆積（浸蝕）による土層形成の結果と考えられている。

発掘条件の良かったA15区では、第6図Aに示すような上層として観察された。それによれば、20灰色砂混じり粘土層・21灰色砂層・22灰色含有機物粘土層・23暗灰色砂層・24泥炭層の塊・25暗灰色含有機物粘土層がVII層を構成している土層群である。第6図Bでは、発掘条件が悪く、断面観察により明確に分層しなかったが、“16砂層と暗灰色含有機物粘土層の互層”がこのVII層に対応する土層群と考えられる（註12）。こうして検出したVII層を、上から順に、VIIa層：20灰色砂混じり粘土層、VIIb層：21灰色砂層、VIIc層：22灰色含有機物粘土層、VId層：25暗灰色含有機物粘土層、として分別して発掘した。発掘調査時の所見によればVIIa層：20灰色砂混じり粘土層・VIIb層：21灰色砂層・VIIc層：22灰色含有機物粘土層は、須恵器第IV期前半（遠考研編年）の土器群を主体にした包含層であり、23暗灰色砂層・24泥炭層の塊・VId層：25暗灰色含有機物粘土層は、須恵器第III期末の上器群を主体に出土した包含層と考えていた。

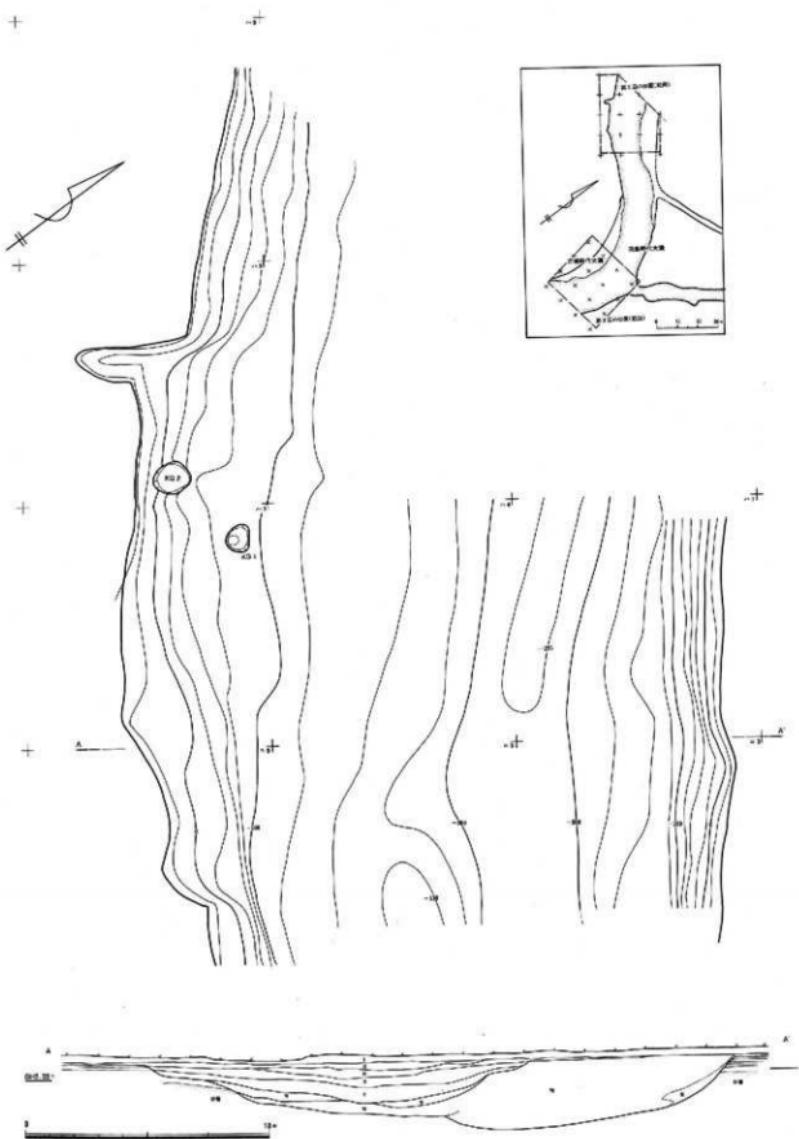
また、大溝内のVII層では、KF1・KG1～KG3等の遺構が検出されている。大溝の外では、東部地区と呼んだ砂丘が高くなった部分（弥生時代の環濠の取巻く部分）で古墳時代の住居跡が、大溝内のKG1・KG2に接近したツバ周辺では溝状遺構が、この時期に該当する遺構群である。大溝内で検出されたKF1・KG1～KG3等の遺構規模は、それ程大きくもなく、安定的でもない。したがって、大溝内のVII層で検出される土器が、全て大溝内の遺構から供給されたものとは考えられない。必ずしも、有機的な関係を示し得ないが、他に同時期の遺構として確認出来るものが見当たらないので、こうした大溝の周囲に作られた住居跡や溝状遺構、生活の場とした人々が、VII層内に包含する土器の供給源と考えざるを得ない。

第6節 VI 層

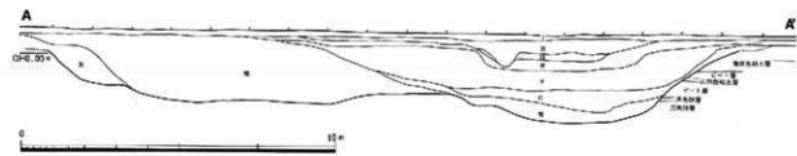
V層の下部で大溝の全面に渡って厚さ2～5cmに堆積した砂層で、須恵器や土師器の細片が検出されたと報告されている上層である。大溝内に堆積した上層のうち、上部土層は泥炭質の強い軟土層であった。発掘調査に際して、掘り進んで行くと、最初に検出できる粒の粗い砂層であったため、堆積土層を分離する上で、メルクマールとしていた砂層である。当初は、大溝の初現をV層の時期（奈良時代）と想定していたので、V層直下の砂層（VI層）を「奈良時代官衙营造直前に、急激なる砂の流入があり、同時に泥じり込んだもの（註13）」と考えていた。その後この砂層の下位に、先述した砂と粘土が互層となる古墳時代の包含層（VII層）が検出された。

大溝内の土層堆積状態は、このように7世紀中葉を境に（VI層を境に）、下層では砂・砂質粘土・有機物（泥炭や小枝等の植物遺体）の互層＝偽層の目立つ上層（VII・VIII層の各上層）と、上層の泥炭質一色となる土層（II・III・IV・V層の各土層）に大別され、大溝の流水の状況にかなりの差異があったことが伺がれる。VI層の砂層は、この大別の中間に位置し、発掘調査では指標となる層としての機能を果たしていたと言ってよい。

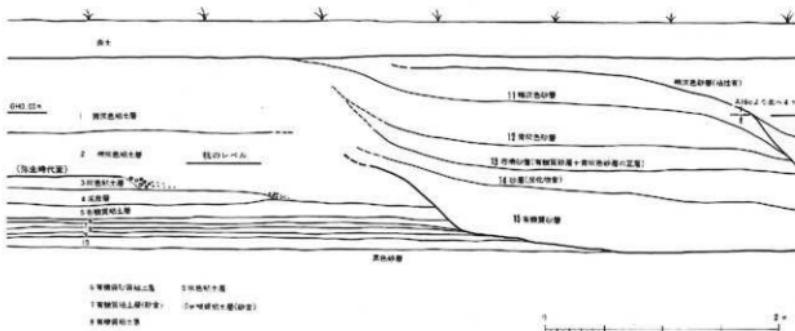
第6図Aでは、19の灰色砂層がVI層にあたる。第6図Bでは発掘条件が悪く、堆積状況が薄いVI層相当層を直接的に分離できなかったが、16の“砂層と暗灰色含有機物粘土層の互層”とした土層のうち、砂層のある部分がこのVI層に該当すると考えている。このVI層は、基本的には、厚さ2～5cmで、V層直下の大溝全体に薄く堆積した無遺物層と考えている。時に土器片等が検出されるが、それらの出土状態はVI層の上下にある包含層からの粉込みと考えられる。



第2図 古墳時代大溝実測図 H区周辺（北側部分）

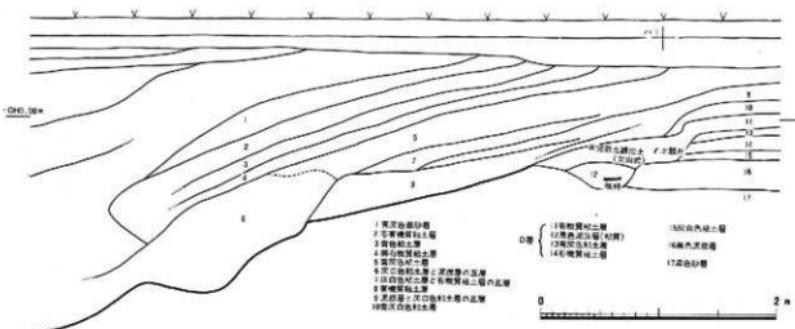


第3図 古墳時代大溝実測図 A16+15区周辺（南側部分）



第4図 大溝断面図（本区西縁）

*断面の位置は第39図参照



第5図 大溝断面図（ハ—1区東縁）

*断面の位置は第39図参照

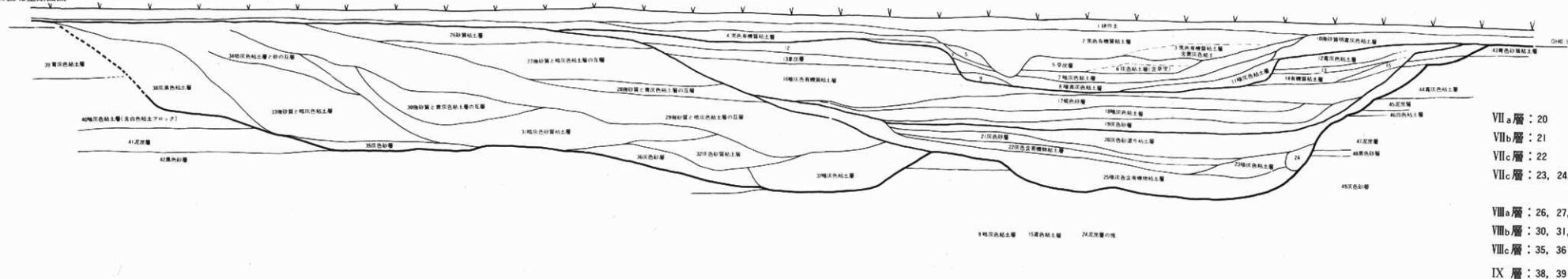
第3章 出 土 土 器

第1節 記載法・出土状況について

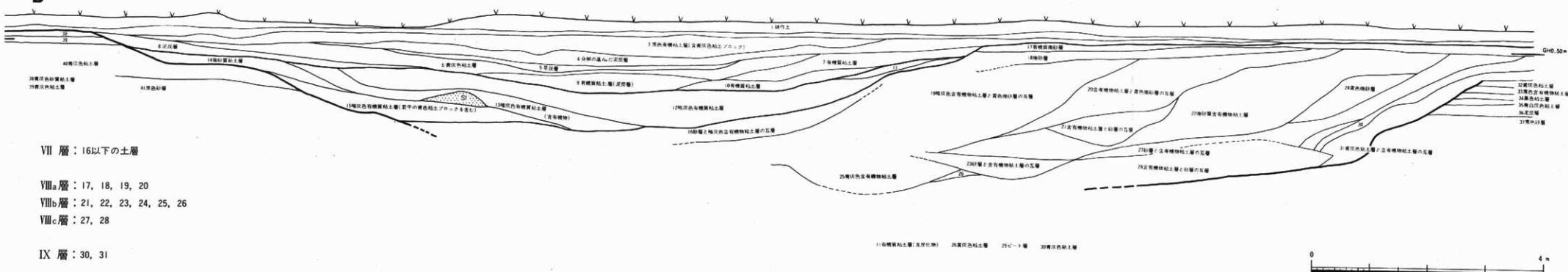
遺跡を南北に曲流する大溝内ではⅠ層～Ⅹ層までの堆積土層が確認されている。大溝の堆積層は、7世紀中葉を境に上層と下層で堆積状況が大きく変わることは先に述べた。今回は、主に“初期大溝”と呼んだ部分も含め、下層の古墳時代の堆積土層から出土した土器について報告する。対象となるべき上層は、X層～VI層までである。大溝の存在を確認したのは、第3次調査以降だが、全体としては、概略、深さ3m、幅20m、長さにして150mの大溝を第7次調査までに発掘したことになる。このうち今回対象としたX層～VI層にかけて出土した土器でも、全体ではかなりな量となっている。

第39図の平面図からも推定出来るように、ロ・ハ区、A15・16区等で古墳時代大溝の堆積土層が比較的安定的

A-A15e区北壁断面図



B一口区北壁断面図



第6図 大溝断面図(A15e区・口区)

であり、大溝発掘区の中ほどでは、奈良時代以降の流路によって浸透された部分が多い。また、VII層の堆積は奈良時代の流路とはほぼ重なり合うが、包含した土器について見ると、ロ・ハ区やA15・16区等の検出状況が良好であった。また、貫流する大溝の中ほど（イ・ホ区）では律令時代の掘立柱遺構の保存の意味もあってVI・VII層にあたる古墳時代の堆積土層は未発掘のまま残された。したがって、本報告では、発掘調査区の中でも、大溝の北端（ロ・ハ区）と南端（A15・16区附近）から出土した土器群についての記述が多くなる結果となった。

X層～VI層にかけて上器の出土状況についてみると、VI層は基本的に無遺物層である。また、X層は、東部地区のD層にあたる弥生時代の文化層であり、IX層はC層に対応し古墳時代の初頭の文化層である。しかし、今回の報告の対象となる大溝付近では、両層ともに上器を包含することは皆無に近く、見るべき遺物は無かった。したがって土器に関する報告は、VII・VIII層出土の土器がほとんどである。ちなみに、土器の総数は約1000袋（約40cm×35cmのボリ袋）、VII層約700袋、VIII層約250袋、VI・IX・X層約50袋、と膨大な量となった。

伊場遺跡の古墳時代の土器の9割以上は、この大溝内の堆積土層から検出したものである。大溝以外の伊場遺跡内の古墳時代遺構から出土した土器は、全体では1割に満たない量である（註14）。さらに、大溝内で明確に古墳時代の遺構として確認できるものは、井戸と杭列しかなく、こうした大溝内遺構に伴った土器にしても、量的にもさほど多くはない。大部分の大溝内出土土器にしても、ある意図を以て大溝に廃棄されたり、使用状況を現わすようなセット関係や同時性を示唆するような出土状態を、必ずしも示してはいない。また、大溝周辺で検出した同時期の遺構群と直接的、具体的に統び付くような出土状態を示しているものでもない。したがって、大溝の堆積土層内に包含された土器としての性格以上に、生活遺物としての積極的な価値を見出しえないので現状である。とはいえ、大溝の周囲で住居跡、祭祀遺構、溝状遺構等の遺構群が検出されており、伊場遺跡で生活したある集団の生活状況の反映であり、こうした様々な土器が時間的な経過の中でもたらされたことに変わりはない。

各土層内で検出された土器について復元可能、計測可能な破片については極力図示するように努めた。検出した土器の包含層が、溝内に堆積した土層であるため、浸透等によって他の古い時期の包含層からの土器の混入が理論的には起りえる現象である。しかし、著しい時期差や明らかに混入したことが知り得る土器については除外したが、基本的に出土層位を基準とし、大グリットを単位とした出土地点別に分類し図示した。ただしホ区出土の土器については、出土量もさして多くないことや、A15区とホ区の地点別の呼称が2種のグリット網を設定したためであり、大溝の存在するホ6・9区等はA15区内に含まれる（第39回参照）。したがって、ホ区出土の土器についてはA15区の出土土器と一括させて図示した。

大溝は第4次調査までの所見では幅15m深さ2m程の規模で奈良時代までの泥炭層が順次堆積する溝と考えていた。しかし調査の進展に伴っての砂層にも土器が包含していることが知られた。その後6・7次調査では大溝内の調査は、奈良時代の泥炭層以下を掘り下げ、無遺物の土層に至るまでにして見ることにした。その結果は『略 大きく見ると、最下層に5世紀末か、6世紀初頭と推定される土器群を包含する部分があり、上層に向けて、年代的な変遷がある程度たどられた。そして奈良時代層の直下に、7世紀中葉頃の土器群を含む砂層が』確認された（註15）。この古墳時代の土層がVII・VIII層にあたることは先に述べた。VII・VIII層は基本的に粘土と砂が互層になって構成される偽層の発達した土層群であり、堆積状況も類似したものとなっている。また、この古墳時代層はかなり流水の激しい動きの中で堆積した土層であることも先に述べた。そうした流入、堆積状況に起因するのか、「古墳時代層では遺物出土に秩序がなく、かつ注目すべき遺物も少なかった」（註16）

したがって、今回の報告書では、この古墳時代層（VII・VIII層）の出土土器は地点別に分けて図示し、層位的には一括して扱うこととした。VII・VIII層出土土器のうち、VIII層出土の土器は、実測図の番号数字の前に■印を付して出土層位の差を示した。また、VII・VIII層とともに比較的厚く堆積した土層であるので、各層で上位層からa～dの順に、更に分層出来た部分もある。それら細分した分層から出土した土器については、実測図の番号数字の後にa～dを付して、出土層位の差を示した。各層の下位、あるいは最下層から出土したとして注記して取上げられた土器の実測図には、同様に番号数字の後に▼印を付して、他と分別した。

こうして、本書には約830点を図示し、約300点の土器写真を掲載した。また土器実測図を掲載した土器については、全ての土器についての観察表を掲載したので、詳細は土器観察表を参照されたい。

第2節 観察表について

第7図～第38図にかけて須恵器512点、土師器314点を掲載した。実測図を掲載した土器については、それぞれ個々に、土器の種別、出土地点、出土層位、器種、形態、法量、技法、時期等の特徴を観察表にして掲載した。実測図、写真等は、判断上の同一の縮尺率に出来ないものもあったり、図写真等で表記出来ない特徴もあるので、掲載土器の詳細は観察表のデーターで理解されると思われる。ここでは観察表の作製についての要項を述べる。

・掲載の順序

伊場遺跡の発掘に際しては、2種のグリット軸が設定されている。西部地区では人溝にそってイ、ロ、ハ区の大グリット（30m×30m）が、大溝の南端ではA15、A16区の大グリットが大溝の流路を包括するグリットである。したがって、イ区→ロ区→ハ区→A15区→A16区の順にグリット出土土器を判組した。しかし製版上の制約から、数点の土器実測図については、この原則を貫けなかったので、適宜に配置した。

・番号

大溝内の各層位から出土した土器について、須恵器と土師器に「分し」、各地点毎にはほ占い順に通連番号を付した。この番号は実測図番号であって、本報告書の基本となる番号とし、本文・写真とも統一して用いている。特に本文中では「須45°」「1.45°」と表記し、それぞれ『須恵器の45番』『土師器の45番』の土器を示すこととした。この番号（実測図番号）は、土器観察表中の各土器項目の左端欄の冒頭に表記した。

「挿図」「写真図版」とした番号は、各通連番号を付した土器が、掲載されている挿図の番号と写真図版の番号を示している。土器観察表では、実測図番号の後に上下二段に別けて表記し、上段が挿図番号、下段が写真図版番号を示している。

・登録番号

発掘時の遺物台帳にしたがった。他の登録番号の土器と接合した土器については、主体となるべき土器の登録番号に統一して表記している。

・出土位置

掲載された各土器の出土位置と出土層位を示している。大グリット→小グリット→出土層位の順に表記している。小グリットの後に付したアルファベットは、E=東、W=西、S=南、N=北を意味し、小グリットを東西あるいは南北に2分したうちのいずれかで出土したこと示している。

・器種・形態

土器の種類については、須恵器は「須」、土師器は「土」と表記した。

器種については、須恵器は、壺蓋・壺身・高壺・甌等、土師器は壺・高壺・甌・鉢・甕・壺等に分けた。

形態については出土量の多い須恵器の壺蓋・壺身・高壺・甌等、土師器では壺・高壺・甌・甕等について細分した。細分の基準、結果については本文に記述し観察表には明記しなかった。

・時期

須恵器は、編年の進んでいる須恵器の壺蓋、高壺を基準とし、時期の古い順にA～J群に分別し、他器種の須恵器については、各群に併行すると推定される群名を付した。群別の基準、根拠については、本文と表1に記述した。土師器については、併行する須恵器の群別名を付したが、時期幅があり、須恵器ほど細分出来ないので、世紀名を付して呼んだが、観察表には明記しなかった。

・法量

単位はcmで示した。『胸径の欄』には、最大径が口径以外の部分に在る場合について、その土器の最大径を表記した。口径が最大径に在る場合は、「口径」の欄に最大径を表記し、胸径は「胸径の欄」に表記した。

底径は、壺、鉢、杯、塊、壺などにあっては、底面に作られた土器だけについて表記し、高杯や脚付の器形にあっては、脚部の様子を表記した。

・技法・調整等の特徴

技法や調整等だけでなく、各土器の使用状況や形状の変化、付着物等、肉眼で観察できる範囲で、その様子を記述した。

・胎土・焼成・色調

胎土については、粗い→普通→やや粗い→良いの順に精選された胎土を示す。砂、礫等を含む場合は特徴の欄に表記した。

焼成については、良い→普通→やや不良→不良の順とし、土師器と須恵器はそれぞれの種類に応じた焼成の善し悪しであって、須恵器では不良としたものが、土師器で普通とした土器より焼成が悪く脆弱な焼き上がりをしているものではない。

色調は、土師器では赤褐色（オレンジ系）、黄赤褐色（クリーム系）、暗（灰）褐色（褐色系の茶色）にはば3分した。須恵器では、灰白色→白灰色→灰色→暗灰色→黒灰色の順に須恵器の黒味（青味）を増していくものとして表記した。いずれも、便宜的な表記に止めた。

第3節 土器の時期分別

人溝内の出土土器についてみると、須恵器では、壺、高杯、壺、塊、横瓶、擂鉢等がある。しかし、正側面に多いのは壺の類で全体の9割以上を占めている。土師器では、壺、塊、鉢、壺、壺等が主なものである。土師器にしても壺の類が多く全体の6割以上あり、残りは煮沸形態としての壺が占めている。これらの土器は、いずれも大溝の包含層より出土した土器で、相互に関連を持ち、セット関係を示すような形で、出土したものではない。したがって、出土量が最も多く、比較的編年（的研究）作業の進んでいる、須恵器の壺類をもとにA～Jまで編年的な時期別を行った。

当地域の、須恵器編年は「大沢・川尻古窯調査報告」（1966 遠江考古学研究会）、『古代学研究』第50号（1968 山村宏他）で、発表され県内では遠考研編年として皆としている。その後、新知見の増加とともに修正され、「須恵器—古代陶質土器一の編年」（1976 静岡県考古学会）に「川尻試案」として公表されている。その後も、研究が加えられ、様々に提案がなされているが、基本的には「川尻試案」を拠り所として、今回のA～J群に分別した（註17）。各群別の編年的位置は、表Iに「須恵器時期別」として示したので参照されたい。

他器種の須恵器や土師器については、上述したA～J群の、その時期別に該当させグループ分けした。しかし、土師器の壺形土器等のように、時期幅があり、単純に一群に収まらないものについては、6・7・8世紀代と表記したものもあるので表Iの時期別を参照して欲しい。

a) 須 惠 器

・A 群

伊場遺跡では、最も占数の須恵器にあたるものである。壺身の底部の大半を手持ち箇削りした須1や、立上がり部と体部の比率が1:1になり、底を平らたくし断面が扇形に近く、口径もやや大きめの須322の身や須114の蓋、脚り耳の付いた須471の高杯がこれにあたる。

・B 群

遠考研編年I期後半としたもので、明通り古窯や宮ノ腰遺跡から出土した須恵器がこの時期にあたられる（註18）。壺身は立上がり部がほぼ直立し、口唇部を斜めに窓整形した後に沈線を置いている。蓋も棱をしっかりと作りだし、口縁部は体部から屈曲して直立し、口唇部の作りも壺身と同様なものとなっている。身蓋ともに最大径が12～13cmで全体に小振りになり、底部と天井部を丸く作っている。壺身の須5・116・118、高杯の壺部

の7。坏蓋の須115・323・325・472・473、高坏蓋の須2・3・4・326がこうした特徴を備えている。須6・324・327の蓋坏は口径が大きくなるが、端削りの技法や端部の作りが類似しているので、このグループとした。また、須328の高坏脚部もこの群に含めた。

・C 群

遼考研編年Ⅱ期・Ⅲ期前葉とした時期をこのグループにした。坏は大型化し、最大径が14~15cm代で最も大きくなる。端部はやや丸く作られ、口唇部も斜めに切り落しただけのものもある。器形的には深めとなり、立上がりと底部の比率が1:2程度となる。立上がりが内傾気味となり、底部は丸く作られる。最大径が14cm代のものが多い。須19~22・24・26・28・30・31・33・34・58~60・121・122・124~126・333・334・336・337・339・476~479がこれにあたる。須23・25・27・29・32・120・123・335・338・475等は最大径が12cm代となるが、底部を丸く作っており器形的にはこのグループの範囲に入れている。須61・340の高坏の坏部も同様な作りとなっている。また、須34・121・125・475~478のように、底部内面にタタキメを残すものが多くある。

坏蓋では棱の作りが、不明瞭になってくる。しかし、口縁部は、まだ稜の部分以下を直立気味にして作られている。口唇部は内側を斜めに整形することが多い。須8~16・56・57・119・329~331の坏蓋や、須17・18・332・474の高坏の蓋が、このグループとなる。口径は14cm代のものが多いが、坏身同様に12cm代のものもある。

須127・314は、いずれも無蓋の高坏で、127は、長脚一段透かしの高坏でこの時期を特徴づける器形である。314は、短脚で丸窓となり脚窓の作りなどからやはり同時期のものとしてよい。

その他、この時期と考えて良いものに、肩部以上をカキメで飾り、底部は鐘形せずタタキメを残す須36・37の壺や、口頭部は長大化傾向にあるが、太めの頭部が付く須35・413の壺がある。

・D 群

遼考研編年Ⅲ期中葉とした時期のものである。蓋坏は最大径が14cm代で大きいが、この時期を境に小型化していく。身蓋ともに口唇部の作りが退化し丸く作られシャープさは無くなってしまう。坏身は浅めになって、体部の形は腰が張らず、底部から受部に直線的に立上がりっていく傾向になる。立上がりもC群より低くなり、内傾してしまう。須39・40・63~65・134~136・358~377・488~492の坏身がこのグループとなる。口縁部に何らかの加工を加えたものは、須63・358・361の3点で、他は加工せずそのまま終わっている。加工を加えるだけ古い要素を持っていると言うことかもしれない。体部の器形は、須39・133が特異だが、他は全て同様な器形になっている。口縁部の作りを見ると須39・64・375~377は立上がりの基部を厚めに作り口唇部にかけて薄く尖らせ、内側を平らにして作っている。また、須370~374・491・492は立上がりが短く、捻り出すように作っている。こうした手法は、新しい要素かもしれない。

蓋について見ると、稜は退化する傾向にあり、沈線を置いて棱を意識させる手法になる。稜(沈線)以下の口縁部がC群では直立気味に立上るのに対し、体部からそのまま弧を描くか、内脇気味になって口唇部へと緩く形になる傾向にある。須38・62・128~132・342~357・480~487がこの時期の坏蓋と考えた。体部と口縁部の境に沈線を置くのが一般的であるが須350~357・485~487は沈線を持たない。口唇部の作りは内傾する面を作るものが大半である。しかし、須350・351・353・356・357・486・487等は端面を作らず、丸く作っている。体部と口縁部の境に沈線を持たない土器にこうした傾向があるようである。その他の器種としては、須67・137の壺、須66・378・493の高坏、須68の壺等がこのグループであろう。また、須379・380も壺の蓋と考えれば同様の時期としてよい。

・E 群

遼考研編年Ⅲ期後葉とした時期に対応出来るものと考えている。蓋坏は小型化し最大径は13cm代で、14cmを越えない蓋坏をこのグループにした。径を重視して分類したため、この一群にF群以下のように径に比し深みのある器形のもの(須73・77・385・496)も含まれることになった。

坏身について見ると、立上がりは体部に内傾して付けられ、先端部は直立気味に作っている。器形的には、体

底が緩やかな弧を描き、浅い作りのもの（須79・80・154～157・396・400・409～411）、深い作りのもの（須78・151～153・398・399・402・407・408）、体部が底部から直線的にたちあがり、全体の形が逆台形状に作られるもの（須42・71～77・397・401・403～406・497・498）の三種がある。須153・399は、三種のいずれにも属さないが、口絆や立上がり部の作り方からこのグループとした。

蓋では、稜は完全に消滅し沈線で体的と口縁部を画していることが多い。口唇部は手を加えることは少なくななり丸く作って終わる傾向にある。須41・138～142・381～386・494等は、体部と口縁部の境に沈線を置いているが、須69・70・143～149・387～395・495・496は、沈線を置いていない。沈線を置かない器形の坏蓋は、沈線の部分で屈曲させ、口縁部を直立気味につくる。沈線を置かないものは口縁部が体部からそのまま弧を描いて続くものが多い。また、須150の撮付きの蓋も、口径がほぼ13cmを計るのでここに含めた。

須383・384・494等の坏蓋は、口唇部を内傾させたり、腹部の沈線が、梗を意識して作っているようである。その点ではD群に含めるべきかも知れないが口径を重視してこのグループに含めた。

その他の器種では、須194・412の高坏や、須414～416の甌がこの時期にあたるものであろう。

• F 群

從来遠考研編年Ⅲ期後葉ないしⅣ期前半としていた時期にあたるものと考えたい。蓋坏の最大径が12cm代になるものをこのグループにした。比較的大きく、径に比し深い形になっているが、まだ立上がり部も比較的長くしっかりと作られている。須44・82～85・166～183・423～426・500の坏身と、須43・81・158～164・417～422・499の坏蓋がこれにあたる。

坏身について見れば、須170、171のように切離し痕をそのまま残したり、須169・172・192のように底部を一氣の箇削りで平らに仕上げたりするものもあるが、底部外面の箇整形に丁寧さが残っており、底部を丸みを持たせて削っている（須83～85・173・175・181・426・500）ものが多い。

坏蓋について見れば、体部下半に沈線を置いて口縁部と体部を画し、口縁部を意識させたもの（須43・81・158～164・417～419・499）と、沈線を置かないもの（須420～422）の二種がある。

他器種について見れば、須45・427・428の無蓋の高坏、須36の有蓋の高坏、須185・186・429・430の高坏脚、須188の平底の頸部？、須189の横瓶が、この時期に含まれる。

• G 群

從来遠考研編年Ⅳ期前半とした時期にあたる。蓋坏が小振りな作りとなり、最大径が10～11cm代になる一群である。坏身にあっては、立上がりは、まだ比較的明確に作られ、体部から内側に屈曲して作られる。底部は未調整のままのものと、箇削りによって整形されるものの二種が混在する。須94～100・233～266・440～450・507がこれにあたる。体部から内側に屈曲した立上がりの先を外反気味にしっかりと作るもの（須94・95・98・99・233～256・265・266・440～444・507）と、立上がりを体部から捻り出す様に外反させるもの（須96・97・100・257～264・445～450）の二種がある。器形的には偏平な球形となるものがほとんどだが、底部から受部にかけて体部が直線的に作られる須256・265・266等もある。

坏蓋では、断面が補鉢形になり、大井部外面は箇削りされることが多いが、身と同様に切離し痕をそのまま残すものもある。須87～92・190～231・431～439・501～504がこのグループとなる。技術的には、口縁部外面に沈線を施すもの（須87～91・190～214・431～436・501～503）と、施さないもの（須92・215～231・437～439・504～506）の二種がある。器形的には口縁部を内輪気味に作るもの（須87～91・190～205・436・438・501・502）と、内輪しないもの（直立気味になったり、直線的に開いたり、外反気味になる）（須92・206～231・431～435・437・439・503～506）の二種に分れる。従って理論的には4種に分別できることとなる。また、頂に撮の付く須93・232も坏蓋としてこの群に加えた。

他器種について見る。須274・451・452の無蓋の高坏、須275～277・453等の高坏脚部と想定されるもの。須278・269・454～456等の、壺・瓶・壺の脚部と推定されるもの。須280の無頸壺、把手が付き形態的には無頸壺

とも呼ぶべき須509の壺。須281・282・283の壺や瓶の口縁部と思えるもの。須281の壺。須510・511のプラスコ形の横瓶。さらに須267・273・508の短頸壺等が、この時期に該当するものであろう。

・H 群

このグループも従来の造考研編年IV期前半としたものである。小型化がさらに進み最大径が10cm以下となり、环身にあっては立上がり部が受部より低くなってしまうものも現れてくる。しかし技法的にも形態的にもG群としたものとさして差が見られない。須46・101～104・285～307・457～466等がこれにあたる。

环身では立上がりは低く内傾し、受部も低く小さくなってしまう（須103・104・303～305・460）。立上がり部と受部の付根を凹線状にナデしてしまうもの（須306・307・459）もある。

蓋ではC群と同様に技法的には口縁部外向に沈線を置くもの（須46・101・102・285～297・457・458）と、留かないもの（須298～302）、器形的には内彎するもの（須102・288・292・288～301）と、そうでないもの（須46・101・285～287・289～291・293～297・302・457・458）の、それぞれ二種ずつある。

他器種については、須47・105の無蓋高环。須106・107・308・309の壺。須108・314・315の、やや人型になる短颈や広口の壺類。須310～313の瓶類の口頸部等が、これらと同一のグループと考えたい。

・I 群

造考研編年IV期後半としたものである。环の身と蓋が逆転し、蓋にはカエリと扁平な宝珠形の撮が付く。身では高台付きのものも現れる。須48～50・109・316～319・461～463等をこのグループにした。須109・316は口径も小さく壺の蓋か。

・J 群

造考研編年V期としたもので、8世紀（奈良時代）の土器である。蓋には扁平な宝珠形の撮が付き、カエリは消滅する。身は高台が付くものと、無蓋で高台の付かないものもある。擂鉢等の器形も一般化していく。須51～54・110・464～469等がこのグループである。

他器種では、須55・112・320・470の擂鉢。底部が平らになる須113の壺。須111の長頭壺の口頸部。須321・512の大型壺や、その口縁部等をこのグループとした。

b) 土 師 器

イ 7 区出土Ⅳ層土器について

土1～3の3点を図示した。1・2の壺は、下半部を欠くので断定は出来ないが、長脚球形の体部で、丸底になると考えられ、6世紀に普及した器形である。また、土3の高环は、环底部の突起を脚に挿入して作られる。脚は低めだが、やや脛らんだ円柱に横ナデして横に開く脚縫が付けられている。Ⅳ層出土と言う点で、和泉式併行と考えたいが、壺を含めや新しくC群としたグループに併行させておく。

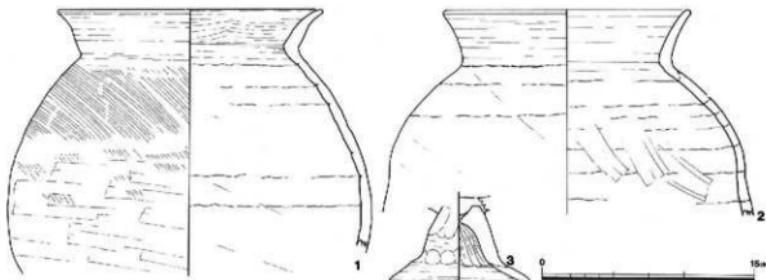
Ⅵ・Ⅶ層出土の土器について

・壺

口径は13cm代が主体となって、14cmを越えるものは少ない。口縁部を内外から横ナデし体部下半には整形時の凹凸を残す。かなり画一的な作りになる。土4～32・99～103・126～129・188～193の43個体を図示した。形態的には口縁部を内彎させるもの（土4～29・99・100・102・103・126・129・188～191）と、内彎しないもの（土30～31・101・126・127・192・193）に分別できる。また、口縁部を内彎させるもののうち、底部を平底や上げ底気味に作って、体部が直線的に立上がるものの（土26～29・102・191）等が形態的には分別出来そうである。こうした差が、時期差を反映したものかは不明である。時期的にはC・D群とした須恵器に併行するものと考えたい。しかし、土192・193のように深めの壺は、やや新しくG・H群（7世紀代）に併行する土師器とする。

・壺

形態的には环との差は無いが、口縁部を強く横ナデしたり。口唇部を内傾させたりして、何らかの加工を施し



第7図 大溝イ区 IX層出土土器（土師器）実測図

たものを壺と呼んだ。土33~43・104・105・125・142・143・194~197等である。

土33~36は口縁部を強く横ナデし、先端が細くなるもの。土36・37・105・194・195は口縁部を横ナデし口唇部は丸く作り、体部は箇や刷毛整形する。ただ土36・37は同様で大型になる。土41・42は口唇部を内傾させている。土43・143・196・197は作りが荒く、刷毛目や木調整部分が残り、手づくね土器のような作りである。これ等の土師器は、先述した壺類と同様にC群に併行するべきものと考えたい。ただし、土38~42・142・194・195は、一段と古く和泉式併行の時期と考えられる。従ってこれらはA群もしくはB群に併行させたい。

・皿

土44・45は、内外ともに丹塗りされる皿で奈良時代のものである。したがってJ群に併行させる土器である。

・高 壕

壺部では、体部（口辺部）と底部の境に不明瞭ながら稜を作つて折れ曲り、口辺部は直線的に開く。脚はハの字に開き、脚脛で外側に折れ、さらに横に開いて作られることが、基本となる器形である。壺部、脚部しか残らないものも含めて土46~75・106~112・130~138・207~222・298を図示した。

やや特殊なものとしては、土66・112の壺体部が直線的にはならず、壺状に弧を描き、口縁部の先端を短く外反させる器形になる。土73も壺状に弧を描く器形になり、やや小振りに作っている。土74は、壺体部が壺状に弧を描くが、体部に稜を作つて小振りになっている。土72は口径に比して器高を高く作るが、全体としては小振りになる。土130の脚部には穴が付される。なお、土75は脚付咲と呼ぶべきものだが、高壺の項に含めた。

それら以外の高壺は、いずれも画一的に作られている。壺部の口径では、やや小振りの15cm代のものと、16cm代のものと分れそうである。しかし器高についてみると、いずれも10~11cmで、口径の差を反映した高低差は無いようである。技術的には、壺の底部に作った突起を脚上部に挿入したもの（土46~51・53~66・75・109~112・130~133・207~209・211・213・214・216~220）と、脚上部を壺底部に挿入したもの（土52?・67~72・134~138・221・222）の二種がある。壺底部の突起は、脚内面の天井部に残される場合と指で擦り付けて整形してしまうものがあり、完形品等については、いずれの技法が明確に出来ないことが多いが、脚上半が中実になる高壺は、脚を壺底部に挿入したものと考えている。脚を壺底部に挿入する（脚上半が中実になる）タイプの高壺は、壺体部外面にある稜も不鮮明になり（屈曲率が少なくなる）、脚脛の屈曲も緩やかになる傾向にある。こうした差を、直ちに時期差と決定する根拠はないが、傾向的には新旧差を現したものと考えている。壺底部を脚に挿入する手法は和泉式の土師器に見られるもので古くしたい。そうした観点からすると、脚部を欠く土106~108・212・298等の壺部は新しいグループに含めるべきかも知れない。

これらの高壺は技術的には和泉式の手法を残してはいるが、脚が低く、脚の張らみが無い等、後出の様相を示しているので時期的にはC・D群としたグループ（遅考研編年Ⅱ期～Ⅲ中）に併行するものと考えている。

・横概 坂

須恵器の器形を模した蓋坏と高坏である。蓋では I:113・114・139・140・199～201、身では I:202～206・294である。蓋では、稜は消滅し口縁部と体部を分けている。したがって、これらの蓋坏は D・E 群の須恵器（遠考研編年Ⅲ期）を模したものと推定され、時期的にもこの時期に併行すると考えて良い。ただ、土114は、口径が15cmとなり、稜もはっきりと意識されている。したがって、まだ稜の残る C 群の須恵器（遠考研編年Ⅱ・Ⅲ期初）を模したものと推定され、一段古く考えている。

高坏では、土223～226・295・296の坏部と、土141・227・228・297の脚部の10点である。土141の土師器の脚部が内輪気味になりやや古くなるかもしれないが、いずれも D・G 群（遠考研編年Ⅳ期）に併行するものと考えている。

・鉢

底部から口縁部にかけて開く形態のもので、土91・92・94・95・144～147・198・308の10点を図示した。I:91・92は、大型の鉢で全体が刷毛整形され、使用形態から言えば甌と言わべきものである。全体に煤が付着し煮沸に使われていたことが分かる。伊場遺跡でも5世紀末～6世紀にかけての住居跡から同様な鉢が検出されており、B群もしくはC群とした須恵器に併行すると考えられる。

I:94も煤が付着し、使用形態から言えば甌と言える。編年的時期は判然としないが、土91・92に後出するものと考え、C群に含めたい。

土146・198・308は細かな刷毛で内外を調整し、土144・147も刷毛で内外を調整している。いずれも類似する鉢である。土145は、窓による整形である。これ等の鉢は、C群としたグループに含まれると考えている。土146・308に類似した鉢は、伊場遺跡では、遠考研編年Ⅲ期前・中葉とした住居跡からの検出があり、C群としても新しいグループに含まれるものか。口縁部を外反させている土95の中型の鉢もC群と考えている。

・壺・小型壺

壺形の形態をとるもので小型のものを取上げた。I:76～83・115～117・148・149・229～232・305等である。土76～79・229・230は、太く長めの口頭部を持つもので、土78・79には、体部下半に轟目（庄痕）が付される。土117は口頭部の大半を欠くが、同様な長頭壺と考えている。土116・148は体部は角張った球形で箱形に近く、細かな刷毛の整形痕を残している。以上の壺はB群ないしC群に含めて考えている。ただ土149の壺は口頭部を欠くが、体部が偏平になり、編年的には古く、A群もしくはB群に含めるべきであろうか。土232は頭部が低く無頭壺とも呼ぶべき器形で、土115はさらに頭部が短くなり壺に近くなる。これ等の壺もC群と考えている。

土231・305はいずれも粗い作りで、口縁部を強く横ナデし、体部には刷毛目が残っている。無頭壺ともいうべきで、C群に含まれる。

・壺

壺の形態をとる土器のうち、大型のものを取上げた。土118・150～154・178～183・271～276・299～303の23点である。

土150・151は上げ底気味の底部に、球形の体部が作られ、口縁部の外側には棱を持つ作りとなる壺である。從来和泉I式とした土器に併行する時期のものである。土299・300等の口縁部の作りが類似する。土152～154・301～303等も、高い稜は作り出さないが、口縁部の上下段を強く横ナデして作られ同様の壺と考えて良い。したがって、これらの壺は、時期的にも古くA群に併行すると考えられる。

土118は偏平球胴の体部を細かな刷毛で整形している。5世紀末の時期を考えているので、B群併行の土器である。壺と甌の口縁部は、形態的に類似するので、口縁部の破片だけで、両者を明確に分別することは難しい。土178～183は、口縁部から続く頭部が直立傾向にあり、頭部から肩部にかけて大きく屈曲するので、壺の形態を取るものと考えた。時期的には判然としないが、手法的には新しい時期の甌等と類似するので、F～H群（遠考研編年Ⅲ期後半以降）に併行する時期を考えている。

土271～276も形態的には壺と考えられる。時期については不詳。

・壺

一般に人型の物が多く、使用状況からしても破損しやすいためか、破片としては多くの量が発掘されている。口縁部破片を主として岡化した。

・A群に属するもの（土120～122・155～158・233～237）

土120は体部を長球形にし、底部も平底に作らず丸底にしている。同様の壺は、遠考研編年Ⅰ期の須恵器とともに、古墳時代の溝から出土している。従って5世紀まで遡ると考え、A群とした。

土233・234は定形化したS字口縁の壺で須恵器を伴わない古い時期のものである。

土121・122・155・235・236はS字口縁の壺の最終段階の形態（宇田型）で、5世紀代と考えられている。

土156～158・237は、全体を刷毛整形し頸部の屈曲は大きくなはない。いずれも大腹の器形になり、形態的には鉢形に近いものである。伊場遺跡の東部地区で、同様の壺のはば光形品が検出され、それには闇がついている。5世紀代で和泉式併行と考えている。

・B群に属するもの（土84・98・159・238・239）

土84は球形の体部に把手が付き形態的には壺と呼ぶべきものだが、煮沸形態として使用しているので壺とした。和泉式併行と考え、B群とした。土238は球形の胸部に上げ底気味の底部を作っている。土98の底部破片も同様の作りとなっている。こうした点からB群と考えた。土239は、下半部を欠き定かではないが、口縁部の作りは土238と類似するのでB群とした。土159は全体に刷毛目が残り古い形態とした。しかし、土158と同器種だとすれば、A群に含めなければいけない。

・B・C群に属するもの（土85・86・93・96・97）

土85は把手付の壺で長球形で下半部には籠目が付されている。土93・96の壺も同様な器形になり、土86・96・97には籠目が付く。こうした籠目上器は一般的には5世紀代と考えて良いので、B・C群とした。

・C・D群に属するもの（土87・160・119・250・251・304・306・307）

土87・119・306・307は体部からくの字に屈曲した口縁部が外反して開く器形で、体部の内面にも刷毛目が、消されることなく残っている。これらを小い要素と考えC・D群とした。

土160・250・251・304等と同形態と思える長球形で丸底の壺が、伊場遺跡では、遠考研編年Ⅱ期の須恵器と伴出している。従ってC・D群とすることが許されよう。

・7世紀代（E・F・G・II群）に属するもの（土161～176・240～249・252～270）

体部から屈曲して開く口縁部は、やや立ち気味で直橋に開くまでにはならない。口縁部の内外には刷毛目がまだ残り完全には消し去ってはいない。

土164・166・168・169・240～248は、外輪する口縁部の先（口唇部）を、そのまま丸く作って終わるもの。土168・169のように口唇部を玉縁状に作る口縁部もこのグループの変種として加えた。

土162?・167・173・174・249?・252～256は、口縁部の先端を上から下に横ナデしたもので、口唇部の上端が丸くなり、口唇部下端に梗ができ下顎を作ったようになっている。

土161・163・165・170～172・175・176・257～261・263～270は、口縁部の先端を下から上に横ナデしたもの。したがって、口唇部の下端が丸くなり、上端に梗が出来たり上端の内側が凹線状になっている。

・8世紀代（I・J群）に属するもの（土88～90・123・184～187・277～289・309～311）

口縁部は体部からくの字に曲り、外輪して開く。体部外面は継刷毛で、内面は刷毛目を消すことが多い。底部は平底に作っている。

土88・186・187・277～280・288・309～311の壺は口縁部が外輪して開き、口径が15～18cmとなる小振りの壺である。中には土281のように口縁部が直立気味のものも含む。土289は、このグループの底部片である。

土89・184・185・282・284・285・287は、口縁部が、外輪しながら大きく（横に）開き、口縁部の先端が水平

に近くなるものもある。体部外面は継刷毛で、内面は刷毛目を消している。口径は17~22cmとなりやや小型である。

土90・123・283・286は口縁部が横に開くもののうち口径の大きなもの。大きなものは30cm以上となるものもある。縁を開いた口縁部の先は内側気味に丸く作られることが多い。

・壺脚 (土177・290~293・312~314)

全体に薄手の作りで内外ともに刷毛整形しているもの (土177・291・292・312)、全体に厚手で作りの荒いもの (土293・313・314) の二種がある。

土290はやや厚手の作りで脚根を折り返さない。A群の壺とした土155~158・233等の脚になるものか。

土177・291・312全体に薄手で作り脚根を折り返す。土175・176・258・259や土90・123等の口径の大きくなる壺の脚になるものであろう。

土293・313・314の詳細は不明だが、C群とした壺の頸に付けられたものか。

・瓶

土124で8世紀代のもの (J群) と考えた。しかし、上端を欠くので何とも言えないが口径と器高がほぼ同じと推定され、長羽化が著しくはない。また、体部には継やかなカーブが残っており、直線的ではない。したがってもっとも古い時期に含めるべきかも知れないが、不詳。

第4節 地点別出土土器の概略

イ区出土土器 (第7図・8図・9図・24図・28図)

須恵器55点、土師器95点を図示した。須恵器では壺類が50点以上を占め、土師器では壺・甕の類が約40点、高杯が約30点と圧倒的に多い。他には壺8点・甕10点、煮沸形態の鉢3点程である。ここで注目されることは、同一形態の土師器の壺、高杯が多く出土する点である。また壺や甕にしても同一時期 (須恵器の群別ではC群にあたる) の物が多い。出土地点も大溝の東縁に集中している。表IIでも明らかなように、イ区にあってはC群とした須恵器の壺身が多く出土する。この様な出土状態は一括して投棄された可能性も考えられる。こうした齊一性が何に起因するか判然としないが、大溝東縁に隣接する、伊場遺跡の東部地区と呼んだ地点には、この時期の住居跡が検出されているので、これ等との関係を指摘するに止どめたい。また、土81・91・92等の甕類の出土にしても、表IIで、B群とした須恵器の出土が比較的多くある点と符合する。こうした、より生活に密着した什器も同様に、東部地区的住居群からの供給を指摘したい。須恵器土師器とも7世紀末~8世紀のものが、やや多く散見される (表II参照)。大溝に流入している奈良時代の枝漕からの紛れ込みかも知れない。

ロ区出土土器 (第10図・11図・29図・30図121~124)

須恵器85点、土師器34点を図示した。須恵器について見ると、ここでも壺蓋の類が多く45点を数える。表IIでみるとⅦ層にC・D群が多く、Ⅷ層にはE~G群の須恵器が集中して検出されている。土師器では、壺、高杯、壺、甕が、C群に併行するもので、一点ではあるが土113の模倣壺がD群と対応する。E~G群に併行する土師器は見られず、土124の甕が、まだ体部が直線化しきっていない点を考慮して、この時期に当たられる可能性はある。土120など4世紀代に遡るような甕も出土しているが、遺物相互の有機的な関係は示し得ない。

ハ区出土土器 (第12図~17図・30図125~141・31図・32図)

須恵器206点、土師器62点を図示した。須恵器では5世紀代 (A群) の壺蓋須114を出土している。これに対応する土師器は土150~158の壺や甕の類である。表IIによるとⅧ層では前後するG群とした壺類の出土が圧倒的に多く、E・F・H群に均等して分布するように出土している。土師器の土161~182の甕や壺がこれらの須恵器に対応すべきものであろう。8世紀代に入る須恵器は検出されていない。一方J群に対応する土師器としてあげた土184~187の甕類は、ある程度の時期幅を考慮出来るので、表IIのH・I群に対応させて考えたい。

重層の出土状況を見るとC群の土器が比較的まとまって検出されている。土師器でこれらに対応するのは126

～137の环や高环、142～148の碗や鉢、壺等である。

西部地区のヌ・ツ・ネ区には用途は不明ながら溝状の遺構群が検出されている。また、ハ8区では、大溝に流入するような小溝状の作り出しもある。さらにハ8・7区の大溝内には、井戸が1個ずつ検出されている。これらの遺構からは遼考研編年Ⅲ期末・Ⅳ期の須恵器が出上している。大溝とこれらの遺構は、場所的にも有機的な関係が指摘できる。したがって、G群とした环類の出土が圧倒的に多く、E～II群の土器が按分するように出土している。ハ区での出土状況は西部地区ヌ・ツ・ネ区の溝状の遺構群からの供給と推定される。

ハ区では、土師器の出土と須恵器の出土状況が整合的に重なっている。これらの遺物がどこから供給されたか、充分には証明し得ないが、表Ⅱに現れたようなハ区での出土状況が、大溝のⅦ・Ⅷ層の基本的な在り方を示していると考えている。

A 15 (木) 区出土土器 (第18図～21図・33図～37図)

須恵器148点、土師器106点を図示した。須恵器では、遼考研編年Ⅰ期とする古丁の环身が5点出土する。5世紀代の土師器は、土233～237等の壺があり、壺の土238・239を加えれば、Ⅰ期に対応できる。

表Ⅱをみると主となるのは、D・E群で、F群がやや少なく、G群が次いで多くなっている。これを土師器で見ると、土188～191・194～198・207～222・250・251の壺や环や高环の類、I:229～232の壺や壺がC群に対応する。また、土199～206の横断環の類がD・EあるいはF群に対応する。土240～262・223～228の壺・环類は、G・H群に併行させて考えたい。土277～289の要類は、時期幅をもつものと考えてJ群にかけて対応させることができる。

A 16 区出土土器 (第22図・23図・38図)

須恵器41点、土師器20点を図示した。Ⅶ層からの出土が多く、Ⅷ層からの出土が少ない。須恵器では須471～473の高环・环蓋がA・B群と古いが、主となるのはD群で、次いでC・G群が多い。土師器ではI:299～303の壺がA群に、土304～308の壺、壺、鉢、等がC群となる。しかし、D群にあたるものは、土294の横断環しかしない。J群としたのは須恵器では土512の壺の口縁部が1点だが、I:309～312の壺が4点出土している。

本報告書に図示した須恵器512点、土師器314点がどのような経緯で、大溝内にもたらされたか出土状態から証明することは難しい。個々の遺構に伴って出土したものでは無いので、出土地区によって土器の種類や時期が偏在することが、大溝に近接する遺構群の生活の反映と考えたい。東部地区の住居跡群、大溝に沿って点在する住居跡、西部地区的溝状遺構群等が想定されるが、個別遺構との有機的関係まで証明し得なかった。

(施業) したと、考えねばならない。

第4章 まとめ

本報告書では、総数826点の土器を図示し、それぞれに時期区分を試みただけに終わってしまった。そのうちの須恵器環類407点について、地点別、層位別の頻度表を作成して表Ⅱに示し、土師器の出土傾向を表Ⅲに示した。これらの表から推測される特徴を述べ本報告書の結語に替えて。

5世紀代の「初期須恵器」と、既に当地方で盛んに生産されている7・8世紀の須恵器を同列に扱うことには問題があるが、表Ⅱをもとにいくつかの特徴を見ることにする。

当然の結果だが、この表では各地区とも下位の層ほど古い須恵器の頻度が増すことが分る。ただイ区ではⅦ層にも相変わらずB・C群と5世紀末から6世紀にかけての須恵器が集中する傾向にある。ロ・ハ・A15・A16区では皆無ではないが、Ⅷ層にB・C群が集中することはない。こうした逆転状況が何によるものか断じることは難しい。3章4節で述べたように、人溝のイ区が東部地区的住居跡群に隣接することや、類似する土器が一致して出土する点を考えれば、西部地区で検出されたような、祭祀遺構等が近接しており、Ⅷ層の時期に大溝内に流入（施業）したと、考えねばならない。

ロ区について見ると、Ⅶ層では、C・D群に土器が集り、その後のE群に1点見られるだけで以後の土器はな

い。替わってⅦ層では、E・F・G群に集中してH群へと続く。したがって、Ⅸ区では、Ⅷ層からⅩ層へと土器の出上りが整合的に続くことが指摘される。

ハ区について見ると、Ⅶ層ではG群の土器が圧倒的に多く、前後するE・F・H群に平均的に接分するように集中している。しかし、Ⅷ層では、絶対数が少ないが、Ⅷ層の前段階のB・C群に、より集中している。これだけのデーターで結論つけることは、早計だが、3章4節で述べた、西部地区の溝状遺構群の始まりがⅧ層E群の時期と考えられると推測している。したがって、これらの遺構の最盛期はG群の時期としたい。

A 15 (ホ) 区では、Ⅷ層に比して、Ⅸ層により先行する土器（B・C群）が散見される率が多い。D・E群の土器は、Ⅷ層、Ⅸ層とともに同様に集中する。その後Ⅹ層ではF・G群と統くのに対し、Ⅷ層ではJ群で一層途絶え気味になって、G群へと続き、やや時間をおいてJ群で再び微増する傾向にある。A 15 区の大溝東縁には住居跡（KD 32～35）が、検出されている。こうした住居跡がD・E群の時期に併行する。したがって、A 15 区のD・E群の土器の供給さきは、こうした住居跡の可能性が指摘される。G群の土器の集積を説明できる積極的理由はない。J群の土器は、A 15 区大溝に流入する奈良時代の枝溝からの粉れ込みが推測される。

A 16 区では、全体量が多くないので何ともいえないが、Ⅸ層では、最も古いA群や、B群の土器も検出され、C・D群の土器が集中し、後のG・H群へと継続的に続かない傾向がある。A 16 区の大溝西岸には、古墳時代の方形周溝墓（KC 1）、祭祀遺構（K 11）、住居跡（KD 10）等が検出されている。これらの遺構はいずれも5世紀代の土器を伴出している。A 16 区の大溝内検出のA～B群の土器と、大溝西岸に立地する遺構を積極的に結び付ける根拠はないが、A 16 区大溝の西岸が、比較的古い時期に開発されていたことの影響を指摘したい。

このように、各地区の群別土器の集中と偏在の仕方を、遺構との関係で、符合させてみた。いずれも、状況証拠的で、説得力を欠くが、一応整合的に説明出来るので、上述したように、結論づけたい。

次に、Ⅷ層、Ⅸ層の時期について述べたい。表Ⅱを見れば、5世紀から7世紀末まで200年近い時間幅を持つことになる。これがそのまま大溝の占墳時代層の時期を示しているものではないことは明らかである。今回報告の対象とした、大溝の古墳時代層は、激しい流水の動きの中で堆積した砂と粘土が瓦砾となる堆積層と想定されることとは、さきに述べた。実際に大溝によって浸蝕された住居跡も存在するので、そうした際、遺物が埋積層とともに流入堆積することは容易に推定出来る。したがって、理論的にはA・B群とした古い時期の土器については、そうした理由を考えて良い。水中ポンプで常時排水をしているとは言え、幅20m、深さ（現地表下）3mの大溝を、標高では海拔0m以下まで掘下げる事は、発掘技術上の不可抗力で、上層からの粉れ込みも推定される。奈良時代の枝溝が大溝内に流入していればなおさらのことである。このような状況からI・J群の土器については、こうした、蓋然性を指摘したい。

Ⅷ層・Ⅸ層で検出された土器の総数を見ると表Ⅱの下段のようになる。先述したように、初期須恵器と7・8世紀代の須恵器の資料的性格を同一視できないが、固体数の多くのビーグの位置がⅧ層とⅨ層では前後にずれている。Ⅷ層とⅨ層は上下に接しているとは言え、物理的な厚さをもっている。したがって、Ⅷ層よりⅨ層がより古い時期となることは、厳然たる事実である。発掘した文化層の時期を、このように統計的な方法で決定する事の是非を問わなければ、Ⅷ層の堆積時期をB？・C・D群の土器の時期とし、Ⅸ層の堆積時期を、E・F・G・H群の土器の時期と推定出来そうである。このことは同時に、各層内の土器の細分に根拠がないことを示している。そして、I・J群土器の混入が、比較的少ないのは、続く奈良時代の上層（V層）とⅧ層との間に、Ⅷ層の砂層があり、これがⅧ層・Ⅸ層の分離の日安になったこと、さらに、泥炭質のV層と、砂層と砂質粘土の瓦層であるⅩ層との質的差による分離が、発掘時に、より容易だったことを示していると考えられる。

須恵器の杯類だけの表ではあるが、大溝のⅧ層・Ⅸ層の状況を傾向的には反映したものと考えたい。この表からは、伊場遺跡では、B群の時期に、比較的安定的に住み始め、D群時期に第一のビーグを迎えるE・F群の時期にはやや衰退し、G群では大きなビーグとなり、H群に続く。Ⅷ層としてはこの時期で終息期を迎える。以後はV

層の時期に統くと考えたい。

表Ⅲには、本報告書に掲載した土器（大溝古墳時代層出土土器）の各器種の時期別の出土傾向を示した。須恵器の表Ⅱと比較して壺・壇・壺・甕等に須恵器に比して一段階古い時期のものが検出されている。A群の時期以前には須恵器生産自体が始まっているが、当地域で須恵器の生産が始まるのは、B群の時期からである。伊場遺跡東部地区ではKD21のような、4世紀の住居跡も検出されていることを考えれば、大溝内出土上器の古い部分が、上器にあるのは当然と言える。

土器の出土傾向を全体的に見れば、A→B・C・D群とF・G群の時期の2箇所に出土する量的なピークがある。また、壺・高壺・壇・甕の一部は、D群の時期を前後して消滅してしまう。こうした器種の消滅は伊場遺跡の大溝内出土土器の特徴ではなく、一般的に、須恵器生産が恒常化して、壺類・壇等が須恵器にとって変わった結果としてよい。伊場遺跡では、D群の時期の前後に土器と須恵器の変換期があったと考えれば良い。言うまでもなく、壺や、形態的には壺とした物のうち、煮沸形態として利用する器種については、その後まで継続し、煮沸形態として利用された鉢形土器等は壺の出現によってS字状口縁の甕等は器種そのものが消滅してしまったと考えられる。

このように、表Ⅲを表Ⅱとの関係で補完的に見れば、周辺の遺構群との関係や、VII層・VIII層の時期的な年代幅も須恵器をもとにした結論と矛盾せず、整合的である。

次にVII層・VIII層出土上器以外の上器について考えてみたい。大溝が溝としての形と機能を果たしていたのは、古墳時代層（VII層・VIII層）までであり、それ以前は『溝』であったか疑わしい。ただVII層は、第6図で見るよう、大溝跡に添うようにして堆積している部分もあり『溝』としてあった可能性はある。

第7図に示した土器は、イ7区のIX層で検出し、時期的にはC群に併行させて考えた。VIII層の堆積時期は、B群の時期を初現としC・D群の時期が主体になると想定されることは先に述べた。したがって編年的には矛盾する結果となってしまう。ただ、第7図に示した高壺は、器形的には古い様相を示している。こうした要素をイ7区のIX層での在り方として重視し、VIII層に接する様なIX層で（IX層最上層）出土した土器とこじつけて考えてみたい。X層は、ほぼ、水平堆積している上層で溝としての形態はとられてはいない。第5図の断面図に示したように、弥生時代後期（矢山式）の土器が検出されている。

中村編年	田辺編年	速考編年	川江試案	78. 9. 30	須恵器時期別群
I 1 O N 155他 2 O N 3他 3 O N 22他 4 O N 5他 5 O N 152他	TK 73 TK 216 TK 208 TK 23-TK 47	明通り室	I 前 伊場 森上G3号墳 伊場 広野古墳	A	500年
			後 伊場 宮ノ原	B	
II 1 K M 239他 2 K M 124他 3 K M 128他 4 K M 18他 5 K M 28他 6 K M 115他	M T 15 TK 10 TK 43 TK 209 TK 217	II 前 有玉・衛門坂窓 後 有玉・衛門坂窓 III 中 有玉・川尻窓 後 大沢窓 前 大沢・川尻窓	II 前 犬屋内B3号墳・沼津長塚古墳 後 鶴塚古墳・大門人塚古墳	C	600年
			前 八幡2号墳・鈴鹿落7号墳	D	
			中 菊池山古墳・城山古墳	E	
			後 木丸山古墳II	F	
			前(a) 丸山古墳II	G	
III 1 K M 234他 2 K M 230他 3 K M 117他	TK 217 TK 217	IV 後 大沢窓	IV 中(b-c)向沢古墳・匂坂27号墳	H	700年
			後(d) 水樹渡A14号墳	I	
			前(?) 伊場(10区)(北平橋川4号窓) 高崎広瀬古墳	J	
IV 1 K M 230他 2 K M 22他 3 K M 11他 4 K M 31他	M T 21 TK 7 TK 7とTK 112の中間	V 大沢窓	V 中 伊場?	J	700年
			後 伊場(9次)(茅ヶ原川1号窓)		
V			城山		

表1 時期別群 対象表 (1970、「静岡県考古学会」加筆転載)

表II 須恵器の地点・時期別頻度表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
イ 区	■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
ロ 区	■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
ハ 区	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
キ 区	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
モ 区	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■

この表は、須恵器の坏縁（高縁を含む）407個体の出土層位を地区別に表にしたものである。■の1個が、須恵器の1個体を示している。縦軸に出土地点と出土層位を示し、横軸には、時期（表Iの時期の群別名A～J）を示した。

層位については、VII、VIII層の各層でa～dまで分層して発掘されたものについては該当する欄に記載し、並にVII層、VIII層として取上げられた須恵器についてはVII、VIII層の名義当欄に記載した。（VIIa～d層、VIIa～d層の合計をVII層、VIII層の欄に示したものではない。）

したがって、縦軸は各地區毎に下に行く程、深い土層からの出土を示し、横軸では右に行く程、新しい時期に属する須恵器となるようを作ったものである。

なお、空缺番号にVII、VIII層出土となっているものは、VII下、VII最下層と記載されたものは、VIII層の欄に含めた。またVIId～VIII層となっているものについては、VIII層の須恵器として扱った。

・イ区についてはVIII層出土の坏縁はなかった。

・イ区VII層、ロ区VII層、モ区VII層、ハ区VII層はa～dに分層して発掘していない。

・最下段の合計の欄にはVII層、VIII層における、各群別毎（時期別）の総数を数字で示し、その傾向を図示したものである。

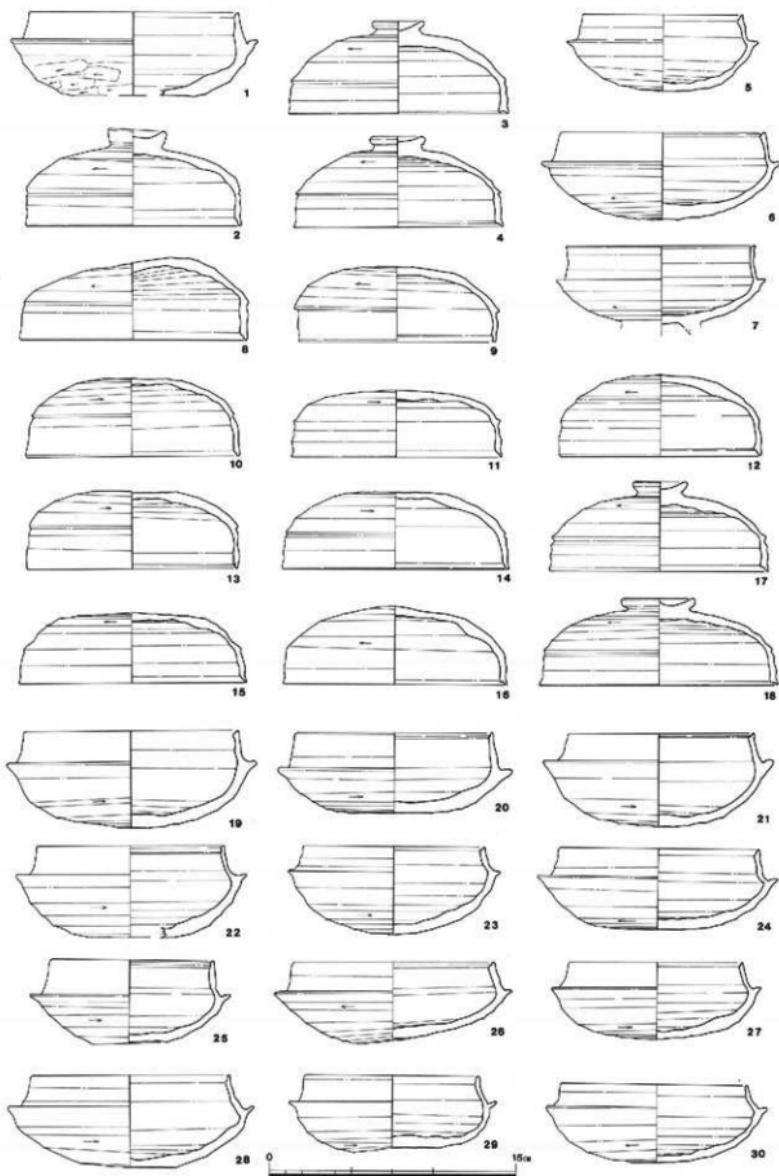


表III 土師器の器種別出土傾向

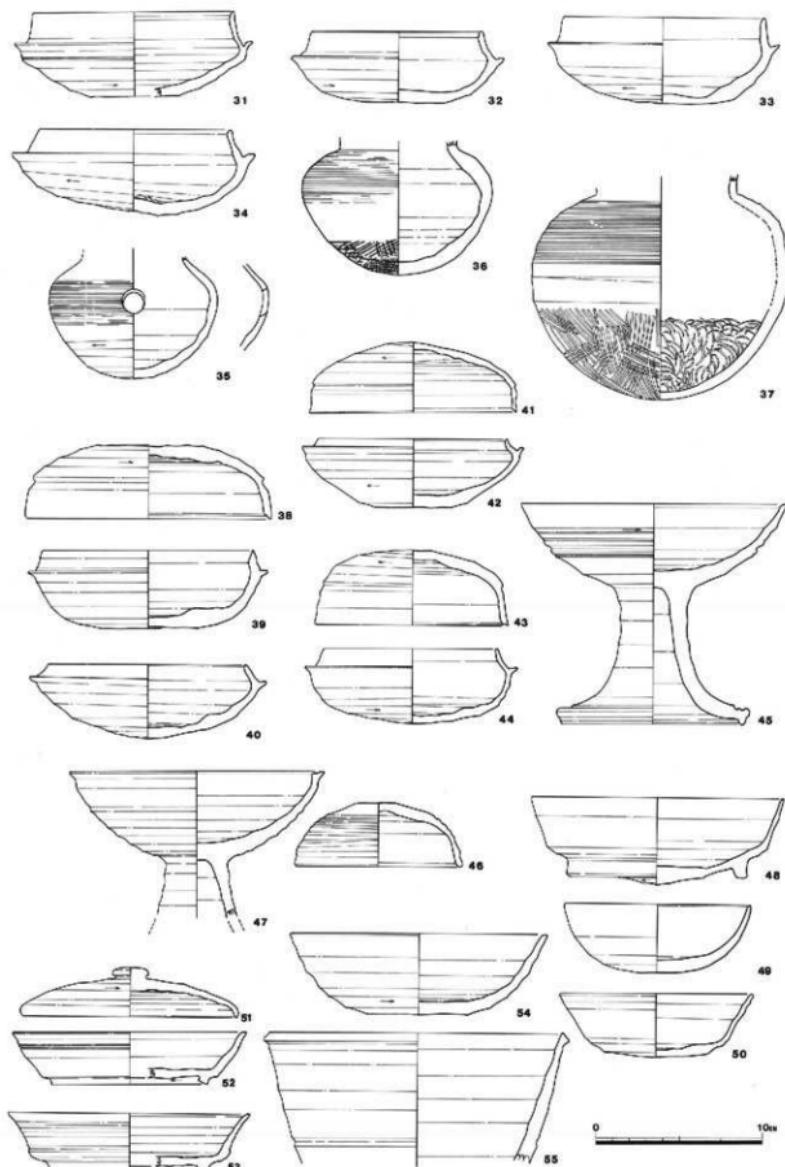


本報告書に掲載した土師器について出土傾向を、棒線によつて示したものである。線の太さが量的な傾向を示し、線の長さは検出した土師器の時期幅を示している。上欄のA～Jは、表Iの時期の群別名（須恵器の時期編年）に対応させている。

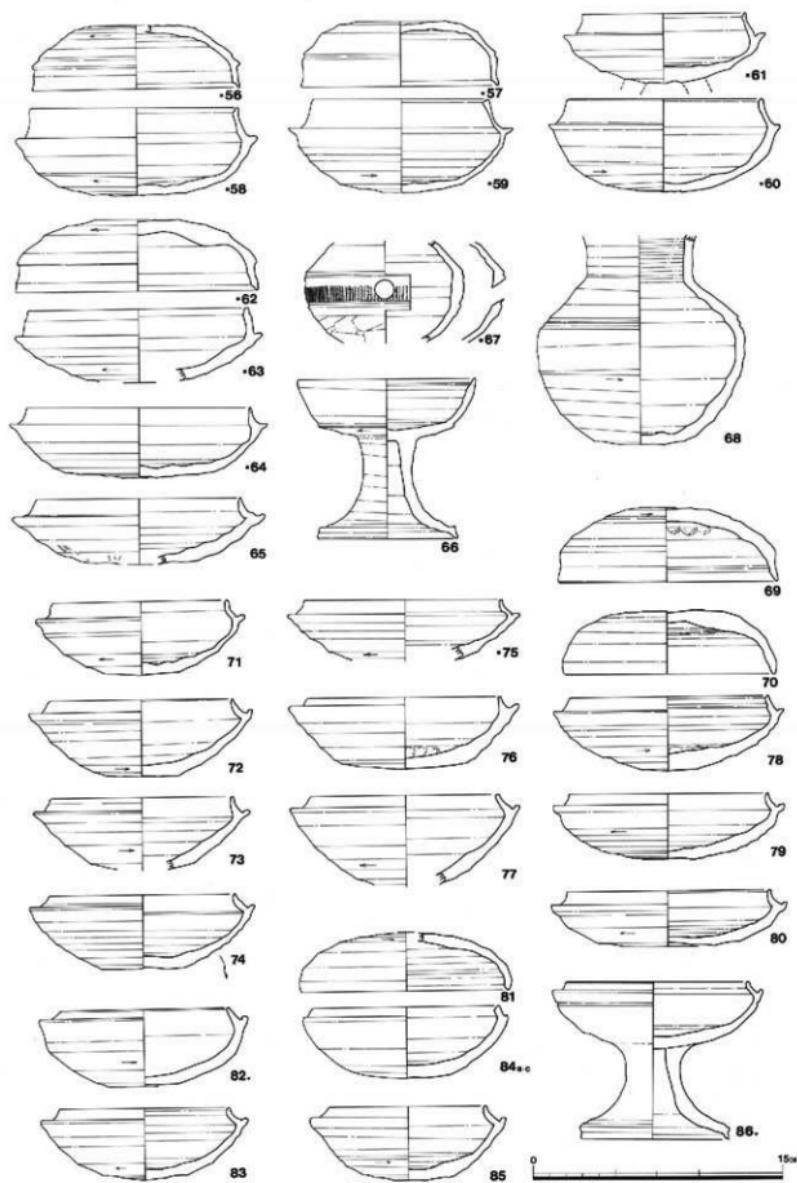
・土師器については、破片が多く全体の個体数を正確には確定できない。したがって、この表は実数を確認し統計的に検討して作られたものではない。土師器の時期幅、出土量の多寡とともに、概略的には表のような傾向が見られたと考え、作製したものである。



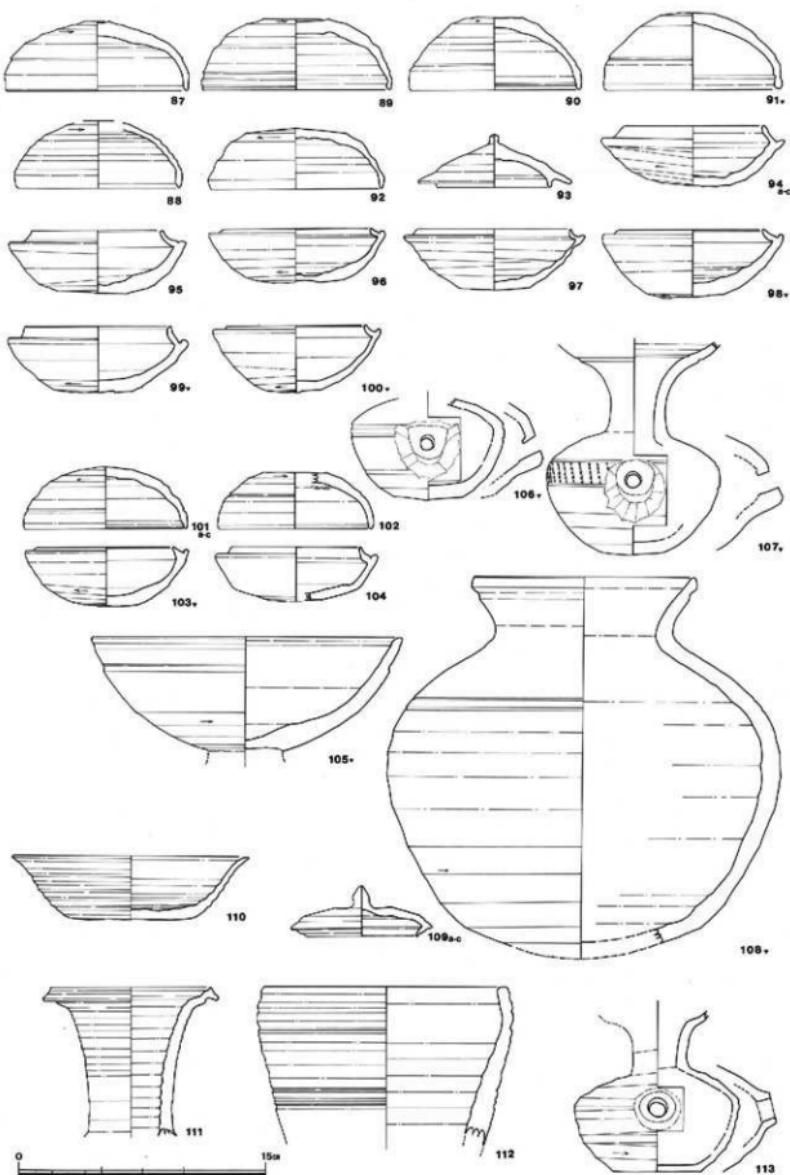
第8図 大溝I区 VII層・Ⅷ層出土土器(須持器)実測図



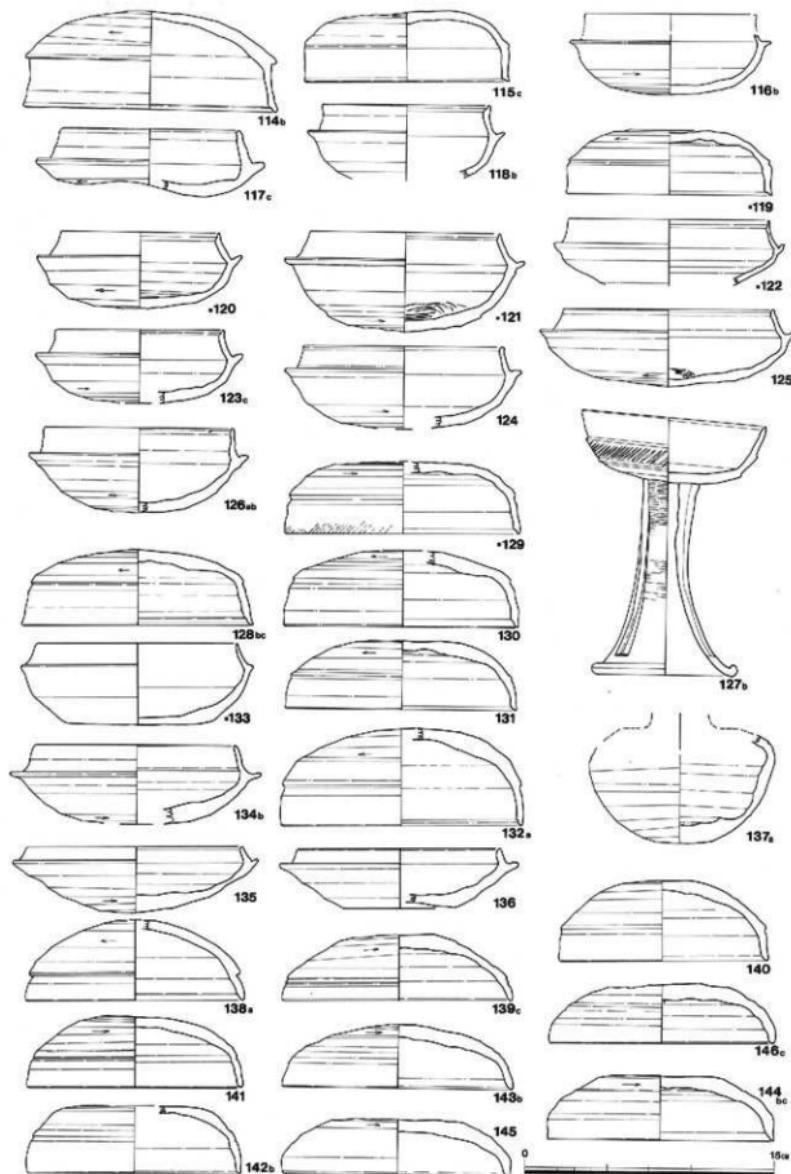
第9図 大溝IV区 VII層・Ⅷ層出土土器(須恵器)実測図



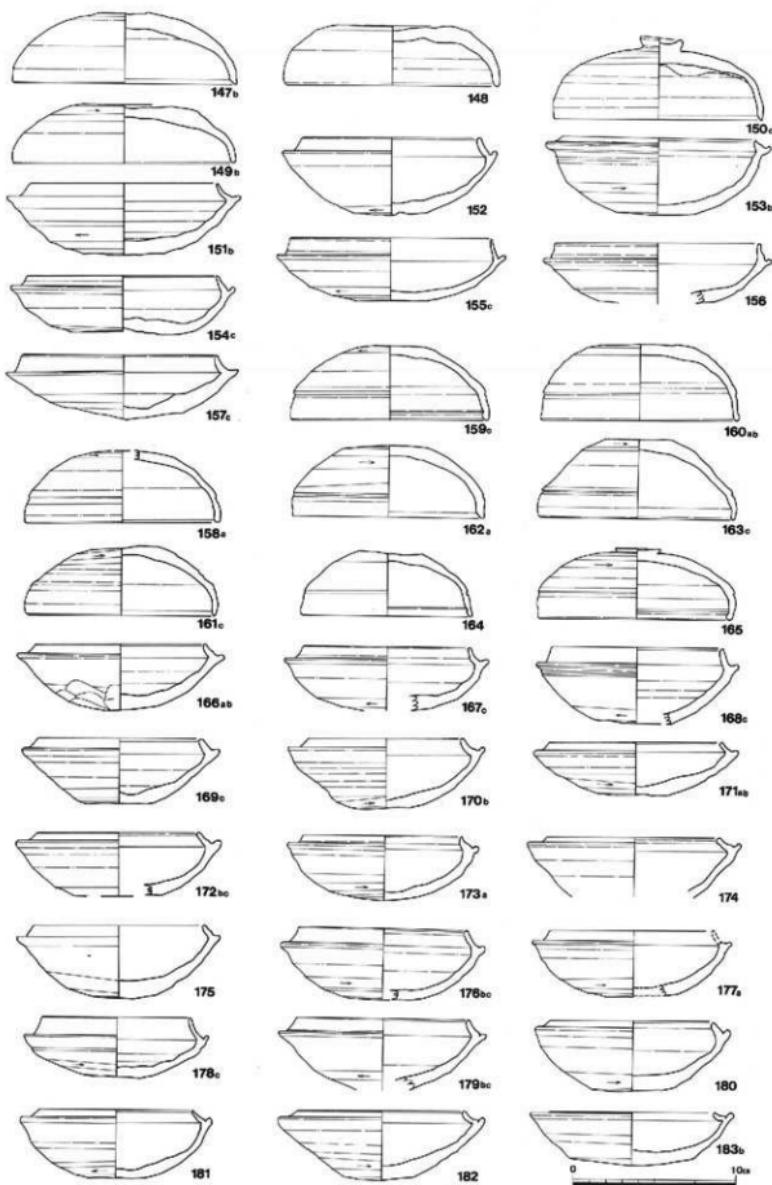
第10図 大湊口区 VII層・埴居出土土器(須恵器)実測図



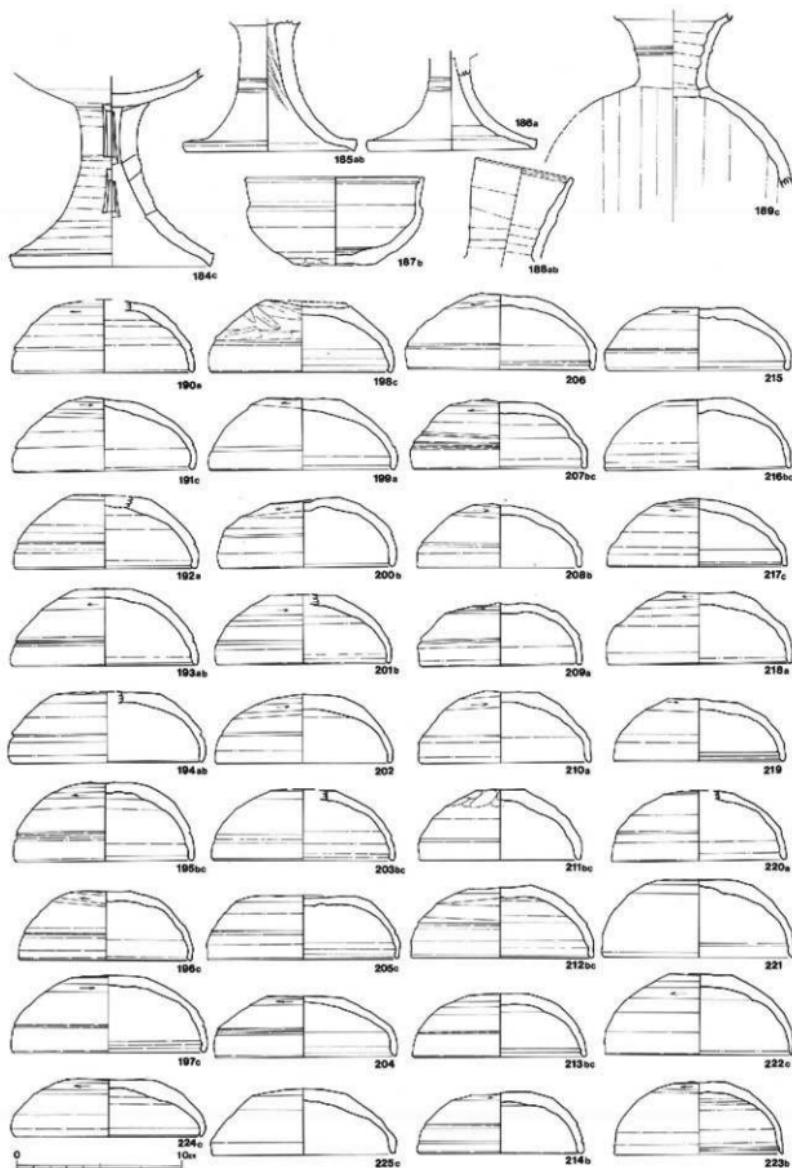
第11図 大溝口区 VII層・Ⅴ層出土土器(須恵器)実測図



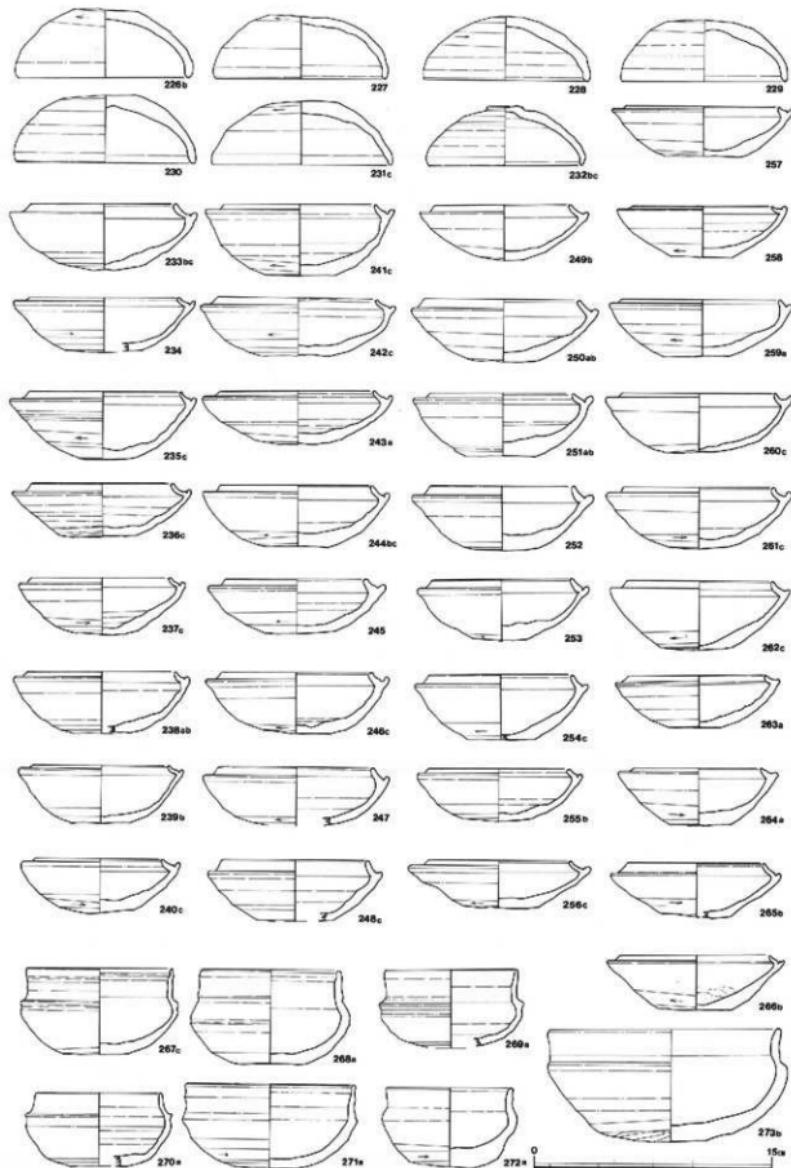
第12図 大溝八区 VII層・埴居出土土器（須器）実測図



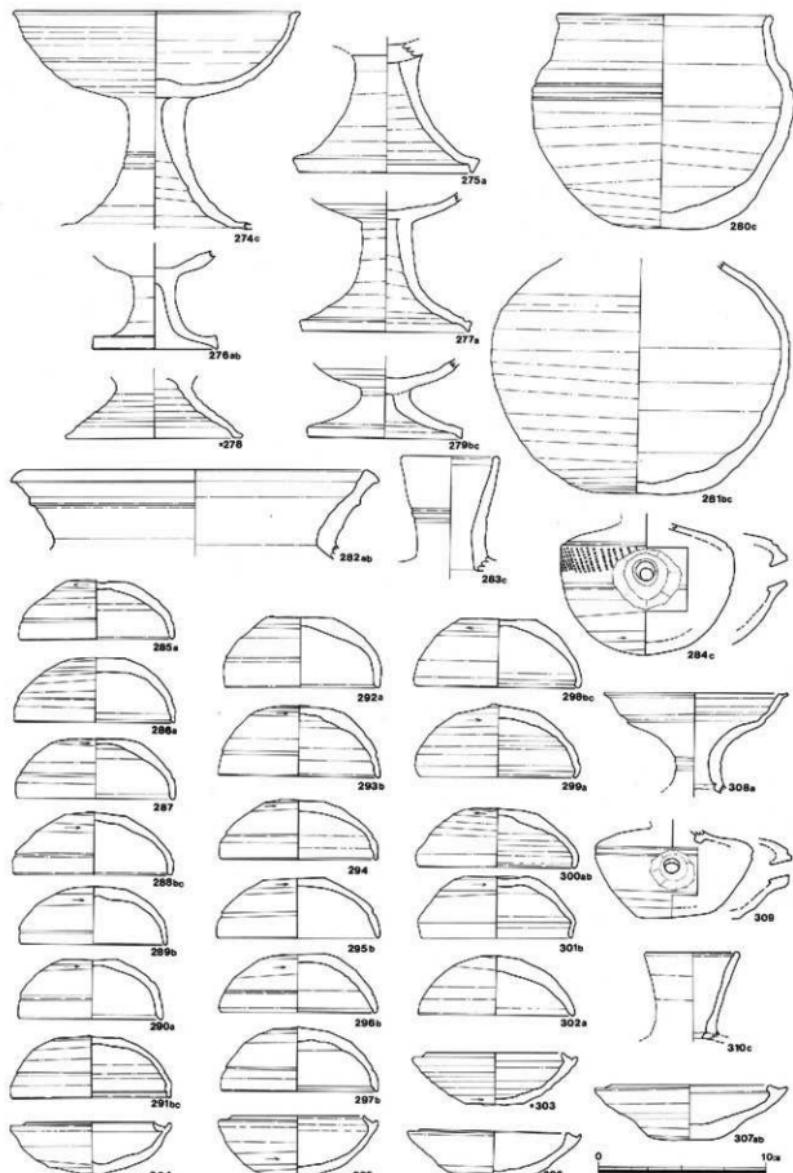
第13図 大溝八区 VII層・VI層出土土器(須恵器)実測図



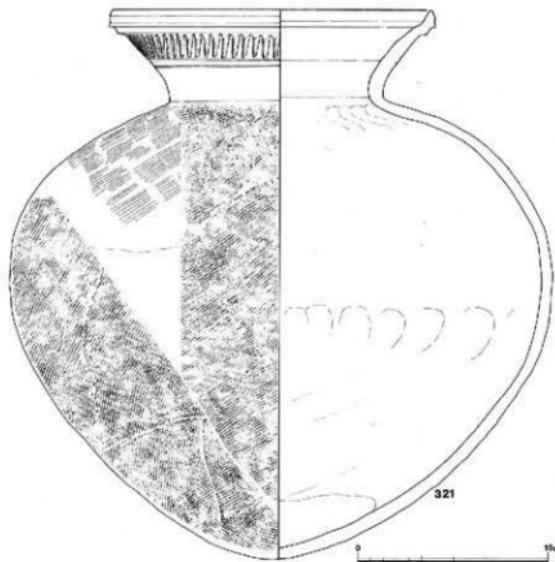
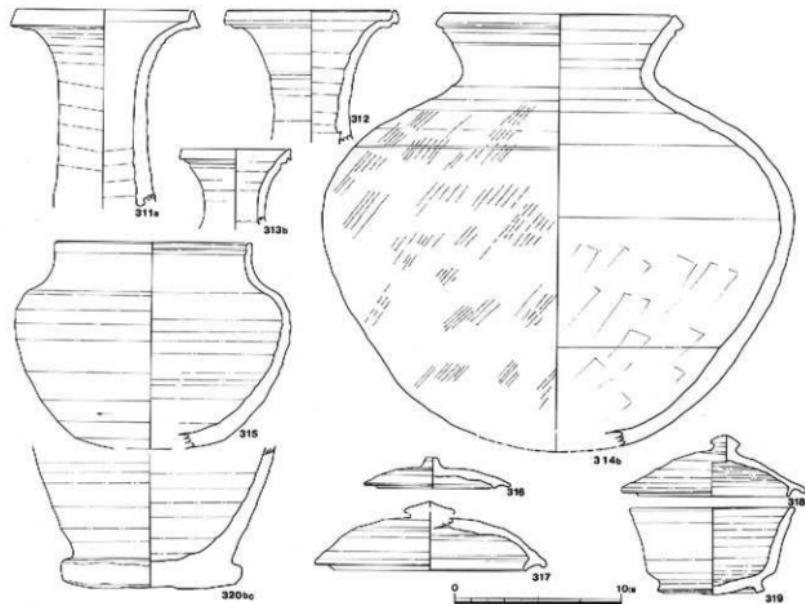
第14図 大溝小区 磁層・埴居上上器(須恵器)実測図



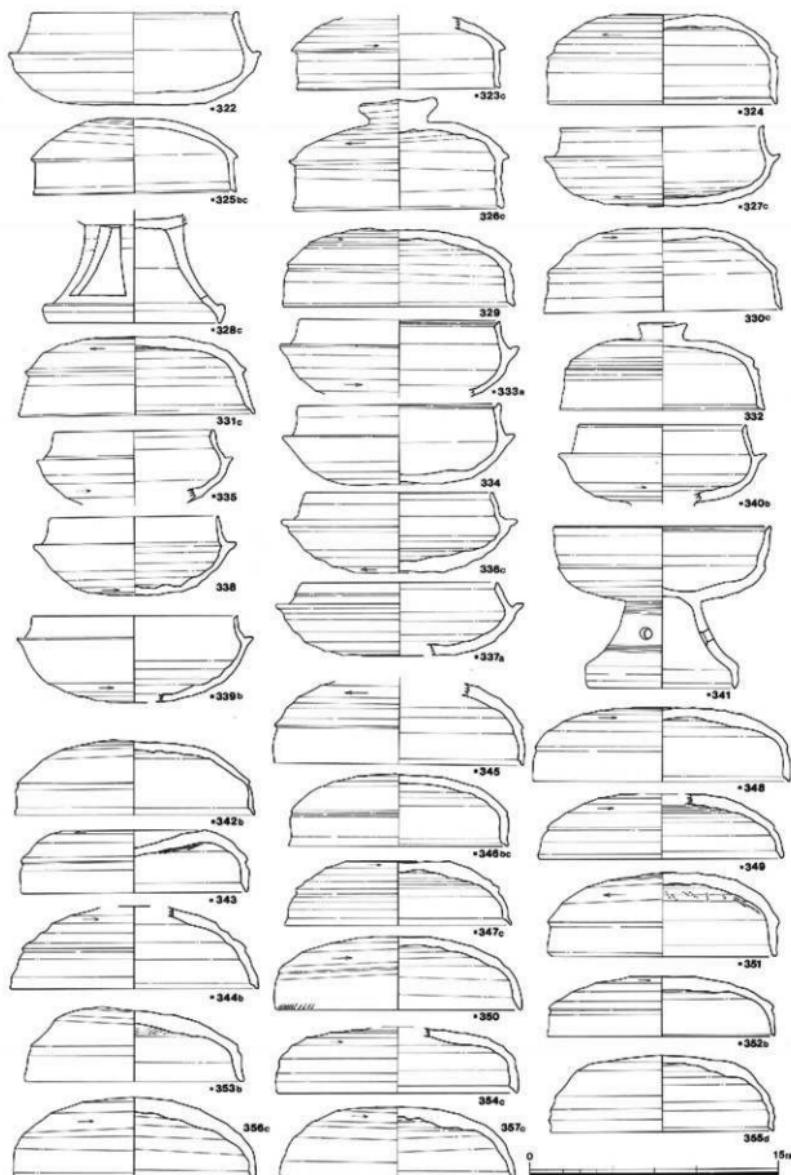
第15図 大溝八区 VII層・Ⅷ層出土土器（須恵器）実測図



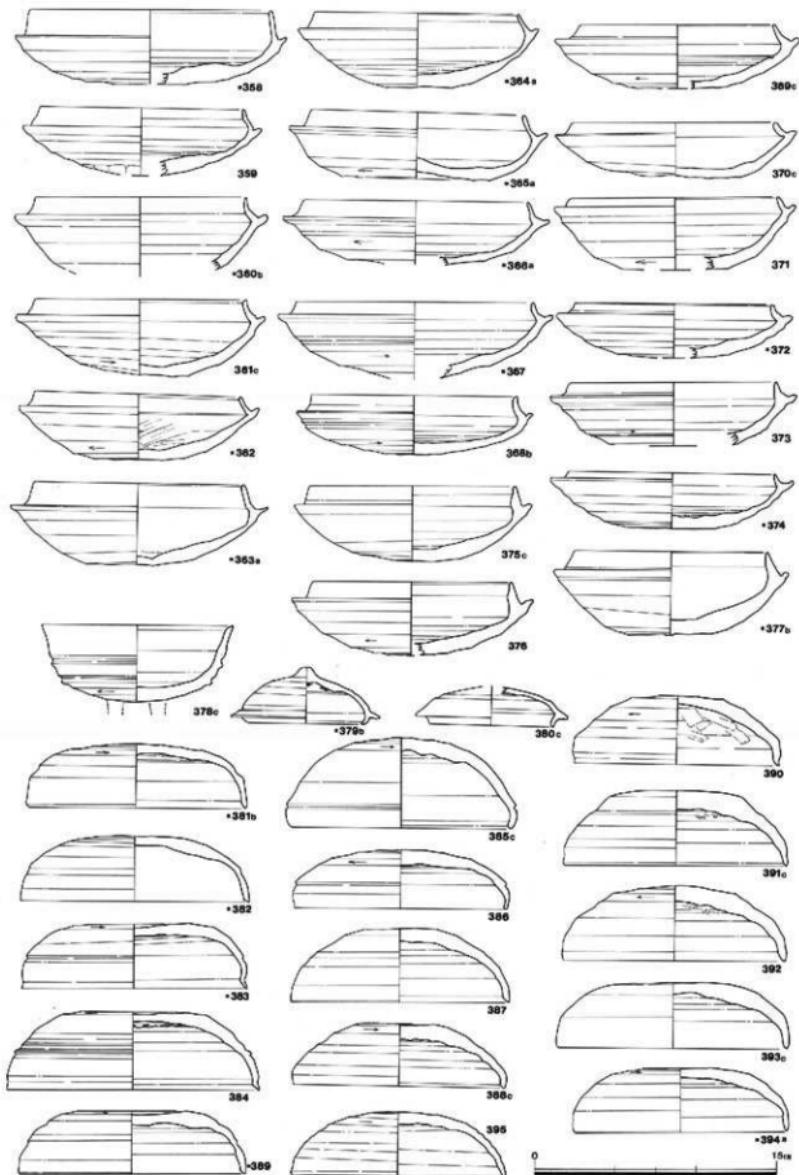
第16図 大溝八区 VII層・埴輪出土土器（須恵器）実測図



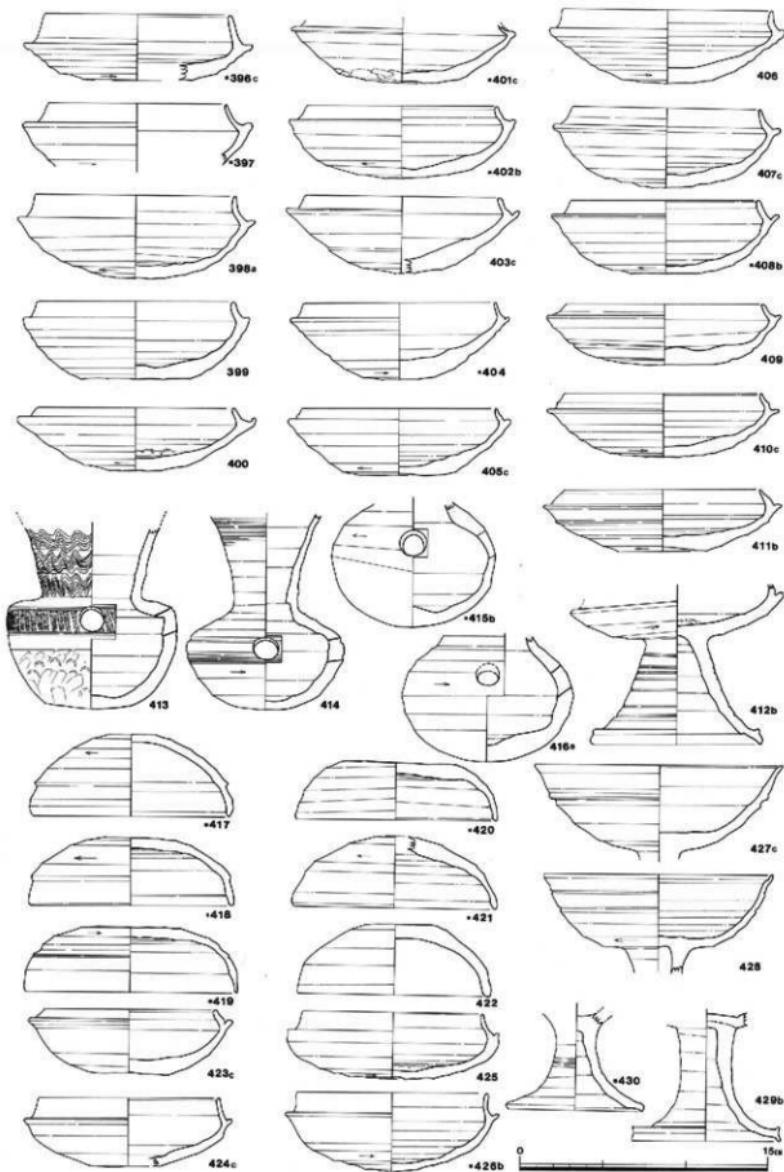
第17図 大溝ハ・イ区 IV層・Ⅴ層出土土器（須恵器）実測図



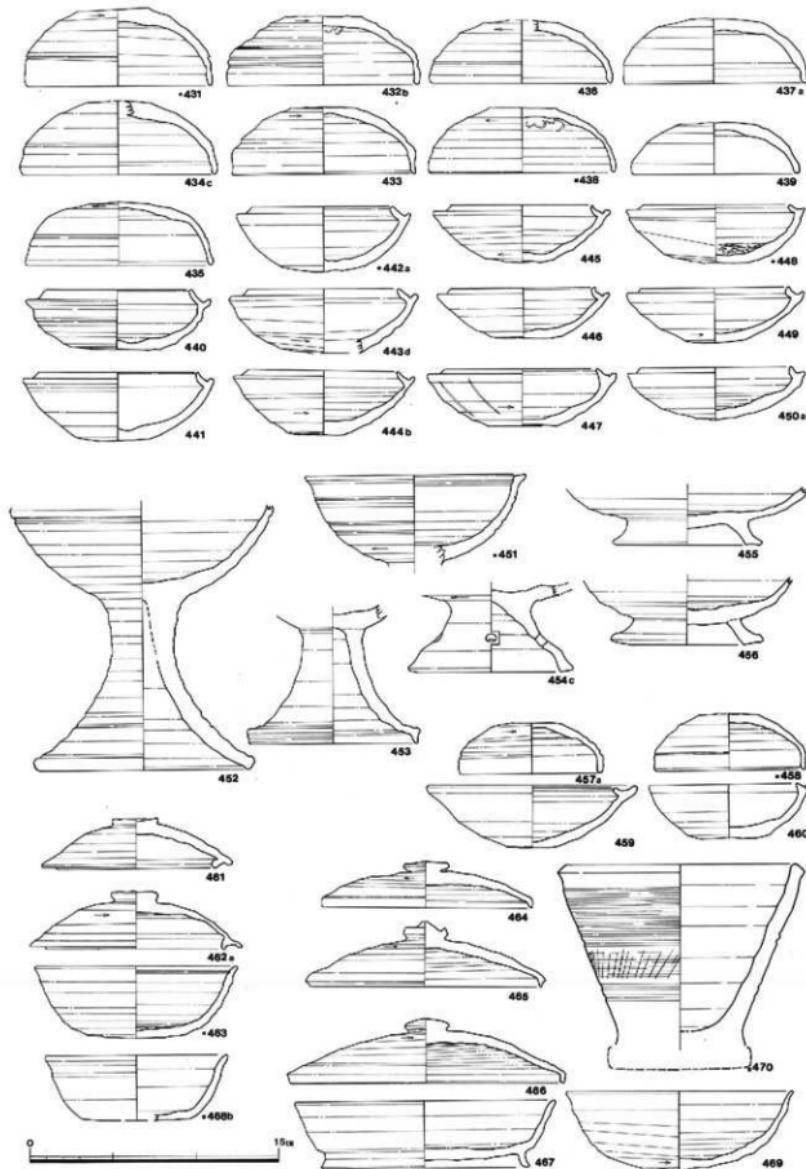
第18図 大溝A15区・本区 VII層・埴層出土土器（須恵器）実測図



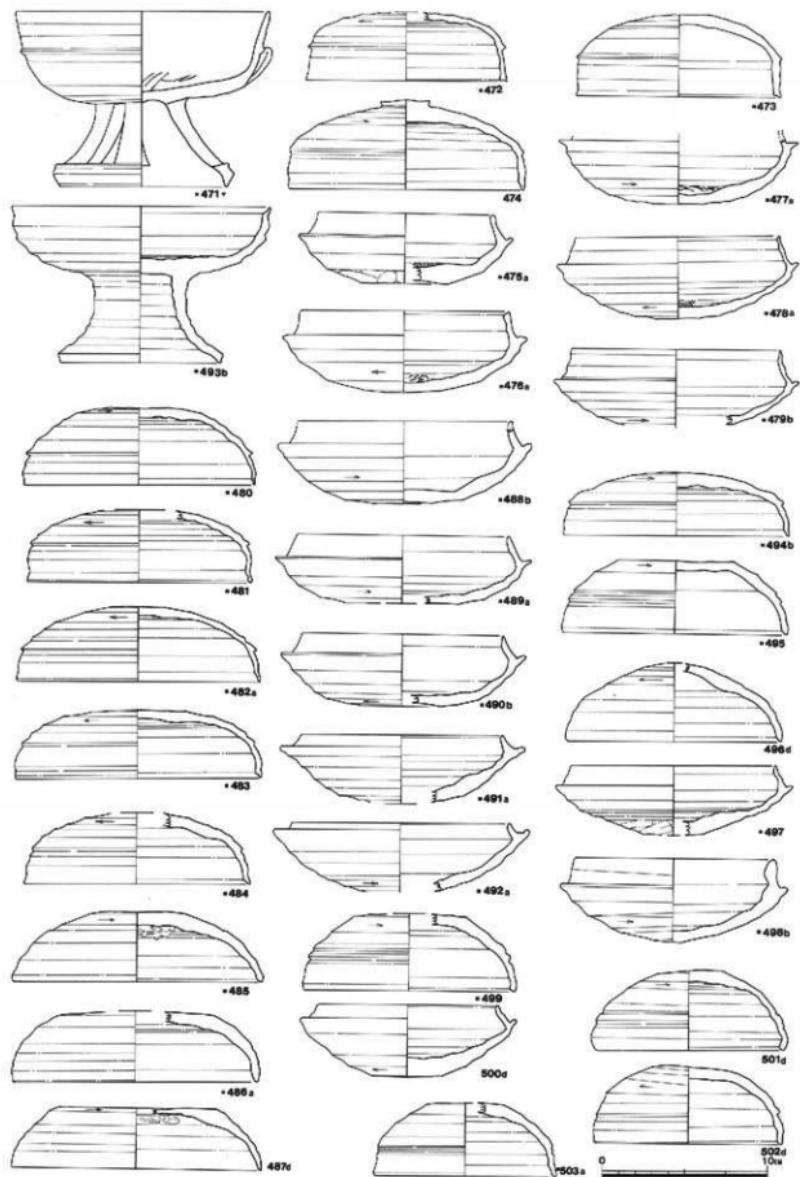
第19図 大溝A15区・本区 VI層・Ⅶ層出土土器(須恵器)実測図



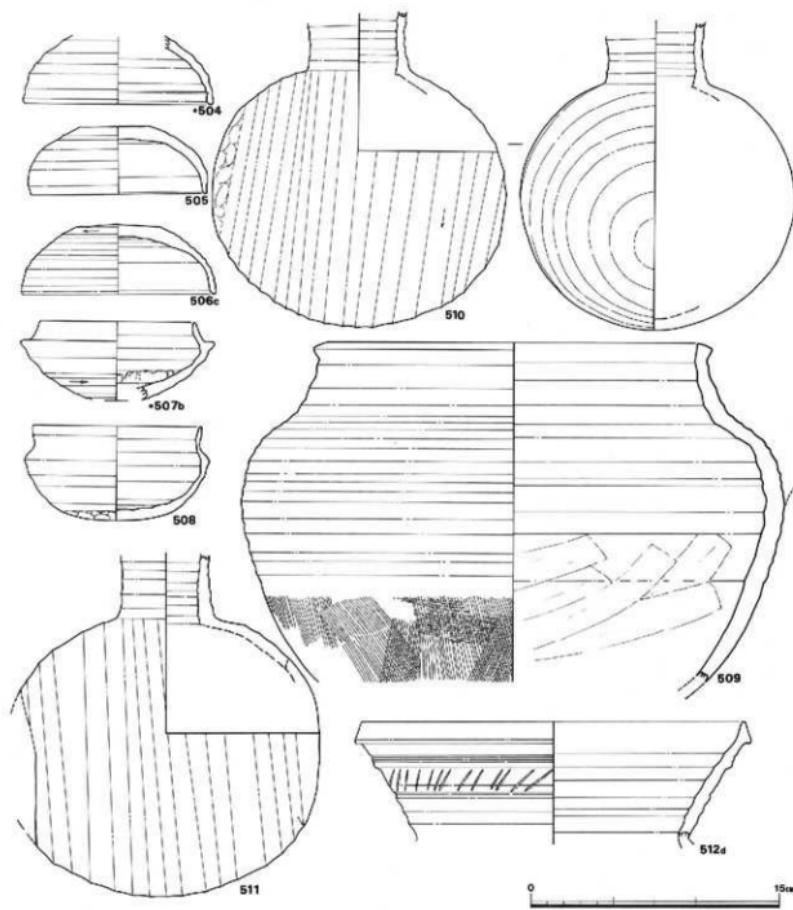
第20図 大溝A 15区・水区 5層・埴層出土土器(須恵器)実測図



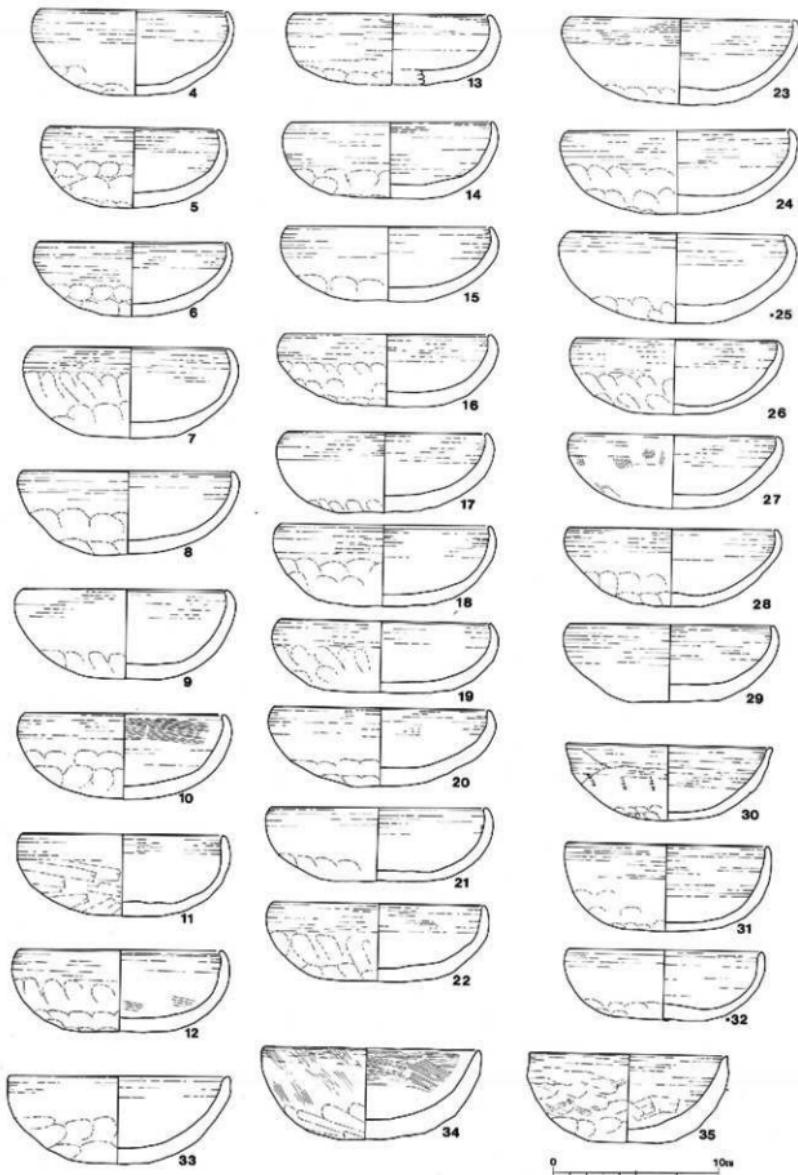
第21図 大溝A15区・本区 VII層・埴層出土土器(須恵器)実測図



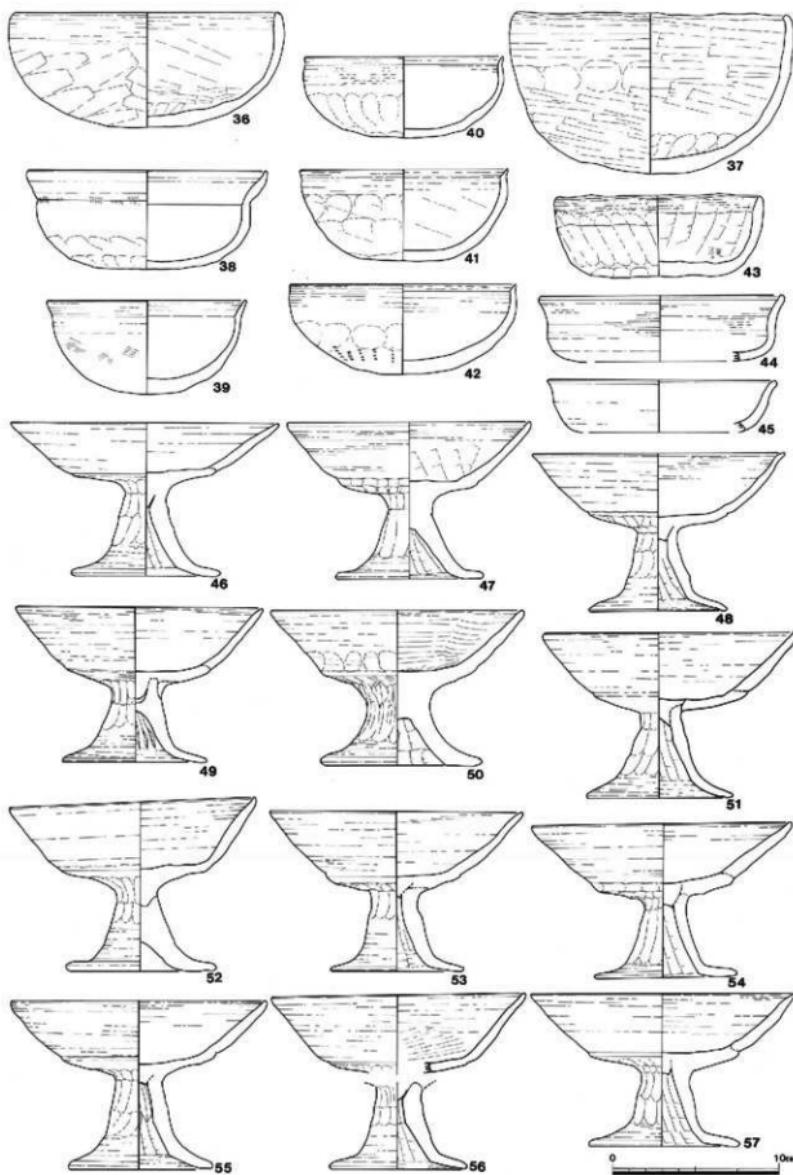
第22図 大溝A 1-6区 VII層・Ⅲ層出土土器(須恵器)実測図



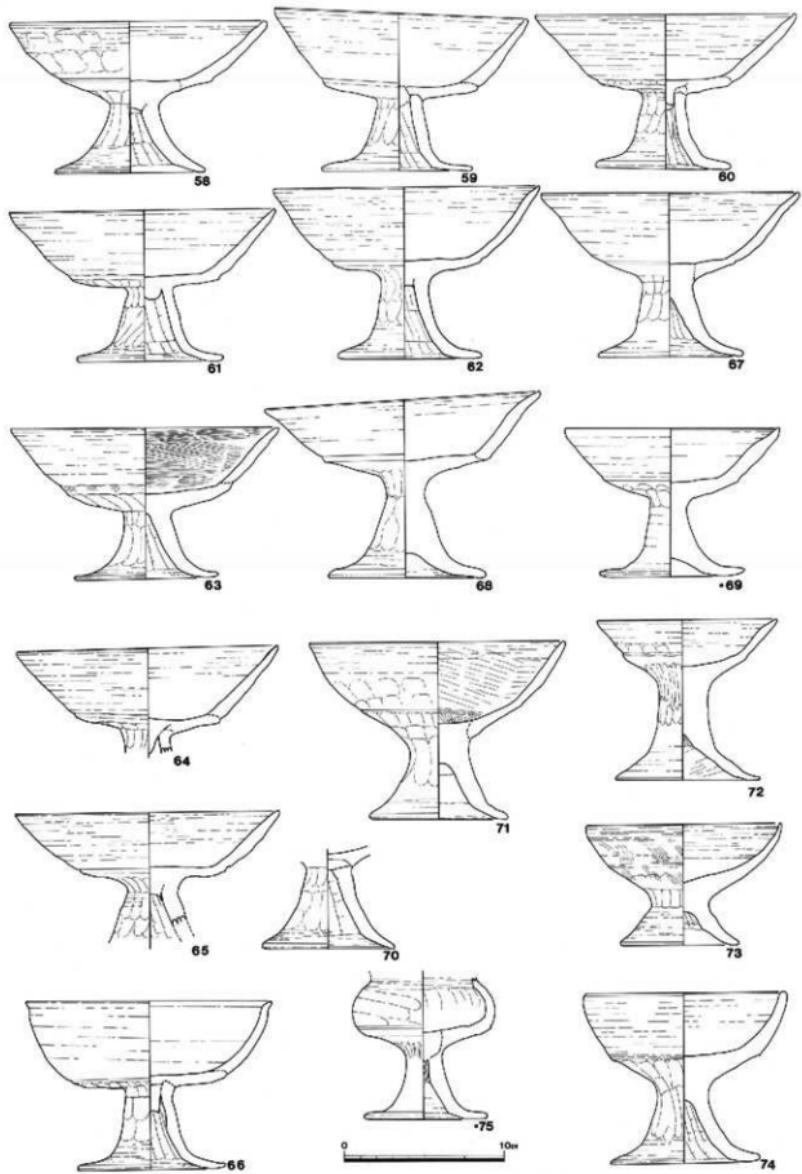
第23図 大溝A15・A16区 VII層・VI層出土土器(須恵器)実測図



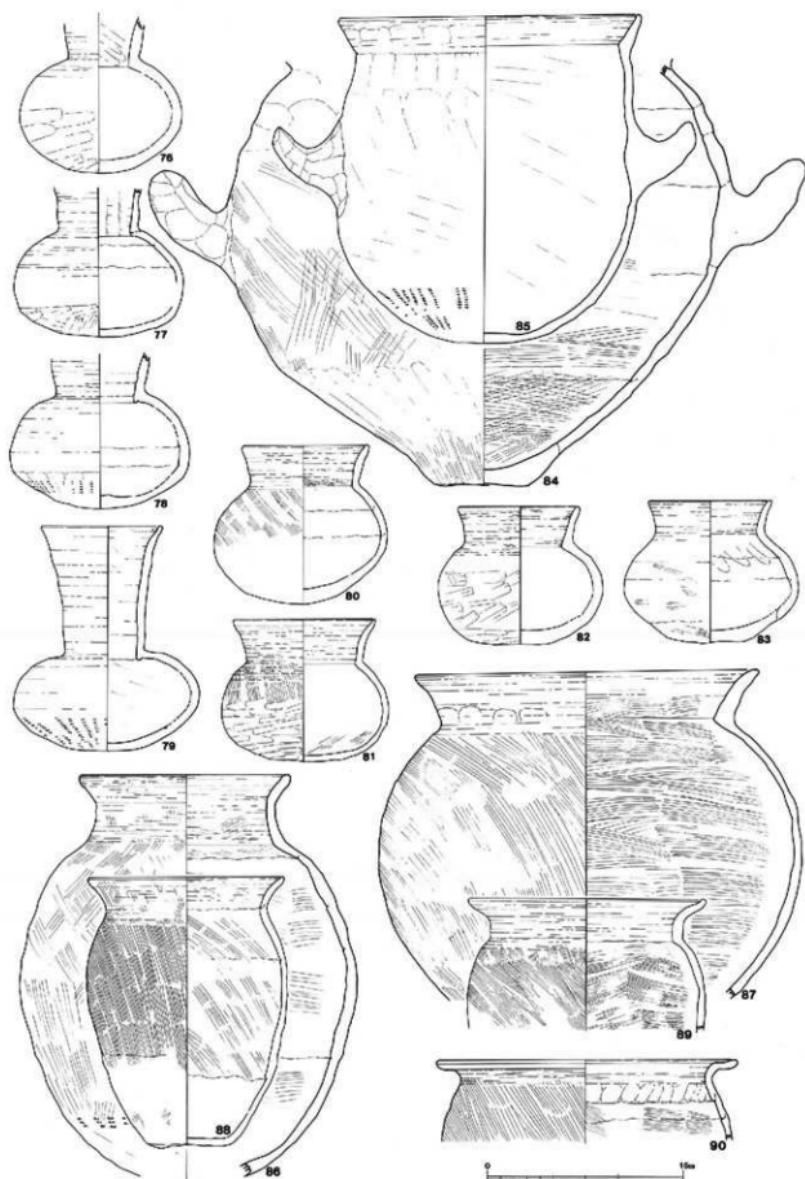
第24図 大溝区 VII層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図



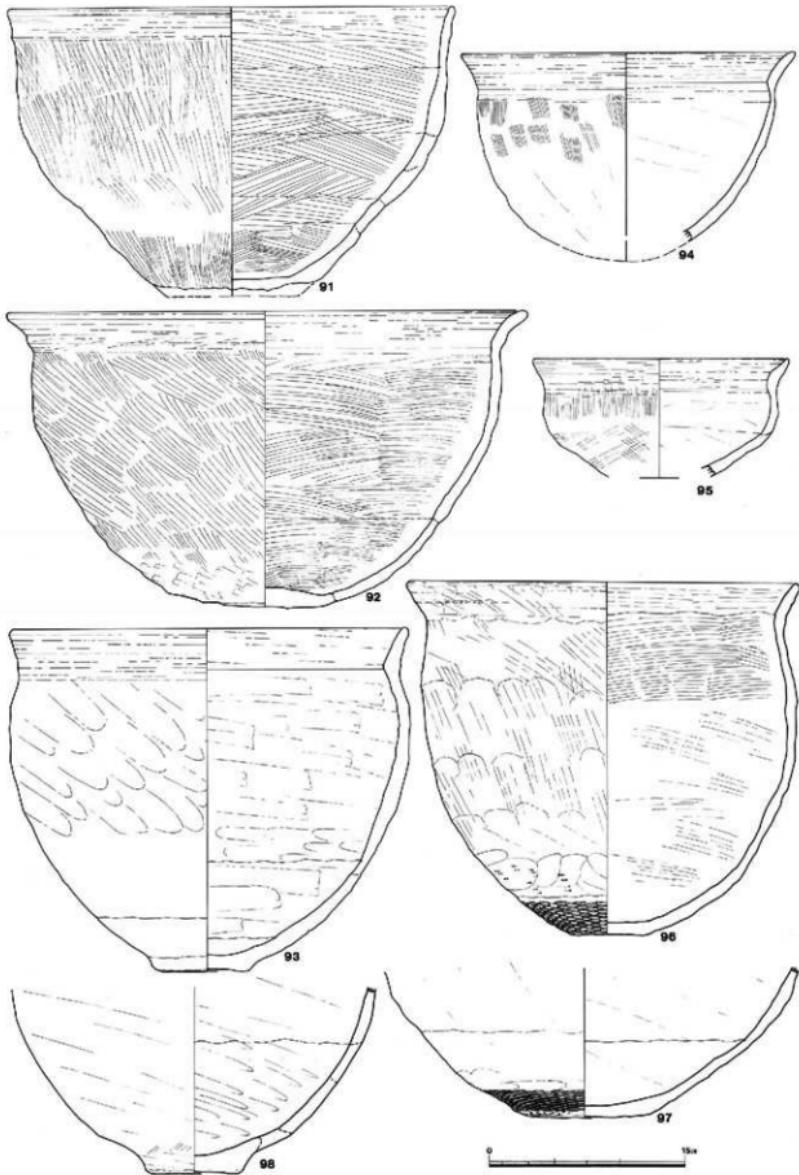
第25図 大溝1区 Ⅶ層・Ⅷ層出土土器(土師器)実測図



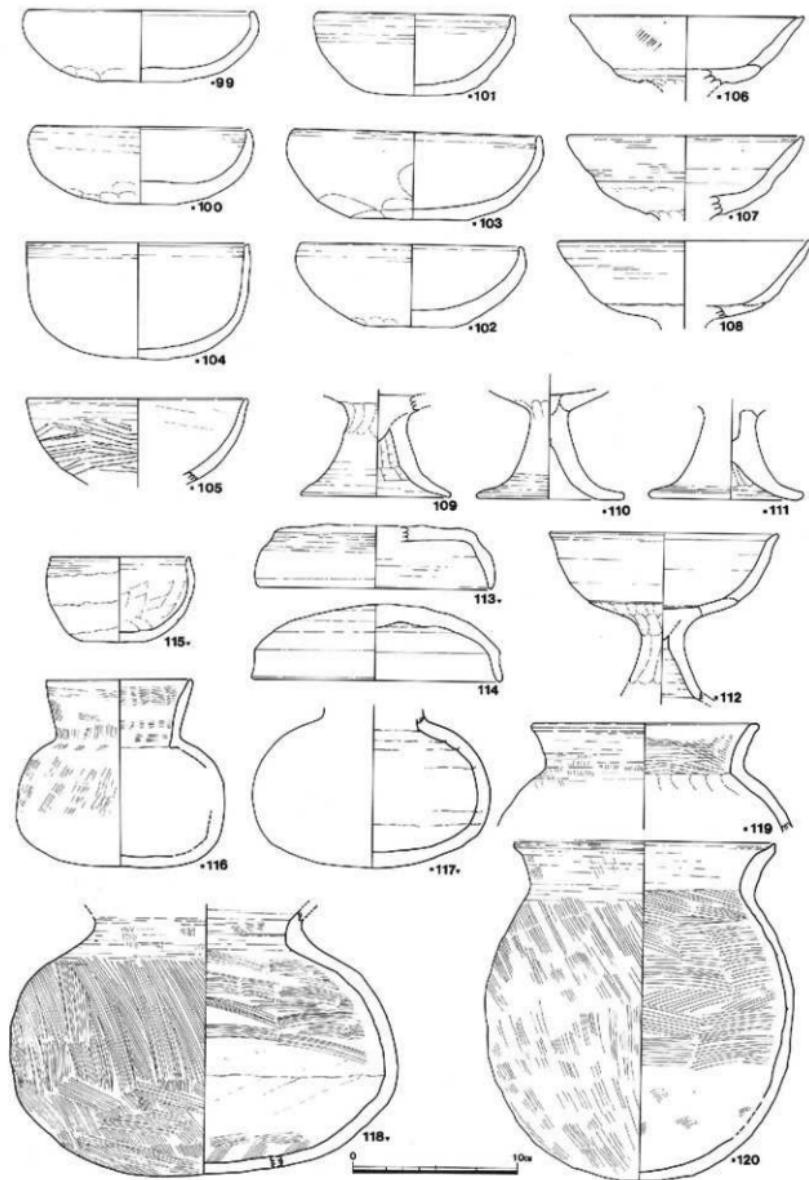
第26図 大溝イ区 VII層・埴層出土土器(土器)実測図



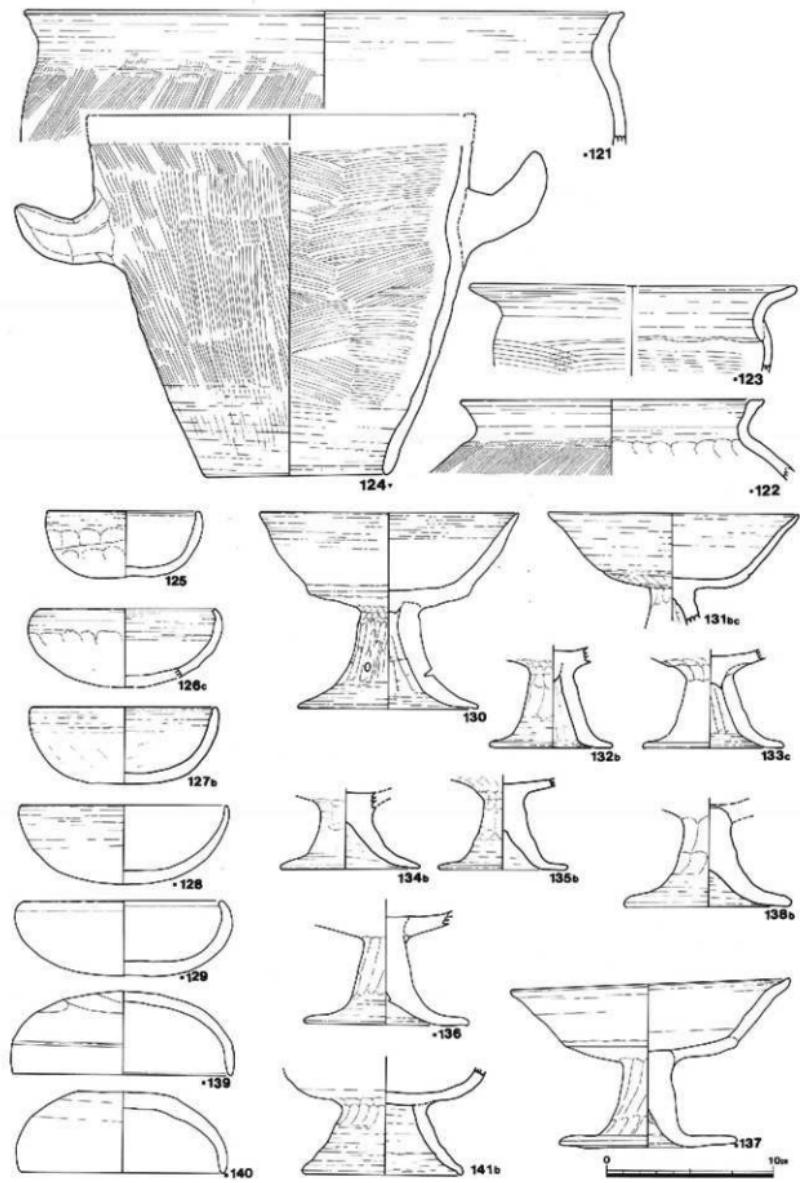
第27図 大溝イ区 VII層・埴層出土土器(土師器)実測図



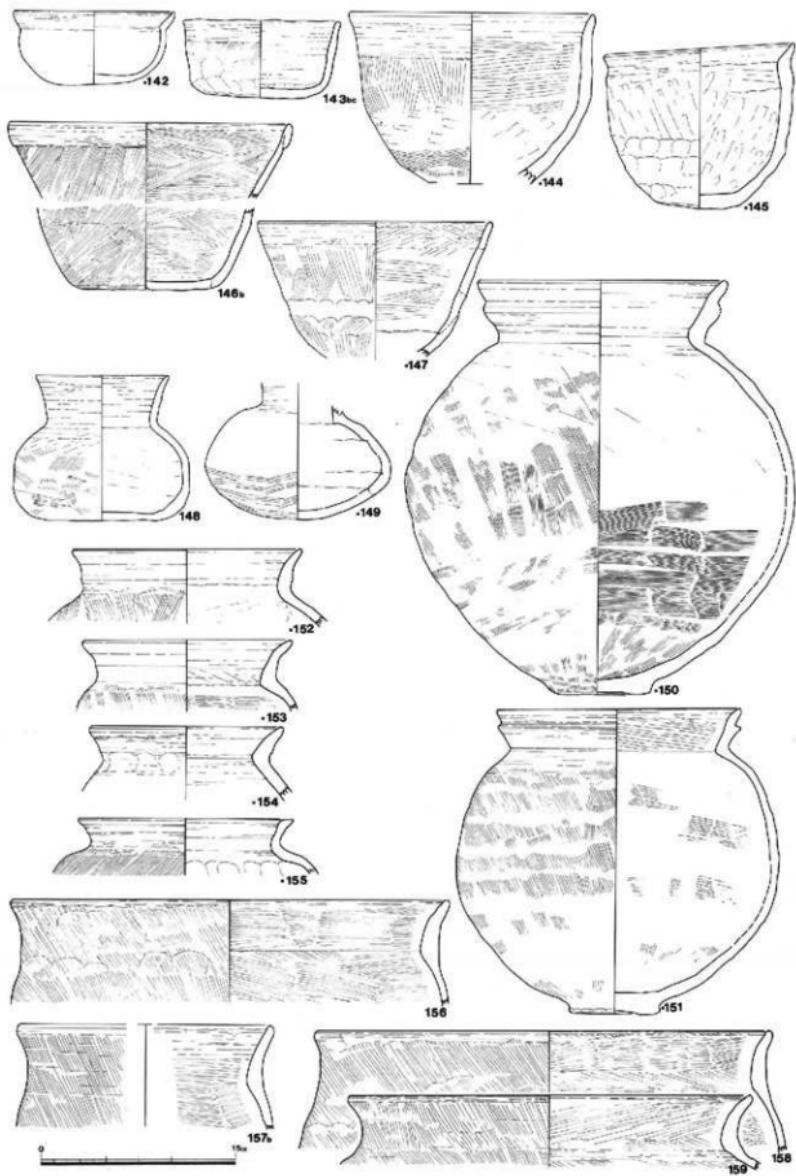
第28図 大溝イ区 VII層・VIII層出土土器(土師器)実測図



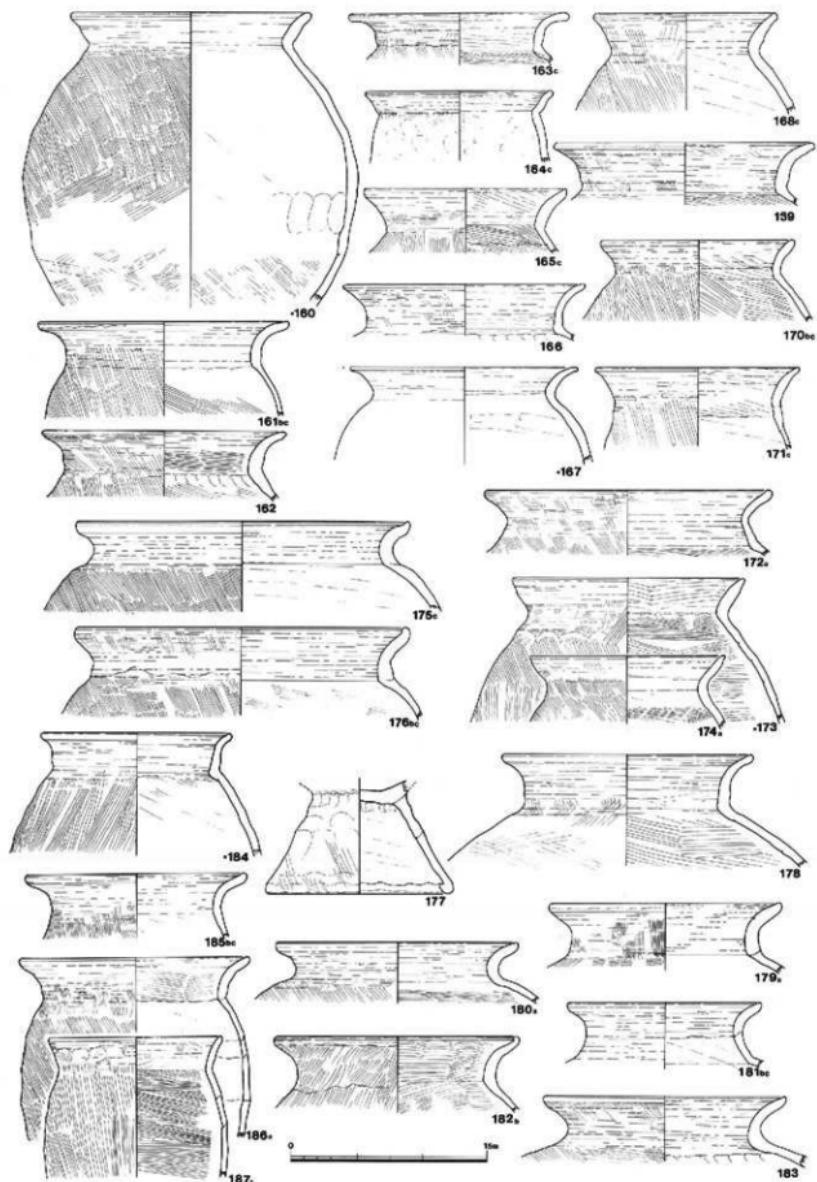
第29図 大溝口区 VII層・Ⅷ層出土土器(土器)実測図



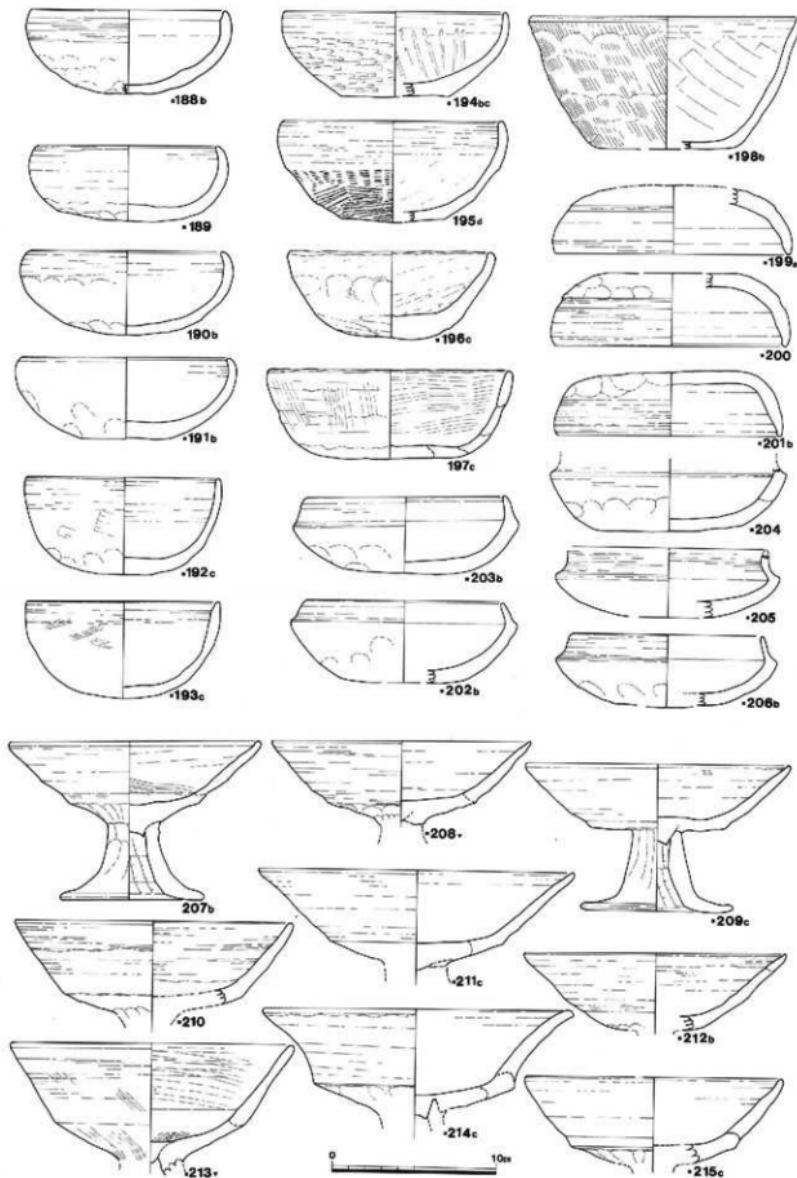
第30図 大溝口・八区 VII層・埴層出土土器（土器）実測図



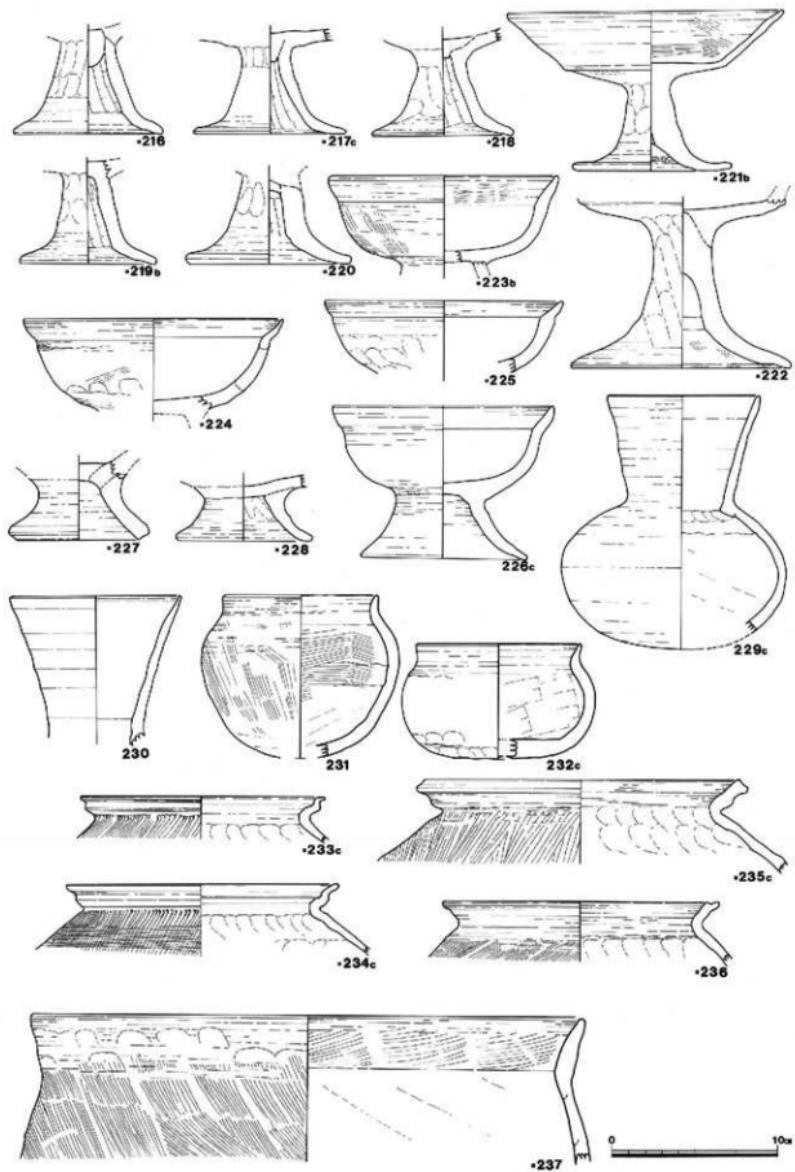
第31図 大溝八区 VII層・Ⅷ層出土土器（上部器）実測図



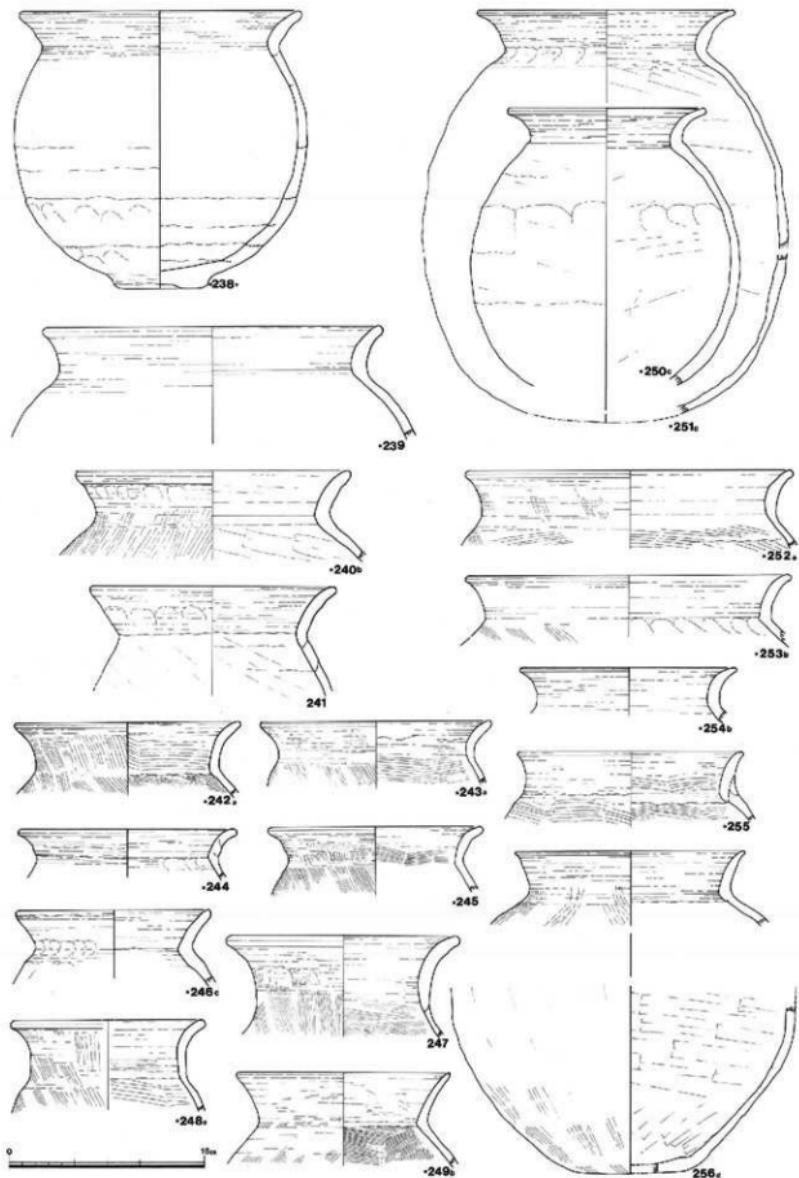
第32図 大溝口・八区 VII層・埴輪出土土器(土師器)実測図



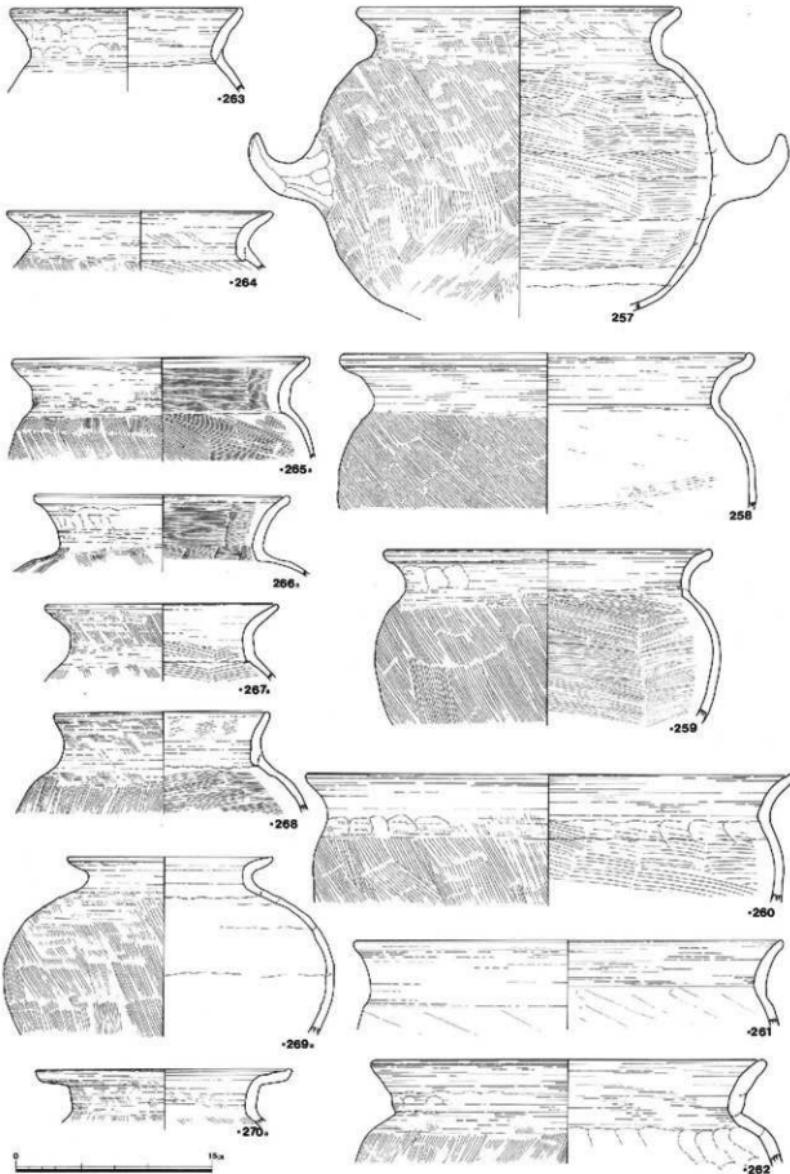
第33図 大溝A 1.5区 VII層・VIII層出土土器(土師器)実測図



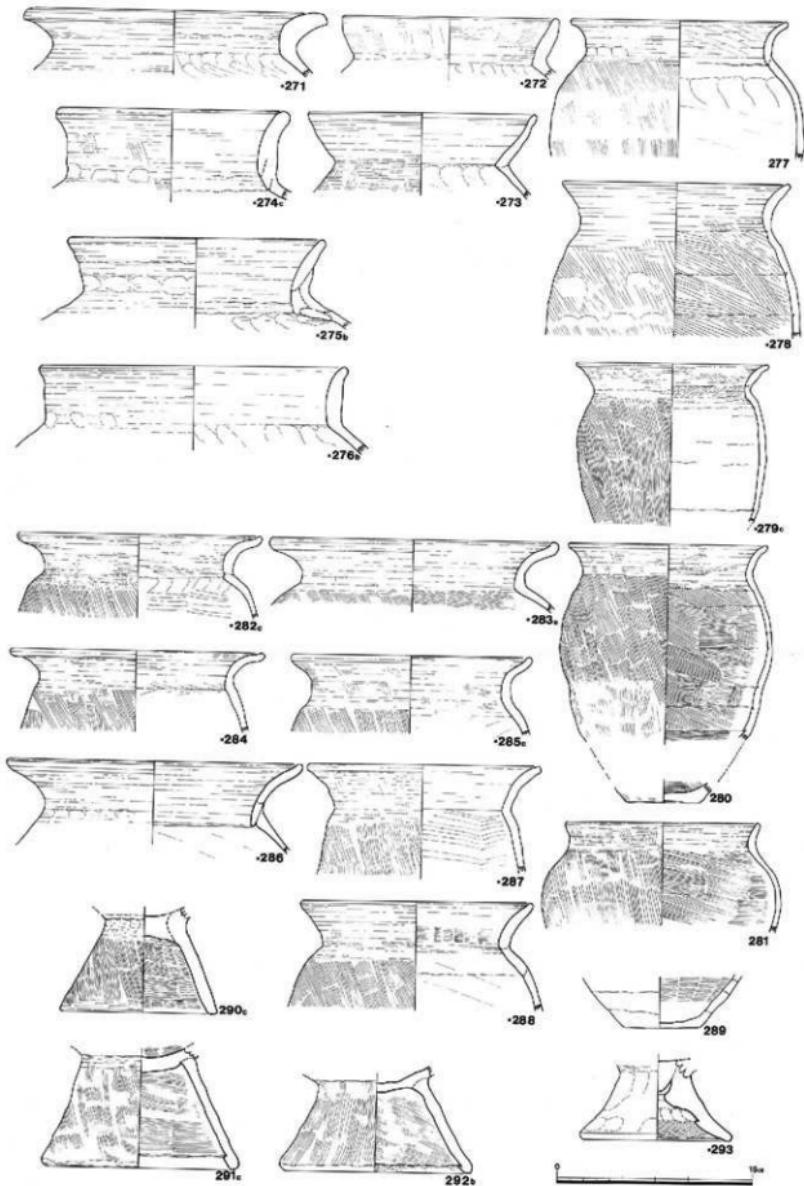
第34図 大溝A 15区・木区 VI層・VII層出土土器(土師器)実測図



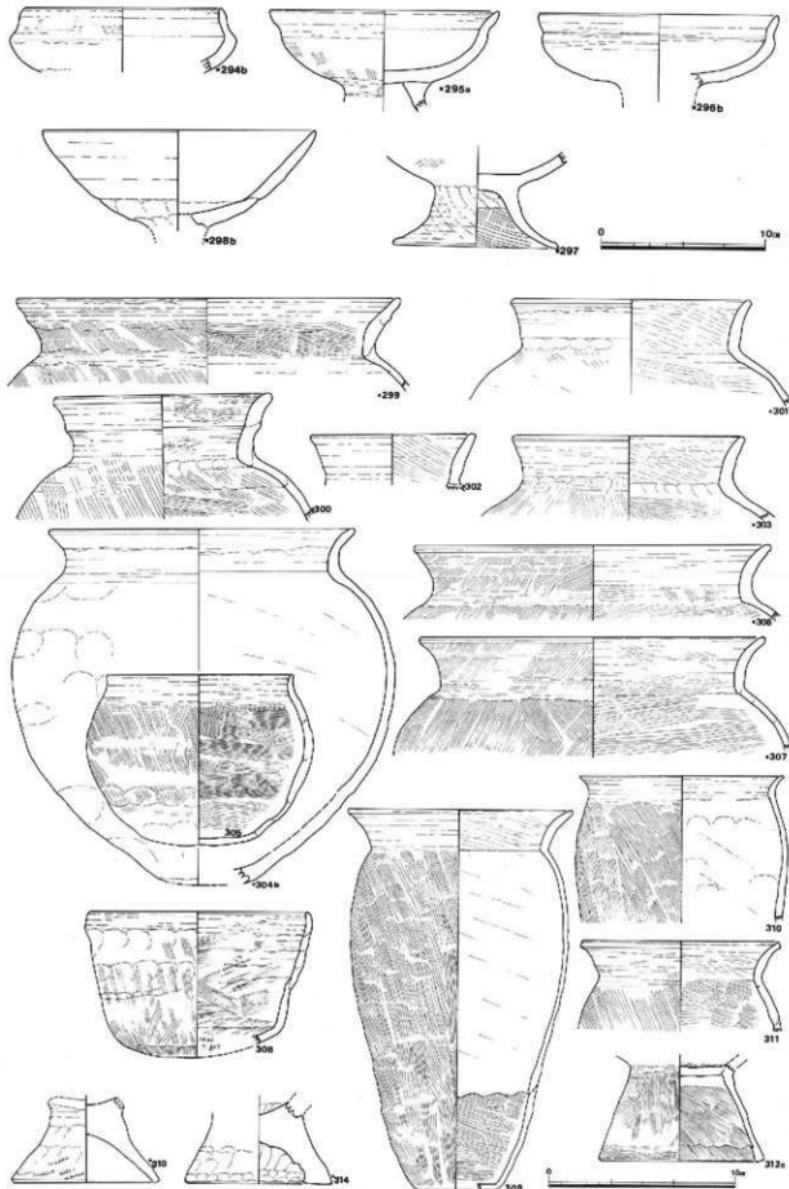
第35図 大溝A 15区 VII層・VIII層出土土器(土師器)実測図



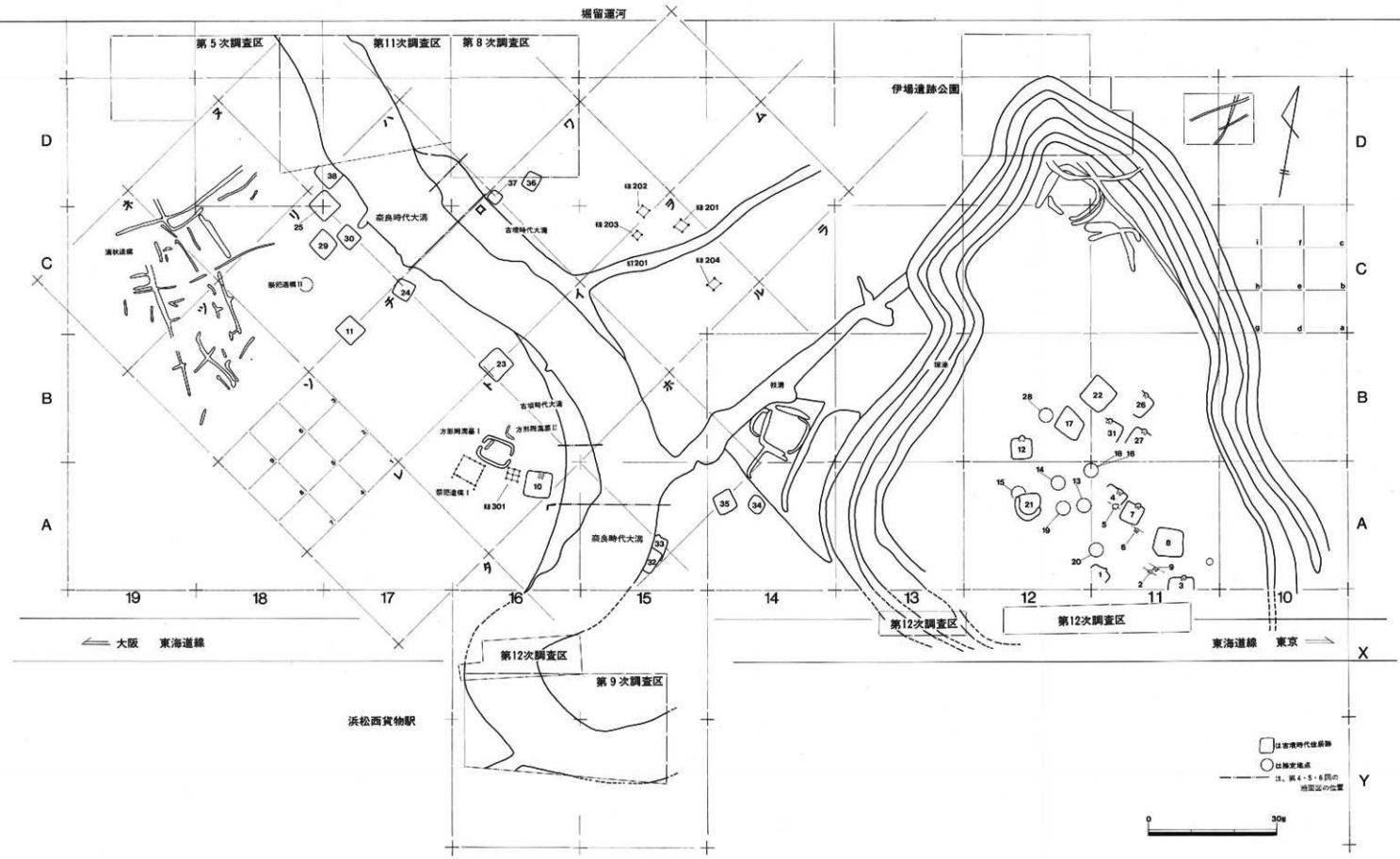
第38図 大溝A 1-5区 Ⅳ層・Ⅴ層出土土器（土師器）実測図



第37図 大溝A 1.5区・小区 Ⅲ層・Ⅳ層出土土器(土師器)実測図



第38図 大溝A 15区・A 16区 離層・離層出土土器（土筋器）実測図



第39図 伊場遺跡 遺構平面図（グリット表）

註

1. 浜松市遺跡調査会1971：『伊場遺跡第3次調査概報』「VI総括」。加藤方郎1957：『焼塚遺跡付近の地形地質について』『県史』その第1次発掘調査。浜松市役所1968：『浜松市史』一等を参照。
2. 浜松市立郷土博物館編1977：『伊場遺跡発掘調査報告書 第2回遺構編』「第2章立地」等を参照。
3. 同上「付載第1」p153～154
4. 同上「第2章立地」挿図第1)。「伊場遺跡第3次発掘調査報告書 第4冊遺物編2」挿図第1等参照。
5. 浜松市教育委員会編1971：『伊場遺跡第3次発掘調査概報』。伊場遺跡調査会1971：『伊場』第4次調査月報5を参照。
6. 伊場遺跡調査会1972：『伊場』第4次調査月報6。浜松市教育委員会編1975：『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』「V 人溝・枝溝の調査」を参照。
7. 註2・3参照。
8. 註2 p55, p153～154参照。
9. 註2 第3章第4節 p56参照。
10. 註2 第3章第4節 p83参照。
11. 註2 第3章第4節 p61。浜松市博物館編1987：『伊場遺跡発掘調査報告書 第6冊 伊場遺跡遺物編4』「第2章第4節」p36～38
12. 註2 第3章第4節 p53参照。
13. 註5に同じ
14. 浜松市博物館編1987：『伊場遺跡発掘調査報告書 第6冊 伊場遺跡遺物編4』で、古墳時代の遺構出土の土器については、報告済みである。
15. 浜松市教育委員会編1975：『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』「V 人溝・枝溝の調査」p23
16. 同上 p23～25
17. 「川江試案」のIV期前・中・後にG・H・I群をそれぞれ対応させている。本文で述べたようにF・II群の分別には、蓋部の口径を主に考慮して分別した。この分別は、概略的には時期差と見なすことも可能と考え、「川江試案」の「IV期前・中・後」をG・H・I群に物理的に対応させたものである。したがって、「川江試案」で、実際の分類は、時間的前後関係の同時性を概略的に示唆する程度の確かさと考えて欲しい。こうした時期の須恵器の、縦平的な細分について厳密な検討を加えた結果ではない。
18. C群とした須恵器の中には、須29・340・344のように、腰の張った古い様相をした部を持つ壺身、高环がある。須340の口唇部は、端面を作り沈線を持つなどB群としてもよい須恵器かもしれない。また須8・9のように棱を持ち、口縁部も直立気味に作られていて、同様に古いB群としての可能性もある。しかし、全体的なシャープさや、箇別りの範囲、口径の差等を考慮して、一處C群として分別しておいた。

参考文献

- ・浜松市教育委員会・遠江考古学研究会「伊場遺跡予備調査の概要」(1968年)
- ・浜松市教育委員会編『伊場遺跡第3次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1971年2月10日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報1-浜松市遺跡調査会(1971年8月10日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報2-浜松市遺跡調査会(1971年9月15日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報3-浜松市遺跡調査会(1971年10月15日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報4-浜松市遺跡調査会(1971年11月5日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報5-浜松市遺跡調査会(1971年12月5日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場』- 第4次調査月報6-浜松市遺跡調査会(1972年1月5日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場遺跡川十文字集成(概報)』浜松市遺跡調査会(1972年12月25日)
- ・伊場遺跡調査所編『伊場遺跡第4次発掘調査の成果(要旨)』浜松市遺跡調査会(1973年2月29日)
- ・浜松市教育委員会編『伊場遺跡第5次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1973年2月10日)
- ・浜松市教育委員会編『伊場遺跡第6・7・8次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1975年3月25日)
- ・浜松市立郷土博物館編『国鉄東海道線内埋蔵文化財発掘調査報告書』-伊場遺跡第12次の1期調査概報-浜松市教育委員会(1979年3月)
- ・浜松市教育委員会編『伊場遺跡第8～13次発掘調査概報』浜松市遺跡調査会(1981年3月31日)
- 伊場遺跡発掘調査報告書
- 第1冊 浜松市立郷土博物館編『伊場木簡』 浜松市教育委員会(1976年3月25日)
- 第2冊 浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡構築編』 浜松市教育委員会(1977年2月28日)
- 第3冊 浜松市立郷土博物館編『伊場遺跡構築編1』 浜松市教育委員会(1978年3月31日)
- 第4冊 浜松市博物館編『伊場遺跡構築2』 浜松市教育委員会(1980年3月31日)
- 第5冊 浜松市博物館編『伊場遺跡遺物編3』 浜松市教育委員会(1982年12月25日)
- 第6冊 浜松市博物館編『伊場遺跡遺物編4』 浜松市教育委員会(1987年3月31日)
- 1958 平安学園考古学クラブ『船橋I』『船橋II』
- 1959 向坂綱二『考古学手帳』『遠江における古式土器』
- 1966 遠江考古学研究会『大沢・川尻古窯調査報告』
- 1968 山村 宏他『古代学研究』第50号「遠江の須恵器生産」
- 1966 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯地図』
- 1968 浜松市教育委員会『駿河道路』その第1次発掘調査
- 1968 浜松市役所『浜松市史』一
- 1974 安達厚一・木下正史『考古学雑誌』第六十巻第二号、「飛鳥地域出土の古式土器器」
- 1974 警田市教育委員会『見性寺貝塚の研究』
- 1976 静岡県考古学会『静岡県考古学会シンポジウム2』「須恵器—古代陶質土器の編年」
- 1970 姫津市教育委員会『宮之腰遺跡』
- 1971 杉原莊介・大塚初重『七跡器土器集成』
- 1978 中村 浩『南丘II』『和泉陶邑古窯時期編』大阪府文化財調査報告三十編 大阪府教育委員会
- 1981 田辺昭二『須恵器人成』角川書店
- 1981 中村 浩『和泉陶邑窯の研究』『第II部 編年的考察』柏青房
- 1983 a 浜松市教育委員会『國鉄浜松工場内(梶子)遺跡第VI次発掘調査概報』
- 1983 b 浜松市教育委員会『國鉄浜松工場内遺跡第VII次発掘調査概報』
- 1985 萩井市教育委員会『坂尻遺跡』(序文・占碑時代編)

大溝内出土土器觀察表
(須 恵 器)

須 恵 器

種 類 番 号 写 真 版 器種・形態・時期	登 録 番 号 出 土 位 置	法 算 cm 口 径 深 度 器 底	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 燒 色 上 成 調
			イ 区		
1 - 8	4 1139-1	12.7 14.9 -	全体の1/3が残る。底部外面の2/3が静止焼削りで仕上げられ、他は横ナデで仕上げられる。腰の張る体部に、ほぼ直立する立上がりが作られる。受部は、立上がり部との境をヘラの沈線で画しっきりと作り。全体に厚手の作りになっている。	良 や 白	い 良 色
須 壊身 A	イ 2 VII	-			
2 - 8	7-3099	13.1 6.0 -	天井部外面の2/3以上が焼削りされ、頂には中央が陥んだ凹が付けられる。他の部分は横ナデで仕上げされている。腰の部分には沈線を置いて後を作り出している。体部は沈線の部分で肩曲し、口縫部を直立気味に作っている。口唇部は軽い段を持つ面を作って内傾する。	や や 灰	粗 い 色
須 高环蓋 B	イ 4 VII	-			
3 - 8	7-3085	13.4 5.7 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が焼削りされ、頂に瘤が付く。他は横ナデで仕上げている。腰の部分には沈線を置いて瘤を作っている。瘤の部分で肩曲し直立気味の口縫部が作られる。口縫部は先端が肥厚し口唇部は強烈の曲面を作り天井部には指痕跡が残る。内面は茶灰色	や 良 灰	粗 い 色
須 高环蓋 B	イ 4 VII	-			
4 - 8	7-3093-2	12.8 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が焼削りされ、頂が瘤状の瘤が付けられる。他の部分は横ナデで仕上げている。腰の部分には瘤を置き、瘤曲させて体部と口縫部の境を作っている。口縫部はほぼ直立し、口唇部は段を作つて内傾している。	良 良 灰	い い 色
須 高环蓋 B	イ 4 VII	5.6 -			
5 - 8	7 3076	9.8 11.7 4.7 -	全体の4/5が残る。底部外面の2/3が焼削りされ、他の部分は横ナデで仕上げられる。やや腰の張る体部に、内傾気味の立上がりが付き、受部は横方向にしっかりと作られている。口縫部の先端はやや肥厚させ、口唇部は内傾させる。全体に薄くシャープな作りをしている。	粗 良 暗 灰	い い 色
須 壊身 B	イ 1 VII	-			
6 - 8	7 3271	12.5 14.6 5.4 -	完形品。底部外面1/2が丁寧に焼削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて穂く体部に内傾する立上がりと、機に引出した受部が付けられる。口縫部は徐々に肥厚し、口唇部は軽い段を作つて内傾する。	や 良 暗 灰	粗 い 色
須 壊身 B	イ 5 VII	-			
7 - 8	7-3092 1	11.7 12.8 -	底部の1/2が残り、脚部を欠く。底部外面の2/3が丁寧な焼削りで仕上げられている。底部から受部にかけて、腰やかも張を描く浅めの体部に、高めの立上がりがつく器形になる。焼削りの跡跡から、3方向に透かしがあったことが分かる。全体に薄手でシャープな作り。	や 良 暗 灰	粗 い 色
須 高环 B	イ 4 VII	-			
8 - 8	7-3071	13.8 -	完形品。天井部外面の大半を焼削りで仕上げている。他の部分は横ナデで仕上げられている。歪みが多いが器形的には、不規則ながら浅めの沈線を置いて瘤を作りだしている部分で肩曲し、直立する口縫部を作っている。口唇部は面を作つて内傾している。	粗 良 灰	い い 色
須 壊蓋 C	イ 1 VII	5.1 -			
9 - 8	7-3265	12.5 4.6 -	ほぼ完形品。天井部外面の2/3が焼削りされる。他は横ナデで仕上げている。天井部から張を描く体部下に、しきりとした瘤を作り内傾する口縫部を作り山している。大井部には指ナデ筋が残っている。口縫部先端の内側に、沈線を置き口縫部は段を作つてある。薄手でシャープな作り。	や 良 灰	粗 い 色
須 壊蓋 C	イ 5 VII	-			
10 - 8	7-3252-2	13.0 4.8 -	全体の1/2が残る。大井部の人字を焼削りで仕上げ、他は横ナデで仕上げている。体部下半で瘤を作り、口縫部と体部を面している。口縫部は瘤の部分でやや肩曲し直立気味になり、口唇部は軽い段を作つて内傾する。全体に薄手でシャープな作りになっている。	や 良 暗 灰	粗 い 色
須 壊蓋 C	イ 4 VII	-			
11 - 8	7-3075	12.8 -	全体の1/2が残る。大井部外面は2/3が焼削りされ、その他の横ナデで仕上げしている。体部から大きくなじく肩曲し、直立気味の口縫部を持つ器形になる。肩曲する部分には瘤が作られ、口縫部と体部を面している。天井が平らで、箱形の薄い作りの杯蓋である。	粗 良 赤 梅	い い 色
須 壊蓋 C	イ 1 VII	4.1 -			
12 - 8	7-3208-1	12.4 -	全体の1/2が残る。天井部の2/3が焼削りされ、他は横ナデで仕上げされる。体部下半に、ごく浅い沈線を描いて口縫部と体部を面しているが、瘤にはならない。口縫部の先端を肥厚させ、口唇部に内傾する坦面を作つてある。天井部には内当を消す静ナデ筋が残る。	粗 良 灰	い い 色
須 壊蓋 C	イ 5 VII	5.0 -			
13 - 8	7-3103	12.9 4.8 -	完形品。天井部外面の2/3が焼削りされ、他は横ナデで仕上げしている。腰の部分には沈線を置いて瘤を作り出している。口縫部は瘤の部分から直立気味に作られ、口唇部は段を作つてある。薄手で箱形に近い器形になる。	粗 良 褐 灰	い い 色
須 壊蓋 C	イ 4 VII	-			

押 固 番号 写真版面	登録番号	法量cm 口 器 器 底	種 属 性 別 器 底	技 法・調 整 等 の 特 徴		脂 焼 色	土 成 調		
				山 土 位 置					
須 壊 蓋 C 器種・形態・時期	14 - 8	7-3073	13.8 4.8	全体の1/3が残る。天井部外面は2/3が鋸削りされ、その他の部分は横ナデで仕上げている。器形的には体部から口縫部へ弧を描いて立上がり、腰の部分には沈縫を置き口縫部と体部を画している。口唇部は段を作つて内傾している。天井部内面には、指痕痕が残る。	良 良 暗 灰	いい 色			
須 壊 蓋 C 器種・形態・時期	15 - 8 - 6	7-3072	13.8 4.3	全体の1/2を残す。天井部外面の1/2が平らに鋸削りされる。他の部分は横ナデで仕上げられる。腰の部分に縫を作り口縫部と体部の境にしている。全体に薄手の作りで、口唇部は内傾する坦面を作っている。	粗 良 暗 灰	いい 色			
須 壊 蓋 C 器種・形態・時期	16 - 8	7-3074	13.7 4.8	完形品。天井部外面の大半を鋸削りで仕上げている。他の部分は横ナデで仕上げる。体部から口縫部に弧を描くような器形になり、腰の部分で大きく屈曲せず、沈縫も腰も作らない。口縫部は段を作つて内傾している。	良 良 黄 褐	いい 色			
須 壊 蓋 C 器種・形態・時期	17 - 8	7-3090-4	13.6 13.9 4.1	全体の1/3が残る。天井部外面の1/2が鋸削りされ、頂が窪む握が付けられている。他の部分は横ナデで仕上げしている。体部と口縫部の境は粗糲で、外面に縫を作っている。口縫部は窪みに近くなり、口縫部は内傾する坦面を作る器形である。比較的薄手でシャープな作りである。	良 良 灰	いい 色			
須 高 壊 蓋 C 器種・形態・時期	18 - 8 - 6	7-3245	14.6 5.3 -	完形品。天井部外面の1/2が鋸削りされ、頂に握が付けられている。他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から体部に統一腰の部分で、縫やかに屈曲し口縫部で仕上げている。口縫部には横い縫を作り、体部と口縫部を画す。口唇部は段を作つて内傾している。	や 良 灰	粗い 色			
須 高 壊 蓋 C 器種・形態・時期	19 - 8 - 7	7-3167	13.2 15.2 5.9	完形品。底部外面の1/2程度が比較的丁寧なヘラ削りで、他の部分は横ナデ仕上げされる。やや腰の張る深めの体部に、直立気味の立上がりが付く、受部もしっかりと作り込まれる。全体に厚い作りで、口唇部は内傾する坦面を作る器形である。	良 良 灰	いい 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	20 - 8 - 7	7-3272	12.0 14.4 4.9	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げられる。腰は張らずに、底部から縫やかに立上がる。厚めの体部に直立気味の立上がりと、横にしっかりと作り出された受部を持つ。口唇部は段を作つて内傾する。底面内面には内当で痕を消したと思える静止ナデが見られる。受部外面に自然輪がかかる。	良 良 暗 灰	いい 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	21 - 8 - 7	7-3219	14.2 5.7	完形品。底部外面の1/2が鋸削り。他の部分は横ナデ仕上げ。やや腰の張る体部に、内傾する口縫部を作っている。口唇部は段を作つて内傾する。受部は立上がり部との境を強調する沈縫で画し、厚くしっかりとした作る。やや厚手の作りで器形も重い。	や 良 暗 灰	粗い 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	22 - 8	4-1134-7	12.6 4.3 -	全体の1/3を残し底部を欠く。底部外面の2/3を鋸削りし、他の横ナデ仕上げで仕上げている。腰の張る深めの体部に内傾する立上がりを付け、受部も横方向にしっかりと作り出されている。体部は厚めに、立上がりは薄めに作られている。	良 良 暗 灰	いい 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	23 - 8	7-3093-1	11.0 13.0 5.4 -	全体の1/3が残る。底部外面の1/2が鋸削りで、他の横ナデ仕上げ。半球形状で腰の張る深めの体部に、外壁気味に内傾する立上がりが作られている。口縫部は先端がやや肥厚し、口唇部は内傾する面を作る。比較的シャープな作りをしている。	や 良 灰	粗い 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	24 - 8 - 7	7-3101	12.2 14.7 5.0 -	完形品。底部外面の1/3が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げられる。弧を描く体部に、立上がり部が屈曲して立ち、受部は立上がり部との境に、窓の沈縫を入れ、横方向にしっかりと引き出している。底面内面には、同心円状のタクナメが内当てとして残される。海手の作り。	や 良 暗 灰	粗い 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	25 - 8 - 7	7-3253	12.3 5.2 -	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされ、平底気味に作る。他の部分は横ナデ仕上げ。底面から縫やかに内傾し、直立して直立する立上がりを作る。口縫部の内側に浅い沈縫を置く。受部は横に引き出され、器高に比して立上がりの高い器形になる。焼き重みがある。	良 良 灰	いい 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	26 - 8 - 7	7-3273	12.3 14.6 5.0 -	完形品。底部外面の半人半を鋸削りしている。他の横ナデ仕上げで仕上げている。焼き重みがあるが、縫やかに立上がる体部に、内傾する立上がりと、横に引き出された受部を持つ。口唇部は軽く段を作つて内傾する。	や 良 暗 灰	粗い 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	27 - 8 - 7	7-3254	12.9 4.7 -	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の張る体部に内傾気味の立上がりを作る。口唇部は段を作つて内傾する。全体的には、浅めで箱型の器形になる。底部外面には//印の施記号が付されている。	良 良 灰	いい 色			
須 壊 身 C 器種・形態・時期	28 - 8 - 7	7-3102	12.0 15.0 6.7 -	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされ、他の横ナデ仕上げしている。弧を描く体部に内傾する立上がりを持ち、受部は斜め上に捻り出されている。口唇部は長い段を作つて内傾している。底面は平らに削られ、内面に×印の施記号が付く。全体的に薄手の作り。	良 良 灰	いい 色			

番号 写真版	登録番号	法量cm 口 刷 器 器 底 径 高 度	技法・調整等の特徴		胎 焼 色	土 成 調
			出上位面	孫 径 高 度		
29 - 8 頸環身C	7-3244 イ4 VII	10.5 12.7 4.7 -	完形品。底部外面の1/3以上が鋸削りされている。他は全体が横ナデ仕上げで、腰の張る体部に、外反気味に内傾する立上がりを持ち、受部も斜め上方に向いてしっかりと作られている。口唇部は丸く作られるが、薄手でシャープな作りになっている。	-	や 良 白 良 白 良 白	や 粗 い 色 灰 いい 色 灰
30 - 8 頸環身C	7-3077 イ1 VII	11.4 13.5 4.9 -	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の張りは少なく、先端を直立気味にした内傾する立上がりが付き、口唇部は丸く作っている。全体に薄手の作りをしている。体部外面には自然輪が掛かっている。	-	良 良 白 良 白 良 白	いい 色 灰 いい 色 灰
31 - 9 頸環身C	7-3208 2 イ-5 VII	14.5 ?	全体の1/2程度が残る。底部外面の1/2が鋸削りで、他は横ナデ仕上げしている。緩やかな弧を描く体部に内傾する高めの立上がりが付く。受部は立上がり部との境を鋸歯線で歯し、斜め横に引山される。口唇部は軽い段を作つて内傾する面を作ること。	-	良 良 灰 良 良 灰	いい 色 灰 いい 色 灰
32 - 9 頸環身C	7-3168 イ-2 VII	10.5 12.8 4.4 -	完形品。底部外面の1/2が鋸削りされる。他の部分は横ナデ仕上げしている。やや腰の張る体部に内傾する立上がりが付き、受部は立上がりとの境に沈線を置くようにしてしっかりと作られている。受部の上には自然輪が掛かり、体部外面には砂(窓床)が触感している。胎子には砂が多い。	-	粗 良 暗 良 暗 白	いい 色 灰 いい 色 灰
33 - 9 頸環身C	7-3090-2 イ-4 VII	12.2 14.1 5.3	完形品。底部外面の2/3が鋸削りで、他の部分は横ナデ仕上げている。底部内面には内当て痕を消した静止ナデを残す。やや腰の張る体部に直立する立上がりと、斜め上に引出された受部が作られる。全体に厚手の作りになっている。	-	良 や 白 良 暗 白	いい 色 灰 いい 色 灰
34 - 9 頸環身C	7-3121 イ-5 VII	11.5 14.8 5.3	完形品。底部外面の2/3が鋸削りされる。他は横ナデ仕上げしている。焼け余みがあるが、底部から弧を描く体部に、内傾する立上がり部分が作られ、口唇部は内傾する面を作つて、受部も厚くしっかりと作られる。全体に厚手の作りで、底部内面には内当て痕が残る。	-	や 良 暗 良 暗 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
35 - 9 頸環 C	7-3242 イ-1 VII	10.2 - -	口唇部を欠いている。全体は横ナデ仕上げされている。底部外面は鋸削り、他は横ナデ仕上げされるが、体部の中ほどにはカキメが施され、やや上向きの注ぎ口の穴が開けられる。腰の張る球形で、薄手の作りになっている。	-	や 良 暗 良 暗 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
36 - 9 頸環 C	7-3078 イ-1 VII	11.5 11.5 - -	口唇部を欠く。脣部外面の中ほどはカキメが全体に施される。底部にはタタキメが残される。外面の上半と、内面底部には自然輪が厚く掛かっている。底部の尖った球形で、広口の口唇部の付く器形となるものであろう。	-	や 良 暗 良 暗 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
37 - 9 頸環 C	7-3104 イ-4 VII	15.7 - -	口唇部を欠き、胸部が残る。脣部外面の上半はカキメが残り、下半部から底部にかけては平行タタキメで整形している。内面上部はナデで調整しているが、下半部には同心円のタタキメが残される。広口の器となるものであろう。	-	や 良 暗 良 暗 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
38 - 9 頸環 D	4-1134-8 イ-2 VII	15.0 - 4.5 -	全体の1/5を残す。天井部の大半を鋸削りで仕上げ、他の部分は横ナデ仕上げされている。腰の部分に沈線を置いて後を作つてある。腰の部分で腰く扁曲して、やや開き気味に口唇部が作られている。口唇部は軽い段を作つて内傾している。	-	や や 良 暗 良 暗 白	や や 粗 い 色 灰 いい 色
39 - 9 頸環 D	7-3090-1 イ-4 VII	12.8 14.6 4.8 -	完形品。腰の張る体部に、直立気味の立上がりと、横にしっかりと作られた受部を持つ。内面は横ナデ仕上げされる。外面には一面に自然輪がかかり、鋸削りの範囲は不明。口唇部は火焔で整形しているため、詳細は不明。	-	や 良 暗 良 暗 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
40 - 9 頸環 D	4-565-2 イ-6 VII	12.1 14.5 4.5 -	全体の1/2が残る。体部の外面に、自然輪がかかり調整法は分明でないが、大半は(観察出来る部分)横ナデ仕上げしている。弧を描いて立上がる浅めの体部に、内傾する立上がりが付き、受部は横に引出している。底部内面には内当て痕をそのまま残している。	-	や 良 灰 良 白	や 粗 い 色 灰 いい 色
41 - 9 頸環 E	7-3243 イ-4 VII	12.6 - 4.3 -	完形品。天井部外面の1/2が鋸削りで仕上げている。他は横ナデ仕上げしている。弧を描く体部が、やや屈曲し直立気味の口唇部を作つている。屈曲部外面には浅い沈線を置いて腰を作り出し、口唇部と体部を彫つてしている。全体に薄手の作りで、天井部外面には「印の認証記号」がある。	-	粗 良 暗 良 暗 白	いい 色 灰 いい 色 灰
42 - 9 頸環 E	4-565-1 イ-6 VII	11.4 13.5 4.2 -	全体の1/2が残る。底部外面の1/2が削り出しの広い窓削りで整形される。他は横ナデ仕上げ。弧を描いて立上がる体部に、外反気味に内傾する低めの立上がりと、斜め上に引出した受部を作つている。全体に偏平な器形になっている。	-	良 良 灰 良 暗 白	いい 色 灰 いい 色 灰
43 - 9 頸環 F	4-1135-1 イ-2 VII	11.8 - 4.6 -	完形品。天井部外面の1/2を削り出し、他は横ナデ仕上げられている。体部の上ほどに沈線を置いて口唇部と体部を彫つていている。口唇部は沈線の部分で屈曲して、やや開き気味に立上がり、口唇部は内傾する舟面を作る。体部は厚い作りで、口唇部は薄めの作りになっている。	-	粗 良 暗 良 暗 白	いい 色 灰 いい 色 灰

番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 線 胸 頸 器 脊 底	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 燒 色	上 成 調
器種・形態・時期	出土位置				
須 壊身 F 44 - 9 44 - 8	7-3100 イ-4 VII	12.9 4.6	完形品。底面外側の1/2が鏽削りで、他は横ナデ仕上げになっている。腰の張る獨特な半球形の体部に、内側気味に内傾する立上がりが付く。受部は横に引出されて作っている。全體に薄手の作りになり、底面外側には△印の鑄記号が付されている。	や 良 褐	や 粗 い 色
須 壊身 F 45 - 9	4-1134-2 イ-2 VII	16.2 13.5 11.8	脚部の人半は残るが、口縫部は僅かしか残らない。底面外側の大半を鏽削りによって仕上げている。他の部分は横ナデで仕上げられる。环体部には4本の沈縫が引かれる。浅い半球形の环部にハの字に開く、脚の付く無蓋の高窓となる。器壁全体に磨滅が激しい。	良 良 灰	い い 色
須 壊身 H 46 - 9	4-538-1 イ-6 VII	10.2 3.9	全体の1/2が残る。頂部に平行タタキメのような直圧痕あり、他は全面横ナデで仕上げている。ノタメが鋸者で半球状に作られている。全體に磨滅が激しく、内面には茶黒色の炭化物が全面に付着している。	良 や 灰	い 良 色
須 壊身 I 47 - 9	4-558-1 イ-6 VII	15.6 ?	环部の2/3が残り、脚部下半を欠いている。全面横ナデで仕上げられている。口縫部は底部から半球状に立上がり、先端を外に折り曲げ口唇部を三角に作る。全體に厚手でノタメが鋸者になっている。	良 以 暗	い い 色
須 壊身 I 48 - 9	4-1134-1 イ-2 VII	15.3 5.4	全體の1/4が残る。底面が鏽削りされ、他は横ナデで仕上げられている。腰の部分で細曲気味に、立上がる口縫部を持ち、屈曲部のやや下方にしっかりと高台が付くが、底部は高窓以下にはみだしてしまる。底面内面には茶色の炭化物が付着し静止ナデが残されている。	良 良 灰	い い 色
須 壊身 I 49 - 9	4-1055-1 イ-2 VII	11.2 4.2 -	全體の1/2が残る。全體を横ナデで仕上げている。天井部の外側には△印の鑄記号がある。大升部は厚手につくられ、口縫部にかけて薄くなる、半球形の器形をしている。口唇部はめぐらし、全體に炭化物（煤？）が付着している。	や や や 灰	粗 良 不 良 色
須 壊身 I 50 - 9	7-3090-3 イ-4 VII	11.8 3.9	完形品。やや厚手の底面に、斜め上方に開く口縫部を持つ器形になる。底面は鏽削りで整形しているが粗い仕上がりである。他は横ナデで仕上げている。ほぼ直線的に広がる口縫部は、薄手の作りで口唇部は丸く作っている。	良 良 灰	い い 色
須 壊身 J 51 - 9	4-1134-6 イ-2 VII	13.0 3.0 -	全體の1/2が残る。天井部外側の1/2は、粗いヘラ削り。他は内外ともに横ナデ。外側には偏平な縫が付く。天井部から底やかに頭を傾いて続く体部の先端を折曲げ、口唇部を丸く作っている。内面にはノタメが鋸者。	良 以 暗	い い 色
須 壊身 J 52 - 9	4-1134-3 イ-2 VII	14.1 3.9 -	全體の1/4が残る。底部外側は鏽削りされ、他の部分は横ナデで仕上げられている。腰の部分で、平底に作った底部から、縫を作つてその字に屈曲する口縫部を持つ。腰のやや内側底部に内傾した高台が作られる。全體に浅めの口縫の開いた环になる。底面には△印の鑄記号がある。	良 良 灰	い い 色
須 壊身 J 53 - 9	4-1135-2 イ-2 VII	14.7 3.7 -	全體の1/3が残る。底部外側はヘラ削りで、平底の底面の、やや内側よりに、内傾性の高窓が付けられる。口縫部は横ナデで仕上げられ、他の部分は横ナデ仕上げとなる。口縫部は底部から開き氣味に立上がって作られる。	良 や や 灰	い 良 不 良 色
須 壊身 J 54 - 9	4-110 イ-6 VII	15.8 5.0 -	底部と口縫部が少し残る。底部外側の1/3が鏽削りされている。他は横ナデ仕上げする。底部から緩い弧を描いて立上がる、浅い半球状の器形になる。全體に厚手の作りで、底面には禾本科植物の茎の痕跡と煤が付いている。	普 普 灰	通 通 色
須 壊身 J 55 - 9	4-1134-9 イ-2 VII	18.6 -	口縫部が1/4残る。内外ともに横ナデして仕上げられているが、内面には刷毛目が残っている部分もある。体部外側の下半には沈縫が施される。口縫部に近付くにともなって、器壁は薄く作られ、口唇部は一角に肥厚させ、外側する平坦面を作る。	や 良 灰	や 粗 い 色
須 壊身 J 321 9	7-3209 イ-5 VII	25.0 43.3 44.3 -	全體の2/3が残っている。大型の要でくの字に屈曲する口縫部は横ナデした後に、沈縫と板状の器具で描いた波紋が描かれ、先端は複合口縫状に作る。体部内面はナデによって滑らかに仕上げ、タタキメは残さない。外側は平行タタキメが肩から底面まで全面にある。外側底部と内面底部には自然軸が掛かる。	良 良 暗	い い 色
口区					
須 壊身 C 56 - 10	7-2992 ロ-3 VII	11.6 3.9 -	全體の1/3が残り、天井部を欠く。天井部外側の1/2が鏽削りで、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部分には縫を作つてある。体部から緩く屈曲する口縫部はやや開き氣味に立上がり口唇部は内傾する。縫の下の坦面に自然軸が付着している。	良 良 暗	い い 色

番号 写真図版 器種・形態・時期	登録番号 出上位図	法量cm 口 径 深 度 器 高 度	技法・調整等の特徴	胎 焼 色	上 成 調
57 -10 須 坏身 C	7-2956-4 ロ-3 VII	12.0 4.0	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から体部にかけて肩曲し、沈線を置いて口縫部を画している。ロ 縫部はほぼ直立し、ロ唇部は内傾する。全体的に薄手の作りでシャープさがある。	良 良 灰	いい いい 色
58 -10 須 坏身 C	7-2983-1 ロ-6 VII・VIII	12.7 14.7 5.4 -	全体の1/2が残る。体部外面の1/3が鏡削りで、印の箇記号が付けられている。底 部内面には内当て脛があり、静止ナデして消している。体部から内傾する立上 がりが付く。形は偏平球形に近く、受部は横に引き出される。	良 良 灰	いい いい 色
59 -10 須 坏身 C	7-2980-1 ロ-6 VII・VIII	10.7 13.6 5.7	全体の1/2が残る。体部外面の1/3が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げて いる。立上がり部はやや内傾しながら立上がり受部もしっかり作られる。ロ 縫部は先端を肥厚させ、ロ唇部は短頭を作れる。全体に薄手の作りで、腰の張る深めの 器形になる。底面に印の箇記号が残る。	良 良 灰	いい いい 色
60 -10 須 坏身 C	7-2987 ロ-3 VII	11.8 14.0 5.7	完形品。底部外面の1/2が鏡削り、他は横ナデ。やや腰の張る深めの器形で、立 上がり部は外脣気味になる。受部は外側につまみ出される程度である。ロ 唇部の内側は使用による摩耗で坦面を作っている。底部外面の中心部には切離し痕が残 り骨調整、内部の中心部は静止ナデで調整している。	や や 良 灰	粗 い 色
61 -10 須 坏身 C	7-2945-4 ロ-3 VII	9.8 12.2	坏部の1/4が残る。体部外面の2/3が鏡削りされ、底面には脚部を張付けた脛跡 が残る。他の部分は横ナデ仕上げ。体部から受部になだらかに続き、内傾する比 較的高い立上がり部が付く。ロ唇部は内傾する坦面となる。	や や や 不 良 灰	粗 い 色
62 -10 須 坏身 D	7-2950-2 ロ-3 VII	14.8 4.4	全体の1/2が残る。天井部の外面は1/3程が鏡削り、他の部分は横ナデ仕上げ。 腰の部分には腰を作りやや外反するロ縫部を持つ。ロ唇部は顯著ではないが、内 傾する坦面を作る。やや腰の張る器形で厚手の作りとなっている。	良 良 暗 灰	いい いい 色
63 -10 須 坏身 D	7-2945-3 ロ-3 VII	13.4 15.0 4.6	全体の1/2が残り底部を欠く。体部外面の1/2が、粗く鏡削りされる。立上がり はやや内傾し高いが、体部との屈曲度は大きくなれない。受部は横に引き出される。 底面内面には静止ナデがあり、内当て脛を消したものか。	や や 良 灰	粗 い 色
64 -10 須 坏身 D	7-2950-3 ロ-3 VII	15.7 -	全体の1/2が残る。体部外面は1/2が鏡削り、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部 分からなだらかに立上がり、直立する立上がり部へ続く。受部は横に捻り出した ような作りとなっている。底部の内面には指痕模を静止ナデで消した痕跡がある。	や や 良 灰	粗 い 色
65 -10 須 坏身 D	6-3484-1 ロ-6E VII	12.4 15.4 4.0 -	全体の1/2が残り底部を欠く。底部外面の調整法は定かではない（未測定？）。 体部は底部から受部にかけて緩やかなカーブを作り、外反して先の尖った、短い 立上がり部が付く。ロ口に比して浅めの器形となる。底部外面には禾本科植物の 圧痕が付いている。	や 良 灰	粗 い 色
66 -10 須 高坏 D	4-724-1 ロ 6 VII	10.8 9.8 8.4	坏部の1/2を欠いている。坏底部外面が鏡削りされ、他の部分は横ナデ仕上げさ れている。坏体部に後を残すロ縫部を画している。ロ縫部は、腰の部分で 内脣気味に折れ曲り、先端の内側には蘇蘋を畫している。脚は脚窓が開き気味の ハの字になり、先端部は一角に作っている。	良 良 灰	いい いい 色
67 -10 須 球 D	7-2956-5 ロ-3 VII	-	底部とロ縫部を欠く。体部には二本の沈線の間を椭状施文具で斜突文を施し、斜 10cm程の上向の孔が開けられる。ロ口と底部内面には白筋軸がかかる。底部外 部の下半は静止ナデで整形している。	良 良 暗 灰	いい いい 色
68 -10 須 盆 D	4-730-6 ロ-6 VII	12.6	LJ縫部の先端を欠いている。体部の下半を鏡削りし、他は横ナデで仕上げている。 LJ縫部内面、肩部、底部内面には、それぞれ自然軸がかかる。広口のロ縫 部を持ち、撫で耳で球形になる器形だが、底部は平底丸味に作っている。底部外 面には×印の箇記号が付してある。	良 良 暗 灰	いい いい 色
69 -10 須 坏身 E	4-726-3 ロ-6 VII	13.3 4.5	全体の1/2が残る。天井部外面は1/3が鏡削りで仕上げられる。他は横ナデで仕 上げている。底部から体部にかけて厚手に作られ、体部から屈曲する立上がり 氣味のロ縫部は、先に行くに従って薄くなり、内側に沈線を落す、ロ縫部は丸く 作る。天井部には指痕模が残る。	良 良 褐 灰	いい いい 色
70 -10 須 坏身 E	7-2995 ロ-6 VII	12.8 13.1 3.9	ロ縫部の1/2を欠く。天井部には、粘土の巻上げの跡が残り未調整。他は横ナデ して仕上げている。ロ縫部はやや立上がり気味に作られるが、体部下半で大きく 屈曲したりを繰り返して薄くなり、ロ縫部を作り出している。天井部には内当て脛 があり、外面には白色のフキダシ軸がかかる。	以 以 良 暗 灰	いい いい 色
71 -10 須 坏身 E	6-3484-2 ロ-6E VII	10.6 12.7 4.4	全体の1/2が残る。底部外面の1/2程が鏡削りされ、他は横ナデ仕上げ。弧を描 く体部、中ほどでくの字形が付く。受部は斜め上にしっかりと作り、ロ縫部を画して いる。全体的に薄手のつくりだがシャープさはない。	や や 良 暗 灰	粗 い 色

番号 器種・形態・時期	登録番号 写真図版	出土位置 口 径 径 深 度 底 高	法量cm	技 法・調整 等 の 特 殊	土成色	
					器種 底	焼 成 調
72 -10 須 坏身 E	4-730-4 ロ-6 VII	11.2 13.6 4.7 -	完形品。底部外面の1/3が鏽削りされ、他は横ナメで仕上げている。体部は、平らに作られた底部から、緩やかに弧を作つて受部に続く。立上がり部は、低く、先が尖つて内側し、受部は斜め上に引出されて作る。全体に、やや深めの器形に作られる。	や 良 灰	や 良 灰	粗 い 色
73 -10 須 坏身 E	4-726-2 ロ-6 VII	11.6 13.2 - -	全体の1/3が残り、底部を欠く。底部外面の1/2を鏽削りによって仕上げ、底面は平らにしている。底部から直線的に立上がる体部に、一角の内傾する立上がりが作られる。受部はやや斜め上方へ引上げている。全体に厚手の作りで、底部外面には自然釉がかかっている。胎土に石英粒を含む。	良 良 灰	良 良 灰	いい 色
74 -10 須 坏身 E	4-725-3 ロ-6 VIII	11.5 13.7 4.5 -	全体の1/2が残る。底部外面は不定方向の静止削りで仕上げている。他は横ナメ仕上げ。底部は平らに作り、受部へと弧を描きながら立上がる体部となる。立上がりは先端を外壁気味に内傾させて、高くはない。	や 良 暗	や 良 灰	粗 い 色
75 -10 須 坏身 E	7-2945-5 ロ-3 VII	11.9 14.2 - -	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外面は鎌削りで調整され、他の部分は横ナメ仕上げ。胎形は、底部から緩やかに立上がって受部へと続き、内傾して先端が直立する立上がり部が付く。腰の張らない浅めの环となる。外面には自然釉が僅かに付着する。	粗 良 灰	粗 良 灰	いい 色
76 -10 須 坏身 E	6-3483-2 ロ-6E VIII	11.6 14.0 4.4 -	全体の1/2が残る。底部外面は、切離し廢を残し未調整で、禾本科植物の茎の压痕が付いている。他は横ナメで仕上げる。平底気味の底部から立上がる体部は、厚めにつくり、底の立上がり部は引き出されたように作っている。底部内面には指痕模が残る。全体に厚くシャープさに欠ける。	や や 不 良	や や 不 良	粗 良 色
77 -10 須 坏身 E	4-725-4 ロ-6 VII	11.5 14.0 ? -	全体の1/4が残る。底部外面の1/2が鏽削りされ、他は横ナメで仕上げている。深めの体部は、底部から緩やかに立上がる器形になるが、細片のため確定できない。受部は内傾し、しっかりと作られ、立上がり部との境には鎌の沈線が窺われる。底部内面には静止ナメの跡がある。	や 良 灰	や 良 灰	粗 い 色
78 -10 須 坏身 E	4-725-6 ロ-6 VII	12.0 14.0 4.5 -	全体の2/3が残る。底部外面の2/3が鏽削りされ、他は横ナメで仕上げている。厚手の底部は緩く弧を描いて受部へ続き、内傾する立上がりがしつくられ、内側には沈線を置く。口唇部は坦壇作で内傾する。受部は斜め上に引出される作りによる。底部内面には、指痕模と鎌削りの跡模が残される。	良 や 不 良	良 や 不 良	いい 良 色
79 -10 須 坏身 E	4-726-1 ロ-6 VII	12.1 14.0 4.0 -	全体の1/2が残る。底部外面の2/3が丁寧な鎌削りで仕上げられる。他は横ナメで仕上げている。全体的に浅めの体部に、低く外壁する立上がりが作られる。受部は、立上がり部との境に鎌描きの沈線を置いて、しっかりと作られている。底部内面には静止ナメの跡模を残している。胎土に石英粒を含む。	良 良 灰	良 良 灰	いい 色
80 -10 須 坏身 E	4-725-5 ロ-6 VII	12.4 14.4 3.4 -	全体の1/4が残る。底部外面の2/3が鎌削りされ、他は横ナメで仕上げている。浅めの体部は、緩やかに弧を描いて、受部へと続く。立上がりは、先端を外壁気味にして、低くしっかり作っているが、受部はさほどでもない。底部内面には、静止のナメ質が残っている。	粗 良 灰	粗 良 灰	いい 色
81 -10 須 坏蓋 F	4-724-2 ロ-6 VII	12.9 3.6 -	全体の1/4が残っている。天井部の1/2程が鎌削りで仕上げている。底部から弧を描いて続き、体部と口唇部の境に稜を置いたり屈曲したりしない。全体が厚手の作りでシャープさはなく、口唇部も丸く作っている。天井部には静止ナメが残されている。	や 良 暗	や 良 暗	粗 い 色
82 -10 須 坏身 F	6-3500-1 ロ-6E VII下	10.3 12.6 4.8 -	全体の1/2が残る。底部外面の2/3が鎌削り、他は横ナメ仕上げ。底部と体部上半でやや崩曲する。深めの体部に、内傾する立上がりが作られる。受部は立上がり部の基部に、鎌描き沈線を置いて作っている。底部内面にはナデマワシ痕がある。胎土には砂が多い。	粗 良 暗	粗 良 暗	い 通 色
83 -10 須 坏身 F	4-726-5 ロ-6 VII	10.4 12.7 4.4 -	全体の1/3が残る。体部外面は1/3が鎌削りで、他は横ナメ仕上げされている。偏平な半円球の体部に、外壁して先の尖った、低い立上がりを作る。受部は立上がり部の基部に、鎌描き沈線を引いて作っている。	良 良 暗	良 良 暗	いい 色
84 -10 須 坏身 F	6-3358-2 ロ-6W VIIa~c	11.2 12.5 4.4 -	全体の2/3が残る。底部外面の調整は鎌削りと撫拂されるが分明でない。他は横ナメで仕上げている。弧を描く体部に、内傾して頭頂する立上がりを持ち、口唇部は内傾するが屈曲を作っている。受部は、摩滅も激しく、中し訛程度にしか作られない、やや特異な器形になる。	粗 不 良	粗 不 良	い 良 色
85 -10 須 坏身 F	4-730-5 ロ-6 VII	9.6 12.0 4.5 -	完形品。底部外面の1/2が鎌削りされ、他は横ナメで仕上げている。偏平な半球形の体部に、外壁して短めの立上がりを作っている。受部は、立上がりの基部に鎌描き沈線を置いて作り出している。全体的に厚手の作りである。	や 良 褐	や 良 褐	粗 い 色
86 -10 須 高环 F	6-3491 ロ-6E VII下	11.2 12.8 9.6 8.9	坏部の3/4を欠く。ほぼ全体を横ナメで器面調整している。偏平な底部に、内傾する低い立上がりが付き、口唇部は丸く作られる。受部は、立上がりの基部に鎌描き沈線を置いて作る。受部の下方に深い沈線を置く。脚は、ハの字に開き、脚幅は、二角に尖つて終わる。全体に甘い作りである。	や 良 暗	や 良 暗	粗 い 色

種 図 番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 縫 器 部 底	技 法・調 整 等 の 特 徴		胎 焼 色	土 成 潤
			山 土 位 置			
器種・形態・特徴						
87 -11	4-725-2	11.2	全体の1/2が残る。天井部外側の1/2が箝削り、他は横ナデで器面を調整している。大井部から口縫部へと弧を描いて続く器形は、底部で少し折れ曲がり口縫部を作っている。折れ曲がりの部分には顯者ではないが、低い穂を作り、口縫部は内側する堆山を作っている。天井部外側には、木本科植物の茎の圧痕がある。	良 良 淡	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6 VII	4.2	-	-	-	-
88 -11	6-3484-3	10.2	全体の1/2が残る。天井部外側の1/3程が箝削りされ、他は横ナデ仕上げ。全体的に作りは薄く、半球形の体部に、やや直立気味の口縫部となり、口縫部は使用による摩滅で内側する平坦面を作っている。ノクメが顯著である。	や や や 不 規	灰 灰	相 良 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	?	-	-	-	-
89 -11	4-725-1	11.4	全体の1/2が残る。天井部外側の1/2が、平らに箝削りされる。他は横ナデ仕上げている。器形は、半球形に近く、口縫部の先端は、(沈線を立てたまき)内側する立上がりで作られ、口縫部は丸くしている。全体に歪み(焼き歪み)がある。	や 良 灰	灰 灰	相 良 色
須 壁 蓋 G	ロ-6 VII	4.4	-	-	-	-
90 -11	4-726-6	10.4	大井部の1/3を箝削りし、木本科植物の茎の圧痕が付いている。他は横ナデ仕上げている。沈線で作った底で口縫部と体部を画して、半球形で深めの体部を作っている。口縫部は、やや立上がり気味につくられ、内面にも細い沈線がみとめられ、口凹部は丸く作っている。	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6 VII	4.5	-	-	-	-
91 -11 - 9	6-3501	10.9	全体の1/2が残る。天井部の1/3が箝削り、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の下半に、深い凹部を置いて、口縫部と体部を画している。口縫部内側にも沈線を立て、口縫部は丸く作っている。全体に厚手の作りになつた。内面は灰褐色になっている。	や 普 通	灰 灰	相 通 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	4.7	-	-	-	-
92 -11	6-3484-4	10.6	全体に1/3が残る。天井部外側の1/3程が箝削りされ、底を平らに作る。他は横ナデ仕上げ。体部は弧を作つて口縫部にまで続き、途中に段や扇曲部を作らず、口縫部をやや立ち気味に作るだけである。天井部外側には、不定方向の静止ナデがある。	良 や や 不 規	灰 灰	相 良 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	3.7	-	-	-	-
93 -11	4-725-1	6.8	全体が横ナデで仕上げられている。山形の体部の頂に突出状の攝が付けられる。体部から続く受部に直立する立上がりが作られている。杯蓋としたが、瓶蓋か?	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6 VII	9.4	-	-	-	-
94 -11 - 9	6-3358 1	8.5	完形品。底部外側の1/2が箝削りされ、他は横ナデで仕上げている。やや腰の張つた厚めの体部に内側する立上がりが付く、受部は斜め上にしっかりと作られる。器形的には、平底気味で偏平な形となっている。口縫部は使用による摩滅が激しい。	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6W VIIa~c	11.1	-	-	-	-
95 -11 - 9	4-726-4	8.0	完形品。底外部は1/3程が箝削りされるが、中心の切離し部分は未調整。他は横ナデ調整で仕上げている。厚めの体部に、外脛する低い立上がりが付く。受部は、立上がりの基部に、腰の沈線を立てて作っている。口縫部は使用による摩滅で内側する平坦面を作っている。	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6 VII	10.8	-	-	-	-
96 -11	7-2954-3	9.0	全体の1/2が残る。底外部の1/3が箝削りで仕上げられるが、丁寧さは無い。	粗 良 黑	灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-3 VII	10.6	他の部分は横ナデで仕上げる。底部からやや深めの弧を描いて立上がる体部に、外反気味の、低い立上がりが作られている。受部は、立上がり部との境に、控抜きの沈線を立てて作っている。	-	-	-
97 -11 - 9	6-3483-1	9.4	全体の1/2が残る。底部外側の1/2は箝削りされ、底部は平らにしている。他は横ナデ仕上げ。底部から内側気味に立上がりが体部にくの字に曲がった低い立上がりが付けられが付ける。底部内面には静止ナデの痕跡が確かに残っている。全体に薄手の作りになっている。	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	11.1	-	-	-	-
98 -11 - 9	6-3490-1	9.0	完形品。底外部の1/3が箝削りされるが、中心部には、切離し窓が残り未調整。	や 普 通	灰 灰	粗 通 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	11.0	他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に外脇して内側する低い立上がりが付く、受部は立上がり基部に控抜きの沈線を立てて作っている。胎内には砂が多い。	-	-	-
99 -11 - 9	6-3500-3	9.0	立上がりの1/2をなくす。底部外側の1/3が箝削りされるが、中心部分は切離し窓を残したまま。他は横ナデ仕上げ。半球形の体部に内側する立上がりを受け、受部は立上がり基部に控抜きの沈線で作っている。内面には内當て窓が残る。口縫部内側の摩滅が激しく、内側する平面を作っている。外面も摩滅する。	粗 普 通	灰 白	い 通 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	11.0	-	-	-	-
100 11	6-3490-2	8.5	完形品。底外部の1/3を箝削りしているが、中心部には削り残しがあり、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、内側する低い立上がりがつく。外面には、薄軽の沈線がある。	粗 良 暗	灰	い い 色
須 壁 蓋 G	ロ-6E VII	12.3	-	-	-	-
101 -11	6-3357	10.0	全体の1/2が残る。天井部外側の1/2程度が箝削り、他は横ナデで仕上げている。器形は半球形に近い。底部下部の外側に、踏き状の沈線を立てて、口縫部と画されている。口縫部先端の内面には、圓錐状の沈線があり、口縫部は丸く作っている。器壁に火照れがある。	良 良 暗	灰 灰	い い 色
須 壁 蓋 H	ロ-6W VIIa~c	3.8	-	-	-	-

番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 脣 胸 脛 高 底	技法・調整等の特徴	胎 焼 成 色	上 成 色
				山土位 高底	
頭 図 顎骨・形態・時期					
102 11	4 730-1	9.5 — ? —	全体の1/2が残り、底部を欠く。天井部の1/2が壠削りし、他は横ナデで仕上げている。体部の下半で、沈縫を聞き口縫部と体部を画している。偏平な半球形の体部で、口縫部は、やや立上がり気味に作り、内面にも細い沈縫を置いている。	良 良 灰	いい いい 色
頬 壁 骨 II	ロ 6 VII	—	天井部に内当て痕がそのまま残っている。		
103 11 — 9	6 3500 2	8.4 9.9 3.6 —	口縫部の一部を欠く。底部外面の1/3が壠削りで仕上げられるが、中心部は切離し痕をそのまま残す。他の横ナデ仕上げ。半球形の体部に、内傾する低い立上がりを作り、受部は立上がり部分の基盤に壠で沈縫を入れてつくる。口縫部内側や底部外面上には、使用による摩耗が著しい。内面には、茶褐色の炭化物が付着している。	良 や や 不 灰	いい 良 色
頬 壁 骨 II	ロ 6E VII下	—			
104 11	7 2954-2	8.9 9.9 3.3 —	全体の1/2が残る。底部外面の1/3が壠削りで仕上げ、他の部分は横ナデで仕上げる。脣の部分で屈曲する体部に、先端の外反した、内傾する低い立上がりを持つ。受部は立上がり部分でとの境に壠沈縫を置いて作っている。底部内面にナデマワシの痕跡がある。	良 良 暗 灰	いい いい 色
頬 壁 骨 II	ロ 3 VII	—			
105 11	6 3493	19.0 — — —	脚部を欠いている。环底部外面の1/3が壠削り、他は横ナデで仕上げている。歪みが大きき正確な様は不明だが、大形の器形である。口縫部先端の内面、底面附近、体部外面で、ノタメや壠削りのため器壁が緩く高くなる部分の摩耗が激しい。	や や 不 灰	粗 良 色
頬 高 壁 II	ロ 6R VII下	—			
106 11	6 3494	— 9.3 — —	口縫部を欠いている。脣部下半は壠削り、他は横ナデ仕上げ。注口部は、突起状に作り出している。脣部には2条の沈縫を聞き、体部はここで屈曲し肩の張った器形になっている。肩部には自然軸が厚くかかっている。	や 良 白 灰	粗 い 色
頬 脣 II	ロ 6R VII下	—			
107 11 — 9	6 3499-1	10.5 — —	口縫部の先端を欠いている。底部外面が壠削り、他は横ナデ仕上げ。口縫部は上半部に沈縫を聞き、段を作って開くが、先端部を欠く。脣部はやや肩が張り、2条の浅い沈縫の間は横棒器具の刺突で飾っている。注口部は、突起させて作られる。口縫部内面と肩部外面上に自然軸が厚くかかっている。	粗 良 灰	いい 色
頬 脣 H	ロ 6E VII下	—			
108 -11 — 10	6-3498	13.8 24.0 25.5 —	全体の1/2が残る。体部下半を壠削りで仕上げ、他は横ナデで仕上げている。口縫部の内面と、肩部外面上に自然軸が厚くかかって器面の調節法がはっきりしない。肩と腰の張った球形で、全体に厚手の作りになっている。口縫部は体部から、ぐの字に開き、先端を二角に作っている。	良 良 灰	いい 色
頬 脣 H	ロ-6E VII下	—			
109 -11 — 10	6 3358-3	6.6 8.6 3.1 —	全体の1/2が残る。天井部外面の大半は壠削りされ、平らに作った頂には、突起状の握を付いている。他は横ナデで仕上げている。偏平な体部に、内側に屈曲する立上がり部が付き、身受部分は頗者ではない。	良 良 灰	いい 色
頬 脣 I	ロ 6W VIIa~c	—			
110 -11	4-730-2	14.4 — 3.9 —	全体の1/4が残る。底部は、鋭切り後にナデ仕上げしている。他の部分は、横ナデで仕上げている。口縫部は外唇気味に聞き、薄手でノタメが顯著である。口脣部は、さらに外反気味になり、口脣部を丸く仕上げている。	良 良 青 灰	いい 色
頬 壁 骨 J	ロ 6 VII	—			
111 11	表採	9.9 —	口縫部が残り、体部を欠いている。首の長い口縫部で、全体を横ナデで仕上げている。下半部には、カキメ状の擦痕が見られる。口縫部は、先に行くに従って開き、口脣部は複合させ三角に作っている。外面と内面の一部に自然軸がかかる。	良 良 灰	いい 色
頬 脣 J	ロ-6 VII	—			
112 -11	6-3484-5	15.6 — —	口縫部の1/2が残り、底部を欠いている。残された部分は、今で横ナデして仕上げられている。下半部は厚く、口縫部に近付くにともなって薄く作り、先端は内側で折れ、平底の器形に作っている。口縫部内面と肩部外面上には自然軸がかかる。	良 良 灰	いい 色
頬 描 鮎 J	ロ-6E VE	—			
113 -11 — 10	6-3481	10.0 — —	口縫部先端を欠いている。脣部下半が壠削りされ、底部は平底に作っている。他は横ナデで仕上げている。円筒の脣部が口縫部で横に開き、脣部は突起した注口を持ち、肩部で折れ、平底の器形に作っている。口縫部内面と肩部外面上には自然軸がかかる。	良 良 灰	いい 色
頬 脣 J	ロ-6E VE	5.4			
八区					
114 -12	6-3328	15.5 — 5.1 —	体部の4/5が残るが、口縫部の大半を欠く。天井部外面の2/3が壠削りされ、天井部には内当て痕が残る。他の部分は横ナデ仕上げている。脣の部分には、しっかりした稜を作り出している。体部は稜の部分で屈曲し、やや外反する口縫部を作っている。口脣部は段を作って内傾する。器形的には箱形に近く、ややシャープに欠けるが薄手の作りである。体部外面上にはフキダシ軸がっかっている。	や や や 不 灰	粗 良 色
頬 壁 A	ハ-4E VIIb	—			
115 -12 — 10	6-3407	12.4 — 4.4 —	全体の1/2が残る。天井部の1/2が壠削りされ、他は横ナデで仕上げている。体部と口縫部の境に低い稜を作り、屈曲して口縫部へと続く。口縫部はほぼ直立し、口縫部は段を作って内傾する。器形的には箱形に近く、ややシャープに欠けるが薄手の作りである。体部外面上にはフキダシ軸がっかっている。	や 普 灰	粗 通 色
頬 壁 B	ハ-5E VIIc	—			

種 国 番号 写真版	登 録番 号	法量cm 口 器 底 器 高 度	技 法・調 整 等 の 特 徵	胎 土 燒 成 色	
器種・形態・時期	出 上 位 四				
116 -12 須 坏身B	6-3438-2 ハ-5W VIIb	?	全体の1/3が残って、口縁部先端を欠く。底部外面の2/3が丁寧に鋸削りされて、底面部内面にはナデマワシ痕が残っている。他の横ナデで仕上げられる。腰の張った体部に、直立気味の立上がりが付き、受部は横にしっかりと作りっている。全体に薄手で、シャープさがある。受部の下方に、発育時の粘土シワが残る。	良 や や 不 良 灰	い い 良 色
117 -12 -10 須 坏身B	6-3344 ハ-4W VIIc	10.9 13.8 4.1 -	全体の2/3が残る。底部外面の大半が鋸削りされる。底部の内面にはナデマワシの痕跡が残る。他の横ナデで仕上げている。体部に歪みが大きい。全体に厚手で、立上がりも高く、受部もしっかりと作りされている。	良 や や 不 良 灰	い い 良 色
118 -12 須 坏身B	6-3447 ハ-5W VIIb	10.6 4.4 -	全体の1/4が残る。底部外面の1/2が鋸削りされる。他の横ナデで仕上げている。腰の張った体部に、内傾する高い立上がりを持ち、受部は横にしっかりと作り出している。口唇部は、やや肥厚し斜い段を作つて内傾する。薄手の作りで、シャープさがある。体部外面に灰釉の自然軋がかかっている。	良 良 灰	い い 色
119 -12 須 坏蓋C	7-2998-1 ハ-4 VII・VIII	12.5 3.9 -	全体の1/3が残る。天井部外面の2/3が鋸削り、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部分には、沈線を置くことによって段を作り出している。休部は後の部分で開削し、ほぼ直立する口縁部を作つている。口唇部は内傾する面を作る。やや厚めの作り。	良 良 灰	い い 色
120 -12 須 坏身C	7-2996-1 ハ-1 VII	9.6 12.5 4.7 -	全体の1/2が残る。体部外面の1/2が粗く鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げ。休部はやや腰が張つて受部へと続き、内傾する立上がりとなる。受部は斜め上方に伸びる、深めの器形となる。	良 良 暗 灰	い い 色
121 -12 須 坏身C	7-3004 ハ-1 VII	11.6 14.6 6.1 -	全体の1/2が残る。底部外面は1/3が鋸削りで調整され、X印の箇記号がある。他の部分は横ナデ仕上げ。器形は、平原な底部から腰やかに立上がりて受部へと続き、内傾する立上がりが付く。底部内面は内当て胎をナデ消している。腰が張り立上がりは内傾し、受部も横に引出してしっかりと作る。	良 良 灰	い い 色
122 -12 須 坏身C	7-2947-2 ハ-1 VII	12.2 14.0 -	全体の1/4が残り底部を欠く。残った部分は横ナデ仕上げ。あまり腰は張らず、立上がり部は内傾する。受部は斜め上方へ引き上げる。口唇部は段を作つて薄くなる。全体に薄い作り。体部の外面には多量の自然軋が見られる。	良 良 灰	い い 色
123 -12 須 坏身C	6-3355-1 ハ-4W VIIc	10.3 12.6 4.5 -	全体の1/3が残る。底部外面の1/2が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げている。腰の張った体部に、内傾する高い立上がりが付き、口唇部は段を作つて内傾する。受部も斜め上向きにしっかりと作り出している。端部も比較的シャープに作られている。胎上には砂が目立ちやや白い。内面は暗灰色、外面は黒灰色。	や や 粗 い 黑 灰	い い 色
124 -12 須 坏身C	6-3269 2 ハ-4E VII	12.2 14.4 - -	全体の1/2が残るが、底部を欠く。底部外面の1/2が鋸削りし、他の横ナデで仕上げしている。腰の張った体部に、内傾する高い立上がりを持つ。受部は横に引出されて作られている。休部に比して立上がりは薄手で口唇部は丸く作っている。	粗 普 灰	通 色
125 -12 須 坏身C	6-3261-4 ハ-4E VII	12.9 15.5 4.8 -	全体の2/3が残る。底部外面の1/2が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げている。腰の張った体部に、内傾する高い立上がりが付き、受部は斜め上にしっかりと引出される。口唇部は斜め上に作つてある。全體に運手の作りになる。底部内面には同心状の内當て痕が付かれており、断面は茶褐色に焼締まっている。	鐵 良 黑 灰	密 い 色
126 -12 須 坏身C	6-3293 ハ-4E VIIab	11.5 13.4 5.2 -	全体の1/4が残る。底部外面の1/2が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げている。やや腰の張る体部に、高めで直立する立上がりを持ち、受部も横にしっかりと作られている。全體に運手の作りで、立上がり部も丁寧に作っているが、口唇部は丸くなっている。胎土はやや粗く石粒が多い。	や 良 灰	粗 い 色
127 -12 須 高坏C	6-3301-3 ハ-4E VIIb	11.2 16.2 9.8 -	休部と脚部とも1/3が残る。底部外面部は鋸削りされる。休部の外縁には隠れ斜めの透刺線突文で飾る。内面には白色自然軋が厚くかかって、調整法は不明。脚は長脚で、二方向に長方形の透かしがあり、上半部にカキメが認められる。脚部は玉縁状に丸く作っている。復元実測。	砂 多 良 青 暗 灰	い い 良 色
128 -12 須 坏蓋D	6-3369 ハ-7W VIIbc	14.2 - 4.7 -	全体の1/4が残る。天井部外面の大半が鋸削りされ、天井部には青海波の内當て痕とナデマワシの痕跡が残っている。天井部から続く休部は屈曲して口縁部を作つる。屈曲部分に浅い沈線を置いて低い段を作つている。口唇部は段を作つて内傾する。外面は灰色だが内面は茶色で焼締めになっている。	や 良 灰	粗 い 良 色
129 -12 須 坏蓋D	7-2985-2 ハ-4 VII・VIII	14.3 - 4.4 -	全体の1/3が残る。天井部外面の1/2が鋸削りで、/の箇記号が付されている。他の部分は横ナデ仕上げ。口唇部の外面にはカキメ状の斜線が付いている。休部から直立気味に屈曲させ口縁部を作つている。屈曲部で沈線を置いて休部と口縁部とを繋ぐ。他は顯著ではない。口唇部は面を作る。	良 良 灰	い い 色
130 -12 須 坏蓋D	6-3312-2 ハ-4E VII	14.2 - 4.8 -	全体の1/4が残る。大井部の大半が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げられている。体部の中ほどに低い腰を作り、後の部分で休部から屈曲する口縁部を作り、口唇部は内傾する面を作る。胎土はやや粗く、内面は茶褐色になっている。	や 良 灰	粗 い 良 色

押 国 番号 写真版面 器種・形態・時期	登録番号 出土位置 銘 器 高 底	法量cm 口 縫 器 底	技 法・調 整 等 の 特 微		胎 燒 成 色	土 成 調		
131 -12	7-2977 ハ-4 VII	14.1 4.2 -	口縫部の1/2を欠く。天井部の2/3が窓削りで、他は横ナデで仕上げている。体部下半に低い縁をつくり、体部と口縫部を画している。天井部から口縫部まで弧を描いて眺め、腰の張らない器形である。口唇部は内傾する面を作り、天井部には内当て縫が残る。		良 良 晴	い い 色 灰		
132 -12 -10	6-3434-3 ハ-5W VIIa	14.8 5.9 -	全体の2/3程度が残る。天井部外面の2/3が窓削りされ、他は横ナデで仕上げられる。体部下部に沈縫を書いて、低めながら腰を作り出し、少し内輪気味に局曲させた口縫部を作っている。腰の張った深めの器形で、口唇部は段を作りて内傾している。焼成は悪く全体が灰白色をしている。		や や 不 灰	相 良 白 色		
133 -12	7-2947-1 ハ-1 VII	12.2 14.2 5.0 -	全体の1/2が残る。底部は平に作られる。底面は摩耗が激しく削りの様子を観察できない。他の部分は横ナデ仕上げ。底部内面は静止ナデで調整している。外面にも静止ナデが見られるが分明でない。立上がり部は内傾し受部は僅かにつまみ出される程度にしか作られない。		や や 不 黒	粗 良 色 灰		
134 -12	6-3294-2 ハ-4E VIIb	12.3 15.4 -	全体の1/3が残る。底部外面は1/3が窓削りで調整され、他の部分は横ナデ仕上げしている。体部の腰はあまり張らず、内傾する薄手の立上がりを持特。受部は横に引出すようにしっかりと作っている。口唇部は摩耗が著しく、平坦面を作っている。体部外面に煤が付着している。		や 良 灰	相 良 色 灰		
135 -12	6-3057-1 ハ-4W VII	13.2 15.0 4.1 -	全体の2/3が残る。底部外面の1/3が窓削りされ、内面にはナデマワシの痕跡が残る。他は横ナデ仕上げされている。底部を厚くし、浅く広がる体部に、内傾するしっかりとした立上がりを作っている。受部は、立上がり部の基部に、窓の沈縫を置いて作っている。胎土はやや粗く白い砂が多い。		や 良 暗	粗 い 色 灰		
136 -12	6-3261-6 ハ-4E VII	12.4 14.6 3.7 -	全体の1/3が残る。底部外面が斜い路削り(切離したまま未調整?)され、他は横ナデで仕上げている。窓曲して底部から広がる体部に、内傾する低い立上がりが付く。受部は立上がり部との境を強く凹凸状にナデでしっかり作り。		普 不 灰	通 良 色 白		
137 -12	6-3388-3 ハ-5E VIIa	11.3 -	体部の1/3が残り、口頭部を欠いている。体部下半が平面窓削りされ、他は横ナデで仕上げされている。窓部は厚くし、浅く広がる体部に、内傾する腰の張る球形状の体部で、肩部上面と底面内面にフキダシ釉がかかっている。		良 良	い い 色 灰		
138 -12	6-3283 ハ-4E VIIa	13.2 -	全体の1/2が残る。天井部外面の2/3程度が窓削りされ、天井部はナデマワシ痕が残る。腰の腰に縁を作り、口縫部と体部を画している。全体的に厚手でシャープさはない。体部の内外面に使用による摩耗が著しい。内面には茶色の炭化物が一面に付着している。		粗 や 暗	い 良 色 灰		
139 -12	6-3346-2 ハ-4E VIIc	14.1 4.0 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が窓削りされ、禾本科植物の茎の压痕が付されている。体部下部に沈縫を書いて、ごく低い縁を作って口縫部を画しているが、口縫部は屈曲せず、器形的には腰やかな弧を描く体部になる。焼成は良く、内面は茶褐色に焼け締まっているが、外側は二次火力によって灰褐色となる。		良 良	い い 色 灰		
140 -12 -10	6-3171 ハ-4EW VII	12.7 5.0 -	完形成 天井部外面の1/3が窓削りされる。体部下半で外面に沈縫を置いて縁を作り、口縫部と体部を画している。弧を描く体部に、直立気味の口縫部を持つ深めの器形になる。内面に炭化物が付着する。器壁外面で、窓削りの界隈、ノタメで高くなる部分、口唇部内面等は摩耗が著しい。		や 良	粗 い 色 灰		
141 -12	6-3261-3 ハ-4E VII	13.3 4.4 -	口縫部の1/8を欠くが体部は残る。天井部外面の2/3が窓削りされている。弧を描く体部は下半で角があり、外面に沈縫を書いて口縫部へと続く。口唇部は丸く作っている。全體に厚手の作りでシャープさはない。胎土には砂が多く、やや粗い。天井部には内当て縫を残している。		や 普 暗	粗 通 色 灰		
142 -12	6-3330-2 ハ-4E VIIb	13.0 13.2 4.1 -	全体の1/4が残る。天井部外面は窓削りで、平らに作られ、天井部はナデ仕上げしている。他は横ナデで仕上げる。天井部から屈曲した体部は、腰の部分で再び軽く屈曲し、浅い沈縫を介して口縫部へと続く。外側にはフキダシ釉がかかり、端部は丸く作られシャープさは無い。		良 良 黑	い い 色 灰		
143 -12	6-3439 ハ-5W VIIb	14.1 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/3が窓削りされ、天井部には内當て縫を消したナデ痕が残る。他は横ナデで仕上げている。体部の先を内傾させ、口縫部を作り出している。窓曲する部分には沈縫を置いたり段を作ったりしない。外側全体に灰釉状の自然釉がかかり、焼成も良く断面は茶色に焼け締まっている。		良 良 暗	い い 色 灰		
144 -12	6-3375-2 ハ-4W VIIc	13.8 3.9 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が窓削りされ、天井部はナデマワシで器面調整している。他は横ナデで仕上げる。器形的には体部の下半を屈曲させて口縫部とし、腰や沈縫は作らない。厚手の作りで、シャープさは無い。二次火力を受けているため焼成は良くなく、外側は茶褐色で煤が付着している。		や 不 肯	粗 良 色 灰		
145 -12	6-3274-2 ハ-4E VII	13.8 14.0 3.4 -	全体の1/2が残る。天井部外面は窓削りされるが、中心部分は切離し縫が残り、未調整。天井部には静止のナデ痕を残す。他は横ナデで仕上げている。体部の先端を、直立気味に屈曲させ、口縫部を作り出している。浅く厚手の作りで、口唇部は内傾する面を作っている。内面には炭化物が付着する部分がある。		良 普 暗	い 通 色 灰		

拂 国 番号 写真版	登 錄番 号	法量cm 口 縫 脛 器 底	技 法・調 整 等 の 特 徵		胎 燒 色	土 成 調
			逐 段 高 度	出 土 位 置		
器種・形態・時期						
146 -12 須 壁蓋 E	6-3342 ハ-4W VIc	13.7 - 3.7 -	口唇部の一部を欠くが、ほぼ完形品。天井部外面は、切離し痕を残したまま未調整。天井部には同心円の内当て瓶が残っている。他は横ナデで仕上げている。体部は緩やかに凸凹して口縫部へと眺き、途中に縫や段を作らない。外面全体に白い斑点状のフキダシ跡がかかる。胎土には砂が多い。	粗 良 灰	い い 色	
147 -13 須 壁蓋 E	6-3303-1 ハ-4E VIIb	14.0 - 4.2 -	全体の1/2が残る。天井部外面には、窓の切離し痕が残り未調整。原めの天井部から、張を描いてそのまま口縫部へと横く、浅めの器形になっている。口唇部は内側に突出させて、口縫部を作っている。内外面共にフキダシ跡がかかる。全体的に厚手でシャープさは無い。	粗 良 暗 灰	い い 色	
148 -13 須 壁蓋 E	6-3311 ハ-4E VII	13.1 13.5 3.8 -	全体の1/2が残る。天井部外面が鋸削りされるが、中央部は切離し痕が残っている。天井部にはナデ痕が残る。窓の部分は横ナデで仕上げている。体部中ほどで緩やかに突出させて、口縫部を作っている。全体に厚手で作りは荒い。内外面全体にフキダシ跡がかかる。外面に暗灰色の部分がある。	良 良 灰	い い 色	
149 -13 須 壁蓋 E	6-3302 ハ-4E VIIb	13.8 14.0 3.8 -	口縫部を僅かに欠くが、ほぼ完形品。天井部外面の1/3が、窓に鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。厚い体部から口縫部を引出すように内壁を削除して作っている。体部外面上には全体に自然筋がかかる。全体に荒い作りになっている。	良 良 暗 灰	い い 色	
150 -13 須 高壁蓋 E	6-3349-5 ハ-4E VIc	13.0 - 5.2 -	全体の3/4が残る。天井部外面の1/2が鋸削りされ、中央の窓んだ握が付けられている。他は横ナデで仕上げている。窓の張った体部で、口縫部も比較的高く、口縫部は内側する窓を作っている。しかし、ナデや削り等の調整が窓でシャープさが無い。焼成は良いが、内面に火薙れが多い。	良 良 暗 灰	い い 色	
151 -13 須 壁身 E	7-2985-1 ハ-4 VII + VIII	11.7 14.6 4.5 -	全体の1/2が残る。体部外面の1/2が鋸削りされる。他の部分は横ナデ仕上げ。底部から緩やかなカーブを描いて受部に至る体部に、内側する受部の付く、腰の張らない浅めの器形になる。体部は比較的厚めの作りとなっている。	や 良 青 灰	粗 い 色	
152 -13 須 壁身 E	6-3261-1 ハ-4E VII	11.3 13.4 4.8 -	全体の3/4が残る。底部外面が鋸削りされるが、切離し痕が残る。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に内側する立上がり部が付き、立上がりの基部に沈縫を置いて受部を作っている。体部の外面にフキダシ跡がかかり、内面には一面に茶色の炭化物が付着している。	や 良 青 灰	粗 通 色	
153 -13 須 壁身 E	6-3448-1 ハ-5W VIIb	12.0 13.9 4.8 -	全体の1/3が残る。底部外は鋸削りされ、底部内面にはナデマワシ筋が残る。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、低い立上がりが内側して付き、立上がり基部を凹線状にナデで受部を横に作り出している。口縫部内側は厚感が著しい。	粗 良 白 灰	い い 色	
154 -13 須 壁身 E	6-3349-6 ハ-4E VIc	12.0 14.0 3.7 -	全体の1/2が残っている。底部外は、窓による切離し痕を残したまま未調整。他は横ナデで仕上げている。底部に発達する立上がりがあるが、窓の張る体部に内側する立上がりを持つ器形になる。受部は立上がりとの境に窓の沈縫を置いて引出されている。	良 良 灰 福	い い 色	
155 -13 須 壁身 E	6-3347 1 ハ 4E VIc	12.7 14.0 3.7 -	全体の1/2程度が残る。底部外面の1/2が鋸削りで、他は横ナデで仕上げている。底部から受部に弧を描く体部に、内側する薄い立上がりが作られている。全体的に窓の手作りとなっているが、窓は丸くシャープさは無い。体部外面上に白色の自然筋がかかる。焼成は良好断面は茶色に焼き締まっている。	良 良 灰	い い 色	
156 -13 須 壁身 E	6-3269 3 ハ 4E VII	12.6 14.2 3.7 -	全体の1/3が残る。底部外面の1/3が鋸削形されるが、切離し痕をそのまま残す。底部内面にはナデマワシの痕跡が残される。他は横ナデで仕上げている。底部は底平気味に作り、浅めの体部に先端が立上がりする受部で、受部は立上がりとの境に沈縫を置いてしっかり作っている。断山は茶色。	良 良 黑 灰	い い 色	
157 -13 須 壁身 E	6-3349-3 ハ-4E VIc	12.3 14.4 - -	完形品。底部外面の2/3に窓の切離し痕が残して未調整。底部内面は指羽痕(内当て痕?)が残る。他は横ナデで仕上げている。皿状の浅い体部に内側する立上がりの付く器形となる。全体に厚手で、作りも荒い。外面全体にフキダシ跡がかかり、炭化物も付着している。胎土に砂多い。	粗 良 灰	い い 色	
158 -13 須 壁蓋 F	6-3360-2 ハ-7E VIIa	12.3 4.4 - -	全体の1/2が残る。天井部外面は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部下半に深い沈縫を置いて、低い窓を意識させ、体部と口縫部を画している。口縫部はやや内側し口唇部を丸く作っている。体部外面上にはフキダシ跡が薄くかかり、内面には炭化物が付着している。	良 良 灰	い い 色	
159 -13 須 壁蓋 F	6-3419 ハ-5E VIc	12.4 4.7 - -	完形品。天井部外面が、1/3鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部下半に深い沈縫を置いて、低い窓を意識させ、体部と口縫部を画している。体部を沈縫の部分でやや突出させ口縫部を作っている。口縫部の内側にも沈縫が置かれ、口唇部を丸く作っている。全体的に厚手の作りになっている。	粗 骨 暗 灰	い 通 色	
160 -13 須 壁蓋 F	6-3367-3 ハ-7W VIIab	9.8 -- 3.8 --	全体の1/2が残る。大井部外面の1/3が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。やや膨らむ張る器形になる。窓の部分に凹線状の沈縫を突き、体部と口縫部を画している。口縫部はやや外輪気味に立上がり、口唇部は丸く作っている。天井部外面上には、禾本科植物の茎の圧痕がある。	や 良 灰	粗 い 色	

博 国 番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 縦 横 径 器 高 度 底 径	技 法・調 整 等 の 特 徴	上 成 調	
				胎 燒 色	成 調
器種・形態・時期	出土位置				
須 壊 盖 F	H-5E Wc	11.8 12.1 4.4 -	全体の1/2が残っている。大井部外面はやや難な箇割りで、中央には切離し痕が残る。底面部には内当て痕が残る。他は横ナデで仕上げている。犬井部から張を描いて続く体部下半に、複数の凸起を作り、やや内側させた口縫部と描している。浅い器形で、体部外面にはフキダンがかかる。	良 良 灰 灰	いい 色
須 壊 盖 F	H-5E Wc	11.9 11.1 4.5 -	全体の3/4が残る。天井部外面は大半が箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。底面部から続く体部の先端を青立氣味に筋書きさせて口縫部を作り、体部と口縫部は浅い沈線で飾している。口縫部は内緑する面をつくり、摩滅が激しい。口縫部外面には摩滅している。	粗 普 灰 灰	いい 褐色
須 壊 盖 F	H-4E Wc	12.0 12.3 4.9 -	全体の1/2程度が残る。大井部外面の1/3が箇削りされ、頂部は平らに作っている。他は横ナデで仕上げられる。体部下半に沈線を置き、内側気味に筋書きさせて口縫部を作る、台形状の器形になる。胎土には砂が多く、やや粗い。口縫部外面には、茶色の炭化物が付着している。	や 普 灰 灰	普通 色
須 壊 盖 F	H-4W Wc	12.0 12.3 4.9 -	全体の3/4が残る。天井部外面の1/3が箇削りされ、頂部は平らに作りだしている。他は横ナデ仕上げしている。体部下半で彎曲し、外側には沈線を置いて口縫部を作っている。口縫部は先端内面で段を作つて薄くなり、口縫部は丸く作る。	良 良 灰 灰	いい 色
須 壊 盖 F	H-4EW VII	12.0 12.4 4.5 -	全体の1/2が残る。天井部外面は箇削りされ、中央の窪んだ掘が付く。他は横ナデで仕上げている。壁の部分に浅い沈線を描いて口縫部と体部を区別している。口縫部の内側にも沈線を深くようにして、内面全体に茶色の炭化物が付着している。	良 普 灰 灰	いい 通 色
須 壊 盖 F	H-4R VII	12.0 12.4 4.5 -	全体の1/2が残る。天井部外面は箇削りされ、中央の窪んだ掘が付く。他は横ナデで仕上げている。壁の部分に浅い沈線を描いて口縫部と体部を区別している。口縫部の内側にも沈線を深くようにして、内面全体に茶色の炭化物が付着している。	良 普 灰 灰	いい 通 色
須 壊 盖 F	H-7W Wlab	10.6 12.9 4.2 -	口縫部の一部を欠くが、ほぼ完成品。底部外面は回転箇削りの後に、不定方向に静止箇削りして仕上げている。他は横ナデで仕上げられる。底面部から張を描いて続く体部に内緑する立上がりを作り、受部も横にしつかりと作られている。底部外面には一印の塑形印が付してある。内面は炭化物が付着して黒っぽい。	や や や 不 灰	粗 良 色
須 壊 身 F	H-3346-1	10.4 12.8 4.2 -	全体の2/3が残る。底部外面の1/2が箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。やや腰の張る体部に、内緑する立上がりが付く。受部は横に厚くしつかりと作り出されている。胎土は粗く、断面は灰色になっている。受部の上面にはフキダンがかかる。	粗 普 黑 灰	いい 通 色
須 壊 身 F	H-4E Wc	10.6 12.5 4.2 -	全体の1/2が残る。底部外面の1/3が箇削りされ、禾本科植物の茎葉とX印の旋記印が付されている。他の部分は横ナデで仕上げられている。半球形の体部に内緑する立上がりが付く、受部は横に引出されて作っている。口縫部の摩滅が激しく平坦面を作っている。内面には黒色の炭化物が付着している。	良 良 黑 灰	いい 色
須 壊 身 F	H-3354-11	10.6 12.5 4.2 -	全体の1/2が残る。底部外面の1/3が箇削りされ、禾本科植物の茎葉とX印の旋記印が付されている。他の部分は横ナデで仕上げられている。半球形の体部に内緑する立上がりが付く、受部は横に引出されて作っている。口縫部の摩滅が激しく平坦面を作っている。内面には黒色の炭化物が付着している。	良 良 黑 灰	いい 色
須 壊 身 F	H-4W Wc	10.3 12.4 4.1 -	全体の2/3が残る。底部外面は箇削りされ、底は平らに作っている。逆台形の体部に、内緑する厚く短い立上がりが付く。口縫部は丸く作っている。口縫部内側と外側の器壁の凹部が摩滅している。内面には黒茶色の炭化物が一層に付着している。次火炙による赤変もあり焼成は良くない。	や や 不 灰	粗 良 色
須 壊 身 F	H-3382-2	9.7 12.3 4.4 -	全体の2/3が残す。底面部外面の1/3が箇削りされるが、中心部分には切離し板が残る。底面部内面には内当て痕が残る。他は横ナデで仕上げられている。偏平な半球形の体部に、内緑する立上がりが付く、受部は立上がりと口縫部を置いて作っている。内面全体に炭化物が付着し、口縫部内側が摩滅している。	や 良 灰 灰	粗 良 色
須 壊 身 F	H-4W Wc	10.8 12.7 3.3 -	体部と口縫部の1/4が残っている。底部外面はやや難な箇削りで、中央には切離し痕が残る。底面部内面には内当て痕とそれを消すしたナメマワシの痕跡がある。他は横ナデで仕上げ、浅い器形で、底面部から張を描いて続く体部に、低い立上がりが付く。口縫部は摩滅で形状を止めない。外外面に茶色の炭化物が付着する。	粗 不 暗 灰	いい 良 色
須 壊 身 F	H-3392	10.2 12.8 -	全体の1/3が残る。底部外面は箇削りされ、底面を平らに作っている。底部外面にはナメマワシの痕跡がある。他は横ナデで仕上げている。底面部から張を描いて続く体部に内緑する立上がりが付く。受部は立上がりの基部に、川綱状の沈線を置いて作られている。	や や 不 灰	粗 良 色
須 壊 身 F	H-3471-1	10.0 12.0 -	完形品。底部外面の2/3が丁寧に箇削りされる。底面部内面はナメマワシで調整している。張を描く体部の先を内緑させて立上がりを作り、受部は、横に短く引出す。口縫部の内側は、摩滅が著しい。胎土はやや粗く白色粘土が縮状に混じる。体部内面には、茶色の炭化物が付着している。	や や 不 灰	粗 良 色
須 壊 身 F	H-4E Wc	10.0 12.0 4.1 -	全体の1/4が残る。底部外面を欠いている。残った部分は横ナデで仕上げている。底面部から直線的に開く体部に、内緑した立上がりがしつかりと作られる。受部は立上がりの基部に川綱を置いて作っている。口縫部は摩滅が激しく丸くなっている。	良 良 灰 灰	いい 色
須 壊 身 F	H-3325	10.7 12.0 4.1 -	全体の4/5が残る。底部外面の1/2が箇削りされ、底部内面はナメト上げで作られる。他は横ナデで仕上げている。深めの体部に内緑する立上がりを作り、受部は立上がりの基部に川綱を置いて作っている。口縫部は摩滅が激しく丸くなってしまっている。	良 や や 灰	いい 良 色
須 壊 身 F	H-4W Wia	10.8 13.2 -	全体の1/4が残る。底部外面を欠いている。残った部分は横ナデで仕上げている。底面部から直線的に開く体部に、内緑した立上がりがしつかりと作られる。受部は立上がりの基部に川綱を置いて作っている。口縫部は摩滅が激しく丸くなっている。	良 良 灰 灰	いい 色
須 壊 身 F	H-3312-1	10.7 12.7 4.7 -	全体の1/2が残る。底部外面を欠いている。底面部内面はナメト上げで作られる。他は横ナデで仕上げている。深めの体部に内緑する立上がりを作り、受部は立上がりの基部に川綱を置いて作っている。口縫部は摩滅が激しく丸くなってしまっている。	良 や や 灰	いい 良 色
須 壊 身 F	H-4EW VII	10.7 12.7 4.7 -	全体の1/2が残る。底部外面を欠いている。底面部内面はナメト上げで作られる。他は横ナデで仕上げている。深めの体部に内緑する立上がりを作り、受部は立上がりの基部に川綱を置いて作っている。口縫部は摩滅が激しく丸くなってしまっている。	良 や や 灰	いい 良 色

拂 図 番号 写真版面	登録番号	法量cm 口 径 深 度 器 高 底	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 焼 成 色
器種・形態・時期	出 土 位 置			成 績
176 -13 須 环身 F	6-3371 ハ-7E VIbc	10.5 12.8 4.4 -	全体の1/2が残る。底部外面の1/2が削りされ、印の跡記号がある。底部内面にはナデ痕が残る。他是横ナデで仕上げている。立上がりが付き、受部は体部の延長を丸めて作っている。体部外面上に灰釉状のフキダシ軸がかかっている。焼成は良く、断面は茶色に焼かれている。	良 良 暗 灰
177 -13 須 环身 F	6-3360-1 ハ-7E VIIa	7 12.2 ?	全体の1/2が残る。底部外面の1/2は削りされ、内面には内当て痕が残っている。他の横ナデで仕上げている。立上がりが欠損している。受部は横に引出され作られた跡、しっかりとしたものではない。やや腰の張った体部を持つ器形である。	良 良 暗 灰
178 -13 須 环身 F	6-3346-3 ハ-4E VIc	19.0 13.2 6.4	全体の2/3程度が残る。底部外面の1/2が削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から受部にかけて、茎を描く体部に、内側する薄めの立上がりが作られる。受部は、立上がりが基部に露描きの沈線を置いて作っている。受部上面に付いたフキダシ軸から、杯蓋を重ねて焼成したことが知られる。	粗 良 暗 灰
179 -13 須 环身 F	6-3375-1 ハ-4W VIbc	10.9 13.0	全体の1/3が残る。底部外面の1/2が削りされ、底部内面はナデマワシで調整している。弧を描く体部に内側する立上がりが付く器形になる。受部は立上がりが基部に露描きの沈線で画して作っている。口唇部の摩滅は著しく、平面面を作っている。受部の上面には自然輪がかかる。	良 や や 灰
180 -13 須 环身 F	6-3173-4 ハ-4EW VII	10.1 12.1 4.4	完形品。底部外面は削りされ、印の跡記号が付されている。底部内面に内当て痕を残したナデ痕がある。他是横ナデで仕上げる。ほぼ平らな底部から、斜め上に開く体部の先を内側にして、立上がり部を作る。口唇部内側は摩滅し、内面には焦茶色の炭化物が付着する。	良 や や 灰
181 -13 須 环身 F	6-3269-1 ハ-4E VII	9.6 12.0 4.2 -	全体の1/2が残る。底部外面の1/3を削りしている。底部内面にはナデマワシ痕がある。他是横ナデで仕上げている。半球形の体部に内側する低い立上がりが付き、受部は立上がりとの境にV字形の沈線を置いて作っている。二次火力によるもののか内面は茶色で外面は灰褐色になっている。	や や 不 灰
182 -13 須 环身 F	6-3274-4 ハ-4E VII	10.1 12.9 4.3 -	1/8を欠くが、ほぼ完形。底部外面は削り、他は横ナデで仕上げしている。底部内面には内当て痕が残っている。体部は底部から直線的に立ち上がって、受部と続く。受部は立上がりとの境にV字形の沈線を置いて作っている。立上がり部は、外壁に内側し低い。体部の外面は使用による摩滅が著しい。	や や や 不 灰
183 -13 須 环身 F	6-3321 ハ-4W VIIb	10.3 12.6 3.3 -	完形品。底部は切離したままで未調査。底部内面にはナデ痕があり、他は横ナデで仕上げている。厚めの底部から受部と強を描いて描く体部に、水平に近くまで内側した立上がり部が付く。立上がり部と受部は露描きの沈線で画している。内面には茶色の炭化物が付着し、外面には煤が付着している部分もある。	や や 良 黑
184 -14 須 高环 E	6-3407-2 ハ-5E VIc	- -	环部の大半を欠いている。脚垢が「の」字に開く脚で、脚の先端は外傾する壺面を作っている。透かしは方形で、2方向2段透かしに作っている。全体が横ナデで仕上げられている。环部の底、脚部の外面上に自然輪が付着している部分がある。脚部内面には自然焼きの織物痕がある。	や や 良 灰
185 -14 須 高环 F	6-3394-1 ハ-5E VIab	- 10.8	环部を欠いている。脚は全体が横ナデで器面を調整しているが、内面上半には整形成のソリメが残る。脚は中ほどに2条の沈線を置き、脚部にかけてラップ状に開き、口唇部はやや肥厚させた舟形を作っている。外面上には斑点状に自然輪がかかり、焼成時の敷台（窯床？）も融着している。	や や 良 灰
186 -14 須 高环 F	6-3436-1 ハ-5W VIIa	- 10.5	环部をよく高环の脚。全体が横ナデで仕上げている。円筒形の脚が、脚部でラップ状に大きく開く。外面上には2条の沈線が付され、横棒状の自然輪がかかっている。	や や 良 灰
187 -14 須 短頸出付	6-3322-1 ハ-4W VIb	10.8 4.4 -	全体の1/2が残る。底部は鉛垂型削りで調整されているが、中心部分には切離し痕を残し未調査。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、直立する口縁部の付く器形になる。口縁部は内側に段を作り、玉転状になる。内面と肩部外面上に白色のフキダシ軸があり、火焔れや焼き歪みもある。	や や 良 暗 灰
188 -14 須 旗 F	6-3394-3 ハ-5E VIab	6.2 - -	口縁部が残り、体部を欠いている。全体が横ナデで仕上げている。先のやや開く円筒形口縁部先端の内面に沈線が置かれ口縁部を丸く作っている。内面と外面上の一部にフキダシ軸がかかっている。欠損している具合から、半瓶の口縁部であろう。	良 良 白 灰
189 -14 須 横瓶 F	6-3420-2 ハ-5E VIIc	16.02 - -	口縁部と体部の大半を欠いている。全体が横ナデで仕上げている。頸部には2条の沈線が置かれれる。頸部内面と体部外面上に線輪状の自然輪がかかっている。	良 良 灰
190 -14 須 环 茅 G	6-3388-2 ハ-5W VIIa	11.2 4.5 -	全体の1/4が残る。天井部外面が削りされ、大井部には内当て痕が残る。他は横ナデで仕上げている。体部下半に低い梗を作り口縁部を凸く作っている。半球形の形で、口内面を丸く作っている。口内面と大井部外面の削りの界線はウナメの摩滅が進んでいる。二次火力によるもののか、内面はクリーム色で外面上は灰褐色。	良 不 灰 褐

種 名 番号 写真図版	登 録 番 号	法 量 cm 口 徑 深 度 後 脣 器 底	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴	胎 燒 色 七 成 調	
				後 脣 器 底	胎 燒 色 七 成 調
器種・形態・時期					
191 -14	6-3407-5	11.0 11.3 4.6 -	ほぼ完品。天井部外面は鋸削りされるが、頂部は切離しの後にナデ仕上げしている。他の横ナデで仕上げている。体部下半に低い縫を作つて口縫部を歯していいる。体部から続く口縫部をやや内彎させる器形である。体部外面には白色のフキダシ軸がかかり、内面には茶色の炭化物が付着する。内面は黒茶色、断面は茶色。	や 良 暗 灰	や 相 い 色
須 环 蓋 G	ハ-5E VIIc				
192 -14	6-3458	11.2 - 4.6 -	全体の1/2が残る。天井部外面が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部下半に、低い縫を作り口縫部を歯している。口縫部の先端をやや屈曲させ、口唇部を丸く作っている。全体に厚手の作りになっている。	良 良 暗 灰	い い 色
須 环 蓋 G	ハ-6E VIIa				
193 -14	6-3367-2	11.5 - 4.7 -	体部の1/2が残る。天井部外面は鋸削りされるが、頂部分には切離し痕が残っている。他の横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて続く体部の下半に、沈縫を引いて口縫部を歯しているが、口縫部は屈曲せず口唇部に続く。大井部には横筋状の付着物がある。	粗 や 暗 灰	い 良 色
須 环 蓋 G	ハ-7W VIab				
194 -14	6-3367-1	11.6 12.0 4.4 -	全体の1/3が残る。天井部外面が鋸削りされるが、頂部に切離し痕が残る。他の横ナデで仕上げている。体部下半に低い縫を作り口縫部を歯している。半球形の器形で、口縫部はやや内彎し、口唇部は軽い咀面を作っている。	良 良 暗 灰	い い 色
須 环 蓋 G	ハ-7W VIab				
195 -14 -12	6-3401-2	11.0 11.1 4.8 -	ほぼ完品。大井部外面が鋸削りされるが、頂部には切離し痕が残される。他の横ナデで仕上げている。体部下半に低い縫を作つて口縫部との境にしている。口縫部、内外面の鋸削りの界線、ノタメの凸部の摩滅が著しい。器壁は瓦色に焼き上げているが、断面は白灰色をしている。	良 不 黒	い 良 色
須 环 蓋 G	ハ-5E VIIbc				
196 -14 -12	6-3406	10.4 10.6 4.2 -	口縫部の1/4を欠く。天井部外面が鋸削りされ、大井部には内当て痕を消したナデ痕がある。他の横ナデで仕上げている。体部下半に低い縫を作つて口縫部を歯している。口縫部は内彎気味を作り、口唇部は丸く作っている。体部外面にフキダシ軸がかっている。	や 普 灰	や 粗 通 色
須 环 蓋 G	ハ-5E VIIc				
197 -14	6-3355-2	12.0 - 4.7 -	全体としては1/2が残る。天井部外面の1/3が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げている。体部下半に踏抜きの沈縫を置いて口縫部と体部を歯している。口縫部内側にも凹線状の沈縫があり、口唇部を玉縫状に作っている。器形的には、偏平な半球形で口縫部が内彎気味の体部になっている。内面は暗茶灰色となっている。	粗 良 晴 灰	い い 色
須 环 蓋 G	ハ-4W VIIc				
198 -14 -12	6-3413	11.0 11.3 ? -	ほぼ完品。大井部外面が欠損しているが、鋸削りされ、頂を平らに作つてあると推定される。器形外面には確に異なる不定方向のナデ痕が認められる。偏平な半球形の体部下半に、沈縫を置いて口縫部を歯し、先端をやや屈曲させて口唇部を丸く作り出している。	良 や 灰	い 良 色
須 环 蓋 G	ハ-5E VIIc				
199 -14 -12	6-3427	11.1 11.5 4.5 -	完品。大井部外面は、鋸削りされ、ほぼ半らに作っている。天井部にはナデ痕が残り、他の横ナデで仕上げている。器形は台形状で口縫部の先端を、やや内彎させている。体部下半には浅い沈縫を置いて体部と口縫部を歯している。外面上には白い斑点状のフキダシ軸がかかり、炭化物が外側面に付着している。	良 普 暗 灰	い 通 色
須 环 蓋 G	ハ-5W VIIa				
200 -14	6-3446-2	10.6 10.8 4.3 -	全体の1/2程度が残る。天井部外面が鋸削りされ、他の横ナデで仕上げられる。体部下半に、ごく浅い沈縫を置いて口縫部と体部を歯しているが、口縫部を屈曲させてはいない。口縫部内側と、器形外面の器壁の凸部に、摩滅が進んでいる。内面全体に炭化物が付着している。	粗 や 暗 灰	い 良 色
須 环 蓋 G	ハ-5W VIIb				
201 -14	6-3330-1	10.7 - 4.2 -	全体としては1/2が残る。天井部外面の2/3が鋸削りされ、頂部分は半らに作つてある。天井部には内当て痕が残り、他の横ナデ仕上げ。半球形の体部下半に浅い沈縫を置いて口縫部と体部を歯している。口縫部内側にも沈縫があり口唇部を玉縫状に作る。内面には茶色の炭化物が付着し、口唇部内側に摩滅が著しい。	良 や 白 灰	い 良 色
須 环 蓋 G	ハ-4E VIIb				
202 -14 -12	6-3172	10.8 - 4.3 -	全体の3/4が残る。天井部外面の1/2が鋸削りされる。器高は高く半球形で口縫部まで続く。口縫部と体部は沈縫で画すだけで、屈曲したり、段を作つたりせず、口唇部は丸く作る。天井部外面には印の差記号が付されている。	や や 暗 灰	粗 い 色
須 环 蓋 G	ハ-4EW VII				
203 -14	6-3471-2	11.0 - 4.4 -	全体の1/2が残る。天井部の外面が鋸削りされ、天井部に内当て痕が残っている。他の横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の下半に浅い沈縫を置いて口縫部を歯している。口縫部はやや内彎させ口唇部を丸く作っている。体部から口縫部にかけての外面上に白色自然軸がかかっている。	良 良 灰 -	い い 色
須 现 蓋 G	ハ-6E VIIbc				
204 -14	6-3261-2	10.9 - 3.8 -	全体の2/3が残る。大井部外面の1/3が鋸削りされ、頂は平らにしている。天井部内面には内当て痕が残る。他の横ナデで仕上げている。体部下半で屈曲し、屈曲部の外面には浅い沈縫を置いて、口縫部と体部を歯している。体部外面には黄色のフキダシ軸がかかっている。	良 良 黑 灰	い 好 色
須 现 蓋 G	ハ-4E VII				
205 -14	6-3407-1	10.8 12.7 3.3 -	全体の1/4が残っている。天井部外面はやや難い鋸削りで、頂部には切離し痕が残る。他の横ナデで仕上げている。大井が平らな台形状の器形で、体部下半に沈縫を置いて口縫部を歯している。口縫部内側を凹線状にして、口唇部を丸く玉縫状に作つてある。天井部外面に木本科植物の茎の圧痕が付いている。	良 不 灰 褐	い 良 色
須 现 蓋 G	ハ-5E VIIc				

押 国 番号 写真版	登録番号	法量cm 口 銅 器 高 度	枝 法・調 整 等 の 特 徴		駆 使 色	土 成 調
			出上位	底		
206 - 14	6-3435-3	11.5 4.7	全体の1/2が残る。大井部外面は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。台形状の体部の先端を、直立して屈曲させ、口縫部を作っている。屈曲部分には口縫部を置いて体部と口縫部を向している。口縫部内側にも口縫部を置き口唇部を丸く作っている。外面にはフォタシ輪がかかり、焼成は良く断面は茶色をしている。		や 良 暗	や 粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-5W W					
207 - 14 - 12	6-3401-1	10.6 10.9 4.2	全体の3/4が残っている。天井部外面が、箇削りされるが、頂部分には切離し痕が残っている。天井部には内当て痕が残る。他は横ナデで仕上げている。体部の先端を直立気味に屈曲させて口縫部を作っている。屈曲部には浅い条線を置いている。器形的には台形が近くなり、外面には白色のフジダシ輪がかかっている。		善 善 暗	通 透 色
須 壊 盖 G	ハ-5E Wbc					
208 14 - 12	6-3446-1	10.1 3.9	全体の3/4程度が残る。天井部外面の1/3が箇削りされ、頂部分は切離し痕が残っている。天井部には内当て痕が残る。他は横ナデで仕上げている。扁平な半球形の体部の先端をやや屈曲させ、口縫部としている。屈曲部に口縫部を置いて口縫部と体部を画している。焼成は良く、断面は茶色。		良 良 暗	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-5W Wb					
209 - 14 - 12	6-3431-1	9.8 10.0 3.8	完形成。天井部外面は、箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。体部の下間に口縫部を置いて直立気味の口唇部を作り、口径が小さな割りには肩の張った体部である。内外共に火照れがあり、灰釉状の自然釉が外面にかかっている。口唇部内側が摩滅している。		良 良 灰	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-5W Wta					
210 - 14	6-3435-2	10.6 4.4 -	全体の1/2が残る。大井部外面は箇削りされるが、頂部分は切離し痕が残り未調整。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、先端を直立気味に屈曲させて口縫部を作っている。腰の部分に浅い口縫部を置いて口縫部と体部を向している。体部外面には灰釉状の白自然釉がかかり、天井部外面には摩滅が進んでいる。		粗 良 暗	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-5W Wta					
211 - 14	6-3425-1	9.9 10.0 4.3 -	全体としては1/2が残る。天井部外面は不定方向に静止箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。体部下間に浅い口縫部を置いて口縫部と体部を画している。扁平な半球形で口縫部が内唇気味の体部になり、口唇部は丸く作っている。内面には、白色の自然釉がかかっている。		や 良 暗	粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-5W Wbc					
212 - 14	6-3469	11.2 - 4.5 -	全体の1/2が残る。天井部外面は箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の下間に低い稜を作り口縫部と画している。口縫部の先を内外側から強く横ナデして口縫部を丸く作っている。体部外面に灰釉状の自然釉がかかっている。		や 良 暗	粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-6E Wbc					
213 - 14	6-3375-3	10.7 3.9 -	全体の1/2が残る。天井部外面の2/3が箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部で、腰の浅い口縫部を置いて口縫部と画している。口縫部先端の内側にも口縫線の沈縫があり、口唇部を玉縫線に作っている。箇削りの界線にあたる部分(天井部)の摩滅が著しい。内面には暗茶色の炭化物が付着している。		粗 や 白	い 良 色
須 壊 盖 G	ハ-6E Wbc					
214 - 14	6-3317-1	10.3 3.8 -	口縫部の一部を欠くが、ほぼ完形成。天井部は箇の切離し痕を残したままで、未調整。他は横ナデで仕上げている。半球形の器形で体部下に2条の沈縫がある。口唇部や外側の内部に摩滅が進んでいる。内面には茶色の炭化物が付着し、外側の半分には斑点状の白色自然釉がかかっている。		や 良 暗	粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-4W Wb					
215 14 - 12	6-3268-1	11.1 11.4 3.9 -	全体の2/3が残る。天井部外面を箇削りし、頂は平らに作っている。他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて続く体部の下に、箇引き沈縫を置いて口縫部と体部とを画している。口縫部は少し口縫し、先端を肥厚して丸く終わる。体部外面には白い斑点状のフジダシ輪がかかっている。		や 良 暗	粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-4E Wb					
216 - 14	6-3467 1	11.4 - 4.4 -	口縫部の一部を欠くが完形成。天井部外面は箇削りで、他は横ナデで仕上げ。偏平な半球形の体部が、そのままで口縫部に接続して、体部と口縫部の境は判然としない。口唇部のやや上方を、強く横ナデし口縫部を丸く作り出している。大井部が厚く体部を薄く作っている。		良 良 暗	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-6E Wbc					
217 - 14 - 12	6-3407-6	10.9 4.2 -	全体の1/2が残る。天井部外面が箇削りされ、頂部分は不定方向の切離し痕が残る。内面にはナデマワシで表面調整している。他は横ナデで仕上げる。偏平な半球形の体部の先端を、直立気味にして口縫部としている。体部外面に灰釉状の自然釉がかかっている。内面は灰褐色。断面は茶色。外面は黒灰色。		良 良 黑	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-5E Wlc					
218 - 14 - 12	6-3362	11.0 11.3 4.4 -	全体の3/4が残る。天井部外面が、箇削りされ、頂部を平らに作っている。他は横ナデで仕上げている。底部から続く体部の先を、やや屈曲気味にして口縫部を作っているが、大きな屈曲ではない。内唇気味の口縫部で口縫部は軽く面を作っている。内外共に器壁に暗茶色の炭化物が付着している。		や 良 灰	粗 い 色
須 壊 盖 G	ハ-7E Wta					
219 14	7-3016	10.5 - 3.9 -	全体の1/2が残る。天井部外面は削り船の広い箇削りで調整され、頂部を平らにしている。大井部には内当て痕が残っている。偏平な半球形の体部は先端部を少し屈曲気味にして口縫部としている。口縫部内側は浅い沈縫を置いて、口縫部を丸く作っている。口縫部外面に白自然釉がかかる部分がある。		良 良 灰	い い 色
須 壊 盖 G	ハ 5 VII					
220 - 14	6-3460-1	10.6 4.3 -	全体の1/2が残る。天井部外面が箇削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の先をやや屈曲させて、口縫部を作っている。屈曲部はノタメの凸部と重なる低い稜のように作り出されている。全体に薄手の作りで口縫部は丸く作っている。		良 良 暗	い い 色
須 壊 盖 G	ハ-6E Wta					

種 国 番号 写真図版	登 録 番 号	法 墓 cm 口 径 銅 器 底	技 法・調 整 等 の 特 徴	土 燒 成 色
器種・形態・時期	出 土 位 置			
須 壱 盖 G	6-3278 ハ-4E VII	11.8 - 4.8 -	全体の3/4が残る。天井部外面が鏝削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、口縁部をやや直立気味に作る器形になっている。口縁部内側に軽い沈線を置き、先端部を丸く肥厚させている。全般的に厚手の作り。	粗 良 灰 灰 いい 色
須 壱 盖 G	6-3407-7 ハ-5E VIIc	11.4 - 5.0 -	全体の1/3が残る。天井部外面の2/3は鏝削りされ、頂部には切離し痕が残り、天井部には内当て脛が残る。他は横ナデで仕上げている。半球形の器形で口縁部と体部を画するものはない。口唇部は内傾し、摩滅が激しい。	粗 や 良 灰 や 不 良 色
須 壱 盖 G	6-3448-3 ハ-5W VIIbc	10.2 - 4.4 -	全体の1/4が残る。天井部外面が鏝削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の先端を、やや屈曲させて口縁部を作っている。口縁部内側には浅い沈線を置き、口唇部を薄く作っている。焼成は良く、断山が茶色になって焼き締まっている。全般的に薄手の作りになっている。	良 良 灰 茶 いい 色
須 壱 盖 G	6-3407-8 ハ-5E VIIc	11.8 12.0 3.5 -	全体の1/3が残る。天井部外面の1/2が鏝削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から続く体部の先端を、内側に屈曲させて、口縁部としている浅めの杯臺になる。体部外面にはフタダシ痕がかかっている。全般的に作りが粗い。	や 良 灰 灰 粗 い 色
須 壱 盖 G	6-3418 ハ-5E VIIc	11.2 - 4.1 -	完形成。天井部外面が、一回の割り輪の広い、施削りで整形されている。他の部分は横ナデで仕上げている。偏半的な半球形の体部の先端を、やや屈曲させて口縁部を作っている。全体に厚手の作りで口唇部を丸く作っている。	や 良 灰 灰 や 粗 い 色
須 壱 盖 G	6-3448-2 ハ-5W VIIb	10.9 11.4 4.4 -	全体の1/2が残る。天井部外面が鏝削りされ、底部内面には、内当て脣がある。他は横ナデで仕上げている。偏半的な半球形の体部の先端をやや屈曲させて口縁部を作り出している。全体に厚手の作りになっている。胎土は良いが、灰色と白灰色の斑になっている。	良 や 良 灰 や 不 良 色
須 壱 盖 G	6-3268-2 ハ-4E VII	10.8 11.0 - -	全体の1/2が残る。天井部外面が鏝削りされるが、中心部分には切離し痕がそのまま残る。天井部内面は、ノマダワシ痕が残っている。他は横ナデで仕上げている。天井部から口縁部まで弧を描いて続く体部は、沈線を置いてたり、屈曲したりせず、偏半的な半球形になる。胎土には砂が目立つ。	や や 良 灰 粗 通 色
須 壱 盖 G	7-3015 ハ-5 VII	10.6 - 4.1 -	完形成。天井部外面は鏝削りされ、天井部はナデ仕上げている。天井部から続く体部の先をやや屈けて口縁部としている。全体に厚手で口唇部も丸く作っている。口唇部内側と体部外面の摩滅が進んでいる。体部外面の上半部に蝶状の炭化物が付着し、内面には暗茶色の炭化物が付着している。	や や 良 白 粗 良 色
須 壱 盖 G	6-3182-2 ハ-4W VII	10.7 - 3.9 -	完形成。底部外面は鏝削りされるが、使用による摩滅のため半滑になっている。底部内面には内当て脣が残されている。他は横ナデで仕上げている。天井部から口縁部まで弧を描いて続く器形である。内外面とも煤が付着し、二次火力による赤変もある。口唇部内側や器底の凸部は摩滅が著しい。	粗 不 良 灰 粗 不 良 色
須 壱 盖 G	6-3173-3 ハ-4EW VII	11.6 - 4.4 -	完形成。天井部は鏝削りされる。他は横ナデで仕上げている。やや平らに削られた天井部から口縁部に半球形である。口縁部を画する沈線も置かない。口唇部内側や、ノマダマレ削りの凸部の摩滅が口外血面に激しい。内面には炭化物が付着している。	良 や 良 灰 粗 良 色
須 壱 盖 G	6-3381-4 ハ-4W VIIc	11.5 - 4.1 -	全体の1/2程度が残る。天井部外面の1/2が鏝削りで、/印の箇記号が付されている。他は横ナデで仕上げている。器形的には、底部から口縁部に、半球形に統一され、途中で大きく屈曲したり、段を作りて口縁部とすることはない。焼き歪みが大きく、胎土には砂が多い。	粗 良 灰 粗 良 色
須 壱 盖 G	6-3375-5 ハ-4W VIIbc	9.8 10.2 3.8 -	全体の1/4が残る。天井部外面は、1/3が鏝削りされ、偏半的な器形が付けられている。天井部には、内当て脣かと思える圧痕が残っている。他は横ナデで仕上げている。偏半的な半球形に弧を描く体部の先端を、屈曲させて口縁部を作っている。外面部全体に白い斑点状のフタダシ痕がかかっている。焼成は良い。	良 良 灰 粗 良 色
須 壱 盖 G	6-3470 ハ-6E VIIbc	9.5 11.9 4.3 -	全体の1/2が残る。底部外面が鏝削りされるが、小穴部は切離し痕をそのまま残す。底部内面にはナデ痕が残っている。底部から弧を描いて続く体部に内傾する立上がりがあり、受部は立上がりとの境に鏝削り沈線を置いて作っている。口唇部内側は摩滅し、体部外面には灰斑状の自然釉が付着している。	良 良 灰 粗 良 色
須 壱 盖 G	7-3018 ハ-5 VII	9.6 11.6 4.5 -	全体の1/2程度が残る。底部外面が鏝削りされ、平面で作っている。他は横ナデで仕上げられる。逆台形状の体部に内傾する立上がりがあり、口唇部は丸く作っている。受部は立上がりとの境に鏝削り沈線を置いて作っている。底部内面に火焔れがある。	良 良 灰 粗 良 色
須 壱 盖 G	6-3410 ハ-5E VIIc	9.8 11.9 4.3 -	全体の3/4が残る。底部外面の1/2は鏝削りされ、中央には切離し痕が残る。底部内面にはナデ痕がある。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、外輪気味の薄い立上がりがあり、受部は立上がりとの境に鏝削り沈線を置いて作っている。内面には斑点状のフタダシ痕が薄くかかる。口唇部内側は摩滅している。	普 普 灰 通 色

押岡 番号 写真図版 器種・形態・時期	登録番号	法量cm 口 径 胸 器 高 底	技法・調整等の特徴	胎土成色	
				胎 燒 色	土 成 調
236 -15 須坏身G	6-3420-4 ハ-5E VIIc	9.2 11.5 3.5 -	体部の1/2が残る。底部外面は鋭削りされ、平底に作るが、中心部は切離し痕が残る。他は横ナデで仕上げされている。逆台形に近い体部に、外彎する低い立上がりが付き、立上がりとの境に窪掘き沈線を置いて受部を作っている。体部外面には斑点状のフキダシ軸が全体にかかっている。焼成はよく、断面は茶色になる。	良 良 黒	いい 色 灰
237 -15 須坏身G	6-3383-1 ハ-4W VIIc	8.9 10.6 3.7 -	完形品。底部外面の1/3が鋭削りされ、他は横ナデで仕上げている。ほぼ逆台形の体部の先端、内側に少し内傾させ受部としている。立上がりは、受部との境に窪掘き沈線を入れて、内傾する低く薄い作りになっている。	良 や や 灰	いい 色 灰
238 -15 須坏身G	6-3367-4 ハ-TW VIIab	9.5 11.2 3.9 -	全体の1/2が残る。底部外面は鋭削りされ、底部を平らに作っている。内面には内当て痕とナデ痕が残る。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、内傾する爪形の立上がりが付く。受部は立上がりとの境に窪掘き沈線を置いて作っている。	良 良 暗	いい 色 灰
239 15 須坏身G	6-3138-1 ハ-5W VIIb	8.8 10.6 3.6 -	全体の1/2が残る。底部外面が鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、内傾する立上がりが付く。受部は、立上がりと窓を窪掘きの沈線を引いて作り、あまり高くはない。体部外面にフキダシ軸がかかる。	良 良 暗	いい 色 灰
240 -15 須坏身G	6-3383-3 ハ-4W VIIc	8.2 12.3 3.5 -	完形品。底部外面が鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、内傾する低い立上がりが付く。受部は、立上がりとの境を窪掘きの沈線を引いて作り。窓が悪く、外面は瓦色で内面はクリーム色に近い灰色。	粗 不 黑	いい 色 灰
241 15 須坏身G	6-3407-4 ハ-5E VIIc	9.8 12.0 4.5 -	体部と口縁部の1/4が残る。底部外面は鋭削りされ、平底に作られた底面に印の施記号が付してある。底部内部にはナデの痕跡がある。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、やや外彎性の立上がりが付く、受部は立上がりの基部に窪掘きの沈線(川線)を置いて作っている。口唇部内側が摩滅している。	良 普 黑	い 通 色 灰
242 -15 須坏身G	6-3411 ハ-5E VIIc	10.1 12.4 3.7 -	体部と口縫部の1/4が残る。底部外面は鋭削りされ、中心部には切離し痕が残る。底部内部には内当て痕が残り、他は横ナデで仕上げている。やや腰の張る偏平な内傾する立上がりが付く。受部は立上がりと窓に、沈線を置いて作っている。口唇部内側は摩滅が著しい。底部外面には印の施記号がある。	や や 不 茶	い 良 色 灰
243 -15 須坏身G	6-3459-1 ハ-6E VIIa	9.8 12.0 3.4 -	口縫部の3/4を欠く。底部外面が鋭削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描く体部の先端に、内傾する立上がりを作り、受部は体部の延長を丸く引山して作っている。浅い作りの器形である。	良 や や 不 灰	い 良 色 灰
244 15 須坏身G	6-3370 ハ-7E VIIbc	9.5 11.8 3.9 -	全体の2/3が残る。底部外面が鋭削りされ、平底に作っている。他は横ナデで仕上げられている。半球形の体部の先に内傾する立上がりが付く、受部は立上がりとの境に窪掘きの沈線を置いて作られている。体部外面にはノタメの凹凸が残らない。口唇部内側は摩滅が進んでいる。内面は褐色灰色。	や や 良 灰	粗 い 色 灰
245 -15 須坏身G	7-3012 ハ-5 VII	9.0 11.3 3.5 -	完形品。底部外面の1/2が鋭削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、内傾するしっかりした立上がりが作られ、口唇部は丸く作っている。受部は立上がりとの境に細い凹線を置いて作っている。口唇部の摩滅が進んでおり、内外面に炭化物が付着している。	や 良 灰	粗 い 色 灰
246 -15 須坏身G	6-3382-1 ハ-4W VIIc	9.6 11.6 3.9 -	全体の2/3が残る。底部外面が鋭削りで、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に、先端を外反気味に丸くした立上がりをしっかり作っている。受部は、立上がり基部に幅の狭い凹線を置いて作っている。口唇部内側と、外の凸部(ノタメや鋭削りの界線)は摩滅が激しい。内面には茶色の炭化物が付着している。	粗 や や 不 灰	い 良 色 灰
247 -15 須坏身G	6-3261-7 ハ-4E VII	9.8 11.9 - -	全体の1/3が残る。底部外面は鋭削り(切離し)され、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾気味の低い立上がりが付く。受部は立上がりとの境に窪掘き沈線を置いて作っている。口唇部は丸く作り、ノタメの凹凸は無い。	や や 粗 黑	い 通 色 茶 灰
248 -15 須坏身G	6-3420-3 ハ-5E VIIc	9.4 11.0 3.9 -	全体の1/2が残る。底部外面が鋭削りされ、底面は平らに作っている。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に内傾する立上がりが付く。受部は立上がりとの境に窪掘き沈線を置いて作っている。体部外面にはフキダシ軸がかかる。	粗 良 暗	いい 色 灰
249 -15 須坏身G	6-3437 ハ-5W VIIb	8.7 10.7 3.5 -	完形品。底部外面が鋭削りされ、底部内部には、内当て痕と印の施記号がある。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、外彎気味で薄く低めの立上がりが付けられる。全体に薄手の作りになっている。受部下方の外面にフキダシ軸がかかる。	や 良 暗	粗 い 色 灰
250 -15 須坏身G	6-3395 ハ-5E VIIab	9.9 11.9 4.1 -	全体の3/4が残る。底部外面は、鋭削りされ、底部内部にはナデ痕がある。他は横ナデで仕上げる。偏平な半球形の体部に、内傾する立上がりが付く。口唇部と、外部外面の摩滅が著しく、器壁の調整法が定かではない。二次火力によるためか、暗茶色になっている。	粗 不 黑	い 良 色 茶

辨 別 番 号	登 録 番 号	法 量 cm	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 土 成 形 色
			上 口 徑 度	底 部 高 度	
写真同版 器物・形態・時期					
251	-15 -13	6-3366	9.2 11.5 4.1 -	完形品。底部外面は鏡削りされ平底に作り、印の認記号が付されている。底部内面にはナデ痕があり、受部は横ナデで仕上げられている。偏平な半球形の体部に、内傾する立上がりが付けられる。受部は立上がりの基部に施描きの沈線を置いてしっかりと作られる。口唇部の内面は摩滅している。	や 良 灰 灰
須	环身G	ハ-7W VIIa	9.3 11.6 4.1 -	全体の1/2が残る。底部外面上には切削し痕がそのまま残る。平底気味で開いて立上がりする体部に内傾する立上がりが付けられる。受部は立上がりの基部に、浅いV字形の沈線を置いて作っている。体部の外面上には、フキダシ跡が付着している。	粗 音 黑 灰
252	-15	6-3269-4	9.3 11.6 4.1 -	全体の1/2が残る。底部外面上には切削し痕がそのまま残る。平底気味で開いて立上がりする体部に内傾する立上がりが付けられる。受部は立上がりの基部に、浅いV字形の沈線を置いて作っている。体部の外面上には、フキダシ跡が付着している。	粗 音 黑 灰
須	环身G	ハ-4E VII	8.9 10.9 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、中心部は切削し痕が残している。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾する受部を作り、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて作っている。体部内面には炭化物が付着し、外面上には自然剥がれがかかる。口唇部の摩滅が進んでいる。	や 良 暗 灰
253	-15 -13	7-3011	8.9 10.9 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、中心部は切削し痕が残している。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾する受部を作り、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて作っている。体部内面には炭化物が付着し、外面上には自然剥がれがかかる。口唇部の摩滅が進んでいる。	や 良 暗 灰
須	环身G	ハ-5 VII	8.9 10.9 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、中心部は切削し痕が残している。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾する受部を作り、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて作っている。体部内面には炭化物が付着し、外面上には自然剥がれがかかる。口唇部の摩滅が進んでいる。	良 音 黑 灰
254	-15	6-3407-3	9.5 11.0 4.1 -	全体の1/2を欠いている。底部外面上には鏡削りされ、平底に作っている。底部内面にはナデマワシで器面を整えている。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に内傾する立上がりが付し、受部は立上がりの基部に施描き沈線を置いて作っている。	粗 音 黑 灰
須	环身G	ハ-5E VIIc	9.1 10.6 -	全体の1/2が残る。底部外面上の1/2が鏡削りされ、印の認記号がある。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾する立上がりが付く。受部は、立上がりと座部との境と、座によるVの字形の沈線で画して作っている。全体に薄手の作りで、胎土には砂が多い。	粗 良 灰 灰
255	-15 -13	6-3306	9.1 10.6 -	全体の1/2が残る。底部外面上の1/2が鏡削りされ、印の認記号がある。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に内傾する立上がりが付く。受部は立上がりと座部との境と、座によるVの字形の沈線で画して作っている。全体に薄手の作りで、胎土には砂が多い。	粗 良 灰 灰
須	环身G	ハ-4E VIIb	9.2 11.6 3.1 -	全体の2/3が残る。底部は鏡削りで平らに削っている。底部内面にはナデマワシで器面を整えている。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部に、大きく内傾する立上がりが付かれて、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。立上がりの基部に施描き沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。燒き歪みがある。	良 良 青 灰
256	-15 -13	6-3349-4	9.2 11.6 3.1 -	全体の2/3が残る。底部は鏡削りで平らに削っている。底部内面にはナデマワシで器面を整えている。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部に、大きく内傾する立上がりが付かれて、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。立上がりの基部に施描き沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。燒き歪みがある。	良 良 青 灰
須	环身G	ハ-4E VIIc	9.2 11.6 3.1 -	全体の2/3が残る。底部は鏡削りで平らに削っている。底部内面にはナデマワシで器面を整えている。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部に、大きく内傾する立上がりが付かれて、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。立上がりの基部に施描き沈線を置いて、受部と内側で立上がりが付いている。燒き歪みがある。	良 良 青 灰
257	-15 -14	7-3010	9.8 11.7 3.2 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、平底に作っている。底部から弧を描く体部に、三角の爪形の低い立上がりが付かれ、受部は立上がりとの境に施描きの沈線で画して作っている。口唇部内側や底部外面の摩滅が著しい。立上がりは受部より僅かしかりに山ない。体部の内外面に暗茶色の炭化物が付着している。	良 や 不 良 灰 灰
須	环身G	ハ-5 VII	9.8 11.7 3.2 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、平底に作っている。底部から弧を描く体部に、三角の爪形の低い立上がりが付かれ、受部は立上がりとの境に施描きの沈線で画して作っている。口唇部内側や底部外面の摩滅が著しい。立上がりは受部より僅かしかりに山ない。体部の内外面に暗茶色の炭化物が付着している。	良 や 不 良 灰 灰
258	-15 -14	7-3023	8.8 10.8 3.3 -	完形品。底部外面上は削り落しの深い削りで、鏡削りされ、底部は平らに作っている。底部内面には、内当と重複する。偏平な半球形の体部の先端に、内傾する爪形で低い立上がりが付く、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて作っている。体部外面上には炭化物のフキダシ跡がかかる。	良 良 灰 灰
須	环身G	ハ-7 VII	8.8 10.8 3.3 -	完形品。底部外面上は削り落しの深い削りで、鏡削りされ、底部は平らに作っている。底部内面には、内当と重複する。偏平な半球形の体部の先端に、内傾する爪形で低い立上がりが付く、受部は立上がりとの境に施描きの沈線を置いて作っている。体部外面上には炭化物のフキダシ跡がかかる。	良 良 灰 灰
259	-15 14	6-3433	10.2 11.7 3.7 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、底部は平らに作っている。底部内面にはナデ痕が残り、他は横ナデで仕上げている。外面には炭が付着している。逆台形状の体部の先端を、やや内凹させ立上がりを作るような器形である。受部は立上がり基部に、施描きの沈線を置いて作っている。燒き歪みがある。	良 良 灰 灰
須	环身G	ハ-5W VIIa	10.2 11.7 3.7 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、底部は平らに作っている。底部内面にはナデ痕が残り、他は横ナデで仕上げている。外面には炭が付着している。逆台形状の体部の先端を、やや内凹させ立上がりを作るような器形である。受部は立上がり基部に、施描きの沈線を置いて作っている。燒き歪みがある。	良 良 灰 灰
260	-15 14	6-3409	9.8 12.0 3.8 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、他は横ナデで仕上げられる。偏平な体部に外縁する低い立上がりが付され、受部は斜め上に引出されている。全体に薄手の作りである。	良 良 灰 灰
須	环身G	ハ-5E VIIc	9.8 12.0 3.8 -	完形品。底部外面上には鏡削りされ、他は横ナデで仕上げられる。偏平な体部に外縁する低い立上がりが付され、受部は斜め上に引出されている。全体に薄手の作りである。	良 良 灰 灰
261	-15 -14	6-3383-2	8.9 10.6 3.7 -	口唇部の一部を欠くが、ほぼ完形品。底部外面上の1/3が鏡削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、先端を外側に外反させて丸く作った立上がりが付く。受部は、立上がりとの境を凸縫合状にナメで作っている。口唇部内側と体部外側の凸部（タメや鏡削りの界線）が摩滅している。	や 良 音 黑 灰
須	环身G	ハ-4W VIIc	8.9 10.6 3.7 -	口唇部の一部を欠くが、ほぼ完形品。底部外面上の1/3が鏡削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、先端を外側に外反させて丸く作った立上がりが付く。受部は、立上がりとの境を凸縫合状にナメで作っている。口唇部内側と体部外側の凸部（タメや鏡削りの界線）が摩滅している。	や 良 音 黑 灰
262	-15 -14	6-3349-2	9.6 11.5 4.4 -	完形品。底部外面上の1/3が削りで、底部は平らに作っている。底部内面にはナデ痕を調整している。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部に、内傾する低い立上がりが付く器形になる。口唇部には使用による摩滅が著しい。	や や 不 良 灰 灰
須	环身G	ハ-4E VIIc	9.6 11.5 4.4 -	完形品。底部外面上の1/3が削りで、底部は平らに作っている。底部内面にはナデ痕を調整している。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部に、内傾する低い立上がりが付く器形になる。口唇部には使用による摩滅が著しい。	や や 不 良 灰 灰
263	15 -14	6-3429	8.9 10.6 3.4 -	完形品。底部外面上は、幅の広い削りで、底部は平らに作っている。偏平な体部の先端に、内傾する低い立上がりが付く器形になる。口唇部には使用による摩滅が著しい。	良 良 灰 灰
須	环身G	ハ-5W VIIa	8.9 10.6 3.4 -	完形品。底部外面上は、幅の広い削りで、底部は平らに作っている。偏平な体部の先端に、内傾する低い立上がりが付く器形になる。口唇部には使用による摩滅が著しい。	良 良 灰 灰
264	-15 -14	6-3430	8.2 10.2 3.7 -	完形品。底部外面上は、幅の広い削りで、底部は平らに作っている。中心部には切難し痕が残されている。底部内面は静止した痕が残されている。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、内傾する低い立上がりが付く器形を作っている。口唇部は摩滅している。	良 や 不 良 灰 灰
須	环身G	ハ-5W VIIa	8.2 10.2 3.7 -	完形品。底部外面上は、幅の広い削りで、底部は平らに作っている。中心部には切難し痕が残されている。底部内面は静止した痕が残されている。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、内傾する低い立上がりが付く器形を作っている。口唇部は摩滅している。	良 や 不 良 灰 灰
265	-15	6-3294-1	8.8 10.9 -	全体の1/3が残る。底部外面上の1/2が粗く鏡削りされ、中心部は切削し痕を残す。また、鏡削りの際の骨のシリが、ヒビ割れ状に残る。他は横ナデで仕上げている。全体に薄手の作りで、逆二角形状の体部に、内傾する立上がりが付く器形となる。受部と立上がりの部は、底の沈線を置いて作っている。	粗 音 黑 灰
須	环身G	ハ-4E VIIc	8.8 10.9 -	全体の1/3が残る。底部外面上の1/2が粗く鏡削りされ、中心部は切削し痕を残す。また、鏡削りの際の骨のシリが、ヒビ割れ状に残る。他は横ナデで仕上げている。全体に薄手の作りで、逆二角形状の体部に、内傾する立上がりが付く器形となる。受部と立上がりの部は、底の沈線を置いて作っている。	粗 音 黑 灰

番号 写真版 器種・形態・時期	登録番号 出土位置	法量cm 口径 深さ 器底 高さ	技法・調整等の特徴	胎 燒 色	土 成 調
266 -15 須 环身G	6-3329 ハ-4E VIIb	9.6 11.4 3.5	完全形品。底部外面は鋸削りされ、底部は一気の削りで平底にしている。底部内面には、内当て痕と思われる圧痕が残っている。他は横ナナデで仕上げる。器形的には、逆台形となる体部に、内傾した低めの立上がり部が作り出されている。立上がり部と受部は、鏽抜きのV字形沈線で彫されている。	良 良 暗	いい 色 灰
267 -15 須 短頸増G	6-3420-1 ハ-5E VIc	9.5 10.1 5.5 -	全体の2/3が残る。底部外面は鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。偏平な体部には、内当て痕と思われる圧痕を残す。器形よりつぼまつ立直するU縫部が付く器形となる。U縫部の内側には沈線が盛られ、口唇部を彫り込んで丸く作っている。胎上に砂が多く、白色粘土が線状に混じっている。	粗 普 暗	通 色 灰
268 -15 須 短頸増G	6-3285-2 ハ-4E VIIa	8.8 10.1 6.0 -	全体の1/2が残る。底部外面は鋸削りで仕上げ、平底に作っている。偏平な体部にはほぼ直立するU縫部の付く器形になる。脚部は肩部に浅い沈線を作っている。脚部内部と口縫部から肩部にかけての外面に、白色斑点のキダシ軸がかかる。U縫部と体底部面の摩滅が著しい。	普 良 灰	通 い 色 灰
269 -15 須 短頸増G	6-3460-3 ハ-6E VIIa	8.6 9.2 5.0 -	全体の1/3が残る。底部外面が鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。脚部に低い縁を作り、U縫部を彫いている。U縫部は外壁気味に立上がり、口唇部は丸く作られている。体部内面と、脚部外面に自然輪がかかっている。	良 良 暗	いい 色 灰
270 -15 須 短頸増G	6-3459-2 ハ-6E VIIa	8.2 9.4 4.7 -	全体の1/2が残る。底部外面は鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。偏平な体部に直立気味のU縫部が作られている。肩の張る器形でU縫部との境に縫を作っている。全体に薄手の作りだがシャープさは無い。	や 良 灰	粗 い 色 灰
271 -15 須 短頸増G	6-3460-2 ハ-6E VIIa	10.8 11.1 5.4 -	全体の1/2が残る。底部外面は鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。偏平な半球形の体部に、直立気味のU縫部が付く。肩部に低い縁を作って体部とU縫部を彫画している。U縫部の先端を強く横ナナデし口縫部を玉縁状に丸く作っている。内面には線輪状の、外面には灰輪状の自然輪がかかっている。	や 良 灰	粗 い 色 白
272 -15 須 短頸増G	6-3361 ハ-7E VIIa	8.1 8.7 4.2 -	全体の2/3が残る。底部外面が鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。肩の張る器形で直立するU縫部を持つ。底部が厚く、全体に粗い作りで、底部内面には火焔輪がある。U縫部の外側と、肩部外面、底部内面に自然輪がかかっている。	良 良 白	いい 色 灰
273 -15 須 短頸増G	6-3443 ハ-5W VIIb	14.7 15.1 7.1 -	ほぼ完形品。底部外面は、鋸削りでされ、中心部分は不定方向に静止鋸削りされている。他は横ナナデで仕上げる。偏平な半球形の体部に、低く直立するU縫部が付く。体部内面、U縫部内面、脚部外面に線輪状の自然輪が厚くかかっている。全体に厚手の作りになっている。	粗 良 茶	いい 色 灰
274 -16 須 高环G	6-3350-2 ハ-4E VIIc	17.4 -	全体の1/2が残っている。环底部外面の1/3が鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。环は偏平な半球形で、ノタメが顕著である。U縫部は三角に肥厚させ、口唇部は内傾する坦面を作っている。脚は、脚が大きく開き、中ほどに2条の浅い沈線を庭いている。环内面には線輪状の自然輪が厚くかかっている。	や 良 灰	粗 い 色 灰
275 -16 須 高环G	6-3462 ハ-6E VIIa	- - - 11.3	脚部の2/3が残り、环部を欠いている。脚は全体に横ナナデで仕上げている。脚はハの字に開き、脚輪は外傾する面を持ち断面が三角に作っている。环底部の内面と脚の外面には自然輪がかかっている。	良 良 灰	いい 色 灰
276 -16 須 高环G	6-3394-2 ハ-5E VIIab	- - - 14.8	脚部の上半を欠いている。全体は横ナナデで仕上げている。环底部の内面と、脚の上面に、自然輪がかかっている。円筒形の脚が下半部で大きく開き口唇部は直立する坦面を作っている。	や 良 灰	粗 い 色 灰
277 -16 須 高环G	6-3360-3 ハ-7E VIIa	- - - 10.5	环部を欠いている。环底部外面が鋸削りされ、他は横ナナデで仕上げている。脚はハの字に開き脚輪は断面三角に作り坦面を作って終わる。环底部内面と脚輪外面に自然輪がかかる。	や 良 灰	粗 い 色 灰
278 -16 須 脚付増G	7-2985-4 ハ-4 VII+VII	- - - 10.8	ハの字に開き脚の1/2が残る。全体は横ナナデで仕上げている。内面共に自然輪が付着している。高环、脚付増等の脚部だが上部の作りは不明。	良 良 灰	いい 色 灰
279 -16 須 高环G	6-3471-3 ハ-6E VIIbc	- - - 9.6	脚部の1/2と环部の上半を欠く。环底部外面は鋸削りされ、脚と接する部分にはナナツケ痕もある。脚は横ナナデで仕上げている。脚は大きハの字の開き、脚輪の口唇部は直立する坦面を作っている。环底部内面と脚の上面には自然輪がかかる。	良 良 灰	いい 色 灰
280 -16 須 短頸蓋G	6-3408 ハ-5E VIIc	13.2 16.0 13.3 -	全体の1/2が残る。底部外面が鋸削りで、内面はナナツケワシで調整し、他は横ナナデで仕上げている。肩部には沈線が配され、U縫部の先端は外壁気味になり、口唇部を丸くして玉縁状に作る。体部下半の外側に冠が付着し、底部には一次火力により窓壁がクリーム色に変わっている。底部と内面下半の摩滅が進んでいる。	や 普 灰	粗 通 色 灰

番号 写真図版 器種・形態・時期	押 図 登録番号	法量cm II 横 胸 器 底	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 燒 色	土 成 調
281 -16 須 罩 G	6-3399 ハ-5E VIIbc	- 16.0 -	口頭部を欠き、体部が残る。底部外面が鋸削りされるが、中央部には、切離し痕 が一部残っている。底部内面には、ナデマワシ痕が残る。他は横ナデで仕上げて いる。	良 良 灰	いい 色
282 -16 須 罩 G	6-3367-5 ハ-7W VIIab	22.5 - -	口縁部の1/2が残る。全体が横ナデで仕上げている。体部から屈曲して直線的に 開き、中ほどに縫を1条作っている。口唇部は外板する坦面を作っている。内外 面共に灰輪状の自然輪がかかっている。	良 良 黑 灰	いい 色
283 -16 須 罩 G	6-3343 ハ-4W VIIc	6.0 - -	口縁部を残して体部をなく。口縁部から頸部にかけて、横ナデで仕上げている。 口縁部の先端の横ナデは丁寧で、頸部に2条の沈継がある。口縁部の内外にフキ ダシ輪がかかる。体部との接合部で欠損しており、瓶頸の口頭部であろう。 胎上は良く、断面は灰色。	良 良 暗 灰	いい 色
284 -16 -14 須 壱 G	6-3382 ハ-4W VIIc	- 10.6 - -	頸部と口縁部を欠き、体部が残る。体部外面が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げ ている。肩の張った体部で、丸足に作っている。肩部には2本の沈継があり、こ の沈継の間に、横ナデ器具で連続刺穴が付されている。注口部は、やや突起させ て作られ、孔はやや上向き開けられている。肩部にはフキダシ輪がかかる。	相 良 暗 灰	いい 色
285 -16 須 壱 盒 H	6-3284-1 ハ-4E VIIa	9.4 - 3.6 -	全体の1/2が残る。天井部外面は鋸削りされるが、中央部分には切離し痕が残り、 ×印の施記号が付されている。他は横ナデで仕上げている。体部下部に沈継を置 いて体部と口縁部を画している。内面には焼化物が付着し、天井部には内当て幅 も残る。口唇部は摩滅が著しい。	良 や 白 灰	いい 良 色
286 -16 須 壱 盒 H	6-3457 ハ-6E VIIa	9.8 - 4.9 -	全体の2/3が残る。天井部外面が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球 形の体部下半に低い縁を作り出して口縁部と画している。口縁部の先端をやや薄 くし口唇部を丸く作っている。口唇部内側と、体部外面の器壁凸部の摩滅が激 しい。	や 以 灰	や 粗 い 色
287 -16 15 須 壱 盒 H	6-3274-1 ハ-4E VII	9.7 3.7 - -	ほぼ完形品。天井部外面が鋸削りされ、/印の施記号が付されている。他は横ナ デで仕上げている。腰の部分に浅い沈継を置いて口縁部と体部を画している。口 縁部は直立気味で、口唇部は丸く作っている。体部の外面には重ね焼きした土器 片が附着し、自然輪がかかる黒灰色の光沢がある。	や 以 灰 灰	や 粗 い 色
288 -16 -15 須 壱 盒 H	6-3400 ハ-5E VIIbc	9.8 - 3.8 -	完形品。天井部外面が鋸削りされるが、天井部と天井御側面の削りをそれぞれ1 回で仕上げている。頂部分は切離し痕が残る。天井部には内当て幅が残っている。 他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の先端を、やや内凹させて沈継を置いて 口縁部を作っている。口唇部は丸くされ、摩滅が著しい。	良 以 黑 灰	いい 色
289 -16 -15 須 壱 盒 H	6-3323-1 ハ 4W VIIb	9.0 - 3.6 -	全体の1/2が残る。天井部外面は1/3が鋸削りされる。他は横ナデで仕上げてい る。器形的には半球形で、体部下半に深い沈継を置いて口縁部と画している。 脚十と焼成も良く、断面は灰褐色になっている。小さいが比較的しつかりした作 りで口唇部は、坦面を作っている。	良 良 灰	いい 色
290 16 須 壱 盒 II	6 3284 2 ハ 4E VIIa	8.9 - 4.5 -	全体の1/2が残る。大井部外面は鋸削りされ、中心部は平らに作る。内面には全 体に自然輪があり、口縁部と体部を画している。外側の鋸削りした部分や、口 縁部の摩滅が著しい。	良 良 茶 灰	いい 色
291 -16 -15 須 壱 盒 H	6 3468 ハ-6E VIIbc	9.8 - 3.8 -	完形品。大井部外面は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。内面は輪整形後 にナデ仕上げしている。偏平な半球形の体部下半に踏抜きの沈継を置いて口縁部 と体部を画し、口縁部の内側にも沈継が置かれ、段を作って薄くなっている。体 部外面には灰輪状の自然輪がかかる。	や 良 暗 灰	や 粗 い 色
292 -16 須 壱 盒 H	6-3285-1 ハ-4E VIIa	9.3 - 4.3 -	全体の1/2が残る。天井部外面は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。他 の部分は横ナデで仕上げされる。体部下半には深い沈継を置いて口縁部と体部の境を作 っている。体部外面の鋸削りの界線やノタメの凸部等に摩滅が著しい。内面には白 筋輪が厚くかかっている。	や 良 灰 灰	や 粗 い 色
293 -16 須 壱 盒 H	6-3319 ハ-4E VIIb	9.9 - 4.2 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/2が鋸削りで、他は横ナデで仕上げている。 半球形の体部の下半に沈継を置いて、口縁部を作っている。鋸削りの界線やノタ メの凸部、口縁部の内側の摩滅が著しい。体部の内外面には、茶色の焼化物が一 面に付着している。	良 や 不 灰	い 良 色
294 -16 15 須 壱 盒 H	7-3017 ハ-5 VII	10.1 - 3.9 -	全体の1/3程度が残る。天井部外面が鋸削りされ、頂部分は/印の施記号と、切 離し痕が残っている。天井部には内当て幅とナデ痕が残る。他は横ナデで仕上げ ている。偏平な半球形の体部下半に沈継を薄くし、口唇部をやや屈曲させて口縁部 と画している。口縁部先端を薄くし、口唇部を大輪状に作っている。内面は茶色。	良 良 暗 灰	いい 色
295 -16 -15 須 壱 盒 II	6 3317-2 ハ 4E VIIb	10.0 - 3.7 -	完形品。天井部外面は、輪の広い削りで鋸削りされ、頂は平らにしている。他は 横ナデで仕上げている。体部下半に沈継を置いて口縁部と体部を画している。全 体に薄手の作りで、口縁部内側が摩滅している。内面には茶色の焼化物が付着し ている。	普 普 灰	通 透 色

番号 写真版 器種・形態・時期	登録番号 出土位置	法量cm 口径 器高 器底	技法・調査等の特徴		胎焼色 土成調
			横径 高さ 底		
296 -16	6-3448-4	9.4 9.7 9.7 3.6 -	全体の1/2が残る。天井部外側が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の下辺に浅い沈線を施して体部と口縫部を画している。口縫部の内側にも沈線が施かれている。全体的に厚手の作りになっている。	粗 青灰	いい 通色
297 -16 -15	6-3444-2 ハ-5E VIIb	9.7 3.9 -	全体の3/4が残る。天井部は鋸削りし、他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の下辺に浅い沈線を施して口縫部と体部を画している。口縫部は体部から屈曲しない。口縫部は沈線を施すようして設作っている。内面には火照れが多くある。	や 良白 灰	や 精 通色
298 -16	6-3402	10.0 10.3 4.1 -	全体の1/2が残る。天井部外側が鋸削りされ、頂部分は平らに作っている。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の先端を内側に屈曲させているが、体部と口縫部との境は明確ではない。内面には煤状の炭化物が薄く付着している。	良 良灰	いい 通色
299 -16	6-3434-2	9.7 10.1 4.5 -	全体の3/4程度が残る。天井部外側の1/2が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の先端を内壁させる器形になる。口唇部の内側は摩擦が激しい。断面は白灰色となり、外側は焼成が良くないため、瓦色をしている。	粗 良暗 灰	いい 通色
300 -16 -15	6-3393 ハ-5E VIIab	9.8 10.0 3.6 -	口縫部の一部を欠くがほぼ丸形容形。天井部外側の頂部が鋸削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部で、口縫部は内側気味に直立して作っている。体部内外面にノタメが見られ、天井部には、内当て模が薄く残っている。口縫部の内側は摩擦が進んでいる。	良 良黑 灰	いい 通色
301 -16	6-3303-2	9.4 9.9 3.8 -	全体の1/3が残る。天井部外側の1/2が粗く鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。天井部には内当て模と想える丘脛が残る。体部の先端を屈曲させ、内縮する口縫部を作っている。全体的に薄手の作りで、口縫部は丸く作られる。	良 良黑 灰	いい 通色
302 -16	6-3431	?	口縫部の先端を欠いている。天井部は鋸削りし、他は横ナデ仕上げ。口縫部の先端が摩擦により擦り減って原形を止めている。口縫部内側だけでなく、器壁の全体が摩擦している。破壊したものを再利用したのか? 内面に炭化物が付着している。	や 粗 灰	や 粗通色
303 -16	7-2985-3	10.2 3.2 -	全体の1/2が残る。底部外側は1/3が鋸削りされ、=の箇記号が付される。底部から曲線的に立上がり受部へと続く形態で、内縮する低い立上がりが付く、口縫の小さな环である。	良 や 高 灰	いい 通色
304 -16	7-3013	8.8 9.8 3.3 -	全体の2/3が残る。底部外側は鋸削りされ、中心部分は切離し痕が残っている。底部内面にはナテ模がある。他は横ナデで仕上げる。底部から弧を描く体部に、爪形で低い立上がりが付く、受部は立上がりとの境に接する形態の沈線を施して作っている。外面は黒色で断面は白灰色で焼かれている。	良 や 黑 灰	いい 良通色
305 -16 -15	7-3014 ハ-5 VII	8.1 9.8 3.8 -	全体の1/2が残る。底部外側は鋸削りし、内面には内当て模がある。他は横ナデで仕上げている。半球形の体部に内縮する立上がりが付く、受部は立上がりとの境に接する凹線を施して作っている。全体に薄手の作りになっている。	良 や 白 灰	いい 良通色
306 -16	6-3260	9.2 10.7 2.8 -	全体の1/2が残る。底部外側が鋸削りされるが、中心部分には切離し痕をそのまま残し未調査。底部の内面にはナテ模が残る。他は横ナデ仕上げ。底部から直開いて立上がる体部で、立上がり部は低く断面二角を作っているだけで、受部も屈折きの沈線を引いて小さく作られる。	良 良灰 灰	いい 通色
307 -16 -15	6-3292 ハ-4E VIIab	9.7 11.7 3.4 -	完形成。底部外側は鋸削りされ、中心部は鋸削り後のナテ模が残る。底部から直開き、逆二角形に近い形態になり、立上がり部は低く、受部も立上がり部との境を、凹線状にナデで作るだけである。底部内面には、あばた状の内当て模が円形に残っている。外面に(受部下方)煤が付着する部分がある。	や や 良 灰	や や 粗 通色
308 -16	6-3436-2	13.1 -	口縫部の体部を欠いた口縫部。円筒状の底部から口縫部がラッパ状に開き、口縫部には薄く胆面を作っている。横ナデで仕上げているが、底部内面には整形時の絞り目が残っている。底部外側には2条の沈線があり、口縫部内側と共に自然軸が厚くかかっている。	良 白 灰	いい 通色
309 -16	6-3267	9.6 -	口縫部を欠いている。体部下半は鋸削りされ、底部に窓床の砂が付着している。肩部には2条の沈線を施し、注口部は、突起させて作っている。底部は平底気味につくり、肩の張った器形となる。体部上半には、縦輪状の自然軸が厚くかかっている。	粗 良灰 灰	いい 通色
310 -16	6-3381-1	5.8 -	体部を欠く。全体が横ナデ仕上げされている。先端の開く円筒形で、口縫部の内側下に沈線を施して口縫部を丸く作っている。やや継ぎ金みがあり、体部と口縫部の接合部以下を欠いている。薄手の作りで、縦輪状の自然軸が内外面にかかっている。平底の肩の口頭部か?	良 良灰 白	いい 通色

番号 写真版 器種・形態・時期	登録番号 山土位異 種類	法量cm 口 孫 胸 器 底	技法・調査等の特徴		土 成 調 色	
311 17	6 3285-3	10.8 — — —	口歯部を残し体部を欠く。口歯部内外面は横ナデされ、縦釉状の自然釉がかかる。円柱状の頭部から口歯部にかけて徐々にラッパ状に開き、端部は一角に作る。	良 良 灰	いい 色	
須 壱 II	ハ 4F VII	—				
312 -17	6 3170-2	10.4 — — —	体部以下を欠き、口歯部が残る。全体が横ナデで仕上げている。口歯部に行くにつれて広がり、先端部を段を作つて屈曲させ、複合U線に作つてある。外面に自然釉が付着する。	良 良 暗 灰	いい 色	
須 壱 II	ハ 4EW VII	—				
313 17	6-3301-2	6.6 —	口歯部が残り、体部を欠く。口歯部の内外面は横ナデで仕上げている。外面には、白色のフキダシ釉がかかり、厚い部分は縦釉状になっている。体部との接合部分から欠損しており、胴口で頭部はあまり近くはない自然釉の口辺部。	良 良 暗 灰	いい 色	
須 壱 H	ハ-4E VIIb	—				
314 -17 -15	6-3304-2	14.0 28.7 27.0	口歯部の2/3と肩部の1/3を欠いている。口歯部の内外面は横ナデで仕上げされる。側面外は、ナデ仕上げされているが、全面にタタキが薄く残ったままである。内面下半は蓋状の器具で丁寧にナデ仕上げされる。底部のやや尖った球洞に広いU線釉が付く。口歯部、肩部、底部に縦釉状の自然釉がかかる。	良 良 灰	いい 色	
須 壱 H	ハ-4E VIIb	—				
315 -17	6-3173-1	12.0 16.8 13.0?	全体の1/4が残り、底部を欠く。体部下半が削り取られる。他は横ナデで仕上げている。特に口歯部周辺は丁寧にナデしている。肩の張る体部に緩やかに立上がりの口歯部が付いており、口唇部は肥厚させ内側に沈線を置く。	良 良 暗 灰	いい 色	
須 短鉢H	ハ-4EW VII	—				
316 -17 -16	7-3022	7.2 9.0 1.9	完形品。天井部の大半が削り取られ、頂部に尖起状の壇が付いている。大井部から身受部まで強引に描いていく、浅い畫である。立上がり部は突起状に付き、受部との間は横ナデで川線状に作っている。外面にはフキダシ釉がかかる。	粗 良 白	いい 色	
須 壱 盖 I	ハ-7 VII	—				
317 -17	6-3173-2	11.6 14.2	全体の1/4が残り、壇を欠く。天井部は削り取られ、他の部分は横ナデ仕上げ。平らな天井部が体部下半でやや屈曲し受部と統一。この体部に内植する低い立上がりが付く。口唇部、体部外面のノタメで高くなる部分の隙間が激しい。	良 良 白	いい 色	
須 壱 盖 I	ハ-4EW VII	—				
318 -17 -16	6-3324	9.5 11.3 3.7	口歯部の1/2が残る。天井部外面は削り取られ、宝珠形の壇が付く。内面は横ナデの痕跡がカキメ状に残っている。他は横ナデで仕上げている。ハの字に開く浅い体部に、やや内傾する立上がりが付く器形となる。外面は薄くかかった自然釉で灰褐色、内面は暗灰色、断面は灰色になっている。	良 良 灰	いい 色	
須 壱 盖 I	ハ-4W VIIa	—				
319 17 -16	6-3058	10.4 — 4.3 6.6	完形品。底部外面は削り取られ、下方に張らみ持った底面を作っている。削り取られた輪廻のやや内側に、横に踏めるような高台を貼り付けている。口歯部は底面から屈曲して外壁気泡に立上がり、口唇部を丸く作っている。外面には黒茶色の炭化物が付着し、白い斑点状のフキダシ釉がかかる。	や 良 暗 灰	粗い 色	
須 壱 身 I	ハ-4W VII	—				
320 17	6-3425-2	—	上半部を欠損している。底部には整形痕を残すが、他の部分は横ナデで仕上げている。体部の内面には、火薬がが多く、底部の内面には自然釉がかかる。	良 良 灰	いい 色	
須 擬鉢 J	ハ 5W VIIbc	11.0	内面の摩滅は少なく、長時間使用したものではない。内面の大穴が、擂鉢としての機能に耐えられなかったと推測される。			
321 -9	7-3209	25.0 43.3 44.3	イ区山土器 55の次項を見よ。			
須 壱 J	イ-5 VII	—				

A15・本区

322 -18	7-1145-2	12.4 15.3 5.7 —	全体の1/2が残る。底部外面の2/3が削り取られる。他の部分は横ナデ仕上げている。腰の張る体部に内植する高い立上がり部が付き、受部もしっかりと作られる。体部の深さと立上がり部がほぼ同じ長さになる。	や や や 白	粗 良 色
須 壱身 A	A15hN VII	—			
323 -18	7-1305-3	12.4 13.0 — —	全体の1/3が残る。天井部外面全体を丁寧な削りで仕上げ、他の部分は横ナデで仕上げる。腰の深分に、しっかりした壇をつくり、体部から屈曲し直立する口唇部を作つてある。口唇部は段を作つて内植する。全体に薄くシャープに作り出している。	良 良 暗 灰	いい 色
須 壱 盖 B	A15iN VIIc	—			
324 -18 -16	7-1169-1	14.1 — 5.5	全体の1/2が残る。天井部外面の2/3以上が削り取られ、他の部分は横ナデで仕上げる。天井部から、直立する口唇部へと続く深い杯蓋である。体部と口唇部の壇に優美な作りである。口唇部は段を作つて内植する。全体にシャープな作り。	や 良 灰	粗 良 色
須 壱 盖 B	A15hS VII A16bS VII	—			

番号 写真版面 器種・形態・時期	登録番号	法量cm 口径 底径 高さ 底面	技法・調整等の特徴	胎焼色	土成調
325 -18 -16	7-1317 2	12.3 3.6	口縁部の1/2が残り、体部は完形品。天井部外縫は丁寧なへラ削り。他は横ナデとして全体的にシャープな仕上げ。口縁部は直立し、体部との境には継ぎを作る。口唇部は内傾する。体部は緩やかな丸みを持つ。胎土に白砂混入。	粗硬暗	い質色赤
須 壊蓋 A	A15gN VIIc				
326 -18 16	7 954	12.9 13.4 6.9	完形品。大井部の大半が鏝削りされ、大きめの宝珠形瘤が付けられる。他の部分は横ナデで仕上げている。体部下段に縫を作って口縁部との境にしている。口縁部は緩やかな丸みを持つ。胎土に白砂混入。	良良暗	いい色灰
須 高環蓋 B	A15eN VIIc				
327 -18	7 1305-5	12.5 14.4 4.9	全体の1/2が残る。底部外縫の1/2が丁寧な鎌削りで仕上げ、他の部分は横ナデで仕上げる。腰の張る体部に、内傾して直立する立上がりを作り、受部は横に引出す、深めの器形になる。口唇部は内傾させる。全体に薄くシャープに作り出している。	良良暗	いい色灰
須 壊身 B	A15iN VIIc				
328 -18	7-1415-2	-	环部を欠き、脚部の1/2が残されている。全体が横ナデである。ハの字に開く脚には台形の透かしが一方に作られる。脚部は肥厚させる。	良良白	いい色灰
須 高環 B	ホ-9 VIIc	10.6			
329 -18 -16	7-3063	14.1 4.7	完形品。大井部外縫の2/3が丁寧に鎌削りされ、天井部には静止のナデ痕が残っている。他は横ナデで仕上げている。体部の先を脚曲させ、直立する口縁部を作っている。肩曲部には沈跡を置いて縫を作り出し、口唇部は内傾する坦面を作っている。	良良灰	いい色灰
須 壊蓋 C	ホ-6 VII				
330 -18 16	7-950-1	14.6 5.1	全体の3/4が残る。天井部外縫の1/2が鎌削りされ、天井部には静止のナデ痕が残る。他は横ナデで仕上げている。平らな天井部から続く体部に、低い縫を作り、そこを脚曲させて口唇部を作っている。口縁部は直線的に口唇部へと続いている。口唇部は内傾する坦面を作っている。天井部外縫に自然瘤がかかっている。	粗良白	いい色灰
須 壊蓋 C	A15eN VIIc				
331 -18	7 1005 5	14.4 4.8	全体の1/4が残る。天井部外縫の2/3が鎌削りされ、他は横ナデで仕上げている。天井部はほぼ平らに作られ、体部の下段に縫を作って、口縁部と体部を向かしている。口縁部は直線的に口唇部へと続いている。口唇部は段を作って内傾する面を作っている。	粗良暗	いい色灰
須 壊蓋 C	A15fS VIIc				
332 -18 16	7 842	12.5 5.4	完形品。大井部外縫の大半が鎌削りされ、中央が窪んだ偏平な瘤が付けられている。他の部分は横ナデで仕上げている。腰の張る体部に沈跡を置いて、体部と口縁部を画している。口縁部はやや外反気味になり先端部が肥厚し、口唇部は段を作っている。腰の張った高めの器形になる。天井部外縫に白色の自然瘤がある。	良良暗	いい色灰
須 高環蓋 C	A15iS VII				
333 -18	7 1190 6	12.2 14.6 ?	全体の1/3が残るが、底部を欠く。底部外縫の1/2が鎌削りされ、他は横ナデで仕上げている。腰の張った体部に、高めで内傾気味の立上がりと、しっかりした受部が作られる。口唇部は段を作って内傾する。器壁も薄く、比較的シャープな作りとなる。	良やや白	い良色灰
須 壊身 C	A15iS VIIa				
334 -18	7-742-1	12.2 14.3 4.9	全体の1/2が残る。底部外縫の1/2が鎌削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。腰の張る体部に直立する立上がりが作られる。受部も横にしっかりと引出されている。口唇部は肥厚し段を作って内傾する。全体的に薄手で、シャープさもある。口唇部の摩耗が進んでいる。	や良茶	や粗い色灰
須 壊身 C	A15iの北 VII				
335 18	7-1339-4	12.0 - -	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外縫は2/3が鎌削りされ、他の部分は横ナデで仕上げしている。腰の張る体部に内傾する高めの立上がり部を持った深めの器形になる。	良良赤	いい色褐
須 壊身 C	A15gN VIIb				
336 -18	7-946-1	11.1 14.4 4.9	全体の1/2が残る。底部外縫の1/3が鎌削りされ、内面には内当て瘤が残る。他は横ナデで仕上げている。やや腰の張った体部に、内傾気味で高めの、立上がりが付く、受部は横にしっかりと作られる。立上がり部は薄く口唇部は尖って丸く作っている。	良良暗	いい色灰
須 壊身 C	A15eN VIIc				
337 18	7-1190-3	12.0 15.1 -	底部を欠くが、全体の1/3が残る。底部外縫の1/3が鎌削りされ、他は横ナデで仕上げされる。やや腰の張った体部に内傾する立上がりが付く、受部も横方向にしっかりと作られる。やや厚手の作りで口唇部は段を作って内傾する。	や良灰	や粗い色灰
須 壊身 C	A15iS VIIa				
338 -18	7-858	10.2 12.4 4.8	全体の3/4が残る。底部外縫の1/2が丁寧に鎌削りされ、他は横ナデで仕上げている。やや腰の張った体部の先に、直立気味の立上がりが作られ、受部も横にしっかりと作られている。全体に薄手の作りだが、口唇部等の端部が丸く、ややシャープに欠ける。	良良灰	いい色灰
須 壊身 C	A15dW VII				
339 -18	7-924-1	12.6 14.4 5.3	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外縫の1/2程度が比較的丁寧なへラ削りで、他の部分は横ナデ仕上げされる。やや腰の張る深めの体部に、内傾して直立すつ受部が付く。口唇部は坦面を作る器形になる。体部は薄い作りで雰成も良い。	良良灰	いい色灰
須 壊身 C	A15gN VIIb				

番号 写真版 種類・形態・時期	登録番号	法量cm 口 器 底 器 底 器 底	技法・調整等の特徴		胎 成 色	土 成 調
			出上位置			
340 -18 須高杯C	7-1335 2 A15gN Wb	10.4 12.7 -	杯部の1/3が残り、脚を欠いている。底部の外は比較的丁寧な鋸削りで、他の部分は横ナデ仕上げている。腰の張る体部に内傾する立上がりが付き、受部もしっかりと作られる。立上がりの端部は内傾する。薄手の作りで全体的にシャープさがある。		や良暗 良 灰	や 粗 い 色
341 -18 須高杯C	7-1168-1 A15hN Wb	13.3 10.1 8.9	全体の1/2が残る。杯底部の外はほとんどが鋸削りされる。腰の部分で屈曲し、口縁部がやや外傾気味に立上がる。筋曲部には低い段が作られる。脚はハの字形に開き、3方向に透かし孔があり、脚の上下にカキメが付き、脚部は直立させる。無蓋の高杯となる。全体に作りが美しい。		良 良 灰	いい 色
342 -18 須高蓋D	7-1270 A15iN Wb1	14.6 4.6 -	完形品。天井部の1/2が鋸削り、他の部分は横ナデ仕上げしている。大井部から体部にかけて一度緩く曲がり、再度緩く曲がり、再度緩く曲がり、最後に口縁部を作っている。腰の部分では沈線を置いて腰を作り出している。大井部外面にはメ印の雑記号がある。胎上には石粉が混入する。		や や 良 灰	粗 良 色
343 -18 須高蓋D	7-931-2 A15gS Wb	13.9 3.8 -	全体の3/4が残る。天井部外面は鋸削り、その他の部分は横ナデ仕上げ。大井部に内当て腰(タタキメ)を残す。肩部はやや太めの沈線を置き腰を作り出している。口縁部は直立し口唇部は内傾して面を作っている。天井部に凹みあり。		粗 良 黑 灰	いい 色
344 -18 須高蓋D	7-1339 A15gN Wb	15.0 4.0 -	全体の1/4が残る。天井部の外は鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げている。体部は天井部から口縁部に弧を描いて続き、途中で屈曲しない半球状の器形になる。頸部ではないが、腰の部分にノタメの凹線で腰を作っている。		や や 良 黄 相	粗 良 相 い い 色
345 -18 須高蓋D	7-1167-2 A15hN Wb	15.4 -	全体の1/3が残る。天井部外面の半分を鋸削りし、他の部分は横ナデ仕上げする。体部は深めの弧を描いて口縁部に至る。腰の部分には、沈線を置いて腰を作り出し、口縁部との接合にしている。口唇部は、段を作つて内傾する。		良 良 白 灰	いい 色
346 -18 須高蓋D	7-1317-1 A15gN Wbc	13.4 4.5 -	ほぼ2/3が残る。大井部の外は、比較的丁寧なへラ削り。体部は浅い沈線を置いて、くの字に曲がり直立する口縁部へと続く。口唇部は段を作つて内傾する。胎上には白粉が混入し、自然な物が付着する。		砂 良 灰	含む 色
347 -18 須高蓋D	7-1471-2 ホ-9 Wb	13.9 4.0 -	全体の1/3が残る。天井部外面は1/3が鋸削りされ頸は平らに作っている。他は横ナデ仕上げ。体部には明瞭ではないが腰を置き口縁部と画している。腰の下には鋸削りで調整している。口唇部は先端を細くし横に開いて内傾する。		や や 良 灰	不 良 色
348 -18 須高蓋D	7-1143-2 A15hN Wb	15.7 4.5 -	全体の1/2が残る。天井部外面の半分を鋸削りで仕上げている。肩部で、直角に近く折れ曲がり、不十分ながら後を作り口縁部へと続く。やや厚めの作りで口唇部も大きい。口唇部は内傾させて作る。		精 硬 黑 灰	良質 色
349 -18 須高蓋D	7-1339-3 A15g Wb	15.0 6.0 -	全体の1/4が残る。天井部外面の1/2が鋸削りされる。弧を描く体部の下半に沈線を置いて口縁部を画している。口唇部は、やや内傾し、口唇部を内傾させている。		良 良 灰	いい 色
350 -18 須高蓋D	7-1178 A15hS Wb	15.2 4.5 -	全体の3/5程度が残る。口唇部の外はタタキメが残る。大井部外面のほとんどが鋸削りされる。腰の部分に浅い沈線を置く。器形的にはこの沈線部分で腰やかに曲げて口縁部に至るが、開脚でも腰も顎者ではない。口縁部外面にタタキメが残される。		や 良 灰	や 粗 い 色
351 -18 須高蓋D	7-1177-1 A15hs Wb	14.0 5.2 -	全体の2/3が残る。天井部外山の2/3以上が鋸削りで、他の部分は横ナデ仕上げする。腰の部分で曲折し、口唇部はほぼ直立するが口唇部は丸く作る。屈曲する部分には顎者ではないが後を作る。天井部に内当て腰とれるタタキメの痕跡と施によるナデが残されている。		や 良 灰	や 粗 い 色
352 -18 須高蓋D	7-1413-2 ホ-9 Wb	13.9 3.7 -	全体の1/2が残る。天井部外山の1/3程が鋸削り、他は横ナデ。腰の部分に腰を作り出し、体部と口縁部を分けている。口縁部は直立気味になって、口唇部は丸みを持っておわれる。全体的に腰部が薄い作りとなっている。		や 良 灰	や 粗 い 色
353 -18 須高蓋D	7-1271 A15iN Wb2	13.4 4.6 -	完形品。天井部外山の1/2が鋸削りで、他の部分は横ナデ仕上げている。焼き歪みがあるが、弧を描く体部が腰の部分で屈曲して口縁部を作っている。屈曲部には浅い沈線を置いて体部と内側する。全体に厚手の作りになる。天井部にはタタキメが残り、外山にはスカ、火が付着している。断面はあざきいろ。		良 良 灰	いい 色
354 -18 須高蓋D	7-946-2 A15eN Wb	14.8 4.0 -	全体の1/3が残る。大井部外山の大半が、鋸削りされ、頂部を平らに作っている。他は横ナデ仕上げしている。体部の先を、屈曲させて口縁部を作っている。直立気味の口縁部で口唇部は、直立をなしている。全体に厚手の作りでシャープさがない。内面は茶色		や 良 暗 灰	や 粗 い 色

番号 写真版面 器種・形態・時期	登録番号 出土位置	法量cm 口径 深さ 器底	技法・調整等の特徴		胎焼色 上成調
			胎焼器底	上成調	
355 -18 須坏身D	7 988 A15eN Wd	13.6 13.8 4.7 -	全体の1/3が残る。犬井部外表面が窓削りされる。平らな天井部からやや畠出して体部に続き、さらに体部の先を内側させて口縁部としているが、体部と口縁部を向す沈痕や痕はない。口縁部は軽い段を作つて内傾する面を作る。	や良灰	や 良 灰 粗 い 色
356 -18 -17 須坏蓋D	7-950 2 A15eN Wc	14.8 - 4.9 -	完形品。犬井部外表面は2/3が窓削りされる。他は横ナデで仕上げられている。天井部から弧を描いて続く体部の先を、やや直立気味に曲げて口縁部を作つている。口縁部と体部を画すような様な筋や痕はない。全体に厚手の作りでシャープさはない。	良 や 良 灰 粗 い 色	や 良 灰 不 良 色
357 -18 -17 須坏蓋D	7 952-1 A15eN Wc	14.4 - 4.3 -	完形品。天井部外表面は窓削りされ、他は横ナデで仕上げている。体部は、天井部から口縁部へ弧を描いて続き、体部と口縁部の境は判然しない。全体に厚手の作りとなっている。口縁部は内傾する坦面を軽く作つていている。	粗 良 灰	良 い い 色
358 -19 須坏身D	7-910-1 A15g Wd	14.9 16.8 4.7 -	全体の1/2を残す。体部は内外両面に横ナデ仕上げ、底部は切離したままで未調整。やや腰の張る体部に内頸気味の立上がり部が付く器形になる。	や 良 暗	や 粗 い 色
359 -19 須坏身D	7-825-1 A15gN Wd	12.6 14.8 - -	全体の1/2が残る。底部外表面が静止窓削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。底部から続く体部は薄く作られ、立上がりの先端を、立ち気味に屈曲させている。受部は立上がりと共に底部に踏巻きの沈痕を入れて斜め上に作つてある。全体に偏平な器形になっている。	良 良 暗	良 い い 色
360 -19 須坏身D	7 1335-1 A15gN Wb	13.2 15.7 - -	全体の1/2が残り底部を欠く。残った部分は横ナデで仕上げている。弧状に立上がる体部に、先端が立つて内傾する立上がりが作されている。深めの器形になるものと推定される。体部の外表面には自然釉が付着している。	良 良 灰	良 い い 色
361 -19 -17 須坏身D	7 1010-1 A15fN Wc	13.2 15.4 - -	完形品。底部外表面が窓削りされ、底面部は静止ナデされている。他の部分は横ナデで仕上げられる。器形に凹みがあるが、弧を描いて続く体部の先に、外彫気味で立ち上がりが作られている。口唇部は内傾する面を作る。受部は斜め上にしっかりと作つてある。	良 や 口 不 良 灰	良 い 良 色
362 -19 須坏身D	7-991 A15g Wd	12.8 14.9 4.2 -	完形品。底部外表面の1/2が窓削りされる。底部内面には静止ナデが残っている。底部から弧を描いて続く体部に内傾する立上がりが付けられる。受部は、体部の延長上に斜め上にひき出されるように作られている。	良 良 暗	良 い い 色
363 -19 -17 須坏身D	7 1186 A15iS Wd	12.9 15.6 5.2 -	完形品。底部外表面の1/3が窓削りされ、他の横ナデで仕上げられている。器形は、底部から直角的に続く体部に、内傾する高めの立上がりが付き、受部は横に引出される。底部内面にタキメと思える突起(内当て根)がある。底盤は強く硬質に焼き上げている。	良 良 灰	良 い い 色
364 -19 -17 須坏身D	7-1185 A15iS Wd	12.6 14.9 4.7 -	完形品。底部外表面の1/2が窓削りされ、他の部分は横ナデ仕上げ。弧を描いて立上がる体部に、内傾する薄い作りの立上がりが付く器形となる。底部は厚く受部に向かうに從つて、徐々に薄く作られている。	白 砂 良 灰	混 入 い 色
365 -19 須坏身D	7-1190-4 A15iS Wd	13.1 16.0 4.2 -	全體の1/3が残る。底部外表面の1/3が窓削りされ、他の部分は横ナデ仕上げされている。体部に凹みがあるが、腰の張った体部から口唇部まで弧を描いて続き、受部は斜め上に引出される。底部内面には内側で痕を消したと思われる静止ナデが残されている。	良 良 青	良 い い 色
366 -19 須坏身D	7-1190-5 A15iS Wd	14.0 16.5 - -	全體の1/3が残る。底部外表面の2/3が粗い窓削りし、他の部分は横ナデ仕上げされる。器形的には、緩やかに弧を描く体部に、横に引出した受部と、直立気味の立上がり部を作り出している。全體に薄い作りの坏身となる。底部に自然釉がかかっている。	や 良 灰	粗 い 色
367 -19 須坏身D	7-1177-7 A15hS Wd	14.8 17.1 - -	全體の1/4が残る。底部外表面の1/2が窓削りし、他の部分は横ナデ仕上げされる。弧を描いて立上がる体部に、内傾した立上がりが付き受部は横に引出される。体部の外表面に踏巻きの沈痕が付されている。	良 良 灰	良 い い 色
368 -19 須坏身D	7-961-2 A15fS Wb	12.8 14.7 3.7 -	全體の1/3が残る。底部外表面が窓削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて続く偏平な体部の先を外彫させて立上がり部としている。受部は立上がりとの境に踏巻きの沈痕を置いて作り出している。	良 良 白	良 い い 色
369 -19 須坏身D	7-1005-1 A15fS Wc	12.1 15.2 4.0 -	口縁部の1/2程度が残る。底部外表面の1/2程度が窓削りされ、底部内面には静止ナデで器面を調整している。浅い器形で底部から弧を描いて続く体部の先に、内傾する立上がりを作つてある。立上がりは先端に行くにつれて薄く作られ、受部は斜め上方に引出している。体部内面に窓状器具で回転ナデした痕跡もある。	良 良 青	良 い い 色

番号 写真版	登録番号	法量cm 口器 胸器 器底 出上位深	技法・調整等の特徴	胎 焼 成 色	土 成 調
器種・形態・時期					
370 -19 370 -17 須 壁身D	7-844-3 7-736-1 A15gN VIIc	12.7 15.1 3.7 — A15gN VII	全体の1/2が残っている。底部外面が鋭削りされているが、鋭削り痕が不明瞭で凹凸が多く、木彫彫か? 他の部分は横ナデで仕上げている。底部で彫り、弧を描いて繞いて行く体部に、外彫気味に内傾する立上がり部を作っている。受部は体部の延長をそのまま受部としている。	や 良 火	や 粗 い 色
371 -19 須 壁身D	7-790-3 A15gN VII	13.0 15.0 A15gN VII	全体の1/3が残っている。底面外面は鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げてある。底面からやや曲がって繞く体部に、内傾する立上がり部を作っている。受部は体部の延長に引出されて、立上がりとの境を横ナデしている。	良 良 灰	いい 色
372 -19 須 壁身D	7-901-3 A15gN VII	13.6 14.8 4.4 — A15gN VII	全体の1/2を残し底面を欠く。底部外面の1/2が鋭削りされ、中心部は切離し痕を残し未調整。口縫部は内外ともに横ナデ仕上げ。底部内面に静ナデ跡を薄く残す。底面から受部にかけて弧を描く体部に、やや内傾する低めの受部を持つ。浅めの器形になる。	良 や 白 灰	いい 良 色
373 -19 須 壁身D	7-772-1 A15gN VII	13.0 15.4 — A15gN VII	全体の1/3が残り、底部を欠いている。底部外面が鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げられている。底面から立上がりまで、弧を描いて繞き、受部は横に引出されて、しっかりと作られている。全体に厚手の作りとなっている。	良 や 灰	いい 良 色
374 -19 須 壁身D	7-901-2 A15gN VII	13.0 15.5 3.5 — A15gN VII	全体の1/2程度が残る。体部は内外面とも横ナデ、底部外面は1/2が鋭削り。底部から受部にかけて、緩やかに弧を描く体部に、やや内傾する低めの受部が付き、浅めの器形になる。焼け痕がある。	良 良 火 灰	いい 色
375 -19 須 壁身D	7-844-1 A15gN VIIc	12.8 14.9 4.7 — A15gN VIIc	全体の2/3が残る。底部外面の1/2は鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げてある。厚手に作った底面から、弧を描いて繞く体部の先に、直立する立上がり部を付いている。体部の延長をそのまま受部として作っている。立上がり部の先を薄くし口唇部としている。	や 良 火 白	や 粗 い 色
376 -19 須 壁身D	7-799-1 A15gS VII	12.4 15.0 — — A15gS VII	全体の1/3が残る。底部外面の2/3は鋭削りされている。他の部分は横ナデで仕上げている。底面から弧を描いて繞く体部から直接屈曲して、立上がり部が作られ、受部も斜め上にしっかりと作られている。立上がり部は内側が強くナデされ先端を薄く作って、口唇部は内傾する面を持っている。	や や や 白 灰	粗 不良 色
377 -19 須 壁身D	7-1300 A15gN VIIb	12.1 14.7 5.3 — A15gN VIIb	完形品。底面外面の1/3が粗いハラ削りで、平底にしてある。他の部分は横ナデ仕上げ。体部は分厚く作られる。器形的には腰の部分で少し屈曲させた体部に、内傾きの立上がり部を持つ。受部は、立上がり部との境と受部外面の下方に、沈線を置くことによって作っている。	良 硬 火 灰	いい 質 色
378 -19 須 高環D	7-952-5 A15eN VIIc	11.8 — — — — A15eN VIIc	环部が残り底部を欠く。环部の外面が鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。环部外面には沈線を置いて2条の腰を作っている。腰の張る深い环部で口縫部は開き気味に立上がり、口唇部は外筋する凹面を作っている。环部外面に三方向透かしを作った捺切りの痕跡が残っている。	や 良 火 灰	粗 い 色
379 -19 須 直蓋D	7-1413-3 ホ-9 VIIb	6.4 9.3 3.5 — ホ-9 VIIb	全体の3/4が残る。器壁全体を横ナデで仕上げている。受部は横に引出され、立上がり部の先端は内彫して身受け部を作っている。腰は比較的高い作りが粗い。天井部には内当て痕を残す。	良 良 火 灰	いい 色
380 -19 須 直蓋D	7-848 A15gN VIIc	7.8 9.4 — — A15gN VIIc	全体の1/2が残っている。犬井部外面に腰を持つが欠損している。犬井部外面に、自然軸が厚くかかるため崩壊等の手法は不明。他の部分は横ナデで仕上げている。薄手の体部の先に、内傾する立上がりが作られ、体部の延長を受部としている。立上がり部は比較的高い。	良 良 火 灰	いい 色
381 -19 須 环蓋E	7-1333-2 A15gN VIIb	13.8 — 4.0 A15gN VIIb	全体の2/3が残る。天井部外面は1/2が鋭削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。体部との境をノマテの凹線で、腰の構りに作り出して両部とする。口縫部は両部で緩やかに屈曲しながら開き気味に立上がり、口唇部を丸く作っている。	良 良 火 灰	いい 色
382 -19 須 环蓋E	7-1158 A15gS VII	14.3 — 4.1 A15gS VII	完形品。天井部外面の2/3が鋭削り。他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部分に沈線を置きやや屈曲させて口縫部を作っている。口縫部は段を作り内傾する。天井部に灰軸状の自然軸が掛かる。胎上面には白い砂が混じり、断面はあざき色をしている。	良 良 火 黑	いい 色
383 -19 須 环蓋E	7-1168-3 A15hN VII	13.9 — 4.1 — A15hN VII	完形品。天井部外面の1/3が鋭削り、他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて口縫部に統一し、口唇部をさらに外に屈曲させる器形になる。腰の部分に太めの沈線を置いて口縫部と体部を画している。	や 良 火 灰	粗 い 色
384 -19 須 环蓋E	7-794 A15gS VII	15.8 — 4.8 — A15gS VII	全体の1/2が残る。犬井部外面が鋭削りされ、犬井部には内當て痕が残されている。他の部分は横ナデで仕上げている。犬井部から体部にかかる部分で屈曲し、体部から口縫部にかかる部分には、腰を作りて体部と口縫部を向している。口縫部はやや内彫し口唇部は内傾する凹面を作っている。	良 良 火 灰	いい 色

種 因 番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 器 側 胸 器 底 高 度	技 法・調 整 等 の 特 徴		胎 成 色	土 成 調
			山 土 位 漢			
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	385 -19	7-1005-3	13.4 14.4 5.6 -	全体の1/3が残る。天井部外面は削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。 焼き直しがあるが、半球形の体部の先端を内轉させた姿形になる。口縫部は体部下半に置かれた沈線で休部と構成している。天井部に火薙が多い。	良 良 暗 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15fS VIIc					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	386 -19 -18	7-826-4	13.4 13.6 3.7 -	全体の2/3が残る。天井部外面が削りされているが、自然軸がかからず判然としない。他の部分は横ナデで仕上げている。休部下半に弧を作つて口縫部と休部を構成している。口縫部は内轉し休部より薄子に作っている。	良 良 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15gN VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	387 -19 -18	7-772-2	13.6 4.6 -	全体の3/4が残る。天井部外面が削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部が口縫部まで統き、途中に段や沈線を置かず、休部や口縫部の境目が判然としない。口縫部は内轉する軽い垣面を作っている。	良 や 白	や 不 良 色
須 坏 蓋 E	A15fN VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	388 -19	7-952-3	13.4 3.9 -	全体の1/2が残る。天井部外面が削りされるが、中央部は切削し痕をそのまま残し、未調整。他の部分は横ナデで仕上げている。大井部から弧を描いて軽く休部の先端を、内轉させ口縫部としている。口縫部は難看ではないが内轉する垣面を作っている。外山全体に自然軸がかかる。内面は茶色。	良 良 白	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15eN VIIc					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	389 -19	7-931-3	14.1 3.9 -	全体の1/2が残る。天井部外面の1/3は削り、他の部分は横ナデ仕上げ。休部は中間に段や沈線を置くことなく底部から口縫部へなだらかに統く。口縫部は開きぎみに立ち上り口縫部は内轉させる。	や 良 灰	粗 い 色
須 坏 蓋 E	A15gS VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	390 -19	7-799-2	13.0 4.3 -	全体の1/2が残る。天井部外面は削りされ、天井部には静止ナデが残る。他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて軽く休部の先を、曲曲させて口縫部を作っている。口縫部は外側のナデを強くし、口縫部を丸く尖ってている。全体に厚手の作りになっている。	粗 良 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15fS VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	391 -19	7-952-4	14.0 4.7 -	全体の1/3が残る。天井部外面は未調整。天井部には指屈圧痕と静止のナデ痕が残されている。他の部分は横ナデで仕上げている。休部は天井部から弧を描いて口縫部まで統く。「口縫部、休部の界線は判然としない。	良 不 白	い 良 色
須 坏 蓋 E	A15cN VIIc					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	392 -19	7-805-2	13.8 4.7 -	全体の1/2が残っている。天井部外面が削りされるが、頂部分は未調整。天井部には内當て痕を削した静止ナデがある。他は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて口縫部まで統く。途中で屈曲したり段を作ったりしない。全体に厚手で作りも重い。	や や 粗 良 色	や や 不 良 色
須 坏 蓋 E	A15eS VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	393 -19	7-1010-3	14.6 4.2 -	全体の1/2が残る。天井部外面が削りされるが、自然軸が厚くかかり観察不能。他の部分は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて軽く休部の先を曲曲して口縫部を作っている。口縫部は先端部分を薄くしている。全体に厚手で、粗い作りである。	や 良 灰	粗 い 色
須 坏 蓋 E	A15fN VIIc					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	394 -19 -18	7-909-1	13.5 4.0 -	全体の3/5が残る。天井部外面は1/3が削りされ、その他の部分は横ナデで仕上げている。厚めの休部から、直立気味に屈曲させて口縫部を薄く作り、口縫部は丸くなっている。	や 良 暗 灰	や や 粗 い 色
須 坏 蓋 E	A15g VIIa					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	395 -19	7-788	13.4 4.0 -	完形品。底部外面が削りされ、窓記号と思える平行線が6条付されている。他は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部で、ノタメが顯著である。「口縫部は薄くなり、口縫部を尖らせて丸く終わる。口縫部や内面は摩擦している。	や 良 褐	や 粗 い 色
須 坏 蓋 E	A15eS VI+VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	396 -20	7-1471-1	11.4 13.9 -	全体の1/2が残り底部を欠く。底部外面の1/2が削りされる。窓跡はあまり高く無く立ち上がりも低い。休部は底部が厚く横ナデ仕上げで腰はやや張り、立ち上がりは少し内轉する。受部は横方向へ引出される。口縫部は内轉する垣面を作っている。	良 良 暗 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	ホー9 VIIc					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	397 -20	7-1143-1	10.8 13.9 -	全体の1/3が残る。底部外面の1/2が削り、他の部分は横ナデ仕上げしている。弧を描く休部に内轉する立ち上がりが付き、受部はあまり横にはみ出ない。立ち上がり部下の内面に、窓のナデ痕がある。	良 良 暗 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15hN VII					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	398 -20 -18	7-935-1	12.2 14.4 5.1 -	全体の1/2が残る。底部外面は1/3が削りされ、他は横ナデで仕上げている。やや腰の張る休部に、直立気味に外轉する立ち上がりが作られ。受部は横に二角に張り出している。全般的に薄手の作りであるが、口縫部等の端部は丸みをもつて作られる。	や 良 青 灰	や 粗 い 色
須 坏 蓋 E	A15eN VIIa					
須 坏 蓋 E 器種・形態・時期	399 -20	7-821-1	12.0 13.7 4.8 -	全体の1/2が残る。底部外面が削りされ、中央部は未調整。底部内面には指屈痕とナデ痕が残っている。半球形の休部に内轉する立ち上がりが付く。受部は休部の延長のまま、横に引出したりされない。全体に厚手で、端部は丸く作られている。	粗 良 褐 灰	いい いい 色
須 坏 蓋 E	A15gN VII					

番号 写真版 器種・形態・時期	登録番号 出上位種	法量cm 口 深 度 脣 器 底 部 高 度	技法・調整等の特徴			胎 成 色 上 成 調	
400 -20 頬 坏身 E	7-792-3 A15gS VII	12.0 14.4 3.9 -	全体の1/4が残る。底部外側は鋸削りされ、内面には指頭圧痕が残っている。他の部分は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて立上がりの体部に内傾する立上がり部が付き、受部は小さく斜め上に引出されている。腰は張らずに全体に浅い器形になっている。	や 良 灰	や 良 灰	粗 い 色	
401 -20 頬 坏身 E	7-1479-1 ホ-9 VIIc	13.7 ?	全体の1/4が残り口縁部を欠く。底部外側は静止の鋸削りで調整され、他の部分は横ナデ仕上げ。器形は、平らな底部から緩やかに立上がって受部へと統き、内傾する立上がり部が付く。	や 良 黒	や 良 灰	粗 い 色	
402 -20 頬 坏身 E	7-1413-1 ホ-9 VIIb	11.6 13.8 4.5 -	全体の1/2が残る。底部外側の1/3が鋸削り、他は横ナデ。やや腰の張る体部に内傾する立上がり部が付き、受部は外側にはみだすほど顯著ではない。	や 良 晴	や 良 灰	粗 い 色	
403 -20 頬 坏身 E	7-841-2 A15gN VIIc	11.8 14.1 4.7 -	全体の1/2が残る。底部外側の1/3が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から直線的に続く体部の先端に、内傾する深い立上がりを作っている。受部は、体部の端から斜め上方に引出されている。逆三角形に近い器形になる。	良 良 青	灰	いい 色	
404 -20 頬 坏身 E	7-901-1 A15gN VII	11.8 13.4 4.7 -	全体の1/2を残すだけ。体部外側の下半は1/3程を鋸削りするが、底部は切り離しを施して柔軟性。他の部分は外側とも横ナデ仕上げ。厚めの底部から受部に弧を描いて統き、内傾した薄めの立上がり部が付く。半球形に近い深めの器形となっている。	粗 良 黒	灰	いい 色	
405 -20 頬 坏身 E	7-952-2 A15eN VIIc	12.0 13.6 4.1 -	全体の1/2が残る。底部外側は鋸削りされ、半底気味に作っている。また、底部内面には静止のナデ痕がある。他は横ナデで仕上げている。逆台形の体部の先に、内傾する立上がりを作っている。受部は体部の延長方向に丸く作られる。	良 や 白	や 不 良 灰	いい 良 色	
406 -20 頬 坏身 E	7-805-1 A15eS VII	12.9 14.4 4.5 -	全体の1/2が残る。底部外側が鋸削りされ、底部内面に静止ナデの痕跡が残っている。他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて統く体部の先に、直立気味に外側する比較的高い立上がりが付けられる。受部は体部の延長方向に丸く作られている。全体にシャープさに欠ける。外曲茶色、内面青灰色。	良 や 茶	や 不 良 色	いい 良 色	
407 -20 頬 坏身 E	7-1005-2 A15gS VIIc	11.6 13.9 4.9 -	全体の1/3程度が残る。底部外側は切離し痕が残って本調整。他の部分は横ナデで仕上げている。体部に焼き歪みがあるが、偏平な半球形の体部の先端を外彫り氣味に内傾させ、立上がり部としている。受部は立上がりとの境に鋸引きの沈線を置き、横に作り出している。	良 良 暗	や 不 良 灰	いい 色	
408 -20 頬 坏身 E	7-1339-5 A15gN VIIb	11.8 14.0 4.5 -	全体の1/4が残る。底部外側の1/3が鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げ。やや腰の張る体部に内傾する立上がり部の付く器形の环である。受部は、立上がり部との境に、鋸の沈線を入れ、斜め上方に引き出している。	良 良 晴	灰	いい 色	
409 -20 -18 頬 坏身 E	7-792-1 A15gS VII	12.2 14.3 3.7 -	全体の3/4が残る。底部外側は不定方向に静止鋸削りされ、底部内面には静止のナデ痕が残っている。他は横ナデで仕上げている。偏平な体部に内傾する立上がりが作られている。受部は立上がりとの境に、鋸引きの沈線を置いて横に引出すように作っている。	や 良 晴	や 良 灰	粗 い 色	
410 -20 頬 坏身 E	7-947 A15eN VIIc	12.0 14.2 3.9 -	全体の1/2が残る。底部外側は1/3が鋸削りされ、内面には静止のナデ痕が僅かに残っている。他は横ナデで仕上げられる。底部から弧を描いて統く体部の先を内傾させて、立上がりを作れる。受部は横に引出されて作られている。	や や 不 良 灰	や や 不 良 色	粗 良 色	
411 -20 頬 坏身 E	7-961-1 A15gS VIIb	12.0 14.6 3.8 -	全体の1/3が残る。底部外側は鋸削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。平底気味の底部から体部が内彎しながら立上がり部まで深く器形で、受部は横に捻り出して作っている。器形的には偏平なものとなっている。焼き歪みがある。	や 良 灰	や 良 灰	粗 い 色	
412 -20 頬 高環 E	7-970-2 A15iS VIIb	- 10.6	环部の収受け部分を欠いている。环底部外側は鋸削りされ、内面には内で窓が残っている。脚は無窓でハの字に開き、浅い沈線が数条置かれる。环部は焼き歪みで脚と曲がって接合している。脚外側から环部にかけて自然軸がかかっている。	良 良 黒	や 良 灰	いい 色	
413 -20 -18 頬 腺 C	7-732 A15fN VII	- 10.4 -	口縁部を欠いている。体部下には指頭圧痕、タキメ、ナデ痕が見られる。肩部には2本の沈線の間を櫛状器具の連続刺尖文で埋め、注口もここに開けている。頭部は櫛引き波状文が施されている。円の張る体部に、口徑の大きな類部が続く器形になる。	良 良 白	や 良 灰	いい 色	
414 -20 -18 頬 腺 E	7-769-2 A15gS VII	- 9.6 -	口縁部を欠いている。底部外側が鋸削りされるが、中央部分はナデ仕上げしている。頭部と肩部にカキメを付している。他は横ナデで仕上げている。肩部に2本の沈線を置き、ここに注口を作っている。頭部は口縁部にかけて開いて行く。頭部の内外面に自然軸がかかっている。	良 良 灰	や 良 灰	いい 色	

標 名 番号 写真版面 器種・形態・時期	登 録 番 号 出土位 置	法 量 cm 口 徑 横 径 器 高 度	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 燒 成 色 土 成 潤	
415 20 -18	7-1339 2 A15gN Wb	10.0 -	体部のみで口縫部を欠く。体部外面は上半がヘラ削りされ、下半はヘラ削りの後にナデ調整仕上げしている。体部内面はナデ仕上げされている。丸底で球形となり、やや上向の穴が開けられている。	や 良 暗	や 良 灰 い い 色	
416 -20 18	7-936 A15eN Wha	14.6 14.7 -	口縫部と体部の一部を欠く。外面は全体が横削りされ、底部外面は削りの後にナデ仕上げしている。内面は横ナデが施されている。球形の体部で注口は上向に開けられ突起にはならない。	良 や 白	や 良 灰 い い 色	
417 -20	7-901-4 A15gN Wh	12.4 5.0 -	全体の1/2を残す。天井部外面の1/2が鏡削り。他の部分は横ナデ仕上げされる。天井部に内当て底を消したと思われる静止ナデが残る。体部下半で腰を作って体部と口縫部を両している。半球に近い器形になる。	や 良 暗	や 良 灰 い い 色	
418 -20	7-1167-1 A15hN Wh	12.5 -	全体の1/2が残る。天井部外面の2/3が鏡削り、他の部分は横ナデで仕上げている。体部は腰の部分を屈曲させ、直立気味のU縫部を作る。屈曲部には軽い被を作り体部と口縫部を両している。天井部外面にはメ印の鑄記号がある。	粗 良 暗	粗 良 灰 い い 色	
419 -20 -19	7-1155-1 A15hS Wh	13.0 4.0 -	ほぼ完形品。天井部外面の1/2が鏡削りで仕上げ、他の部分は横ナデで仕上げている。体部から腰を描いてU縫部にいたり、腰の部分で屈曲することはないが、腰の部分に窓で沈縫を引くようにして腰を作っている。比較的端手の作り。	や 良 灰	や 良 灰 い い 色	
420 -20	7-930-2 A15gS Wh	12.3 -	一部を欠くがほぼ完形品。天井部外面は鏡削りで半らにしているが未調査。その他の部分は内外面が横ナデで調整される。体部から口縫部にかけては緩やかに曲がって沈縫や腰は作らない。天井部には内当て底を消した静止ナデの痕跡が残る。	や 良 灰	や 良 灰 い い 色	
421 -20	7-931-7 A15gS Wh	12.6 -	体部の1/2を残す。天井部外面は粗いU縫り、他の部分は横ナデで仕上げている。厚めの体部から鏡縫部は少し内側に屈曲させ、立ち上がり気味に薄く作りだしている。浅い半球状の器形になる。	良 や 不 規	良 や 不 規 い い 色	
422 -20 -19	7-793 A15fS Wh	10.8 4.3 -	口縫部の一部を欠くが、ほぼ完形品。天井部外面が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の先端を少し屈曲させて口縫部を作っているが、体部と口縫部の界線が明瞭になる程ではない。全体に厚手の粗い作りで、シャープさはない。	苦 良 慢	苦 良 慢 通 い い 色	
423 -20	7-845-1 A15gN Whc	10.2 12.4 4.0 -	全体の1/2が残る。底部外面が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。腰の張る体部に内側する立ち上がり部を持つ。受部は立ち上がりとの境を、施描きの沈縫で画して作っている。底部が厚く、全体に粗い作りとなっている。	良 良 灰	良 良 灰 い い 色	
424 -20	7-845-2 A15gN Whc	11.0 12.6 4.2 -	全体の1/2が残る。底部外面が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。底部から続く体部の先を、やや内側に屈曲気味に削して立ち上がり部を作っている。受部は立ち上がり基部に施描き沈縫で画して作られている。	良 良 灰	良 良 灰 い い 色	
425 -20	7-770-2 A15fS Wh	11.0 13.0 4.1 -	全体の1/2が残る。底部外面が鏡削りされ、内面には内当て底が残っている。他の部分は横ナデで仕上げている。底部から強を描いて綱く体部に、外寄する立ち上がり部を作っている。受部は立ち上がりとの境に施描きの沈縫を置いて作り出している。歪みの多い器形である。	や や や 不 規	や や や 不 規 粗 以 色	
426 -20	7-1272-1 A15iN Wh2	11.8 13.1 4.8 -	全体の1/3が残る。底部外面の1/2が鏡削りされる。他の部分は横ナデで仕上げている。腰は張らず、底部から強を描いて口縫部まで強く、深めの漏斗形になる。立ち上がり部は直立気味で、受部は斜め上に引き出している。海手の作りになっている。	や 良 暗	や 良 暗 粗 い い 色	
427 -20	7-1005-4 A15fS Whc	15.5 -	环部の1/4が残る。残っている部分は横ナデで仕上げられている。环体部の中ほどには内側に沈縫を置いて、しっかりと綱く腰を作り出されている。受部はU縫部に近付くほど、薄く作られ、口縫部は薄い却面を作っている。	や や や 不 規	や や や 不 規 粗 良 色	
428 -20	7-736-4 A15iN Wh	14.0 -	环部の1/3が残り、脚部を欠く。环体部外面が鏡削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の环部で、口縫部の先がやや外反する。口縫部下方には2条の沈縫が描かれている。腰との付け根は、横ナデしている。全体的に薄い作りになっている。	良 良 暗	良 良 暗 粗 い い 色	
429 -20	7-970-1 A15iS Whb	- 9.2	脚部の3/4が残る。残された部分は横ナデで仕上げている。円筒の脚がハの字に開き、脚部は却面を作っている。	や 良 白	や 良 白 粗 い い 色	

番号 写真図版	登録番号	法量cm 口 深 径 器 底 高 度	技法・調査等の特徴	胎土成色	
				出土位 置	胎 燒 色
器種・形態・時期					
430 -20	7-931-4	-	坏部を欠き脚部のみ。脚部中間に2条の沈線を置く。全体がナデ仕上げ。脚部は、ハの字に開いて広がり、そのまま終わる。	や 良 晴	や 灰 い い 色
須 高 环 F	A15gS VII	8.0			
431 -21	7-931-1	11.4	完形品。天井部外側の1/3は削り落とし、他の部分は内外ともに横ナデ仕上げ。半球形に近い器形となり、肩の部分には沈線を聞き継ぎを作り出している。	良 良 白	良 白 い い 色
-19		4.8	口縁部は直立気味になり、内面にも浅い沈線を置く。		
須 杯 蓋 G	A15gS VII	-			
432 -21	7-965	11.8	全体の2/3が残る。天井部の外面が鋸削りされ、天井部に内当て筋が残っている。他の部分は横ナデで仕上げている。体部の先を屈曲させて口縁部を作っている。	や 良 晴	や 灰 い い 色
須 杯 蓋 G	A15gS VIIb	4.2	この曲面部には2条の沈線を置いて口縁部と体部を画している。天井部が平らで、台形状の器形となり、全体に薄手の作りで口唇部は丸く作っている。		
433 21	7-792-4	11.2	全体の1/2が残っている。天井部外面が鋸削りされ、禾本科植物の土痕が付されている。側半は半球形の体部の先端を、内側に屈曲させて口縁部を作っている。口縁部は外輪気味になり、口唇部は丸く作る。全体的に薄手の作りになつていい。	や 良 暗	や 灰 い い 色
須 杯 蓋 G	A15gS VII	4.1			
434 21	7-1010-4	11.7	全体の1/3が残る。天井部外面は鋸削りされるが、自然軸が多量にかかって観察できない。半球形の先をやや屈曲させ、底に沈線を置く器形を作っている。口縁部は僅かに内輪して作り、口唇部を丸めをたてて作っている。	や 良 白	や 灰 い い 色
須 杯 蓋 G	A15gN VIIc	4.5			
435 -21	7-792-7	11.5	全体の3/4程度が残る。天井部外面が鋸削りされる。他の部分は横ナデで仕上げている。体部の下半に沈線を置いて、口縁部と体部を画している。天井部から体部にかかる部分で屈曲している器形である。口縁部は外傾し口唇部は丸く作っている。器形に焼き進みがある。	良 良 暗	良 白 い い 色
須 杯 蓋 G	A15gS VII	3.9			
436 21	7-736-3	11.1	全体の1/2が残る。天井部外面が鋸削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。側半は半球形の体部の下半に、浅い沈線を置いて口縁部を画している。口縁部はやや内輪気味となり、口唇部はやや尖る。	や や 褐	や や 不 良 色
須 杯 蓋 G	A15gN VII	-			
437 -21	7-937	11.1	完形品。天井部外側は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描いて続く体部の先を、少し屈曲させて口縁部を作っている。口縁部の内側に凹窓状の沈線を置き、口内部を薄くし、丸く作っている。外面全体が摩滅している。	良 良 灰	良 白 い い 色
-19		4.0			
須 杯 蓋 G	A15gN VIIa	-			
438 -21	7-931-6	11.3	体部の1/3が残る。天井部外面は、粗いへラ削り、他は内外ともに横ナデ。天井部には指圧状の内当て筋が残る。体部は深めて器形的には天井部から口縁部に渡るややカーブを描いて続き途中で屈曲せず、口縁部はやや聞きぎみに直立する。薄手の作りである。	良 良 褐	良 白 い い 色
須 杯 蓋 G	A15gS VII	4.0			
439 -21	7-797	10.2	完形品。天井部外面は鋸削りされる。他の部分は横ナデで仕上げられる。天井部から、弧を描いて続く体部の先を、やや前で口縁部を作っているが、体部と口縁部の境は判然とはならない。口唇部は丸く、全体的には雑な作りである。内部は炭化物が付着して黒っぽい。	や 良 灰	や 良 粗 い 色
-19		3.1			
須 杯 蓋 G	A15gS VII	-			
440 -21	7-769-1	8.9	完形品。底部外側は鋸削りされ、×印の箇記号がある。他は横ナデで仕上げている。側半は平滑な体部に内輪する立上がりが付く、受部は斜め上に引出されて作られている。	良 良 暗	良 白 い い 色
-19		11.2			
須 杯 身 G	A15gS VII	3.6			
441 -21	7-1467	9.7	完形品。底部外側は鋸削りされ、底部を平底気味に作っている。他は横ナデで仕上げている。側半は半球形の体部の先に、内輪する爪形の立上がりが付く。受部は立上がりとの境に、跳躍の沈線を置いて、体部の延長方向に作っている。底部を平底気味に作っている。	や 良 灰	や 粗 い 色
-19		11.6			
須 杯 身 G	ホ-9 VII	4.2			
442 -21	7-921	9.3	完形品。底部外側の1/3が鋸削りされ、他の部分は横ナデ仕上げされる。半球形の体部に内輪する低い立上がり部が作られ、受部は斜め上方に作かに引出される器形となる。全体に厚手の作り。二次火力で赤変している部分がある。	粗 や 褐	粗 や 不 良 色
-19		10.6			
須 杯 身 G	A15gN VIIa	4.0			
443 -21	7-998	9.5	全体の3/4が残っている。底部外側は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げる。弧を描く体部の先に内輪する立上がりを付けている。受部は、跳躍の沈線を立上がりとの境に置いて、しっかりと作っている。	良 良 暗	良 白 い い 色
-19		11.5			
須 杯 身 G	A15gS VIId	-			
444 -21	7-1502 2	9.2	全体の1/2が残る。底部外側は鋸削りされるが、中心部分は未調査。他の部分は横ナデで仕上げている。底部から直線的に立上がる体部に、内輪する立上がりが付けられている。底部外側には木本科植物の斑紋が付されている。	良 や 灰	良 白 い い 色
-19		11.2			
須 杯 身 G	A15hN VIIb	4.4			
		-			

番号	押岡 写真版画	登録番号	法華cm 口 種 属 山土位質 洞 器部 高 深	枝法・調整等の特徴	胎土成調	
					胎	土成調
445	21	7-790-3	10.2 12.8	全体の3/4が残る。底部外面は削りされ、底面を平らにしている。他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて続く体部に、内側する爪形の立上がりが付く、受部は、立上がりの基部に、窓焼きの沈線を置いて、斜め上方に作られている。	良 良 黒	いい いい 色 灰
須杯身G		A15fS VII	-			
446	21	7-776	8.7	完全形。底部外面が削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。底部からや曲組して続く体部の先に爪形の立上がりを作っている。立上がりの基部に、窓焼きの沈線を置いて受部を画している。逆台形の浅い器形になる。	良 良 黒	いい いい 色 灰
須杯身G	-19		10.3			
447	21	7-736-2	9.4 11.5 3.5	全体の1/3が残る。底部外面の2/3が削りされ、底面は平らに作っている。他の部分は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて続く体部の先に、内側する爪形の立上がりが作られる。立上がりとの境に窓焼きの沈線を置いて受部を画している。体部外面には記号が付されている。	良 良 黒	いい いい 色 灰
須杯身G		A15iN VI	-			
448	21 19	7-830 1	9.0 10.9 3.6	完全形。体部は内外両とも横ナデ仕上げ。体部下半の外面は軽くへラ削りされ、木本科植物の丘陵が残る。底部前面には内当て痕が残る。立上がり部は低く内側する。受部は窓焼きでなく横に僅かに引き出される程度である。受部下方に沈線状の凹線が付けられる。	良 良 灰	いい いい 色 灰
須杯身G		A15gS VII	-			
449	21	7-792 6	9.2 10.8 3.4	全体の1/4程度が残る。底部外面は、削り幅の広い削りで、窓削りされ、木本科植物の丘陵が残されている。他の部分は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて受部へ続く体部に、爪形の立上がりが付けられる。受部は、立上がり部との境を、四回線状に横ナデして斜めに引出されている。	や 良 黒	粗 い 色 灰
須杯身G		A15fS VII	-			
450	21	7-935-2	9.3 10.8 3.2	全体の1/3が残る。底部外面が削りされ、他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて続く体部の先に、内側する低い立上がりが付き、受部は体部の先を捻り出すようにして作っている。全体に厚手の作りで、浅い器形になる。外面には自然釉がかかっている。	や 良 暗	粗 い 色 灰
須杯身G		A15eN VIIa	-			
451	21	7-931 5	13.4	环部が残り脚部を欠く。2条の沈線が、体部外面に2段にある。环底部はへラ削り、他の部分は横ナデによって窓焼きを整えている。底部から弧を描いて口縁部に至る半球形となり、口部は肥厚させ面を作っている。	や 善 灰	粗 通 色
須高环G		A15gS VII	-			
452	21	6-3616	-	全体の1/2が残る。环底部外面が削りされ。他の部分は横ナデで仕上げている。半球形の环部に、ハの字に開く窓を持つている。环部の上半に2本の沈線を置いているが、以上を欠いている。脚は高く無窓で脚裾端部は丸みを持つ、器壁も厚く作っている。	粗 良 白	いい 色 灰
須高环G		A15iN VII	13.5			
453	21	6-3588-1	-	环部を欠き、脚部が残る。环底部にはナデ痕が残る。他は横ナデで仕上げている。ハの字に開く脚で脚窓は三角に作っている。	良 良 灰	いい 色
須高环G						
454	21 19	7-952-6	-	环部を欠く。环底部外面は窓削りされ、脚と接する部分は横ナデしている。脚は横ナデで仕上げている。脚は一日ハの字に開き、次に先端部を内側に屈曲させ踏張った形になっている。脚部の口唇部坦面が下に向かわれる。透かし孔は、四方に開けられている。	良 良 暗	いい 色 灰
須脚付盖G		A15eN VIIc	10.0			
455	21	7-789	-	体部を欠き、脚部が残る。底部外面は窓削りされ、踏張るようにしっかりした高台が付く。脚は内外両面から横ナデされている。他は横ナデで仕上げている。底部から弧を描いて続く体部は薄手の作りになっている。	良 良 灰	いい 色
須脚付蓋G		A15eS VI + VII	9.2			
456	21	6-3588-2	-	体部を欠き、脚部が残る。全体は横ナデで仕上げている。底面は糸切り底で、横に踏張るような、しっかりした高台が付けられている。全体に炭化物が付着する。	良 良 灰	いい 色
須脚付蓋G		ホ-6 VII	9.4			
457	21	7-935-3	8.8 - 3.1	全体の1/2程度が残る。天井部外面は窓削りされ、口の記号が付されている。他は横ナデで仕上げている。天井部から弧を描く体部の先を、屈曲させて口縁部とし、扇曲部には浅い沈線を置いて体部と口縁部を画している。口部はやや内彎し、口部は丸く作っている。	良 良 褐	いい 色 灰
須杯蓋H		A15eN VIIa	-			
458	21	7-1157	9.2 - 3.5	全体の1/2が残る。天井部外面の1/3を窓削りしている。他の部分は横ナデで仕上げられる。腰の部分で屈曲しほば直立する口縁部を作る。屈曲する部分に窓による沈線を置き、体部と口縁部を画している。口部は丸く作る。薄手で小形の作り。	良 良 暗	いい 色 灰
須杯蓋H		A15hS VII	-			
459	21	6-3588-3	10.2 12.8 3.8	全体の1/2が残る。底部外面は窓削りされ、平底に作っている。他は横ナデで仕上げている。逆三角形に近い体部の先端に、高い立上がりが付く。受部は体部の延長として作られている。受部が高く、立上がりが低くなる。受部と立上がりの境は横ナデで凹線状に作っている。	や や 不 褐	粗 良 色 灰
須杯身H		ホ-6 VII	-			

押 国 番号	登 錄 番 号	法量cm	技 法・調 整 等 の 特 徵	胎 焼 成 色
写 真 国 版	出 土 位 置	口 銅 器 底		
器種・形態・時期		銅 器 底		
須 杯 身 H	460 -21	7-745-1	8.2 完形品。底部外面は鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部の先に、断面三角の立上がりを張り付けて作り出している。立上がり部は受部より上には出ない。	や 良 灰 粗 い 色
須 杯 盖 I	461 -21	7-839	9.9 完形品。天井部外面は鋸削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。天井部外面には中央の深んだ掘が付けられている。大井部から弧を描いて続く体部の先に内傾する立上がりが付けられている。体部の延長部が受部となり、身受部を作っている。	や 良 灰 粗 い 色
須 杯 盖 I	462 -20	A15gN VII	11.6 12.9 完形品。天井部外面の2/3は鋸削りされ、宝珠形の掘が付けられている。天井部には内当て窓が残っている。弧を描いて続く体部の先にY字形に見受け作っている。見受け部は、立上がり部分が僅かに受部より下に出ている。外面全体に自然釉がかかっている。	や 良 灰 粗 い 色
須 杯 身 I	463 -21	7-824	3.1 3.5 12.3 完形品。天井部外面の2/3は鋸削りされ、宝珠形の掘が付けられている。天井部には内当て窓が残っている。弧を描いて続く体部の先にY字形に見受け作っている。見受け部は、立上がり部分が僅かに受部より下に出ている。外面全体に自然釉がかかっている。	や 良 灰 粗 い 色
須 杯 身 I	464 -21	A15gS VIIa	4.4 12.3 体部の1/2を残す。底部は切り離し度が残り未調整で、他の部分は横ナデで仕上げされている。ノタメが顯著。体部は、腰の部分で緩く屈曲して、やや開き気味で口縁部へと立ちがっていく器形となっている。口縁部の内側に浅い沈線を聞き口唇部をやや外反させる。	良 や 灰 粗 い 粗 い 色
須 杯 盖 J	465 -21	6-3548	2.8 12.8 完形品。天井部外面の1/2が鋸削りされ、頂部に宝珠形の掘が付けられている。他は横ナデで仕上げている。偏平な弧を描く体部の先端を二角に折曲げて環の着としている。	良 良 暗 灰 粗 い 色
須 杯 盖 J	466 -20	ホ-6 VII	14.6 完形品。天井部外面の1/2が鋸削りされ、宝珠形の掘が付けられている。他は横ナデで仕上げられる。弧を描いて続く体部の先を折曲げ三角に作っている。	良 や 白 不 良 い 良 好 色
須 杯 盖 J	467 -21	7-771	4.6 17.0 全体の4/5が残る。天井部外面が鋸削りされ、頂部に偏平な宝珠形状の掘が付けられる。他の部分は横ナデで仕上げている。弧を描いて続く体部の先端を折曲げた器形になっている。内面にはノタメが顯著である。外面には全体に自然釉がかかっている。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 杯 身 J	468 -21	A15fN VII	4.0 15.9 全体の1/2が残る。底部外面が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。高台は底部の外寄りに、外反するように付けられる。口縁部は底部から屈曲し、斜め上方に聞き口唇部は丸く作って終わる。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 杯 身 J	469 -21	6-3559-2	4.1 11.1 全体の1/3が残り、底部の一添を欠く。全体を横ナデで仕上げている。平底に作り、開き気味に立上がるU字形となる。先端を少し外反させて口唇部を丸く作る。小形である。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 杯 身 J	470 -21	ホ-6 VII	13.0	
須 杯 身 J	471 -21	7-1272-2	4.0	
須 杯 身 J	472 -21	A15iN WB2	-	
須 杯 身 J	473 -21	6-3587	13.9 全体の3/5が残る。底部外面が鋸削りされ、他は横ナデで仕上げている。半球形の体部で口縁部の先が外壁と口唇部を丸く作っている。全体に薄手の作りで外面の器壁もノタメが顯著である。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 杯 身 J	474 -21	ホ-6 VII	4.9	
須 杯 身 J	475 -21	7-931-9	-	
須 搢 鉢 J	476 -21	A15gS VII	14.0 体部の1/2が残り、底部を欠く。外面上半には、カキ口が施され、2本銀の沈線が、2条置かれている。沈線の間にねじれの連続斜線が付されている。内面の使用による摩耗は少ない。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 搢 鉢 J	477 -21	7-840	17.8 口縁部を欠き、体部が残っている。ほぼ球形に近い制部の右側の1/3程度が鋸削りされ、左側は横ナデで仕上げている。左端は円板で密封した後に横ナデしているが折頭部の凹凸が残る。別作りの制部からは横ナデで仕上げている。制部から体部にかけて自然釉がかかっている。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 橫 瓶 G	478 -21	A15gN VII	-	
須 橫 瓶 G	479 -21	7-841	18.1 口縁部と体部の一部を欠く、卵形の体部の左側1/3程度が鋸削りされている。左側面は器壁が剥落している。円板で密封した右端は丁寧なナデで充填した痕跡を残さない。別作りの制部は横ナデで仕上げている。制部の上半に自然釉がかかっている。側面にはX印の捺印跡がある。	良 良 白 粗 い 良 好 色
須 橫 瓶 G	480 -21	A15gN VII	-	

A16区

須 高 壁 A	471 -22	7-1151	15.4	环部の2/5程を欠く。环底部の外表面が鋸削り、他は横ナデ仕上げ。環状飾りは1か所のみ。环底部内面には内当て窓と思える青海波状のタタキ目が残る。制部には三角の透かしが二方に作られ、脚部は細く尖って終わる。胎土には白石粒が混入し断面にはあざき色をしている。焼成も良い。綠釉を帯びた灰褐状の自然釉。	良 良 白 粗 い 質 色
須 高 壁 A	472 -20	A16bn VII 最下層	10.8		

押 罫 番号 写真版面 器種・形態・時期	登録番号	法量cm 山 土 位 置 口 縫 器 底	技 法・調 整 等 の 特 徵	胎 土 成 潤	
				燒 成 色	
472 -22 須 杯蓋B	7-857-1 A16aN VIII	12.2 4.2 -	全体の1/4が残るのみ。体部外側はJ字な箇所で、その1/2程度が仕上げられている。腰の部分には模様がしっかりと作りられ、全体的に薄手でシャープに作られている。口唇部はやや厚くなり坦面を作る。	良 良 暗	いい 色 灰
473 -22 須 杯蓋B	7-1146 A16bN VII	12.5 5.1 -	完形品。天井部の外面は2/3が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部分には模様を作り出している。後の部分で体部が直立するように曲がり口縫部となる腰の張った状態となる。口縫部は粗面を作りて内傾する。体部に輕石状の物が触感している。胎土に砂が少量混入。灰褐色の自然風。	良 良 灰	いい 色 灰
474 -22 須 高杯蓋C	7-872 A16aS VII	14.4 5.5 -	完形品。天井部の外面は2/3が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げ。腰の部分には内當て模様を残している。他是横ナデで仕上げている。大井部から弧を描いて続く体部は、曲面して口縫部を作る。この屈曲部に沈線を置いて腰を作り、口縫部と体部を繋ぐ。口縫部は直立し口縫部は内傾する面を作っている。	や や 不 良	粗 良 色 灰
475 -22 須 杯身C	7-913-4 A16aS VIIa	10.6 13.0 4.3 -	全体の1/2が残る。底面部外面の1/3は静止の箇所を行った後に静止ナデで仕上げている。底面部内面には内當て模様を残している。体部は厚手の作りで、内傾する立上がりとなり、口縫部は丸く作る。	良 良 暗	いい 色 灰
476 -22 須 杯身C	7-913-2 A16aS VIIa	12.1 14.8 5.0 -	全体の1/3が残る。体部外面の半分程が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げ。立上がり部はやや内傾し、口縫部は坦面を作りて内傾させる。底面部の内面には内當て模様が残される。器形的にはやや深めで、比較的角めの作りとなっている。	や 良 白	粗 い 色 灰
477 -22 須 杯身C	7-913-5 A16aS VIIa	14.6 - ? -	全体の1/2が残るが、口縫部を丸く。体部外面の1/3程が箇所で、切り離し部分は未調整。底面部の内面には内當て模様が残る。体部は深めで受部は横に引出すように作っている。	良 良 白	いい 色 灰
478 -22 須 杯身C	7-913-8 A16aS VIIa	12.4 14.8 5.0 -	全体の1/3が残る。底面部外面の1/3程が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げ。底面部の内面には内當て模様が残る。全般的に作りは薄く、内傾する長めの立上がり部となる。口縫部は顯著ではないが坦面を作っている。	良 良 灰	いい 色 灰
479 -22 須 杯身C	7-1327-1 A16aN VIIb	15.0 - -	全体の1/3が残り底部を欠く。底面部外面の1/3が箇所で仕上げられて、他の部分は横ナデ仕上げ。口縫部は体部から内傾して続き、先端部を直立させて長めの立上がり部となる。全体に薄手の作りになっている。	や 良 暗	粗 い 色 灰
480 -22 須 杯蓋D	7-1170-1 A15hS VII A16bS VII	14.1 4.7 -	全体の1/2が残る。天井部の外面の1/3が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げされる。器形は、やや平らな大井部から緩やかなカーブを作りて口縫部に続き、腰の部分には模様を作りて口縫部と体部の境となっている。全般的に薄手の作り。天井部に内當て模様と腰模様がある。	良 良 灰	いい 色 灰
481 -22 須 杯蓋D	7-1170-3 A15hS VII A16bS VII	13.7 - 4.4 -	全体の1/3が残り天井部を欠く。天井部外面の1/3が箇所で仕上げられて、他の部分は横ナデ仕上げ。体部は、腰の部分に模様を作り、腰以下の口縫部を直立させる。口縫部の先端は、一目薄くなり、口縫部は丸く作る。全体に薄手の作りとなっている。	や 良 灰	粗 い 色 灰
482 -22 須 杯蓋D	7-913-3 A16aS VIIa	14.8 4.6 -	全体の1/4が残る。大井部外面が箇所で、他の部分は横ナデされる。大井部には内當て模様と静止ナデが残っている。腰の部分には両側に沈線を置くようにして作った模様がある。胎土から立ち上がり気味に口縫部が作られ、深めで薄手の坦面となっている。	や 良 青	粗 い 色 灰
483 -22 須 杯蓋D	7-885 A16aS VII	15.5 4.2 -	全体の3/4が残る。体部外面は1/3が箇所で仕上げられる。腰部の模様は顯著ではないが作り山されている。器形としては深めの蓋である。口縫部は内傾する面を作り。全体に薄い作りとなっている。	粗 良 青	いい 色 灰
484 -22 須 杯蓋D	7-1170-2 A15hS VII A16bS VII	13.7 - 4.3 -	全体の1/3が残り天井部を欠く。天井部外面の1/3が箇所で、他の部分は横ナデ仕上げ。体部は、腰の部分に沈線を置いて腰を作り、立ち上がり気味の口縫部となる。口縫部は、内傾した坦面を作る。	良 良 黑	いい 色 灰
485 -22 須 杯蓋D	7-884-1 A16aS VII	15.4 4.3 -	全体の1/2が残る。天井部外面は1/3ほどが箇所で、切離し部分は未調整。天井部には内當て模様をナデ消した痕跡が残る。口縫部外面が横ナデ。腰が張らずに、体部からならかに口縫部へと続く、浅めの器形となる。	良 や 白	いい 色 灰
486 -22 須 杯蓋D	7-912-2 A16aS VIIa	15.0 - 4.3 -	全体の1/3が残り天井部を欠く。体部は厚手に作られ全般的にシャープさを欠く。天井部には内當て模様を消したためか、静止ナデが残る。体部には焼け馳ったような部分もあり。詳細な調整法は不明。	良 や 白	いい 色 灰

番号 写真版面 器種・形態・時期	登録番号 出土位置	法單cm 口 径 深 度 底 部 高 度	技法・調査等の特徴		土 成 色 調
			横 径 高 度	底 部 高 度	
			横 径 高 度	底 部 高 度	
487 -22	7-883-2	15.2 - 3.7 -	全体の1/2が残る。天井部外面は鋸削りされ、底部分は静止剝離で平らに作られている。天井部は静止ナデで調整している。他は横ナデで仕上げている。底部から口底部まで弧を描いて継ぐ形で、取立てて口縫部を意識して作っている。	や 良 暗	や 粗 い 色
488 -22	7-1324-5	?	全体の1/4が残り、口縫部を欠く。底部外面のほとんどが剝離り、他は横ナデによって仕上げられる。底部の内面には指痕压痕があり、同じく底部の外面上に静止ナデの痕跡が残される。底部と脚部に接する部分が曲り、内傾するV上上がり部を持つ厚めの器形となる。	や や 灰	や 粗 良 色
須 杯身 D	A16aS VId	15.1 - - -	全体の1/3が残り底部を欠く。底部外面の1/2程が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。底部の内面は静止のナデ痕があり、内當て底を消したものと思われる。腰のやや張る器形となり、内傾した長めの立上がりが付けられる。	良 良 暗	良 不 良 色
489 -22	7-913-7	12.3 - - -	全体の1/3が残り底部を欠く。底部外面の1/2程が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。底部の内面は静止のナデ痕があり、内當て底を消したものと思われる。腰のやや張る器形となり、内傾した長めの立上がりが付けられる。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 D	A16aN Vlb	14.9 - 4.4 -	全体の1/2が残り底部を欠く。底部外面の1/3が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。腰がやや張り内傾する立上がり部を持つ器形となる。口縫部は先端が細くなり丸くなつて終わる。	良 良 暗	良 いい 色
490 -22	7-1324-2	14.9 - 4.4 -	全体の1/2が残り底部を欠く。底部外面の1/3が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。腰がやや張り内傾する立上がり部を持つ器形となる。口縫部は先端が細くなり丸くなつて終わる。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 D	A16aN Vla	12.2 14.9 ?	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外面の1/2程度が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。器形は体部から受部にかけて直線的に立上がり、内傾する受部が作り出されている。全体に厚手の作り。	良 良 暗	良 いい 色
491 -22	7-912-1	15.6 - ?	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外面の1/3程が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。体部は底部から受部にかけて腰やかなカーブを作り、外反する短い立上がり部が付く、浅めの器形となる。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 D	A16aS Vla	9.6 9.6 -	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外面の1/3程が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。体部は底部から受部にかけて腰やかなカーブを作り、外反する短い立上がり部が付く、浅めの器形となる。	良 良 暗	良 いい 色
492 -22	7-913-6	13.2 15.6 ?	全体の1/4が残り底部を欠く。底部外面の1/3程が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。体部は底部から受部にかけて腰やかなカーブを作り、外反する短い立上がり部が付く、浅めの器形となる。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 D	A16aS Vla	15.7 - 9.6 9.6	全体の2/3が残る。環部の底盤外表面が鋸削り、他は横ナデ仕上げ。环部と脚部の外面に自然軸が描かれ調整法が一部不明。腰の張る浅めの環部で、ハの字形に開く脚部の付く器形となる。	良 良 暗	良 いい 色
493 -22 -20	7-1325-1	15.7 - 9.6 9.6	全体の2/3が残る。環部の底盤外表面が鋸削り、他は横ナデ仕上げ。环部と脚部の外面に自然軸が描かれ調整法が一部不明。腰の張る浅めの環部で、ハの字形に開く脚部の付く器形となる。	良 良 暗	良 いい 色
須 高环 D	A16aN Vlb	13.8 - 3.9 -	体部の1/2が残される。天井部の外表面の1/3程度が剝離りされ、他は横ナデ仕上げ。体部と口縫部の境に縫を作り出して、やや腰の張った深めの器形の环部である。作りは薄い。	や 良 暗	や 粗 い 色
494 -22	7-1324-3	13.8 - 4.5 -	全体の1/3が残されるが、口縫部の張りが少ない。腰の部分に2本の沈線を置き縫縫を作り出している。天井部外面は剝離りによって平らになり、天井部の内面に当て底が残る。	や や 良 暗	や 粗 良 色
須 杯蓋 E	A16aN Vlb	13.2 - 4.8 -	全体の1/2が残る。天井部外面は剝離りされるが、頂部は切離し表を残し、未調査。他は横ナデ仕上げている。脚部に焼け歪みがあるが、体部下半で、底盤をやや開口させ口縫部を作り出している。肩曲は大きくて、そのまま口縫部へと続き口底部は尖り気味に終わっている。	良 良 暗	良 いい 色
495 -22	7-849-1	13.8 - 4.5 -	全体の1/3が残されるが、口縫部の張りが少ない。腰の部分に2本の沈線を置き縫縫を作り出している。天井部外面は剝離りによって平らになり、天井部の内面に当て底が残る。	や や 良 暗	や 粗 良 色
須 杯蓋 E	A16aN VII	13.2 - 4.8 -	全体の1/2が残る。天井部外面は剝離りされるが、頂部は切離し表を残し、未調査。他は横ナデ仕上げている。脚部に焼け歪みがあるが、体部下半で、底盤をやや開口させ口縫部を作り出している。肩曲は大きくて、そのまま口縫部へと続き口底部は尖り気味に終わっている。	良 良 暗	良 いい 色
496 -22	7-883-1	13.2 - 4.8 -	全体の1/2が残る。天井部外面は剝離りされるが、頂部は切離し表を残し、未調査。他は横ナデ仕上げている。脚部に焼け歪みがあるが、体部下半で、底盤をやや開口させ口縫部を作り出している。肩曲は大きくて、そのまま口縫部へと続き口底部は尖り気味に終わっている。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯蓋 E	A16aS VId	14.4 - 4.2 -	全体の1/4が残る。立上がりも高く、全体的に薄手に作られている。体部は腰が張らずに直線的で浅い器形となる。外面の体部中ほどから受部にかけて自然軸が付着。底盤は静止の剝離り。	良 良 暗	良 いい 色
497 -22	7-907-1	14.4 - 4.2 -	全体の1/4が残る。立上がりも高く、全体的に薄手に作られている。体部は腰が張らずに直線的で浅い器形となる。外面の体部中ほどから受部にかけて自然軸が付着。底盤は静止の剝離り。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 E	A16aS VII	12.0 13.9 5.1 -	全体の2/3が残る。体部外面のほぼ半分が剝離り。他は横ナデ仕上げ。内面全体に火彌れがあり調査法がはっきりしない。体部は腰やかなカーブを持ち、立上がり部は直線的。	良 良 暗	良 いい 色
498 -22 -20	7-1324-1	12.0 13.9 5.1 -	全体の2/3が残る。体部外面のほぼ半分が剝離り。他は横ナデ仕上げ。内面全体に火彌れがあり調査法がはっきりしない。体部は腰やかなカーブを持ち、立上がり部は直線的。	良 良 暗	良 いい 色
須 杯身 E	A16aN Vlb	13.0 - 4.7 -	全体の1/3が残る。天井部の外表面は平らに剝離りされる。腰の部分には沈線を置いて体部と口縫部を画しているが、腰やかに口縫部へと立上がり気味に続く。	や 良 暗	や 粗 い 色
499 -22	7-857-2	13.0 - 4.7 -	全体の1/3が残る。天井部の外表面は平らに剝離りされる。腰の部分には沈線を置いて体部と口縫部を画しているが、腰やかに口縫部へと立上がり気味に続く。	や 良 暗	や 粗 い 色
須 杯蓋 F	A16aN VId~VII	13.2 10.8 4.4 -	U縫部の1/2が残る。底盤外表面が剝離りされ、平底に作っている。厚めの底盤から直線的に続く体部の先を、肩曲させ、内傾する立上がりを作っている。受部は新めに引出されている。逆台形状に近い器形になっている。	や 良 暗	や 粗 い 色
500 -22 -21	7-883-3	13.2 10.8 4.4 -	U縫部の1/2が残る。底盤外表面が剝離りされ、平底に作っている。厚めの底盤から直線的に続く体部の先を、肩曲させ、内傾する立上がりを作っている。受部は新めに引出されている。逆台形状に近い器形になっている。	や 良 暗	や 粗 い 色
須 杯身 F	A16aS VId	12.0 - 4.9 -	全体の1/2が残る。天井部外表面が剝離りされ、他の部分は横ナデ仕上げている。偏平な球形の体部の下に沈線を置いて、口縫部を画している。口縫部は先端を内側させて作り、口縫部は丸い。全体に薄手の作りになっている。	や 良 暗	や 粗 い 色
501 -22	7-882-4	12.0 - 4.9 -	全体の1/2が残る。天井部外表面が剝離りされ、他の部分は横ナデ仕上げしている。偏平な球形の体部の下に沈線を置いて、口縫部を画している。口縫部は先端を内側させて作り、口縫部は丸い。全体に薄手の作りになっている。	や 良 暗	や 粗 い 色
須 杯蓋 G	A16aS VId	12.0 - 4.9 -	全体の1/2が残る。天井部外表面が剝離りされ、他の部分は横ナデ仕上げしている。偏平な球形の体部の下に沈線を置いて、口縫部を画している。口縫部は先端を内側させて作り、口縫部は丸い。全体に薄手の作りになっている。	や 良 暗	や 粗 い 色

押 国 番号	登録番号	法環cm 口 横 径 高 度 出上位置	技 法・調 整 等 の 特 徵	胎 燒 成 調	
				胎 燒 色	成 調
器種・形態・時期					
須 杯蓋 G 502 -22	7-882-1	11.6	完形品。入井部外面が鉗削りされ、天井部には静止のナデ痕が残っている。他の部分は横ナデで仕上げている。大井部から張を描いて軸と体部に沈縫を留めて、種を作り、「口縫部」と画している。口縫部はやや内側し口唇部を丸く作っている。	や 良 灰	や 粗 い 色
須 杯蓋 G 503 -22	7-914-1	11.1	全体の1/3が残り天井部を欠く。天井部外面の1/3程が鉗削りされ、他は横ナデ仕上げ。ただし天井部外面の中心部分は鉗削りの後に静止ナデしている。腹の部分は2本の線を纏めて縫をなしてある。口縫部は直立気味になり、深めの器形となる。	や 良 灰	や 粗 い 色
須 杯蓋 G 504 23	7-907-2	11.5	全体の1/4を残す。頂部分が鉗削り、体部は内外共に横ナデ仕上げ。大井部分に静止ナデが残っている。口縫部は立上がり気味になり、口縫部は丸く作る。	や 良 灰	や 粗 い 色
須 杯蓋 G 505 -23	6-3614	10.6	完形品。天井部外面は鉗削りされ、頂部は平らに作っている。他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部の先を、やや内側させて口縫部を作っている。器壁全体に摩滅が見られる。	普 良 灰	通 い 色
須 杯蓋 G 506 -23	7-880-1	11.8	全体の1/2が残る。天井部外面は鉗削りされ、他の部分は横ナデで仕上げている。偏平な半球形の体部は、そのまま口縫部まで続き、口縫部と体部の界線は判然しない。ノタメがやや顯著で、器形に重みがある。	良 良 暗 灰	い い 色
須 杯身 G 507 -23	7-1323-1	11.8	全体の1/3が残り底部を欠く。体部外面の半分程度が鉗削り、他は横ナデで仕上げている。受部は横方向に引き出され内傾する立上がりを持つ。底部の内面には指頭痕が残る。	良 良 灰	い い 色
須 短頸壺 G 508 23	7-905	10.2	全体の1/2程度が残る。底部外面が静止鉗削りされ、丸底に作られている。他の部分は横ナデで仕上げられている。肩の張る偏平な体部に直立気味の短い口縫部が作られている。体部外面下半部と口縫部から肩部にかけて自然彫がかかっている。	良 良 灰	い い 色
須 短頸壺 G 509 -23	7-871-1	24.3	全体の1/4が残る。体部外面の下部は平行のタタキ目が残る。体部上半は内外共に横ナデで仕上げている。体部内面の下部は、縫によるナデ(鉗削り?)で半滑に仕上げ、タタキ目等は残らない。肩の張る体部に広口で短頸の器形で、肩部に把手貼付けの指頭痕やナデ痕が残されるが、把手の形状は不明。	良 良 灰	い い 色
須 横瓶 G 510 -23	7-840	17.8	A15区出土上器 470の次項を見よ。		
須 横瓶 G 511 -23	A15gN VII	-	A15区出土上器 470の次項を見よ。		
須 横瓶 G 512 -23	7-882-2	24.0	口縫部の1/5が残る。直線的に立上がる口縫で、口縫部は外傾する担面を作り、下方には段(後)を盛き、柳(硝毛)による刻文、沈縫と施されている。全体は横ナデで仕上げられている。	良 良 灰	い い 色
須 豆 J	A16aS VIII	-		茶	

大溝內出土土器觀察表
(土 師 器)

土 師 器

押 図 番号 写真図版 器種・形態	登録番号	法量cm 山 棒 洞 器 器 底 高 底	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 烧 色	上 成 調	
					上	成
イ 区 IX 層						
1 - 7 上 要	7-1476 イ-7 IX	18.4 25.7 -	脚部の下半を欠く。口縁部は横ナデされる。脚部の外面は刷毛整形され、下部は、この刷毛整形の後に箇面(箇ナデ)して仕上げている。内面はナデ仕上げされる。外山全体に焼が付着する。内面は粘土の繋ぎ目が残り、下部には炭化物が付着している。胎土には砂が多く混じり、雲母も含む。	粗 良 糞	良	いい 色
2 - 7 上 要	7-1477-1 イ-7 IX	17.5 26.0 -	口縁部の3/4と脚部の1/4が残る。口縁部は横ナデされる。脚部の外面はナデ仕上げされる。内面は粘土の繋ぎ目が残り、部分的には壘状の器具でナデしている。内外面共に焼などの炭化物の付着はない。胎土に砂粒を多く含むが、焼成は良い。	粗 良 糞	良	いい 色
3 - 7 上 壊	7-1477-2 イ-7 IX	- 10.0	坏部を欠く。中ほどに脇らみを持つ円錐状の脚で、脇がハの字に開く。脚部は横ナデされる。内面は焼き出すような壘形痕と絞り目が残り、外面には整形時の指紋痕が残る。胎土には砂や藍母が混じり、焼成は良い。	や 良 黄	良	粗い 色
イ 区						
4 - 24 七 壊	7-3097-1 イ-4 VII	11.4 12.3 5.3	全体の1/3が残る。口縁部の内外を1寸に横ナデして仕上げる。体部内面はナデで平滑に仕上げ、外面下半はナデ調整の痕跡はあるが、整形時のシワや凹凸が残り未調整の部分もある。薄手で、深めの作りとなり、口縁部は大きく内側に残す。	良 普 黄	良	い 通 色
5 - 24 上 壊	7-3257 イ-5 VII	10.3 11.3 4.9	完成品。口縁部は内外から横ナデで仕上、内面はナデマワシで調整している。体部の外面には、整形時の粘りのひびれや凹凸が残り、未調整である。底部は厚く口縁部に行くに従って薄く作られる。器形的に余みがあるが、口縁部は内側にして、偏平な半球形になる。内面は茶褐色。	良 良 糞	良	いい 色
6 - 24 上 壊	7-3249-2 イ-4 VII	11.4 12.0 4.6	全体の1/2が残る。口縁部は内外から横ナデされるが、体部外面には整形時の粘土の繋ぎ目や凹凸が残る。内面はナデ仕上げされている。器壁の荒れが激しい。口縁部はやや内側して作られ、偏平な半球形になる。胎土は粗く細砂を多く含む。	粗 不 整	良	い 良 色
7 - 24 上 壊	7-3232 イ-4 VII	11.3 13.4 5.5	完成品。口縁部は内外から横ナデし、内面はナデ調整で平滑にしている。外面もナデ調整されるが整形時の凹凸を残している。底面外周は平坦面を作り平底になる。口縁部は内側に残す。胎土はやや粗く砂粒が多い。内面は赤褐色になっている。	粗 や 黄	良	い 良 色
8 - 24 七 壊	7-3108 イ-4 VII	12.5 13.5 5.2	完成品。口縁部は内外から横ナデで仕上げている。体部内面はナデマワシで平滑にしているが、外面には整形時の凹凸や粘土のシワや繋ぎ目が残っている。口縁部は内側に残し、口縁部を丸く仕上げている。胎土に砂はないが、赤色粘土粒を含む。	良 や 不	良	い 良 色
9 - 24 土 壊	7-3249-1 イ-4 VII	12.3 13.5 5.5	口縁部の1/4を欠く。口縁部は外表面から横ナデされる。内面はナデ仕上げされる。体部外周の下半には、整形痕の凹凸が残る。全体に器壁の荒れが目立つ調整法の詳細は分明でない。深めで口縁部は内側する逆台形に近い器形になる。	以 不 茶	良	い 良 色
10 - 24 土 壊	7-3097-2 イ-4 VII	12.2 13.0 5.3	全体の1/2が残る。口縁部の内外を横ナデして仕上げるが、口縁内面には刷毛の整形痕が残り、ナデ範囲の不十分さが伺われる。底部外周には凹凸が残り、未調整。口縁部は内側して作られる半球形の深めの器形。	や や 赤	良	い 良 色
11 - 24 土 壊	7-3147-2 イ-4 VII	12.2 12.9 5.1	全体の2/3が残る。口縁部は内外から横ナデで仕上げている。内面はナデやナデマワシで平滑にしているが、底部には凹凸が残る。外面は下部が落のナデで器壁が調整されている。口縁部は内側気味になる。胎土はやや粗く、砂粒も多い。	や 良 糞	良	粗い 色
12 - 24 土 壊	7-3278 イ-5 VII	12.5 13.0 5.0	口縁部の1/2を欠く。口縁部は内外から横ナデして仕上げている。内面は刷毛が擦り残るが、ナデで平滑にしている。外面下部は落の凹凸を残し未調整のままである。口縁部は内側して偏平な半球形の器形になる。胎土は緻密で良い。	良 や 黄	良	い 良 色

番号 写真図版	登録番号	法環 口 縫 刷 器 底	出土位置	技法・調整等の特徴		胎 焼 成 色 上 成 調
				逐 段 高 度		
土 环	13 -21 22	4-1134-10 12.1 13.0 4.3 -	イ-2 VII	全体の2/3が残る。口縫部は内外から横ナデして仕上げている。内面はナデマワシで平滑に仕上げている。底部外面上には菱形時の凹凸が薄く残されている。口縫部先端を内彎させ口唇部は丸く仕上げている。胎土には赤色粘土粒を含む。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
	14 -21 22	7-3143 12.2 13.1 4.7 -	イ-4 VII	全体の2/3が残る。口縫部は内外から横ナデして仕上げている。体部内面はナデで平滑にしている。外面上は上半で横ナデ及び、下半には菱形時に出来たと思われる凹凸が残る。器形は浅めで箱形に近く、口縫部は内押している。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
土 环	15 -21 22	7-3096-1 12.2 13.1 4.7 -	イ-4 VII	光形品。口縫部は内外から丁寧に横ナデして仕上げている。体部外面の下半には菱形時の凹凸が残る。浅い半球形で、口縫部が強く内彎し、底部は渋み気味の器形である。その他の調整法は分明でない。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
	16 -21 22	7-3230 12.5 13.5 4.5 -	イ-4 VII	光形品。口縫部の内外面は横ナデで仕上げている。内面はナデマワシによって平滑に仕上げている。外面上はナデ調整しているがト半筋から底部にかけては、凹凸が多く木調整。浅めの器形で、口縫部は内彎して、口唇部は丸く作っている。胎土は良く、赤色粘土粒を含む。	良 良 黄 褐色	い い 色
土 环	17 -24 22	7-3228 12.2 13.2 5.0 -	イ-4 VII	完形品。口縫部の内外面は丁寧に横ナデしている。外面上はナデ調整されるが、下半部には菱形時の凹凸が残り、底部周辺は未調整。内面はナデマワシで平滑にしている。浅めで口縫部は内押し箱形に近い器形になる。胎土は良く、赤色粘土粒を含む。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
	18 -24 22	7-3083-1 13.0 13.6 5.0 -	イ-1 VII	完形品。口縫部は外面から横ナデ仕上げ、内面はナデマワシによって平滑にしている。体部外面の下半は、菱形時の凹凸を多く残したものである。体部は強を擱いて立上がり口縫部は内押し、口唇部は丸く作っている。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
土 环	19 -24 22	7-3233 12.7 13.8 4.4 -	イ-4 VII	全体の2/3が残る。口縫部は外面から横ナデして仕上げている。内面は平滑にされ、外面上半には凹凸が残る。器形の風潮が激しく調整法の詳細は不明。胎土は良く、赤色粘土粒を含んでいる。口縫部が内彎し、浅めの箱形の器形になる。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
	20 -24 22	7-3229 13.1 13.9 4.5 -	イ-4 VII	完形品。口縫部は内外面から丁寧に横ナデしている。内面は平滑に仕上げられ、外面上半には凹凸が残る。底部外面上に平坦面を作り平底の器形にしている。口縫部は内押し、全体には逆台形に近い形になる。胎土は良く、赤色粘土粒が含まれている。	良や や 不 良 褐色	い 良 色
土 环	21 -24 23	7-3256 13.2 13.8 4.6 -	イ-5 VII	完形品。口縫部は内外から横ナデして仕上げている。内面はナデ調整で平らにし、底部外面上には凹凸が残る。いずれにしろ器壁の表面は荒れが激しく調査法の詳細は分明でない。底部はほぼ平らに作り、浅めで口縫部は内押す。胎土は緻密で赤色粘土粒を含む。	良 不 良 茶 褐色	い 良 色
	22 -24 23	7-3236 12.6 13.6 4.8 -	イ-4 VII	口縫部の1/4を欠く。口縫部は外面から横ナデし、内面はナデマワシで平滑に仕上げる。外面下半はナデ調整されるが、菱形時の刷毛目や凹凸が残る。口縫部の内彎はさして強くなく、器形的には逆台形に近く作られている。	良 や や 不 良 褐色	い 良 色
土 环	23 -24 23	7-3252-1 13.6 14.6 5.3 -	イ-4 VII	口縫部の1/4を欠く。口縫部は外面から横ナデして仕上げる。内面はナデ調整で平滑にしている。外面上もナデ調整で仕上げられるが底部近くには凹凸が残る。口縫部が大きくなり、口縫部の先端を粗面仕上げで内側にせざる。逆台形に近い形になる。	や や や 不 良 茶 褐色	粗 良 色
	24 -24 23	7-3235 13.5 14.4 5.1 -	イ-4 VII	口縫部の1/3を欠く。口縫部は内外面から横ナデし、内面は平滑に仕上げる。外面上半には凹凸が残るが、底部は平底で作っている。口縫部は底部より薄手に作られ内押している。胎土には赤色粘土粒が多く含まれている。	良 や や 不 良 茶 褐色	い 良 色
土 环	25 -24	7-1773-3 13.4 14.4 5.5 -	イ-1 VII	全体の2/3が残る。口縫部の内外面が横ナデ仕上げ、体部の内面はナデ仕上げ。底部外面上には指頭による菱形跡が残る。やや浅めの耳で口縫部が内押す。焼成があまり良くなく器壁の風化が激しい。	昔 や や 不 良 茶 褐色	酒 良 色
	26 -24 23	7-3237 12.3 13.0 4.6 -	イ-4 VII	全体の4/5を残す。口縫部は内外から横ナデして仕上げている。内面はナデマワシで平滑にされるが、外面上には、菱形時の刷毛のシワや凹凸が残っている。全体に薄手の作りで、口縫部は内押し、浅めの器形になる。	良 や や 不 良 茶 褐色	い 良 色
土 环	27 -24 23	7-3248-3 12.3 13.0 4.5 -	イ-4 VII	全体の2/3が残る。口縫部は内外面から横ナデして仕上げて、内面は平滑にしている。外面上はナデ調整しているが、刷毛の菱形痕が薄く残る。口縫部は内押するが、浅めで逆台形に近い器形に作られている。	良 良 茶 褐色	い い 色
	28 -24 23	7-3248-3 12.3 13.0 4.5 -	イ-4 VII			

押 番 号	登 録 番 号	法 規 登 録 登 録 出 上 位 置	口 徑 深 度 器 底 高 度	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 燒 色	土 成 剖		
28 土 坏	-24 23	7-3112 イ-4 VII	12.5 13.2 4.8 -	充形品。口縫部は内外から横ナデ仕上げされる。体部外面はナデ仕上げしているが、下半部には整形時の凹凸が残っている。器形は、平球形より逆台形に近く、口縫部は内彎する。器壁全体に風化が激しく調整法の詳細は不明。胎土はやや粗く細砂が多く含む。		粗不 良 黄	いい 良 色 場		
29 土 坏	-24 23	7-3279 イ-5 VII	12.3 13.1 4.3 -	充形品。口縫部は内面から横ナデ仕上げしている。内面はナデマワシで平滑にしている。体部外面には切欠が残るがナデ調整している。底部は筒状の器具で平らに切取ったよう(鋸切り?)に観察される。口縫部は内彎し、逆台形に近い形状になる。内面に焦黒している部分がある。		粗良 黄	いい 良 色 場		
30 土 坏	-24 23	7-3231 イ-4 VII	12.5 12.6 4.7 -	ほぼ充形品。口縫部は内外から横ナデ仕上げする。内面はナデ調整で平滑にし、外面部下部は整形時の凹凸や、巻上げ粘土の張目が螺旋状に残っており未調整。体部には整形後に、窓の内に置いたために付いたと思われる窓目も残る。口縫部はほとんど内彎せず、口縫部は柱状に作る。		良 良 赤	いい 良 色 場		
31 土 坏	-24 23	7-3258 イ-5 VII	12.2 12.6 5.4 -	ほぼ充形品。口縫部は内外から強めに横ナデされ、体部外面はナデで平滑に仕上げている。外面もナデ調整されているが、下半部には整形時の凹凸が残る。口縫部はほとんど内彎せず、口縫部は柱状に作る。		粗不 良 赤	いい 良 色 場		
32 土 坏	-24 23	7-1774 1 イ-1 VII	11.7 12.2 4.3 -	体部は残るが、口縫部は1/8程度しか残らない。口縫部の外表面が横ナデ仕上げ、体部の外面はナデ仕上げされているが、整形時の凹凸が残る。底部外面上にはX印の陶割りがある。器形はやや上吹気味の底部から口縫部が内彎せずに立ち上がる。胎土には砂粒や雪雲が混じり、焼成が良く表面の風化が少ない。		や 良 赤	粗 良 色 場		
33 土 坏	-24 23	7-3111 イ-4 VII	13.5 6.4 -	全体の3/4が残る。口縫部は内外から横ナデ仕上げされる。体部外面上半はナデによって仕上げ。下半部には整形時の凹凸が残り未調整。平球形で口縫部はほとんど内彎しない。口縫部の外面上には使用による摩耗痕が残る。胎土には大粒の砂が含まれる。		良 良 赤	いい 良 色 場		
34 土 坏	-24 23	7-3247 -1 イ- 4 VII	13.5 5.7 -	口縫部の3/4を欠いている。口縫部は内外面から横ナデされ、体部はナデ調整されているが、いずれにも刷毛目や粘土のシワが残されている。底部外面上には陶割りで整形されている。全体に作りは厚手で粗く、口縫部も平滑に作っていない。		良 良 赤	いい 良 色 場		
35 土 坏	-24 23	7-3069 イ- 1 VII	12.1 12.3 5.4 -	充形品。口縫部は内外から横ナデ仕上げ。体部外面の下半は窓ナデして仕上げているが、整形時の凹凸や、粘土のシワなどが残される。内面も窓ナデして仕上げているが凹凸が薄く残る。体部の作りは厚く口縫部は細く尖って仕上げている。胎土には比較的の砂が多い。		良 良 赤	いい 良 色 場		
36 土 坏	-25 23	7-3110 イ-4 VII	15.8 16.7 7.1 -	全体の1/2が残る。口縫部の外表面は、強めで丁寧な横ナデで仕上げている。体部外面は斜めの窓削りで仕上げる。内面は上半をナデで、下半を窓ナデで仕上げている。半球形で、口縫部はやや内彎する。大きく深めの器形になる。		粗良 黄	いい 良 色 場		
37 土 坏	-25 23	7-3146 イ-4 VII	16.8 17.3 9.9 -	充形品。口縫部は内外から横ナデされる。内面は窓のナデで調整し、外面も窓削り(窓ナデ?)で仕上げているが、整形時の凹凸が残る部分もある。深い窓で口縫部は僅かに内彎している。全体に作りは粗く口縫部は水平にならない。		粗良 黄	いい 良 色 場		
38 土 坏	-25 24	7-3241 イ-4 VII	14.6 6.0 -	充形品。口縫部の内外が横ナデで仕上げされる。环部内面は平滑にし、外面には刷毛目が薄く残されている。体部下半には整形時の凹凸が残る。全体に器の風化が激しく調整法の詳細は不明。腰の張る体部から口縫部を内彎気味に屈曲させた器形になっている。胎土は良く、赤色粘土を含む。		良 不 赤	いい 良 色 場		
39 土 坏	-25 24	7-3166 イ-2 VII	12.2 6.8 -	口縫部の一部を欠くがほぼ充形品。口縫部の先端を外板させ、丁寧な横ナデで仕上げている。体部の外面は刷毛形窓にナデ仕上げしているが、刷毛目、粘土のシワが残る。内面は施状器具でナデ仕上げし平滑にしている。表面の剥落が激しく調整法の詳細は不明。		良 良 赤	いい 良 色 場		
40 土 坏	-25 24	7-3248 -4 イ-4 VII	12.0 6.0 -	全体の1/2が残る。口縫部は内外から横ナデされる。内面はナデ調整で平滑にしている。外面もナデ調整されるが、整形時の凹凸が残る。体部は深めで、腰の張る深めの体部で、口縫部の先端を外反させ、口縫部を尖らせて作る。全体に薄手の作り。		や 不 赤	粗 良 色 場		
41 土 坏	-25 24	7-3109 イ-4 VII	12.7 5.7 -	充形品。口縫部は内外から横ナデされる。体部内面はナデマワシで平滑にしている。体部外面はナデ調整されるが、整形時の凹凸を残している。体部は深めで、口縫部は内彎し(窓)内面は傾斜する面を作る。胎土には細砂が混じり、器表の赤色粘土が化粧土のように覆っている。内面は赤色。断面は茶色。		や 不 赤	粗 良 色 場		
42 土 坏	-25 24	7-3142 イ- 4 VII	13.7 13.8 5.4 -	充形品。口縫部は内外から横ナデ仕上げされる。体部内面はナデマワシで平滑にしている。体部外面はナデ仕上げしているが、下半部には整形時の凹凸と窓目が残っている。器形は、半球形で口縫部はやや内彎し、口縫部は内傾する面を作っている。		や や 赤	粗 良 色 場		

番号 写真図版	登録番号	法華cm 口径 深さ 調査 器種・形態	出土位置 イ-4 VII	技法・調整等の特徴		胎 焼 成 色 良 好
				口 径 深 度	底 径	
				深 度	底 径	
43 -25 -24	7-3234 1	12.2 12.6 5.0 -	ほぼ完形品。口縁部は内外から横ナデしている。内面は刷毛によるナデ痕がのこり、外面上には粘土の巻きめ、指により跡跡を残す。底部には木葉模が残り同様に未調整。全体に作りが粗く口唇部も水平にならない。	粗 良 好	いい 色 褐	
44 -25 -24	4-1136-2	12.9 -	口縁部の1/8が残る。口縁部は内外から強く横ナデされ、先端を外反気味に作り、口唇部を丸くする。底部には整形時の粘土のシワが残る。内外共に内壁に削りされている。	良 良 好	いい 色 褐	
45 -25 -24	4-1135-3	13.9 -	口縁部の1/4が残る。口縁部は内外から強く横ナデされ、先端を外反気味にする。底部に近い部分には整形時の粘土のシワが残る。内外共に内壁に削りされている。胎土は粗く砂が多い。	粗 良 好	いい 色 褐	
46 -25 -24	7-3267	15.1 9.4 9.0	完形品。口縁部と脚部は内外から横ナデ仕上げしている。环底部と脚部の外表面は未調整。脚内面は鋸削りで整形している。环底部の焼き歪みが大きく、器壁の荒れも激しい。調整法の詳細は不明。脚はなだらかにハの字に開く器形。	や 不 良	や 粗 良 色 褐	
47 -25 -24	7-3056	14.9 -	环部の1/3、脚部の1/2を欠いている。口縁部は内外ともに横ナデで仕上げされ、环底部の外表面は未調整で凹凸が残る。环内部は底盤形の後にナデマワシで平滑に仕上げている。脚はハの字に開き、脚部が屈曲して一段と横に開く形になる。脚部は内外から横ナデし、内面は鋸削りで整形している。	や 良 赤	や 粗 い 色 褐	
48 -25 -24	7-3262	15.4 -	口縁部の1/4を欠く。口縁部と脚部は内外から横ナデし、环内部はナデで平滑にしている。环底部と脚部の外表面は整形痕を残すで未調整。脚内面は鋸削りで整形し、天井部は粘土突起を押された指頭压痕がある。ハの字に開く脚は、脚で横に屈曲してさらに開く。胎土はやや粗く砂が多く含む。	や 普 通	や 粗 通 色 褐	
49 -25 -24	7-3068	15.0 -	环部の1/3を欠く。口縁部は横ナデ仕上げ、内面はナデマワシで平滑に仕上げている。环の体部と底部の外表面には整形痕の凹凸が確かに残る。脚外表面には环部とのナデマワシ痕が残り、内面には絞り目が残る。脚部は内外から横ナデして仕上げている。	良 良 赤	いい 色 褐	
50 -25 -25	7-3087-1	15.6 9.8 9.5	完形品。口縁部は内外から横ナデ仕上げしている。环内部には粗い刷毛目があり、外表面下半には凹凸が残りナデ調整の不十分さがうかがえる。脚部外表面は鋸削りで蒸氣を除き、内面は鋸削りで整形している。脚部は内外から横ナデする。全体に厚手の作りで、脚上半は中空となる。	や 良 赤	や 粗 い 色 褐	
51 -25 -25	7-3263-1	15.4 -	口縁部と脚部の一部を欠くがほぼ完形品。口縁部と脚部は内外から横ナデしている。环内部はナデ、脚内面は鋸削りで整形している。天井部には、粘土突起を押えた指頭压痕がある。脚は緩やかにハの字に開く。	良 や 赤	や 不 良 色 褐	
52 -25 -25	7-3259	15.0 10.0 9.2	完形品。口縁部と脚部は内外から横ナデで仕上げている。环底部と脚の外表面には整形痕を残す未調整である。环内部は平滑にしているが、器壁の荒れが激しく調整法は不明。口縁部は底部から屈曲して開き、先端を内側させる。脚は横に一段と横に開く器形になる。	良 不 良	いい 色 褐	
53 -25 -25	7-3067	15.4 9.9 8.2	完形品。口縁部は内外から横ナデ仕上げ、内面は整形後にナデ仕上げして平滑にしている。环の底部から外表面は指によるナデマツケの凹凸が残る。脚部は横ナデで仕上げ、内面には鋸削りの整形痕を残している。脚内面大井部には环底部の粘土突起を指で押している痕跡がある。	良 良 赤	いい 色 褐	
54 -25 -25	7-3164	15.8 9.5 8.8	环部の1/2を欠いている。口縁部は内外から横ナデされ、环底部の外表面から脚上半は整形痕を残し未調整で凹凸が残る。环内部はナデマワシで調整され平滑に仕上げている。脚はハの字に開き、脚部が一段と横に開く形になる。脚部は内外から横ナデし、内面は鋸削りで整形している。	や 良 赤	や 粗 い 色 褐	
55 -25 -25	7-3261	15.5 10.3 8.8	完形品。口縁部と脚部は内外から横ナデしている。环内部はナデマワシ、脚の内面は鋸削りで整形し、天井部に出た环底部の突起は指で削っている。环底部と脚の外表面は整形痕を残して未調整。胎土はやや粗く小砂が多く、器壁の荒れも目立つ。	や 不 良	や 粗 良 色 褐	
56 -25 -25	7-3249-3	15.6 -	环部と脚部が接合しないが同一器体。口縁部と脚部は内外から横ナデされるが、环内部には刷毛目が残る。环底部と脚部と上半の外表面には、ナデマツケや整形時の坦白を残す。脚内面は、鋸削りで整形し、天井部には环底部の突起粘土を指で押している。脚の内面は鋸削りで整形している。	や 良 赤	や 粗 い 色 褐	
57 -25 -25	7-3145	16.0 9.4 9.1	环部の1/4を欠く。口縁部と脚部は内外から横ナデされる。内面はナデマワシで平滑にしている。环底部と脚部と上半の外表面には、ナデマツケや整形時の坦白を残す。脚内面は、鋸削りで整形し、天井部には环底部の突起粘土を指で押している。脚は脚部で屈曲しさうに横に開いた形になる。	良 良 好	いい 色 灰	

押 国 番号 写真図版	登録番号	法量cm	技 法・調 整 等 の 特 微		胎 焼 色	土 成 調
			口 縁 部 高 度	脚 部 高 度		
器種・形態	出土位置					
土 高 坯	イ 4 VII					
58 -26	7-3107	16.3	口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品。口縁部は内外から横ナデで仕上げている。脚部内面はナデで平滑に仕上げているが、唇壁はあばた状に剥落している。脚部と坏部の外面には整形時の凹凸や脚ナデの整形痕が残る。	粗 や 灰	い 良 色	
-26		9.7				
59 -26	7-3251-1	15.9	ほぼ完形。口縁部と脚部の内外面を横ナデで仕上げている。坏部内面はナデで半端にしている。脚外面には整形痕が残り、内面は鉛削りで整形している。坏底部上面に横を作り立ち上がる口縁部を持ち、圆形的には逆台形の坏部となる。脚部は屈曲して横に聞く高坏である。	や 良 赤	や 良 色	
-26		9.7				
60 -26	7-3094	18.5	坏部の1/2を欠く。口縁部と脚部は内外から横ナデして仕上げ、坏部内面はナデで平滑に仕上げている。坏底部外面は整形時の凹凸や脚のナデツケ痕が残る。ハーニーの字に開く脚部の内面は鉛削りして整形し、大井部分には坏底部の粘土突起がある。脚部は、さらに細面し、横に聞いておわる。	良 良 赤	い い 色	
-26		9.9				
土 高 坯	イ 4 VII	8.5				
61 -26	7-3251-2	16.8	口縁の一部を欠く。口縁部と脚部は内外から横ナデされる。坏部内面はナデマワシで平滑に仕上げている。坏底部脚部の外面上には、整形時の凹凸やナデツケ痕等が残る。脚内面は鉛削りで整形され、天井部には坏底部の粘土突起がある。胎上はやや粗く脚部砂が多く含む。	や や 赤	や 粗 良 色	
-26		9.7				
土 高 坚	イ 4 VII	9.3				
62 -26	7-3091-2	16.8	坏部の1/4を欠く。坏底部に腰を作り、崩出で斜め上に直線的に立上がる!縁流を持つ。口縁部は内外から横ナデし、内面はナデマワシで平滑に仕上げている。脚部の外面上には整形時のナデ痕が凸となって残り、内面は鉛削りで整形している。脚部は横ナデ仕上げ。	良 良 黄	い い 色	
-26		11.0				
土 高 坚	イ 4 VII	9.1				
63 -26	7-3144	16.8	坏部の1/2を欠く。口縁部と脚部は内外から横ナデされるが、内面には細かな刷毛目が残る。脚部の底部外面上には刷毛目ナデツケの整形痕が残り、なだらかなハーニーの字形に開く脚の上半にも整形時の下面が残り、未調整。脚内面は鉛削りで整形されている。	良 良 灰	い い 色	
-26		4.7				
土 高 坚	イ 4 VII	9.0				
64 -26	7-3096-2	16.6	坏部を残す。口縁部は内外から横ナデして仕上げている。坏部内面はナデ仕上げで平滑にしている。坏底部外面上には整形時の凹凸と、脚接合のためのナデツケ痕が残る。脚の大半を欠くが、脚内面には坏底部の粘土突起を指で押している。胎上はやや粗く砂も多い。	良 良 赤	い い 色	
-26		—				
土 高 坚	イ 4 VII	—				
65 -26	7-3239	16.7	脚部と口縁部の1/4を欠いている。口縁部は内外から横ナデされる。内面はナデで平滑にしている。脚上部と坏底部の外面上には脚接合時のナデツケ痕が残る。脚の内面は鉛削りで整形され、天井部は坏底部の粘土突起を指で押している。胎上はやや粗く砂も多い。	粗 や 赤	い い 色	
-26		—				
土 高 坚	イ 4 VII	—				
66 -26	7-3260	15.6	完形品。口縁部と脚部は内外から横ナデされる。坏底部と脚の外面上は整形痕を残し未調整。脚内面は鉛削りで整形している。圆形に焼き歪みがあるが、坏部は底部から内側で立ち上がる。口縁部で、先端を少し外反させている。脚は緩やかにハの字に開く形になっている。器壁の荒れが激しい。	や 良 赤	粗 い 色	
-26		10.6				
土 高 坚	イ 5 VII	9.4				
67 -26	7-3248-1	16.4	坏部の1/4と脚部が残る。口縁部と脚部は内外から横ナデされる。坏部内面はナデ仕上げで平滑にする。坏の底部と脚上半の外面上にはナデツケ痕が残る。脚内面にはシボリ目が見られる。底部から口縁部が外縁気味に人さく聞く坏部に、ハの字に開く脚部を持つ器形になる。	や や 赤	粗 良 色	
-26		10.5				
土 高 坚	イ 4 VII	9.2				
68 -26	7-3238	17.5	坏部の1/2を欠く。口縁部は内外から横ナデされ、先端部は外縁気味に薄くなっていく。内面にはナデ調整で平滑にするが、坏底部外面上、整形時の凹凸や脚部と脚部とのナデツケ痕が残る。底面から後ろで作って外反しながら聞く坏部に、ハの字に開く脚部を持つ器形で、脚部は横ナデして横に聞く。	良 や 赤	い 良 色	
-26		10.9				
土 高 坚	イ 4 VII	9.9				
69 -26	7-1773-2	13.5	脚部の1/2が欠け、脚部は完形。脚と坏部の接合部の足端外面上には接合時のナデツケの指跡痕が残る。他の部分は横ナデ仕上げ。坏部は平らな底面から口縁部が直線的に斜め上方へ開く。脚の上半は中央で脚部が横に聞く器形になる。	良 善 黄	い 通 色	
-26		9.2				
土 高 坚	イ 1 VII	9.6				
70 -26	4-1135-4	—	ハの字に開く脚部で、坏部を欠いている。外山はナデ仕上げしているが、整形時の凹凸が残る。内面は鉛削りで整形している。脚部は内外から横ナデで仕上げている。胎土はやや粗く細かな砂を含んでいる。	粗 良 黄	い い 色	
-26		8.4				
土 高 坚	イ 2 VII	—				
71 -26	7-3248-2	18.3	坏部の1/3を欠く。口縁部と脚部の内外面は横ナデされるが、刷毛目や整形時の凹凸を完全に消してはいない。体部から脚にかけての外面上は、整形痕がそのまま残り未調整。脚内面は鉛削りし、裡には布目の底壁が見られる。ハの字に開く脚と、体部で脚を作らず半球状の脚部を持つ器形になる。	良 良 赤	い い 色	
-26		11.3				
土 高 坚	イ 4 VII	8.8				
72 -26	7-3106	10.4	坏部の1/2、脚部の2/3が欠損。口縁部と脚部の内外面は横ナデし、坏部の内面はナデマワシで平滑にしている。坏底部の外面上から脚上半は豊應焼?され、下半はナデで仕上げる。脚内面は鉛削りで整形する。坏部は底面からやらず出しして聞く口縫部を持ち、脚は円錐状の先端がハの字に開く器形になる。	良 や 不 褐	い 良 色	
-26		10.2				
土 高 坚	イ 4 VII	9.2				

拂岡 番号 写真図版	登録番号	法量cm 口縁部 器底 器高 底	技法・調整等の特徴		胎 焼 色	土 成 色
			出土位置			
器種・形態						
73 -26	7-3240-1	12.3	脚部の一部を欠くほぼ完形品。口縁部の内外が壊ナデで仕上げられ、壊部内面はナデマワシで調整し、外面上には刷毛目が見られる。平な半球形の耳部に、ハの字に開く低めの脚を持つ背の低い壺形である。	良 良 亦	褐	いい 色
73 -26		7.6				
上 高 壱	イ-4 VII	7.4				
74 -26	7-3091-1	12.8	環部の1/2、脚部の2/3を欠く。口縁部が内彫して立上がる环部になる。口縁部と脚部は内外から横ナデ仕上げている。环底部外面から脚外側は壊によるナデ(ケズリ?)で整形している。脚の内面は鋸削りの壺形。全体に厚手の作り。体部は黄褐色だが、脚は赤褐色になる。	粗 良 黄	褐	いい 色
74 -27		9.6				
上 高 壱	イ-4 VII	10.9				
75 26	7-1773-1	9.0	体部の1/2が残り、脚部はほぼ完形。体部外は壊によるナデ、内面は搔き上げたような指痕を残すがナデ仕上げ。体部と脚部の接する部分にも壊によるナデ(ケズリ?)で整形している。脚の内面は上半には壺形時の絞り目が残っている。胎土に砂が多い。	粗 良 黄	褐	いい 色
土 脚付壺	イ-1 VII	7.2				
76 27	4-1018-2	9.0	口縁部の先端を欠く。口縁部外面は横ナデ仕上げ。体部外面の上半はナデで、下半は壊ナデされ、底部は鋸削りで器面を整えている。脚部下半には焼が付着している。器壁の荒れが激しく、調整法の詳細は不明。胎土は粗く赤色粘土を含む。	粗 良 赤	褐	いい 色
土 長頸壺	イ-2 W VII	10.9				
		3.6				
77 27	7-3274	12.8	口縁部の先端を欠いている。口縁部は内外から横ナデされるが、内面に壊の整形板が残されている。体部も上半は横ナデしているが、下半は不定方向の窓ナデで器面を整えている。体部内面は粘土の繋ぎ目も残る。胎土はやや粗く砂を多く含む。全体に薄手の作りとなっている。	粗 良 赤	褐	いい 色
上 増	イ-5 VII	-				
78 -27	7-3275	13.7	口縁部先端を欠いている。口縁部は内外から横ナデしている。体部外面はナデ調整しているが、下半部には亂用の圧痕が残されている。この圧痕は四方向に後來持つような籠で受けられたようである。器底の内面には粘土の繋ぎ目や横状の器具で振で付けたような圧痕(壓痕痕?)も残る。	良 良 亦	褐	いい 色
上 増	イ-5 VII	-				
79 -27	7-3247-2	9.2	完形品。口縁部は内外から横ナデで仕上げている。脚部内面はナデ仕上げしている。底部の外側には難目が残る。全體に器壁の風化が激しく調整法の詳細は分明ではない。偏重的な球形に、広口で長い凹部を付した壺形になる。	良 不 可	褐	い 良 色
上 長頸増	イ-4 VII	14.2				
		12.3				
80 -27	7-3165	9.3	完形品。口縁部は内外ともに横ナデ仕上げ、体部外面は刷毛彫形し、内面には粘土の繋ぎ目を残すが、ナデ仕上げしている。球形で、丸底の体部に広口で窓めの口縁部がつく。口縁部の先端は内輪気味で口唇部を丸く作っている。胎土は良く、赤色粘土粒が含まれる。	良 や や	不 褐	い 良 色
上 増	イ-2 VII	13.2				
		12.3				
		-				
81 -27	7-3248-5	10.9	口縁部は内外から横ナデされ、先端を内輪気味に丸くつくる。体部の外面は壊の刷毛彫形と柄の研磨(削り?)で器面調整している。内面はナデ仕上げで底部付近には刷毛目が残る。全體に薄手の作りになっている。	良 良 赤	褐	いい 色
上 増	イ-4 VII	12.7				
		10.9				
82 -27	7-3070	13.0	口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品。口縁部は内外から横ナデ仕上げ。体部外面は壊状器具によるナデ、特に底部は、見ると鋸削りのように見える。内面はナデ仕上げで平滑にしている。胎土は粗く砂粒が多く混じっている。	粗 良 赤	褐	いい 色
上 増	イ-1 VII	15.5				
		3.5				
83 -27	7-3269	9.4	完形品。口縁部は内外から横ナデする。体部内面は上半に指で横掻げた壺形があり、下半はナデで器面調整している。脚部外面はナデ調整しているが、刷毛目が薄く残されている。全体に粗い作りで、器面の風化も激しい。胎土には細砂が多く混じる。	粗 不 亦	褐	い 良 色
土 増	イ-5 VII	13.4				
		11.1				
		-				
84 -27	7-3281-2	-	口縁部を欠いているが、把手付の大形の壺形になる。体部の外側丸に粘土の繋ぎ目や凹部を模すが刷毛彫形される。内面はナデ調整している。脚部外の把手の付く部分と、底部のやや上方に帶状に焼が付着している。胎土は粗く大粒の砂を含んでいる。球形の脚部に上げ底付軸の底部を作っている。	粗 良 赤	褐	いい 色
土 増	イ-5 VII	39.0				
		-				
85 27	7-3247-3	23.2	完形品。口縁部は内外から横ナデ仕上げ。体部内面はナデ調整、外面は壊状器具でナデ仕上げしているようである。体部には凹凸も残り、脚部下段には難目も残る。器壁表面の風化が激しく調整法の詳細は不明。砲弾形の体部に、屈曲する口縁部が作り出され、体部には対になる把手が付く壺形になる。	や 不 赤	褐	粗 良 色
上 増	イ-4 VII	32.0				
		25.6				
		-				
86 -27	7-3250	16.4	全体の1/3が残り。口縁部は内外から横ナデで仕上げている。体部外面は、斜めや縱方向の刷毛彫形、内面は横の筐ナデ(刷毛?)で器面を調整している。底部近くの外側は壊ナデが強くされた(削り?)。刷毛目は残らないが、難目の圧痕が付いている。内面は黄褐色になる。	や 良 亦	褐	粗 い 色
土 増	イ-4 VII	25.8				
		26.5?				
		-				
87 -27	7-3246-1	26.2	全体の1/2が残り、底部を欠く。口縁部は内外から横ナデで仕上げされるが、外面には棘方向の凹凸が残り、内面には刷毛目が残っている。体部外面は窓めに屈曲して付けられた壺形になる。球	良 良 赤	褐	いい 色
土 増	イ-4 VII	32.3				
		-				
		-				

押 番号	登 録 番 号	法 量 cm	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 焼 成 色
			口 縫 径 副 器 高 度	出 上 位 置	
透 透 性 ・ 形 態					
88 -27	4-234	15.2 15.5 20.7 -	口縫部の1/3を欠いている。口縫部は内外が横ナデされる。体部外面は刷毛整形されて、下半部は、ナデが使用によるスレで、刷毛目が消えている。外面上半部には炭化物が付着している。内面には刷毛目が薄く残り、炭化物も付着している。底部内面は隔壁が黒変している。全面に薄手の作り。	良 良 黄 褐色	いい いい 色
土 甕	イ-6 VII				
89 -27	4-565-3	18.3 18.3 -	口縫部の1/4が残り、底部を欠く。口縫部は外面から横ナデで仕上げる。体部は内外面とも刷毛整形される。体部外面には炭化物が付着する部分を見られる。口縫部は、擦る脚の体部から屈曲し、直立する隔壁を作れる。隔壁は光端を再度外反させ口縫部を内側気味に丸く作る。	良 良 灰 褐色	いい いい 色
七 甕	イ-6 VIII				
90 -27	4-1136-1	23.2	口縫部の1/4が残る。口縫部の内外が横ナデしている。体部外面は斜めの刷毛整形、内面はナデ調整しているが、擦る脚の刷毛整形部が僅く残る。内面には整形時の凹凸が目立ち、粘土の緊き目も残される。口縫部先端を横に大きく屈曲させ、口縫部は内側気味に丸く作られる。外面には全面に焼が付着する。	良 良 白 褐色	いい いい 色
土 甕	イ-2 VIII				
91 -28	7-3079-1	34.0 -	全体の2/3を残す。口縫部は内外から丁寧な横ナデで仕上げている。隔壁は外側は縱方向の、内面は横方向の刷毛で整形している。底部は隔壁が剥落して欠損する。胎土は良いが、焼成がやや悪く軟質な焼き上がりとなっている。体部の隔壁に黒変する部分がある。	良 や 黄 褐色	いい 不良 色
七 甕	イ-1 VII	22.0			
92 -28	7-3147-1	39.6 -	光形品。口縫部は内外から丁寧な横ナデで仕上げされる。体部内面は横の刷毛整形で、外面は斜めの刷毛整形がされる。底部周辺は窓による割いケズリで整形している。外面は下半部に焼が全面に付着するが、窓割りされる底部周辺には付着しない。胎土は粗く砂が多く含む。全面にクリーム色をしている。	粗 良 灰 黄 褐色	いい いい 色
七 鉢	イ-4 VII	22.8 -			
93 -28	7-3246-3	30.5 30.6 26.6 7.5	全体の1/2が残る。口縫部は内外共に横ナデ、体部内面は窓によるナデ仕上げ、体部外山も窓ナデ（窓割り？）で器面調整されている。隔壁全体にあばた状の剥落があるが、特に体部外側の腹部下部が激しい。長胴氣味の体部にくの字に曲がる口縫部を作りだし、上部底の底部を持つ器形になる。	粗 良 黄 相	いい いい 色
七 甕	イ-4 VIII				
94 -28	7-3246-2	25.6 23.7 11.07 -	底部を欠く。口縫部は内外共に横ナデ、体部内面はナデ仕上げ、体部外面もナデ調整されるが、上半部には細かな刷毛整形部が残る。使用の結果と想えるが、隔壁の下半部は、外側面とも隔壁の剥落が激しい。隔壁外面には焼が一面に付着し、次火力での赤変もある。内面には炭化物によるものと思われる黒変がある。	粗 良 赤 褐色	いい いい 色
七 鉢	イ-4 VII				
95 -28	7-3281-1	19.5 18.0 ?	全体の1/3が残り、底部を欠く。口縫部は内外から横ナデで仕上げている。内面はナデで窓面調整している。隔壁外面の上半分には横の刷毛の整形部が残る。下半部は窓ナデで刷毛目を消しているが、完全に消し去るまでは至っていない。底部に近い部分には、使用によるものと思われるスレが隔壁に残る。	普 良 黄 相	通常 色
七 鉢	イ-5 VII	-			
96 -28	7-3266-1	30.2 28.2 27.4 -	光形品。口縫部内外面は横ナデされるが、刷毛形態や凹凸が残る。内面の上半分は粗い刷毛目が残るが、下半部には残らない。外面には凹凸と刷毛目が薄く残るが、いずれも調整により削除されたものか、使用によるスレか定かではない。隔壁下面には、窓割り痕と露目が付されている。	良 や 赤 褐色	いい 不良 色
七 甕	イ-5 VIII				
97 -28	7-3280	-	底部のみ残る。大型甕の底部で、一丸平底に作っている。内外山ともにナデ調整で平滑にしている。底部付近には窓割りの整形痕と、龍口の仕 hakkが付されている。下半部の外面は黒変している。	粗 良 灰 黄 褐色	いい いい 色
土 甕	イ-5 VII	10.5			
98 -28	7-3281-3	- 28.07 -	体部の上半を欠く。体部の内外面がナデ調整される。内面下半部は窓によるナデ（窓研磨？）で表面調整する。底部は上げ底に作っている。外面の隔壁の荒れが激しく調整痕の詳細は不明。胎土は粗く粒状が多く跳じる。	粗 や 灰 褐色	いい 不良 色
土 甕	イ-5 VII	7.6			
口区					
99 -29	7-2980-3	14.4 4.4	全体の1/3が残る。底部は平らに作る。口縫部の外面は横ナデ、内面はナデによって平滑に仕上げている。体部下半には整形時の凹凸が残る。隔壁には気泡状の穴が見られる。摩耗が進んでいる部分が多く、他の調整法は分明でない。	普 不 黄 褐色	通常 色
土 甕	ロ-6 VII・III				
100 -29	7-2956-2	13.6 4.8	全体の4/5が残る。口縫部の内外面は横ナデ仕上げ。体部の内面はナデマワシによって平滑にしている。外面の下半分には整形時の凹凸が残り、底部は平らに作っている。口縫部は少し内側に窓部を丸く作る。焼成が悪く表面が施い。胎土には赤色粘土粒が混じる。	良 不 赤 褐色	いい 良好 色
土 甕	ロ-3 VII				
101 -29	7-2956-3	12.2 5.0 -	全体の1/2が残る。口縫部の内外面は横ナデ仕上げ。体部の内面はナデマワシで平滑に仕上げる。体部外面の下半分には整形時に出来たと思われる粘土の横方向のヒビ割れや凹凸が残り未調整。胎土は砂を含まず良い。	良 良 黄 褐色	いい いい 色
土 鉢	ロ-3 VIII				

種類 番号 写真図版	登録番号	法量cm 口径 径深 器底	技法・調査等の特徴		胎土成色	
			出土位置	口縁部の内外面は横ナデで仕上げられ、内面はナデマワシによって平滑に仕上げている。体部外面の下半から底面には整形時の粘土のヒビ割れや凹凸があり。内面には炭化物が付着する。底面は平底になり口縁は内側に立上がり、口縁部を丸くしている。		
				102 -29		
上 壱	7-2980-4	14.0 - 4.1 -	口 -6 VII + VIII	完全品。口縁部の内外面は横ナデで仕上げられ、内面はナデマワシによって平滑に仕上げている。体部外面の下半から底面には整形時の粘土のヒビ割れや凹凸があり。内面には炭化物が付着する。底面は平底になり口縁は内側に立上がり、口縁部を丸くしている。	当不赤褐色	通良色
103 -29	7-2991	15.0 15.8 5.3 -	口 -3 VII	全体の1/2が残る。口縁部は丁寧な横ナデで仕上げている。体部の内面はナデしあげで平滑に仕上げている。外山には粗い鋸歯状の削り跡で仕上げている。底面は平底で木炭痕が付いている。体部の側面に炭化物が付着している部分がある。胎土には砂を含まない。	良苦赤褐色	い通色
104 -29	7-2993	13.5 - 7.3	口 3 VII	口縁部の一部を欠くが、ほぼ完形品。口縁部は横ナデで仕上げられ、内面はナデマワシによって平滑に仕上げている。体部外面の下半から底面には整形時の凹凸があり、煤が付着して表面に付着している。底部は丸底になり口縁は直角に立上がり、口縁部は内側に坦面を作っている。	苦赤褐色	通通色
105 -29	7-2956-7	13.6 - - -	土 壱 口 -3 VII	全体の1/4が残り底部を欠いている。口縁部の内外面を丁寧な横ナデで仕上げている。体部内面はサザで平滑に仕上げ、外山には粗い鋸歯状の器具で、擦てたよう調整がなされている。器形的には深めの鉢となる。	良良黄褐色	いい色
106 -29	7-2945-1	14.2 - - -	土 高 壱 口 -3 VII	壺部の1/2が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。壺部に刷毛の整形痕、底部外山には、ナデツケ痕が残る。器壁の風化が激しく外の調整法は不明。	粗不灰褐色	い良色
107 -29	7-2950-1	14.4 - - -	土 高 壱 口 -3 VII	壺部の1/2が残り、脚部を欠く。口縁部の内外山は横ナデ仕上げ、内面はナデで平滑に仕上げている。底部外山には整形時の凹凸や、脚のナデツケ痕を残している。やや厚めの作りで粘土の緊ぎ日等も残すまである。胎土には砂は少なく、赤色粘土粒が含まれる。	良苦赤褐色	い通色
108 -29	7-2945-2	15.6 - - -	七 高 壱 口 -3 VII	壺部の1/3が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。口縁部は使用によるスレか摩滅している。器壁の風化が激しく他の調整法の詳細は不明。平らな底部から外方に直線的に立上がる口縁部を持つ高壺の外形となる。胎土は砂が少なく良い。	良不黄褐色	い良色
109 -29	7-2955	-	土 高 壱 口 3 VII	壺部を欠き、底部が残る。脚部外山は、ナデツケの整形痕が残る。内面は鋸削りで整形し、天井部には环底部の粘土突起がある。脚部は内外面から横ナデ仕上げしている。脚はハの字に開く形で、先端部は大きく開かない。	や苦赤褐色	粗通色
110 -29	7-3009-1	-	土 高 壱 口 -3 VII	口縁部を欠く高壺。脚上半は中実となり、内外山から横ナデした脚部が横に開く形になる。脚内面は器壁に添ってく抜くように鋸削りされる。脚上部には环部にナデツケ痕跡が残る。器壁の表面は風化して脆い。	良不赤褐色	い良色
111 -29	7-2980-5	-	土 高 壱 口 6 VII + VIII	壺部を欠き脚のみ残る。脚部内面は横ナデされる、脚内面には指による整形痕が残り、外山はナデ仕上げになる。环底部が押入される部分は、蓋によって削りとられている様子が分かる。	良苦黄褐色	通通色
112 -29	7-2980-2	13.9 -	土 高 壱 口 6 VII + VIII	壺部を残し脚部を欠く。口縁部から体部にかけては、内外山共に横ナデで仕上げている。脚部内面は平滑になり、底部外山は脚部へのナデツケ痕等が残り凹凸がある。脚部の外山は整形による平坦面が角錐状になっている。环部は偏平な半球形になり、脚部は新しい円錐形で始か広がる器形になる。	普不黄褐色	通良色
113 -29	6-3495-3	14.0 14.6 4.0 -	土 杯 蓋 口 -6E VII下	全体の1/4が残る。入井部外山は未調整。口縁部は内外山から横ナデしている。肩の部分には刷毛ナデと思われる、カキメ状の整形痕を残している。天井部は平らに作り、腰の部分で崩曲させ口縁部をつくっている。横模環の蓋である。胎土は良く、赤色粘土を含んでいる。	良不黄褐色	い良色
114 -29	7-2952-3	15.4 - 4.7 -	上 杯 蓋 口 -3 VII	完形品。底部外山は、鋸削り調整と思われるが、判然としない。他の部分は横ナデで仕上げる。弧を描いて続く体部は、腰の部分で屈曲して口縁部を作っている。全体に厚手の作りで、シャープではない。赤褐色に施き上がっているので、土師器としたが須恵器の焼き純ったものかも知れない。	良不赤褐色	い良色
115 -29	6-3495-1	8.5 9.1 5.2 -	土 壱 口 -6E VII下	完形品。口縁部は内外山から横ナデで仕上げ、口縁部を薄く尖らせている。内面は鏡でナデして器面調整し、底部には指でナデ上げた整形痕が残る。外山は、ほとんど未調整で、粘土を螺旋状に巻き上げた緊ぎ目を残している。	粗良赤褐色	いい色
116 -29	7-2943	9.0 12.7 11.5 -	土 壱 口 -3 VII	完形品。口縁部の内外面は横ナデされる。器壁全体に刷毛目が薄く残っているので、削毛整形の後にナデ調整されたと推測される。すんどうの体部に直線的に開き気味の口縁部が付く器形となる。胎土には大粒の砂が多く含む。	粗苦赤褐色	い通色

番号	押 団 写真図版	登録番号	法量ca 口 銅 器 高 度	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 土 成 調	
					出 土 位 置	胎 烧 色
117	-29 上 墓	7-3003 ロ-3 VII 最下層	14.5	口縁部を欠き、体部の2/3が残る長頸壺の体部。体部外面は、器壁の荒れが著しいため觀察不能。器底の表面には気泡穴の穴が多く見られる。内面は粘土の繋ぎ目が観察されナデマワシで仕上げている。胎土には赤色粘土粒を含み、内面は赤褐色になっている。	良 小赤	い 良 色 福
118	-29 土 墓	6-3489 ロ 6E VII	24.6	口縁部を欠き、全体の2/3が残る。口縁部(頸部)の内外面は横ナデ仕上げだが内面には刷毛目が残る。体部外面は糰め、内面は機に刷毛目整形している。内面は一部ナデで開口部を調整している。かなり箇平な球形になっている。外面には器壁が黒変している部分も見られる。	良 や や 灰	い 良 色 福
119	-29 土 墓	7 2994-1 ロ-3 VII	14.0	口縁部1/3を残し下部を欠く。口縁部(頸部)の内外面は横ナデされるが、刷毛目を完全に消してはいない。体部は内外面共にナデ仕上げとなっている。外面全体に煤が付着する。胎土には砂が多く混じるが、焼成は良い。	粗 良 黄	い 良 色 福
120	-29 土 墓	7-2944 ロ 3 VII	16.0 18.9 20.8	ほぼ完形品。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ、器壁の外面は刷毛目が薄く残り、下半から底部にかけ煤が付着している。粗い刷毛目が内面上半部に残り、下半部はナデで消している。体部は長めの球形で丸底、くの字に外反する口盤部は肥厚させ、口唇部は平坦面を作る。胎土には砂が多少多い。	粗 良 黄	い 良 色 福
121	-30 土 墓	7 2981-1 ロ 6 VII + VIII	36.5	1/輪郭の1/6程度が残る。口縁部の内外面は丁寧な横ナデで仕上げられ、内面はナデによって平滑に仕上げている。体部外面は刷毛目整形されている。体部外面には全面に煤が付着している。内面には部分的に炭化物が付着する。頸部の屈曲はそれ程大きではなく、口盤部は内側気味の坦面を作っている。	良 良 黄	い 良 色 福
122	-30 土 墓	7-2956-9 ロ-3 VII	18.5	口縁部破片を残すのみ。口縁部は丁寧な横ナデで仕上げている。体部外面は頸部に指による整形痕を残し、頸部以下はナデ調整をする。外面は単斜方向の刷毛目で整形され、煤が付着する。口盤部はくの字に曲がり先端部は肥厚する。口唇部は坦面を作る。胎土は精造され雲母を含む。	良 以 黄	い 良 色 福
123	-30 土 墓	7 2956-6 ロ-3 VII	48.07	口縁部ほぼ1/10程度が残る。口径は50cm程度となると思われるが、細片であるため不明。口縁部は外反しながら横に引出され口盤部は丸く作る。口縁部の外面は横ナデし、体部は粗い刷毛目が残る。外面には煤がかなり厚く付着する。全体に薄手の作りになっている。	昔 昔 灰	通 通 色 福
124	-30 土 墓	6-3497 ロ 6E VII 下	32.0 11.3	口縁部を欠いている。体部外面は糰め、内面は機に刷毛目整形している。底面部は、内外面共に横ナデして、刷毛目が薄くなっているが、使用による歯減かもしれない。口縁部を肥厚させ、ロ口と器高とか、ほぼ同程度となる器形であろう。	良 良 白 灰 福	い 良 色 福
160	32 土 墓	7 2981-2 ロ-6 VII + VIII	18.5 25.2	全体の1/2を残し、底部をなく。口縁部は横ナデ仕上げ。体部外面は刷毛目整形され、上半部分に刷毛目の残りが顕著で下部には少ない。この下半部に煤の付着が著しく、使用による摩耗感。内面は窓ナデによって平滑にしているが、下半部には刷毛目が残り、全体に炭化物が付着している。胎土に雲母が含み砂はない。	昔 良 黄	通 通 色 福

区	番号	登録番号	法量ca 口 銅 器 高 度	技 法・調 整 等 の 特 徴	胎 土 成 調	
					出 土 位 置	胎 烧 色
125	-30 土 墓	7-3027 ハ-7 VII	9.2 9.7 4.3 -	完形品。口縁部は内外面から横ナデされる。内面はナデ仕上げで平滑にしている。外面もナデ削されるが、整形時に粘土を螺旋状に巻き上げた繋ぎ目や粘土のシワが残っている。深めで口盤部がやや内側に傾いている。口縁部の外面と体部の内側は丹塗りになっている。底部に黒変する部分がある。	良 や や 赤	い 良 色 福
126	-30 土 墓	6-3341-1 ハ-4W VIIc	10.7 11.9 4.8 -	全体の3/4が残る。口縁部は内外面から横ナデされ、内面はナデマワシで平滑にしている。体部外面から底部にかけてナデ仕上げされているが、整形時の凹凸が残している。偏平半球形で口縁部は内側させ、口唇部は丸く作っている。胎土は良く、赤色粘土粒を含んでいる。	良 や や 黄	い 良 色 福
127	-30 土 墓	6-3440-1 ハ-5W VIIb	11.2 11.5 4.8 -	全体としては1/3が残る。口縁部は内外面から横ナデしている。体部は内外面共にナデ仕上げされている。口縁部内側の横ナデは「」字で凹輪状になる。半球形の体部の、先端がやや内側気味になる。胎土には赤色粘土粒が含まれる。	良 や や 黄	い 良 色 福
128	-30 土 墓	7-300-1 ハ-4 VII + VIII	12.7 5.0 -	全体の1/3が残る。口縁部は横ナデ、体部外面はナデマワシで半滑仕上げされる。外面はカキメ状の整形痕が残り、炭化物が全体に付着している。比較的薄手の作りで、口縁部がやや内側するが半球形の器形になる。胎土には雲母が含まれる。	良 昔 赤	い 通 色 福
129	-30 土 墓	7 2970-1 ハ 4 VII	13.2 4.6	全体の5/6が残る。口縁部は内外共に横ナデ仕上げ。体部内面は平滑に仕上げている。外面は器壁に荒れがあり詳細は不明。口縁部は内側し、偏平球形の器形となる。胎土には赤色粘土粒があり、赤褐色となる。	昔 や 赤	通 良 色 福

番号 写真回数 器種・形態	登録番号 出上位置	法規cm 口 後 脣 股 高 底 径	技法・調整等の特徴		胎 焼 色	土 成 調
			口 脣 部 高 度	脛 部 高 度		
			口 脣 部 高 度	脛 部 高 度		
130 -30	7-3008	15.7	环部の1/2を欠く。口脣部と脚部は内外から横ナデ仕上げ、环体部の内外面はナデ仕上げされる。环底部外面上には整形時の凹凸や脚へのナデツケ痕が残される。脚外側に整状器具のナデ痕があり、三方向に貫通しない透かし孔が付される。内面は窪削りで整形している。脚尖部には环底部の粘土突起を指で押えた跡がある。	粗 良 赤	いい 褐色	いい 色
-30		12.0				
土 高 环	ハ-5 VII	11.0				
131 -30	6-3398-2	15.3	脚と口脣部の1/2を欠く。口脣部は内外から横ナデされ、内面はナデマワシで平滑に仕上げている。环底部外面上には脚へのナデツケ痕が残る。脚の内面は窪削りで整形し、环底部の脚部突起を指で押している。半らな底部から、口脣部が屈曲して外反気味に立上がる形態で、屈曲部の外面に瘤を作る。	良 や 赤	や 不 褐	い 良好 色
土 高 环	ハ-5W VIIc					
132 -30	6-3445-2		环部と脚の1/2を欠いている。脚部は内外から横ナデされる。外面はナデツケ痕や整形時の坦面を残す。内面は窪削りで整形している。天井尖端には环底部の粘土突起が突出している。円錐形で脚部が横に屈曲して開く形になっている。	や や 赤	や 不 褐	粗 良好 色
土 高 环	ハ-5W VIIb	7.6				
133 -30	6-3341-2		环部を欠いている。脚部は内外から横ナデされ、下半はナデ仕上げしているが、上半には环部のナデツケ痕が残る。内面は窪削りで整形している。天井尖端には、环底部の突起粘土を指で押している跡痕が残っている。胎上に砂は少ないが、やや粗い。	や や 赤	や 褐	粗 通色
土 高 环	ハ-4W VIIc	8.5				
134 30	6-3445-1		环部と脚の1/3を欠いている。外面上半は横ナデされ、下半はナデ仕上げしているが、上半には环部のナデツケ痕が残る。内面は窪削りで整形している。脚部は内外から横ナデで仕上げている。内面は窪削りで整形している。脚部は横ナデ仕上げしているが、上半には环部のナデツケ痕が残る。内面は窪削りで整形している。天井尖端には、环底部の突起粘土を指で押している跡痕が残っている。胎上に砂は少ないが、やや粗い。	や 良 赤	や 褐	粗 良好 色
土 高 环	ハ-5W VIIb	8.5				
135 30	6-3440-2		脚部の2/3が残り、环部を欠いている。脚部は内外から横ナデされ、内面は窪削りで整形後にナデ仕上げしている。外面上半部には整形時の坦面や环部へのナデツケ痕等が残っている。胎土は良く、赤色粘土粒を含んでいる。	良 や 赤	や 普 赤	い 通色
土 高 环	ハ-5W VIIb	8.0				
136 -30	7-2972-2		口脣部を欠き、脚が残ったもの。脚部は内外共に横ナデされた脚部が横に開き、上部は中実。脚の内面には指による押えが残り、外面には整形時のニジレが面と面って残る。	良 苦 赤	や 褐	い 通色
土 高 环	ハ-4 VII	10.1				
137 -30	7-2972-4	17.0	环部の1/4、脚部の1/3を欠いている。口脣部から体部にかけてと、脚部の内外面が横ナデされる。环部の底面はナデ仕上げ、脚と环部の接する部分にはナデツケ痕が残る。脚内面には絞り目が残っている。脚はやや木本ガリの円柱が、裾で一氣縫に開く形となる。	普 普 黄	普 黄	通 通色
土 高 环	ハ-4 VII	10.3				
138 30	6-3440-3		环部と脚の2/3を欠いている。脚部は内外から横ナデしている。内面は窪削り後にナデ仕上げしている。外面には整形時の坦面が残されている。胎土には砂が多く粗い。全体にクリーム色に近い。环部との剥離具合を見ると、环底部に脚部の上端を挿入したものと推測される。	粗 や 黄	や 不 褐	い 良好 色
土 高 环	ハ-5W VIIb	10.0				
139 30	7-2999-4	13.6	完形品。口脣部の内外面が横ナデされ、内面はナデマワシで平滑にしている。天井部外面上は静止箇所で残る。体部と口脣部を浅い斜線で書いて残している。体部外面上は研磨と思われる滑平面でしている。須毛部の环底を模倣したものと考えた。胎土には砂が多く表面には、あたはた状の凹凸がある。	や や 黄	や 普 黄	粗 通色
土 坏 蓋	ハ-4 VII・VII	5.6				
140 -30	7-2999-2	12.8	完形品。口脣部は横ナデ仕上げされ、内面はナデで平滑にしている。天井部の外面上は鏡による整形と推測されるが、摩滅が激しい。表面はあたはた状に崩落し胎土には砂が多い。10箇所の环の可能性はあるが、須毛部の环底を模倣したものと考えた。	普 不 黄	普 褐	通 良好 色
土 杯 蓋	ハ-4 VII・VII	5.0				
141 -30	6-3440-4		环部と脚の1/2を欠いている。脚は全体が横ナデで表面を調整しているが、整形時の粘土シワや歪みを完全に消してはいない。脚上半には环部へのナデツケ痕が残る。环部の底面内面はナデマワシで表面を調整している。横模高环の脚部であろう。	良 や 黄	や 不 褐	い 良好 色
土 高 环	ハ-5W VIIb	9.8				
142 -31	7-3005-1	12.4	全体の1/2が残る。やや肥厚した口脣部の内外面を横ナデで仕上げ、内面はナデで平滑に仕上げている。外面には、成形時の粘土の巻上げの跡痕が螺旋状に残る。胎上には砂は含まれない。	良 苦 黄	や 褐	い 通色
土 烧	ハ-1 VII	5.8				
143 -31	6-3398-1	12.0	完形品。口脣部は内外から横ナデされる。内面下半はナデで仕上げ、底部は窪状の器具でナデ（窪削り？）仕上げている。体部外面上半は刷毛整形し、底部近くには整形時の凹凸が残る。底面はほぼ平底に作り、窪削り（窓ナデ？）で表面調整しているが、木彫版を溶さまでにいたっていない。胎土に砂が多い。	や 良 黄	や 褐	粗 良好 色
土 烧	ハ-5E VIIbc	5.8				
144 -31	7-3007-1	19.0	全体の1/3程度が残る。口脣部の内外面は横ナデで仕上げられ、体部内面は横方向に指い刷毛整形され、下半は鏡による削り（ナデ）。体部外面上には、刷毛と鏡による削り（ナデ）で丸みに整形されている。底部外面上には窓口の圧痕が付く。胎土に砂が多いが焼成は良い。内外面とも焼・炭化物は付着しない。	粗 良 灰	粗 褐	いい 色
上 鮎	ハ-4 VII・VII	13.2				
		6.4				

押岡 番号	登録番号 写真図版	法寸cm 口 孫 器 高 度	技法・調整等の特徴		胎 焼 色	土 成 調
			出土位置			
器種・形態						
145 土 鉢	-31 -30 ハ・鉢	7-2997 14.6 ハ-4 VII	完形成。口縁部を横ナデしている。内面は継で削るようにして整形している。外 面の上半も縫による整形で、下半は指で押えた整形跡をそのまま残す。内面には こげ茶色の炭化物が付着している。外面には煤が付着している。胎土に大粒の砂 を含む。焼け締まっているが、歪みが多く粗い作り。		粗良赤	いい色 褐
146 土 鉢	-31 -30 ハ・鉢	6-3442 2 20.07 ハ-5W VIIb	縁部は1/2、口縁部は1/10が残る。口縁部の内外面が横ナデされている。体部 は内外両面に細かな刷毛整形がされている。口縁部は折返され肥厚させ、底 部は平底に作り、本腰圧痕が付いている。体部下部に黒変する部分があり、口 縁部の内側には炭化物が付着している。		粗良赤	いい色 褐
147 土 鉢	-31 30 ハ・鉢	7-2986-3 18.0 ハ-4 VII・VIII	全体の1/3が残り、底部を欠く。口縁部は横ナデ、内面は横方向の刷毛整形、外 面は斜め縦方向の刷毛整形で凹凸を残している。器壁外面には煤や炭化物は付 着しない。胎土には砂が多く混じっている。		やや粗 良普灰	い通 褐
148 土 堀	-31 30 ハ・堀	6-3259 10.2 13.6 12.2 ハ-4E VII	全体の1/2が残る。口縁部は内外面から横ナデして仕上げている。体部外壁は不 定方向の刷毛によるナデで調整し、内面はナデで平滑にしている。底部には木壓 痕が付されている。器壁は外表面が円滑に仕上げられている。偏平な体部に、聞き気味 の広い口縁部が付く器形で、薄手の作りとなる。		良 良赤	いい色 褐
149 土 堀	-31 31 ハ・堀	7-2972-1 14.2 - - ハ-4 VII	口縁部を全く比較的の崩れで3/4を残す。肩部は横ナデ仕上げ。体部上半はナデ仕 上げと推測できる。体部下半身が底部にかけては刷毛の整形痕そのままで残す。 胎土は砂が混じるが良い。体部内面には粘土の輪廻痕が残る。		良 良普 赤	い通 褐
150 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-2999-1 18.7 24.8 24.7 7.0 ハ-4 VII・VIII	全体としては1/2が残る。口縁部は横ナデ仕上げされ、外面に断面三角形の尖帯 が付く。肩部外面には刷毛整形し、下半部はナデによって消されている。制部内面 は刷毛整形後にナデ仕上げされる。球頭でやや上げ底気味の平底になっている。 胎土に砂は少ないが焼成はあまり良くない。		良 良不 赤	い良 色 褐
151 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-3007-2 19.3 30.0 31.9 8.0 ハ-4 VII・VIII	全体の1/2程度が残る。口縁部は横ナデ仕上げ、外面には縫を作り、剥落が激し い。内面下半部の刷毛の跡があり張子だが、体部の外壁は刷毛整形された後にナ デ仕上げされている。胎土には砂粒が現じり、球頭の器形となる。器壁には煤 状の炭化物は付着しない。		粗 や 良 黄	い良 色 褐
152 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-2999-3 17.6 - - - ハ-4 VII・VIII	口縁部の1/2が残る。外面に低い稜を作るように横ナデされた口縁を持つ。 器壁外面は深彫れ形で、内面は縫のナデによって平滑にしている。口縁部の外壁 には煤が付着する。胎土には石粒が多く窑母も含む。やや厚めの作りとなってい る。		普 良 灰	通 色 褐
153 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-3001-3 16.2 - - - ハ-4 VII・VIII	口縁部の2/3が残る。口縁部の内外面は横ナデされ、特に外面のナデは丁寧、そ の結果、頸部は肥厚して作られた口縁部に向けて薄くなっている。体部内面は横の 刷毛整形、外面は斜めの刷毛整形が施されている。外面には煤が一面に付着している。 胎土には入粒の砂や窑母が含まれる。		や 良普 灰	粗良 色 褐
154 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-3001-4 15.0 - - - ハ-4 VII・VIII	口縁部の2/3が残る。口縁部の内外面は横ナデで仕上げられる。肩部はナデ仕上 げしている。内面は平滑に仕上げられているが、外面には粘土の張子や整形時 の凹凸を残している。胎土には砂や窑母が混じり、全体的に厚手の作りになって いる。		普 良 赤	通 色 褐
155 土 壺	-31 31 ハ・壺	7-3001-1 16.7 - - - ハ-4 VII・VIII	口縁部破片が残る。口縁部は丁寧に横ナデ仕上げされ先端を肥厚させている。口 唇部は底を作ることで底面は斜めに刷毛整形され、全面に煤が付着する。頸部 の内面には、指耕による整形痕が見られる。胎土は精緻な窑母を含む。		良 良 黄	いい色 褐
156 土 壺	-31 31 ハ・壺	6-3264 - - - ハ-4E VII	口縁部・体部の内外面は刷毛整形され、口唇部の先端だけ は横ナデしている。頸部の底曲は、それ程大きくならない。肥厚した口縁部は、先端 部に向けて薄くなり、横ナデで内窓気味に口縁部を丸く作っている。体部の外壁 には、次火力による深窓の剥落があるか、整形時の凹凸も残り、煤が付着する。		粗良赤	いい色 褐
157 土 壺	31 31 ハ・壺	6-3450-1 39.07 - - - ハ-5W VIIb	口縁部は内外面に横ナデされ、体部は内外両面に刷毛整形されている。肥厚した頸部の底曲 はそれ程大きくななく、横ナデの器形になる。口縁部は横ナデで内窓気味に丸く 作られている。		粗良灰	いい色 褐
158 土 壺	31 31 ハ・壺	6-3266 I 34.3 - - - ハ-4E VII	口縁部の1/2が残る。体部・口縁部の内外面は刷毛整形し、口縁部の先端だけが 横ナデされる。外面には整形時の凹凸が残り、煤が付着する。頸部の底曲は小さ い。口縁部は肥厚させ、光面の横ナデによって、口唇部を内窓気味に丸く仕上げ ている。		や 良 黄	粗 い 色 褐
159 土 壺	-31 31 ハ・壺	6-3255-4 31.0 - - - ハ-4E VII	口縁部の1/5が残る。口縁部の内外面が、横ナデされるが、丁寧に横ナデしてい るのは先端部で、外面には縫、内面には横の刷毛整形痕が残されている。この字 に付する頸部は底曲が残るが、口縁部先端に行方に從って薄くなり、口縁部 は内窓気味に丸く作る。外面は器壁の剥落が激しく、煤も付着する。		粗 や 良 赤	い良 色 褐

押岡 番号 写真図版	登録番号	法環cm 口 剝 器 底 径 高 度	技法・調整等の特徴		胎 焼 色	土 成 調
			出土位置			
雲母・形態						
160 -32	7-2981-2	18.5 — 25.2	ロ区出土器 124の次項を見よ。			
土 壱	ロ-6 VII・VIII					
161 -32	6-3473-1	19.3	口縁部の1/2が残る。口縁部は内外面から横ナデされ、体部内面は刷毛整形後にナデ調整され、外面は横方向の刷毛形がされている。口縁部は体部器壁より肥厚し、大きく外側し、口唇部に内層気味にして丸く作る。口縁部から頸部にかけての外面に焦が灰く付着する。口縁部内面には黒茶色の炭化物が付着する。	や 良 灰	や 褐	粗い色
土 壱	ハ-6E VIIc					
162 -32	6-3255-1	18.8	口縁部1/4が残る。口縁部は内外面から横ナデする。体部外表面は継の刷毛目で、内面には横の刷毛目が残される。体部から屈曲した口縁部は、やや肥厚し先端部をさらに外反気味に開き、口唇部に段を作っている。灰褐色と赤褐色の部分がある。	粗 良 灰	いい 褐	いい色
土 壱	ハ-4E VII					
163 -32	6-3378-4	17.0	口縁部の1/6を残す。口縁部は内外から丁寧に横ナデしている。体部外表面は継、内面には横の刷毛目が残っている。口縁部は、頸部で横曲し、中程で一段と大きく外反させ、先端部は水平に近くまで曲げて作っている。口唇部は丸い。体部から頸部の外面には焦が付着している。	粗 良 灰	いい 褐	いい色
土 壱	ハ-4W VIIc					
164 -32	6-3378-2	14.4	口縁部の1/5を残す。口縁部は内外から丁寧な横ナデ。体部の内面はナデ仕上げ、外表面は刷毛整形後に施状器具のナデで仕上げている。施で肩の体部から、くの字に外反する口縁部は、中ほどを少し肥厚させ口唇部を丸く作っている。器壁が黒変している部分が口縁部にある。	粗 良 灰	褐	いい色
土 壱	ハ-4W VIIc					
165 -32	6-3378-1	15.6	口縁部の1/5を残す。口縁部から頸部にかけて、内外共に横ナデで仕上げている。口縁部の先端の横ナデは丁寧で、口唇部を細く尖らせている。体部は内外面共に刷毛整形している。体部外表面に焦が付着し、口縁部内側には茶色の炭化物の染みがある。	粗 良 灰	褐	いい色
土 壱	ハ-4W VIIc					
166 -32	6-3257	18.6	口縁部の1/3が残る。口縁部は内外面から横ナデしているが、外面には刷毛目が薄く残っている。頸部からくの字に曲がり外反する、薄い作りの口縁部である。	や 良 灰	褐	粗い色
土 壱	ハ-4E VII					
167 -32	7-2972-3	17.5	口縁部の1/2を残す。口縁部の内外面が横ナデされ、胴部内面は継ナデ、外面はナデ仕上げされる。口縁部は胴部からくの字に曲がって外反し、口唇部は玉頭状に丸く作る。体部外表面には焦が部分的に付着している。	普 善 灰	褐	通い色
土 壱	ハ-4 VII					
168 -32	6-3378-3	14.0	口縁部の1/5を残す。口縁部は内外から横ナデしているが、外面に刷毛の整形痕が残り、内面には残らない。体部外表面は刷毛整形し、焦が面に付着する。体部の内面には部分的に焦が付着している。頸部でくの字に開く口縁部は、途中で肥厚させ先端部を玉頭状に作っている。	良 や 赤	褐	い良色
土 壱	ハ-4W VIIc					
169 -32	6-3266-2	20.0	全体の1/3が残る。口縁部の外表面は横ナデ仕上げされるが、刷毛目が薄く残っている。体部内面には、刷毛目が残されている。体部から屈曲した口縁部は、上半でさらに横に開き、口唇部を玉頭状に作っている。	や 良 黄	褐	粗い色
土 壱	ハ-4E VII					
170 -32	6-3396-2	14.8	口縫部の3/4が残っている。口縫部は内外から横ナデで仕上げているが、内外共に刷毛目が薄く残っている。体部外表面は横方向、内面は弱めの刷毛整形がされている。口縫部内面は、吹きこぼれた糞のように炭化物が付着している。口縫部外表面は、吹きこぼれた糞のように炭化物が付着している。	粗 良 赤	褐	いい色
土 壱	ハ-5E VIIc					
171 -32	6-3353	18.0	口縫部の1/3が残る。口縫部は内外から横ナデ、内面は横方向の刷毛整形後にナデ仕上げされ、外面は横横方向の刷毛形圓や凹凸を残している。口縫部内面や器壁外表面には焦が炭化物が付着している。体部からくの字に曲がる口縫部は、外縫い、先端が薄くなって口唇部を丸く作っている。	粗 良 赤	褐	いい色
土 壱	ハ-4W VIIc					
172 -32	6-3426-2	22.2	口縫部の1/6が残り、体部の大半を欠いている。口縫部は内外から横ナデされるが、外表面には刷毛の整形痕を残している。頸部内面下部にも刷毛目が残る。体部から屈曲する口縫部は、頸部中ほどで外反し、先端部は内層気味に丸く作る。	良 良 灰	褐	いい色
土 壱	ハ-5W VIIa					
173 -32	7-3001-2	18.8	口縫部の1/2を残す。口縫部から体部にかけて、横ナデで仕上げている。口縫部の先端の横ナデは丁寧で刷毛を薄くしているが、頸部には整形時の凹凸も残る。外表面は斜めの刷毛整形、内面には横に刷毛整形され、いずれも焦が炭化物が付着する。口縫部の外表面は一層力強くして、表面が剥落している部分もある。	普 良 灰	褐	通い色
土 壱	ハ-4 VII・VII					
174 -32	6-3287-1	15.0	口縫部の1/4が残る。口縫部は丁寧に内外から横ナデされる。頸部外表面は継、内面は横の刷毛整形がされている。体部からくの字に曲がる口縫部は内層気味に開き、先端は外反気味に丸く仕上げられている。外表面には全体に焦が付着している。胎土に砂が混じるが緻密である。	良 良 灰	褐	いい色
土 壱	ハ-4E VIIa					

拂 図 番号	登 錄 番 号	法量cm	技 法・調 整 等 の 特 徵			胎 上 成 色
写 真 図 版		口 刷 器 器 高 底	出 土 位 置	孫 径 高 底		
器種・形態						
175 土 壁	-32	6-3404-3	25.6	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外から丁寧に横ナデされている。体部外面は筋整形され、内面はナデ仕上げしている。やや肥厚する口縫部は体部から外側で立上がる。先端部は内側させ口唇部を薄くし、丸く仕上げている。口縫部の内側と脣部の外面に煤状の炭化物が付着している。	良 や や 黄 褐	い や 不 良 色
176 土 壁	-32	6-3397 1	25.7	口縫部の1/3が残る。口縫部は内外から横ナデされるが、外面には刷毛目が残っている。体部外面は斜めの刷毛整形で、内面は横に刷毛整形した後ナデ仕上げしている。肥厚した口縫部は外側で立ち上がり先端部を内側させて口縫部を丸く作っている。体部内面には炭化物が薄く付着する。	良 や や 黄 褐	い 良 色
177 土 壁 腳	-32	6-3053	-	脚部の1/4が残る。上半部には体部と脚の接合時のナデツケ痕や、整形時の凹凸刷毛目などが残る。脚内面の天井部には整形時の指痕痕が残るが、他はナデで平らに仕上げている。ハの字に開く脚で、脚部は内側に折曲げ二重を作る。胎土には砂、雲母等を多く含む。	粗 糙 黑	い 通 色
178 土 壁	-32	6-3266-3	19.3	口縫部の1/2が残る。口縫部は、内外から横ナデしている。体部外面はナデ仕上げしているが、刷毛目が残る部分もある。体部の内面には刷毛目を残している。体部から屈曲して立上がる口縫部は、上半部でさらに開いて曲がり、口唇部を少し肥厚させて丸く仕上げている。	や や 良 赤 褐	粗 い 色
179 土 壁	-32	6-3359-2	18.8	口縫部の1/3程度が残る。口縫部は内外から横ナデされる。外面は刷毛目が残るが、内面には残らない。体部内面はナデ仕上げし、外面は刷毛目を残している。体部から屈曲し、肥厚する口縫部は外側で立ち上がり口唇部を丸く作っている。	良 良 黄	い い 色
180 土 壁	-32	6-3426-3	18.7	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外から丁寧に横ナデされる。体部外面は筋方向の刷毛整形で、内面は整形時の凹凸を残し、斜め横の刷毛目が見られる。肩の張る体部から外側する口縫部が続いている。口縫部先端は内側氣味に丸くし、口唇部は尖って終わる。	良 や や 黄 褐	い 良 色
181 土 盆	-32	6-3397-3	14.8	口縫部の1/4程度が残る。口縫部から頸部にかけて、横ナデで仕上げられる。頸部内面はナデ仕上げしている。頸部で屈曲した口縫部は外側ながら立上がり先端部はやや内側氣味にして、口唇部を丸く仕上げている。胎土には細砂が含まれる。	粗 や や 黄 灰 白	い 良 色
182 土 壁	-32	6-3440-5	14.8	口縫部の1/4が残る。口唇部近くが内外面から横ナデされる。口唇部以下は、口縫部、体部共に、外面が刷毛整形している。体部から、くの字に曲がる頸部が肥厚し、口縫部にかけて外側しながら薄くなり、口縫部は内側させて丸く作っている。外面には炭化物が付着する部分もある。胎土には砂が多く含まれる。	粗 良 黄	い い 色
183 土 盆	-32	6-3255-2	18.6	口縫部の1/2を残す。口縫部は内外から横ナデされているが、刷毛の筋形痕を残す部分もある。体部から大きく屈曲する口縫部は、先端部を内側にして、口唇部を丸く作っている。体部内面の頸部には整形時の凹凸が残っている。	や や 良 赤 褐	粗 い 色
184 土 壁	-32	7-2998-2	14.8	口縫部の1/4が残る。口縫部は横ナデ仕上げ。体部内面はナデで平滑に仕上げ、外面は斜めの刷毛整形。頸部からくの字に曲がり、外反する口縫は先端で屈曲度を増し口縫部に口唇部を作る。外面には煤が全面に付着し、口縫部内面にも炭化物が付着している。胎土には大粒の石が混じり、焼成は比較的良い。	粗 良 黄	い い 色
185 土 壁	-32	6-3424-2	17.2	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外から横ナデされる。体部外面は刷毛整形され、内面はナデ仕上げしている。撫で肩で頸部の屈曲は大きくなり。外反する口縫部の先端は、内側氣味になり口縫部を丸く作っている。体部の外面には煤が付着し、内面にも同様に炭化物が付着する部分がある。	や 良 赤 褐	粗 い 色
186 土 壁	-32	6-3463-2	17.7	口縫部の1/3程度が残る。口縫部は内外から横ナデされる。内面は刷毛目が残るが、外面には残らない。体部内面はナデ仕上げし、外面は刷毛目を残している。体部から屈曲し、やや肥厚する口縫部は外側で立ち上がり口唇部を丸く作っている。内外面に炭化物は付着しない。	良 不 良 黄	い 良 色
187 土 壁	32	6-3455	13.4	口縫部の1/2と体部下半を欠いている。口縫部は内外から横ナデされるが、刷毛目が薄く残されている。体部は外面が縦、内面が横の刷毛整形となっている。口縫部は撫で肩の体部から屈曲し口縫部を丸く作っている。口縫部と体部の外面には煤が付着し、内面には炭化物が薄く付着している。	良 良 黄	い い 色
188 土 壁	-33	7-1335-5	11.8	全体の1/2が残る。口縫部の内外面が丁寧な横ナデで仕上げられている。内面はナデマワシで平滑にしている。天井部の外面には指痕痕の凹凸が残されている。胎土には砂や雲母が混じる。	や 良 赤 褐	粗 い 色
		A15gN Wb	12.5			
			5.2			
			-			

A15・本区

番号 写真閲覧版	登録番号	法量cm 口 深 度 器 底	技法・調整等の特徴		胎 焼 成 色	土 成 調
			出土位置			
				器種・形態		
189 -33 -31	7-1141 A15hN VII	10.8 12.1 4.7 -	全体の2/3が残る。口縫部は内外ともに横ナデ仕上げされる。体部内面はナデによって平滑仕上げ。体部外面の下半部には指頭痕状の凹凸が残り未調整。塵の張った体部に内壁する口縫部の付く器形になる。胎土は砂を含むが精緻。内面は濃った赤褐色になっている。		良 普 赤	い 通 色
190 -33 -31	7-962 A15eS VIIb	11.8 13.0 5.2 -	全体の2/3が残る。口縫部は内外から横ナデされる。内面はナデマワシによって平滑している。体部外面や底部には整形時の凹凸や粘土シワが残っている。半球形で口縫部が内壁し、口縫部を丸く作っている。胎土は細かく、赤色粘土粒を含んでいる。		良 や 赤	い 良 色
191 -33 -31	7-1334-2 A15gN VIIb	12.6 13.5 5.0 -	全体の2/3が残る。口縫部は横ナデ仕上げ、内面はナデで平滑に仕上げている。体部外面下半に指頭痕が残り、平底にしている。外面には煤が、内面にはこげ茶色の炭化物が付着している。口縫部が内壁する偏平な半球状の器形となる。焼成は良く、胎土には赤色粘土粒を含む。		良 良 赤	い い 色
192 -33	7-1295 A15iN VIIc	14.0 - 6.0 -	全体の1/3が残る。口縫部の内外面が横ナデされる。体部内面はナデマワシで平滑に仕上げている。体部の外表面は擦状器具でナデ仕上げしているが、底部周辺は整形時の凹凸が残り未調整。内面は黄褐色になっているが、外面底部は赤褐色である。		良 普 黄	い 通 色
193 -33 -31	7-1297-2 A15iN VIIc	11.9 - 5.9 -	全体の1/2が残る。口縫部の内外面が横ナデされる。体部内面には、あばた状の剥落があるが、ナデマワシによって平滑に仕上げられている。外面は刷毛目が薄く残るが、剥落が激しく調整法は分明ではない。胎土は砂を含むと旨す良い。		良 良 黄 赤	い い く 色
194 -33	7-1319-2 A15gN VIIbc	13.6 13.8 5.2 -	全体の1/4が残る。口縫部の内外面が横ナデして仕上げられる。体部の外表面は横方向に研磨磨され、内面は継方向に擦状工具で擦削磨している。底部は平底に作り木案裏が付されている。平底の底部から立ち上がる口縫部がやや内壁し、口縫部は丸く作っている。胎土には砂が多いが、硬質に焼き上っている。		粗 良 赤	い い 色
195 -33	7-1000 A15fS VIId	13.4 14.0 6.3 -	全体の1/3が残る。口縫部は外面から横ナデされ、体部内面はナデ調整される。外面は一見するところ底のようだが、粗い刷毛目（刷毛目？）で、器壁に對して深めに擦形している。口縫部は、性に内壁し、口縫部は丸く作っている。胎土には砂粒が多く混じっている。		粗 良 赤	い い 色
196 -33	7-1225 A15iN VIIc	12.7 - 5.4 -	完形品。口縫部は斜めのナデ、体部内面は擦状器具でのナデで平滑に仕上げている。体部外表面は、整形時の凹凸や刷毛目が残り、下部は擦削りして仕上げている。口縫部も平らには作られず、全体に粗い作りで、ロクロを使用していないものと考えられる。胎土は粗く砂、石が混じる。		粗 普 灰	い 通 色
197 -33 -31	7-1002 A15fS VIIc	14.8 - 5.5 -	全体の1/3が残る。口縫部は内外面から横ナデされているが、外面には紙、内面には横の刷毛目が薄く残っている。底部内面はナデで仕上げている。外面には整形時に粘土や擦形工具で作り上げたことが伺える、粘土の緊ぎ目が残っている。口縫部は平らにならず全体に粗い作り。		良 や 黄	い 良 色
198 -33	7-924-2 A15gN VIIb	16.6 - 8.1 -	全体の1/4が残り底部の一部を欠く。口縫部の先端を横ナデする。体部の外表面は刷毛形整後にナデ仕上げしているが、刷毛目や整形時の凹凸が残る。内面は擦状の器具でナデ仕上げし、下半には炭化物が付着している。胎土には雲母と砂が混じる。		粗 良 灰	い い 色
199 -33	7-910-2 A15g VIIa	14.2 14.6 - -	今体の1/2を欠く。内外面ともに丁寧な横ナデ仕上げとなる。体部に浅い沈線を置き口縫部と体部を画している。粗張器の杯蓋を模倣した上器である。大井部に窓の整形痕が認められそうだが分明でない。胎土には砂も含まず精選されていて。焼成はやや軟質だが良い。		良 良 黄	い 好 色
200 -33	7-1155-4 A15hS VII	13.8 14.6 4.5 -	模倣杯の蓋。全體の1/4を残す。口縫部は内外ともに横ナデして平滑に仕上げている。体部外面の上半には指頭痕状の凹凸が残る。窓は全体がアバタ状に剥落する。胎土には砂が混じり、内面は赤褐色、外表面は灰褐色。		良 普 灰	い 通 色
土 杯 蓋	7-1334-3 A15gN VIIb	13.6 13.9 4.1 -	全体の3/4が残る。口縫部の内外は丁寧な横ナデ仕上げ、内面はナデで平滑に仕上げている。大井部の外表面には整形時の凹凸が残る。平らに作った大井部が窓の部分で屈曲して口縫部を作成。土器蓋の模倣杯である。胎土には砂は無く、赤色粘土粒を含む。		良 軟 赤	い 質 色
土 杯 蓋	7-1335-6 A15gN VIIb	12.2 13.8 5.0 -	全体の1/3が残る。口縫部の内外を横ナデして仕上げる。体部の内面はナデマワシによって平滑に仕上げている。外面は指頭痕や擦形時の粘土のシワ等が残り未調整。受部が退化してしまった模倣杯の上器である。胎土には砂はないが赤色粘土粒を含む。		良 普 赤	い 通 色
土 杯 身	7-1334-1 A15gN VIIb	12.2 13.7 4.9 -	全体の1/2が残る。口縫部は横ナデ仕上げ、内面はナデマワシで平滑に仕上げている。口縫部の下半には整形時の指頭痕による凹凸を残す。受部が退化してしまった土器蓋の模倣杯である。胎土には砂は含まないが、焼成が良くなく表面が風化している。内面は黄褐色になっている。		良 不 赤	い 良 色

種別・形態 番号 写真図版	登録番号	法規cm 口 径 径 長 器 器 高 底 上 位 置	技 法・調 整 等 の 特 徴		脂 模 色	土 成 調
			横断面	内面		
土 杯 身 204	33	7-1177-3	一 14.2	焼成部で、体部の1/2が残り、口縁部の先端を欠く。口縁部の内外面は横ナデ仕上げされ、内面はミズビキの跡が残る。外面(底部)には整形時のものと思われる凹凸が残り未調整。	普良黄	通い色 褐
	-33	A15hS W	-			
土 杯 身 205	7-1177-4	? 13.8	横断環。口縁部の先端と底部を欠き1/3が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ、内面はミズビキの跡が残る。底部には凹凸が残り未調整。焼成はやや灰質で赤色新土粒を含む。	普良赤	通い色 褐	
	-33	A15hS W	-			
土 杯 身 206	7-1335-8	11.8 13.6 4.5	全体の1/4が残る。口縁部の内外面を横ナデして仕上げる。体部の内面はナデによって平滑に仕上げている。外面は整形時の粘土のシワや緊ぎ目が残り未調整。受部が退化してしまった横断環となるが歪みが大きい(口径11.8~12.0cm、最大径13.6~14.0cm)。胎土には赤色粘土粒を含む。	良普黄	い通色 褐	
	-33	A15gN Wb	-			
土 杯 身 207	7-960	12.4 -	全体の1/2が残る。口縁部と脚部が横ナデで仕上げてある。环底部外表面と脚の付け根部には整形時の凹凸や刷毛目が残っている。脚の内面は擦削りで整形され、天井部には环底部の突起粘土を押えた跡がある。坏部は側面形に開き、脚はハの字に開き脚部はさらに横に開く。	良良赤	いい色 褐	
	-33	A15fS Wb	9.8 8.8			
土 高 坏 208	7-1152-1	15.8	坏部の1/3が残り脚部を欠く。体部は横ナデ仕上げ、坏の底部外表面は凹凸が残り未調整。脚接合部のナデ付け脛もそのまま残る。坏部内面には煤状の炭化物が付着。	良良赤	いい色 褐	
	-33	A15hN W 最下層	-			
土 高 坏 209	7-1297-1	16.1 9.0	全体の1/2が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げ。坏部内面は平滑に仕上げるが、底部外表面には凹凸が多い。ハの字に開く脚の外表面は、整形時の内面が残るがナデ仕上げし、内面は笛で削って整形している。脚部は横に一段と開き横ナデして仕上げている。	良普赤	い通色 褐	
	-33	A15iN Wc	-			
七 高 坏 210	7-1177-2	17.0	坏部が残り脚部を欠く。口縁部内外面は横ナデされる。体部外表面の下半には凹凸が残り、粘土の緊ぎ目も残る。坏部内面には炭化物が薄く付着し、底面はナデマーキングで平滑にしている。焼成はやや灰質だが良い。	良良黄	いい色 褐	
	-33	A15hS W	-			
土 高 坏 211	7-1305-2	19.4 -	坏部の1/2が残り、脚を欠く。全体を横ナデで平滑に仕上げている。坏の底面にはナデ脛が残る。口縁部は、使用によるものか、摩滅が激しい。内面には黒変する部分もある。底部から崩壊した口縁部が直線的に開く器形になる。	良良灰	いい色 褐	
	-33	A15iN Wc	-			
土 高 坏 212	7-1413-4	16.0	坏部が残り脚を欠く。体部は横ナデで仕上げられている。底部からほぼ直線的に開く器形になる。底部の外表面は脚部に接合したさいの指印痕が残る。器形の割落が激しくその他の調整痕は不明。胎土には比較的砂が多い。	や不赤	粗良色 褐	
	-33	ホ-9 Wb	-			
土 高 坏 213	7-1154-2	17.3 -	坏部の1/2が残り脚部を欠く。内面には斜めの粗い刷毛目が薄く残る。坏部全体は刷毛整形の後に横ナデして仕上げている。胎土には砂は少なく、赤色粘土粒が混じる。全体的に序手で大きな作りになっている。	良普黄	い通色 褐	
	-33	A15hN W 最下層	-			
土 高 坏 214	7-1305-1	19.0 -	坏部の1/2が残り、脚を欠く。口縁部の内外を横ナデ仕上げする。体部内面はナデによって平滑に仕上げている。外面には粘土の緊ぎ目等が残るが、同様にナデ仕上げしている。体部の下半で横を作て脛出し、口縁部は大きく外反する器形の坏部となる。	や良黄	粗い色 褐	
	-33	A15iN Wc	-			
土 高 坏 215	7-1229-1	17.8 -	坏部が残り脚を欠く。全体を横ナデして表面を整えている。内面は平滑にしているが、内面には残るナデ脛も残る。底部外表面は凹凸が残り、未調整。脣の部分で脛を作て曲がる器形になる。胎土はやや粗く石粉を含む。	や良赤	いい色 褐	
	-33	A15iS Wc	-			
土 高 坏 216	7-1142-3	-	脚部の1/2が残り坏部を欠く。脚部は横ナデする。外面には整形時に出来たと思える凹凸が残る。内面は擦削りされる。ハの字に開く脚で、脚部をさらに脛出す器形になる。	普良黄	通い色 褐	
	-34	A15hN W	9.2			
土 高 坏 217	7-1230	-	坏部を欠く。ハの字に開く脚で、脚部は一段と広がる。外面にはナデ脣や刷毛目が薄く残り、脚部は横ナデされる。内面は擦削りして整形する。天井部には坏部底の突起粘土を押した指印痕がある。脚部はハの字に開き変している。	良普赤	い通色 褐	
	-34	A15iS Wc	9.2			
土 高 坏 218	7-1177-5	-	坏部を欠く。外面は整形時の粗えが面として残る。内面は笛で削って整形している。脚部は横ナデで仕上げる。天井部には、坏部底の突起粘土上を、指で押えて接合した指印痕が残る。	良良黄	いい色 褐	
	-34	A15hS W	8.6			

番号 写真版面	登録番号	法量cm 口 頭 部 器 高 度 底	技法・調整等の特徴		土成 色 焼 成 調	
			出 土 位 置			
			器種・形態			
219	-34	7 1335-7	- - - A15gN Wb	胸部のみ残る。脚部が丁寧に横ナデされる。外面には整形時のナデツケ痕や指痕が薄く残る。内山頂部には鎌による搔き出しの跡や窓削り等の整形痕が残る。胎土には雲母が混じる。	良 良 黄 場	いい 色
土 高 坏			8.4			
220	-34	7 1177-6	- - A15hS Wb	环部を欠き脚部が残る。外側は整形時の凹凸が残る。内面は鎌で削って整形し、脚部は横ナデで仕上げる。大井部には、环底部の突起状粘土を、指で押えた指痕が見られる。	や 良 黄 場	や い 色
土 高 坏			10.0			
221	34	7-1337-1	16.8	环部の1/2と脚を残す。体部の内面には刷毛目が残る。环底部の外側にも刷毛整形痕やナデツケの凹凸が残る。底部から直線的に立上がる口縫部を持つ环部に、脚部が横に大きく開く脚の付く器形になる。胎土には砂などは含まない。	精 良 普 亦	良 通 色
土 高 坏	-32		9.9			
222	-34	7-1155-3	- - A15hS Wb	高坏で口縫部を欠いている。ハの字に開く脚の外側には整形による凹凸が彫刻状に残り、脚部は横ナデされる。环部との境にはナデツケの跡が残る。环部の底には刷毛目と捺化物が付けられている。胎土に赤色粘土粒が混じる。脚の上半は、中実になっている。	良 普 良 黄 場	い 通 色
土 高 坏			13.6			
223	34	7-1337-2	14.0	环部の1/2を残し、脚を欠く。口縫部の内外を横ナデして仕上げるが、刷毛整形を失し去っていない。腹の張った体部に外輪する口縫部の付く横筋の高底である。内面には墨化物が一部一面に付着している。胎土に砂粒は無く、赤色粘土粒を含む。表面はあばた状に剥落する。	良 普 良 黄 場	い 通 色
土 高 坏			A15gN Wb			
224	-34	7-1155-2	15.8	全体の1/2が残る。口縫部は横ナデ、内面はナデまわしで平滑に仕上げている。半球形の体部から口縫部を開口させた、模倣高坏。体部下半の外側は凹凸や刷毛目等の整形痕が残され刻痕痕はない。胎土には赤色粘土粒が混じる。内面は赤褐色、外側は黄褐色となっている。	良 良 黄 場	い い 色
土 高 坏			A15hS Wb			
225	-34	7 1167-3	14.6	环部の1/3が残り腹部と脚部を欠く。口縫部は内外共に横ナデ。体部山面は腹に沿うるナデで半滑に仕上げている。体部外面は凹凸や刷毛目等の整形痕はない。半球形の体部に外方に屈曲させた口縫部を作る模倣高坏である。外面は赤褐色となるが、内面は赤褐色になっている。	良 良 黄 場	い い 色
土 高 坏			A15hN Wb			
226	-34	7-1001	13.5	ほぼ完形成。口縫部の内外、体部外面上半、脚付け根から脚部は横ナデで仕上げている。体部の内山は半滑に仕上げているが、体部外側は整形時の粘土のヒビリや縮れの痕跡が残されたままである。半球形の体部に外反する口縫部をつくり、口縫部は内壁気味に丸く作っている。脚はハの字に開く。	良 や 良 黄 場	い 良 色
土 高 坏	-32		9.3			
			10.0 A15fS Wc			
227	-34	7 1180-2	- - A15gN Wb	ハの字に開いた脚のみが残る。全体が丁寧な横ナデ仕上げ。内面の天井部には整形時のナデツケ痕が残る。全体的に厚手の作り。胎土には細かな砂と雲母を含む。	普 普 良 黄 場	通 通 色
土 高 坏			8.6			
228	-34	7-1166-3	- - A15hN Wb	环部を欠き脚が残る。全体は横ナデで仕上げられている。脚内面の上半には、环部との接合のためのナデツケ痕とナデ調整がある。模倣高坏の脚である。胎土には石が混じる。	普 良 亦 黄 場	通 い 色
土 高 坏			8.3			
229	-34	7 941	9.3	体部の1/2を欠く。口縫部の外側は内外から横ナデで仕上げている。偏平な球形の体部上半も横ナデで調整している。体部下半から底部はナデマッシで調整している。体部内面はナデ仕上げしている。全体に薄手の作りになっている。	良 良 黄 場	い い 色
土 増	-32		13.7			
			15.6 A15eN Wc			
230	-34	7-790-2	10.5	口縫部が残る。全体が横ナデされる。全体に薄い作りで、口縫部の先端は、内側のナデを強くしたためか特に薄くなり口縫部を丸くしている。	良 不 赤 場	い 良 色
土 増			A15fS Wb			
231	34	7-1466-2	9.5 12.0 10.0	体部の1/3が残る。口縫部は内外から横ナデされる。体部は内外とも刷毛整形しているが、底辺近くはナデで刷毛目を消している。全体に荒い作りで、胎土にも砂が多い。	粗 や 赤 不 褐 場	い 良 色
土 短頸壇			7.1 A15eN Wc			
232	-34	7-948	10.2 11.8 7.1	全体の1/2が残る。口縫部は内外から横ナデしている。体部内面は布状のものでナデ仕上げしている。体部外側もナデによって表面調整しているが、粘土の緊ぎ目や、整形時の凹凸が残っている。底部には基盤が黒変している部分がある。	粗 以 灰 場	い い 色
土 短頸壇			7.1 A15eN Wc			
233	-34	7-1305-4	15.0 - -	口縫部の1/10が残る。口縫部の内外面は横ナデして仕上げられる。体部外側は、斜めに刷毛整形される。内面は、整形時の指縫痕の凹凸を残すがナデ仕上げしている。全体に薄い作りで、内外面に煤が付着する。いわゆるS字口縫を持つ壇である。胎土には雲母と砂を含む。	粗 普 良 灰 場	い 通 色
土 壇			A15iN Wc			

辨 別 番 号	登 録 番 号	法量cm 口 径 深 度 器 高 度	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴		胎 土 成 色		
			出 上 位 度				
234	34	7-1307-2	16.6	口縫部の1/10を残る。口縫部は横ナデ仕上げ、体部外面は横に整形した後に、縦に刷毛整形される。II輪と体部の境に鷹状の器具で凹窓を引いている。内面は、炭化物が付着し、外面には煤が付着する。全体に薄い作りで、S字口縫を持つ型である。胎土には雲母と砂を含む。	良 良 灰 褐	い い 色	
土	甕	A15iN Wa					
235	34	7-1414-1	20.2	口縫部破片の1/3を残す。口縫部内外面は横ナデされ、なかほどを破るように肥厚させ口縫部は外傾する。体部外面には整形時の凹窓を多く残す。体部外面は斜め方向の刷毛目が残り全体に煤が付着している。胎土は砂が多く雲母も含む。器壁はクリーム色に近い。		粗 普 灰 褐	い 通 色
土	甕	ホ-9 Wa					
236	-34	7-902-3	16.8	口縫部の1/10を残すだけ。口縫部の内外面は丁寧な横ナデで仕上げている。体部外面は斜めの刷毛目を残す。内面は、頭部に整形時の凹窓を残すがナデ仕上げされる。頭部で抽出した口縫形は、口縫部を斜め横に引き出すように作る。胎土には砂が多く雲母も含む。	や 良 良 灰 褐	い い 色	
土	甕	A15hN VH					
237	-34	7-1166-5	33.7	口縫部の1/8が残るだけ。口縫部の内外を横ナデするが、内面は先端部だけで下半分には刷毛目が残り、外面には整形時の凹窓が残る。体部の外面は刷毛目を残し、内面には砂ナデ仕上げ。外面全体に煤が付着し、二次火力によって変質している部分もある。胎土に砂が混じる。	粗 普 灰 褐	い 通 色	
七	甕	A15hN VH					
238	35	7-1152-2	21.6	全体の1/2を残す。口縫部は内外ともに横ナデし厚手に作っている。器壁には凹窓が残るが全体がナデ仕上げされ刷毛目等の整形跡はみられない。内面の下半部の器壁の荒れが激しく、炭化物が付着している。外側は腰より上に煤が付着し、下半部には付着しない。胎土に砂粒が混じる。	粗 普 灰 褐	い 通 色	
七	甕	A15hN VH 最下層	22.4 21.5 7.3				
239	-35	7-1144-1	26.0	口縫部の1/2が残る。口縫部は内外面共に横ナデ仕上げされる。体部内面はナデで仕上げられ、外面は凸凹を残しナデなどの調整痕が確認できず、未調整か?。外面上には全体に煤が付着している。胎土には大きな砂粒が多い。	や 良 赤 黄 褐	利 い 通 色	
七	甕	A15hN VH					
240	-35	7-1336	21.2	口縫部の1/3を残す。体部の内面は籠状器具のナデによって半滑に仕上げている。口縫部外面は指鉗痕状の凹凸や粘土のシワがあり、肩部は刷毛整形される。外面には煤が一面に付着している。内面が灰褐色になっている。全体的に厚めの作り。	普 良 灰 褐	通 い 色	
土	甕	A15gN VHb					
241	-35	7-773-1	19.8	口縫部の1/2が残る。口縫部は内外から横ナデしている。体部の内外面はナデで器皿調整されている。撫で育つ体部から、くの字に屈曲する口縫部は、外輪気味に立ち上がり、口縫部を丸く作っている。体部外面には炭化物(煤)が付着している。胎土は緻密だが砂粒を多く含んでいる。	良 良 灰 褐	い い 色	
七	甕	A15fN VH					
242	-35	7-909-2	17.4	口縫部が1/4残る。口縫部が刷毛整形の後に横ナデされる。特に先端部の横ナデが丁寧。他は内外共に細かい刷毛で整形される。胎土に砂ではなく、宝珠が含まれる。焼成は良く、内面は赤褐色、外面は黄褐色に焼かれている。	良 良 黄 褐	い い 色	
七	甕	A15g VHb					
243	-35	7-922-2	17.8	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外ともに横ナデで仕上げ。頭部外面は縦の刷毛で調整し、内面は横方向の刷毛調整。口縫部は体部から緩やかに外反し口縫部は丸く作る。胎土には雲母と砂が多く混じる。内外共に粘土の繋ぎ目を薄く残す部分もある。	粗 普 灰 褐	い 通 色	
土	甕	A15gN VHb					
244	-35	7-1176-4	16.8	口縫部の1/4が残る。II輪部の内外が横ナデされるが、粘土の繋ぎ目が残る部分もある。頭部内面はナデ仕上げされる。頭部でくの字に曲がり外反する口縫は、先端部を丸くする。外面上には煤が、内面には炭化物が付着する。胎土には砂粒が混じる。	や 良 黄 褐	粗 い 通 色	
土	甕	A15hS VH					
245	35	7-828-2	16.6	口縫部の1/3を残す。口縫部の内外面は横ナデで仕上げている。体部外面は斜めの刷毛整形。内面は、頭部に整形時の刷毛目や凹窓を残すがナデ仕上げされる。頭部で曲がる口縫部は先端をさらに外に曲げ、口縫部は丸く作って終わる。体部外面には煤が全体に付着する。	や 良 赤 褐	粗 い 通 色	
土	甕	A15hSN VH					
246	35	7-1227-2	15.0	口縫部の1/2を残す。口縫部の内外面は横ナデで仕上げしている。頭部、肩部の外面はナデ仕上げされているが、菱形時の粘土シワや凹窓が残る。内面には籠状器具によるナデ痕も残る。全体に作りが粗い。胎土も粗く砂が多い。	粗 良 赤 黄 褐	い い 通 色	
土	甕	A15iS VHc					
247	-35	7-795	18.0	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外から横ナデしている。体部外面は綫方向の刷毛整形で、内面は横方向に刷毛整形されている。口縫部は体部から、外輪して広がっている。体部に比べて肥厚して作っている。口縫部は丸く、やや玉筋状に作っている。器壁に炭化物の付着はない。	粗 良 赤 褐	い い 通 色	
土	甕	A15fS VH					
248	35	7-909-3	?	口縫部が1/5が残る。口縫部から脣部にかけて刷毛整形の後に、軽く横ナデしている。頭部内面は、横向きの刷毛整形形状がそのまま残っている。頭部の屈曲は比較的少なく、外反する口縫部へと続き、口縫部は丸く作る。口縫は細断片のため不明。胎土には人粒の砂が混じる。	粗 良 赤 褐	い い 通 色	
土	甕	A15g VHb					

押 固 番号	登録番号	法量cm 口 器 高 度	技 法・調 整 等 の 特 徵	胎 焼 成 色	上 成 調
					写 真 版
器種・形態	山 土 位 置				
249	-35	7-1282-2	16.4 - - -	口縫部の1/4が残る。口縫部は内外が横ナデされる。外面には細かな刷毛目が薄く残る。体部の内面は横方向に刷毛整形成されている。内外面共に炭化物が付着している。薄い作りで、頸部での字に曲がり、口縫部は外反気味に立ち上がる。	や 良 赤 褐 粗 い 色
土 瓦	A15iN Wb2	-			
250	-35	7-1307-1	15.2 20.6 - -	全体の1/2、口縫部の2/3が残る。口縫部は横ナデで仕上げ、体部外面は整形時の凹凸を薄く残すが、ナデ仕上げされている。内面もナデで平滑に仕上げている。口縫部はくの字に曲がって外反し口縫部は角形に作る。外面には煤が厚く付着する。底部周辺には付着しないが、内面の底部周辺には炭化物が付着する。	良 良 赤 褐 粗 い 色
土 瓦	A15iN Wc	-			
251	-35	7-1479-3	19.7 28.0 32.0 - -	全体の1/3が残り底部をく。口縫部は内外共に横ナデ仕上げ。体部内面は横方向に窓のような器具で整形成した跡をそのまま残す。外面は斜め方向にナデ仕上げされ、表面には調整法が見えない程に煤が厚く付着している。胎土は粗く砂が多い。	粗 普 灰 褐 粗 い 通 色
土 瓦	ホ-9 Wc	-			
252	-35	7-909-4	25.2 - -	口縫部の1/5が残る。口縫部が刷毛整形成後に横ナデされている。特に内面のナデが「寧」字に刷毛目が消されている。体部も内外面共に刷毛整形成される。蝶状の模様物は内外面共に付着している。頸部の屈曲は緩やかで口縫部は肥厚させている。焼成がやや悪く表面の剥落が多い。	良 不 灰 褐 粗 い 良 色
土 瓦	A15g Wla	-			
253	-35	7-1337-3	25.0 - -	口縫部の1/2が残される。口縫部の内外を横ナデして仕上げる。頸部外面には刷毛目が残り、内面には整形時の凹凸が残る。頸部での字に屈曲した口縫部は外反し、口縫部を卡鉗状に作る。外面には一面に煤が付着している。	普 普 灰 褐 粗 通 通 色
土 瓦	A15gN Wb	-			
254	35	7-1272-3	16.7 - -	口縫部を1/4残すのみ。口縫部の内外面を丁寧な横ナデで仕上げている。口縫部は外反して立上がり、先端に行くにしたがって薄く作られている。胎土はやや粗く、器壁に炭化物の付着はない。	粗 普 灰 褐 粗 い 通 色
土 瓦	A15iN Wb2	-			
255	-35	7-828-1	17.4 - -	口縫部の1/2が残る。口縫部は横ナデされる。肩部は刷毛整形成で仕上げている。颈部の屈曲はほんの大きさではない。分厚に作られた口縫部は、やや外反しながら口縫部に向けて薄くなり先端を丸く作る。胎土には粗い砂を含む。外面には煤が付着している。	良 普 赤 褐 粗 い 通 色
土 瓦	A15hSN W	-			
256	-35	7-991	17.6 27.6 - 8.6	口縫部の1/3と体部下半が残る。口縫部は内外面から横ナデされる。体部外面は刷毛整形成でナデ仕上げしているが、刷毛目が薄く残っている。体部内面は窓状器具でナデ仕上げし、器皿表面に薄い模様の粘土(化粧粘土?)が見られる。底面外に使用による摩耗がある。外腹全面上に薄く煤が付着している。	良 や 赤 褐 粗 い 良 色
土 瓦	A15eN Wd	-			
257	-36	7-729-1	23.0 32.0 - -	全体の1/2が残る。口縫部は内外から横ナデしている。体部外面は斜め刷毛整形成され、内面は横に刷毛整形成した後にナデ仕上げし、底部近くはナデで刷毛目を消している。斜平球胸の体部に角形の把手が付き、口縫部は外側に立上がり先端部を内側に凹みにして口縫部を丸くしている。	良 良 黄 褐 粗 い い 色
土 瓦	A15iN VII	-			
258	-36	7-778	32.6 - -	口縫部の1/2が残っている。口縫部は内外から「寧」字に横ナデしている。体部内面はナデ仕上げされ、器皿内面に窓状の口縫部を丸く作っている。体部外面、口縫部内面に煤が付着している。体部内面下には炭化物が付着する。	粗 良 火 褐 粗 い 色
土 瓦	A15hN VII	-			
259	-36	7-902-1	25.2 26.4 - -	口縫部の1/2が残る。口縫部の内外面を横ナデで仕上げている。体部外面は斜め、内面は横の刷毛整形成がされる。偏平な球形となる体部の頸部から外反する口縫部は、先端を丸く肥厚させ、さらに横に曲げられる。外面には煤が全体に付着する。胎土には大粒の砂はないが、墨粉を含む。	や や 粗 火 粗 い 色
土 瓦	A15hN VII	-			
260	-36	7-1176-1	38.8 - -	口縫部の1/2が残る。口縫部の内外面共に横ナデされ、先端を内側に凹みにして仕上げる。体部の外面は横の刷毛整形成、内面は横方向に刷毛整形成している。外腹全面上に煤が付着している。胎土には小石が混じるが、砂は混じらない。器皿表面は茶褐色だが、断面は灰褐色となる。	良 良 茶 褐 粗 い 色
土 瓦	A15hS VII	-			
261	-36	7-1175-2	33.8 - -	口縫部の1/3が残る。口縫部の内外面を丁寧な横ナデで仕上げている。体部の内外面は窓によるナデで器皿を調整している。外面は、全体に煤が付着する。胎土は粗く2~4mm程度の砂粒が混じっている。器皿表面は赤褐色だが、断面は灰褐色になっている。	粗 良 赤 褐 粗 い 色
土 瓦	A15hS VII	-			
262	36	7-902-2	30.3 - -	口縫部の1/3が残る。口縫部は内外ともに横ナデされる。体部内面は整形時の凹凸を残すがナデ仕上げされる。体部の外面は刷毛整形成で、煤が付着する。口縫部の外面上には、整形時の凹凸や、吹きこぼれた様に炭化物のシミが付く。口縫部はくの字に屈曲し寸厚く作られる。	や 普 灰 褐 粗 通 色
土 瓦	A15hN VII	-			
263	-36	7-1176-3	17.8 - -	ほぼ口縫部の1/4が残る。口縫部の内外が横ナデされるが、整形時の粘土の緊ぎ目や凹凸が残る部分もある。体部の外面は窓ナデ(?)され、内面はナデ仕上げされる。口縫部はやや外反し、先端部を内側に凹みにくくする。外面には煤が付着し、口縫部内面には暗褐色の染みがある。胎土に墨粉が含まれる。	良 良 赤 褐 粗 い い 色
土 瓦	A15hS VII	-			

辨 別 番 号	登 録 番 号	法量cm 口 径 胸 器 高 度	技 法 ・ 調 整 等 の 特 徴	胎 上 成 色	
				胎 燒 色	成 調
器種・形態	出土位場				
264 上 土	-36 寶 塵	7-1166-1 Al5hN VII	20.5 - 毛整形、内面には横方向の粗い刷毛目が残る。頭部で屈曲する口縫部は、外反して立上がり先端を内側気味に丸く作っている。外面には部分的に煤が付着している。胎土には砂が混じる。	や 青 赤	粗 通 色 褐
265 土 土	-36 寶 塵	7-1190-7 Al5iS VIIa	22.8 - 毛整形され、内面は横に刷毛形をしている。頭部から、立上がり気味に外反する口縫部は、口縫部の上半に内外共に炭化物が付着している。外面は黒褐色だが内面は肌色になっている。胎土は灰く砂が多い。	粗 良 黑	良 通 色 褐
266 土 土	-36 寶 塵	7-934 Al5cN VIIa	19.6 - 頭部以下を欠く。口縫部は外側面には横ナデされるが、外面には整形時の凹凸が残り、内面には刷毛目が残っている。体部内面は刷毛形後にナデ調整され、外面は横方向の刷毛形がされている。口縫部は体部から2度屈曲し外反して立上がり、口唇部の外側を少し肥厚させ口唇部を丸く作っている。煤は付着しない。	良 良 灰	良 通 色 褐
267 土 土	-36 寶 塵	7-909-6 Al5g VIIa	18.0 - 口縫部が1/10が残るだけ。口縫部・頸部は刷毛整形後に横ナデされている。特に口縫部内面と頸部外面のナデが丁寧で刷毛の整形が消される。胸部から腰部する口縫部、口唇部は丸く作る。外全體に煤が付着し、口縫部の内面にも一部付着している。胎土には砂と雲母が混じる。内面は黃褐色。	良 青 赤	良 通 色 褐
268 土 土	-36 寶 塵	7-900-1 Al5gN VII	16.6 - 口縫部の1/4が残る。口縫部は刷毛整形後に横ナデ仕上げ。脣部外面は横の刷毛一日が残る、内面は横の刷毛整形と粘土の繋ぎ目も残る。「口縫部は頸部から緩やかに外反し、口唇部は丸く作る。体部の外面には全体に煤が付着している。胎土には砂が無く、焼成も良い。	良 良 灰	良 通 色 褐
269 土 土	-36 寶 塵	7-922-1 Al5gN VIIa	16.0 25.5 - 口縫部の1/4を残す。脣部から口縫部にかけて横ナデで仕上げるが、頸部、口縫部のナデが丁寧。口辺部の曲は大きくて、コの字形に曲がり口縫部の先は水平に近くなる。体部は偏平圓錐になり、外面は刷毛整形、内面は粘土の繋ぎ日がは残るがナデ仕上げ。破片のため口縫は分明ではないが16cmで示した。	良 青 灰	良 通 色 褐
270 土 土	-36 寶 塵	7-909-5 Al5g VIIa	19.8 - 特に内面のナデが丁寧で刷毛の整形が消される度合が多い。胸部で一度くの字に用曲させ、口辺部でさらには直角に屈曲させる。直立気味の頸部をつくり、口縫部先端は引上げ、口唇部は丸く作る。	妙 粒 少 亦	妙 粒 多 亦 褐
271 土 土	-37 寶 塵	7-1175-1 Al5hS VII	23.2 - 口縫部の1/2が残る。口縫部の内外面は横ナデされる、頸部の内面には整形時の凹凸が残り、板状の器具の小口を使ったナデで仕上げている。口縫部は厚手で、頸部で屈曲して外反する。外面には煤が厚く付着している。胎土には赤色粘土粒が混じっている。	普 普 亦	通 通 色 褐
272 土 土	-37 寶 塵	7-1144-2 Al5hN VII	16.6 - 口縫部の1/2が残る。口縫部外面は横ナデで仕上げているが、刷毛整形が完全に消していない。頸部の外面は磨研磨されている。頸部で屈曲する口縫部は、先端部を傷つき内側気味になる。外面全體に煤が付着し、内面には部分的に炭化物が付着する。	妙 粒 少 亦	妙 粒 多 亦 褐
273 土 土	-37 寶 塵	7-1175-3 Al5hS VII	17.6 - 口縫部の1/4が残る。口縫部の内外面を丁寧な横ナデで仕上げている。体部の内面はナデで仕上げ、外面は刷毛目が残る。口縫部は内側し口唇部は丸く作り出している。外面には煤が付着する。内面には炭化物が付着し黒褐色になる。窓壁外表面は赤褐色だが、断面は灰褐色をしている。	や 良 亦	や 良 通 色 褐
274 土 土	-37 寶 塵	7-1229-2 Al5iS VIIc	17.9 - 口縫部の1/2が残る。口縫部は横ナデされるが内外面に窓壁は肥厚させ、先端を少し外反させ、口唇部を丸く作る。全体に厚い作りとなっている。内面には炭化物が薄く付着している。	粗 普 良	粗 普 通 色 褐
275 土 土	-37 寶 塵	7-1331-3 Al5gN VIIb	19.8 - 口縫部の1/8が残る。口縫部の内外面が横ナデされる。外面には粘土の繋ぎ日や整形時の凹凸が残る。窓壁の内面にも整形時の指輪底痕が残される。頸部で屈曲した口縫部は、中ほどが肥厚し先端部は薄く作る。表面は薄く模様に削落している。内面は灰褐色になる。	や 良 亦	や 良 通 色 褐
276 土 土	-37 寶 塵	7-1331-2 Al5gN VIIb	23.8 - 口縫部1/3が残る。口縫部の内外面とともに横ナデ仕上げ。内面は頸部に整形時の凹凸が残るが、ナデ仕上げされる。頸部で屈曲する口縫部は、やや肥厚して立上がり、先端部を少し外反させ口唇部を丸く作って終わる。器壁に内外面ともに煤が付着する。特に外側の付着が著しい。	良 や 灰	良 や 通 色 褐
277 土 土	-37 寶 塵	7-1466-1 ホ-9 VII	16.9 19.5 - 口縫部の1/3が残り、体部半を欠いている。口縫部は内外から横ナデしている。体部外表面は刷毛整形で、内面にはナデ仕上げされている。口縫部は外側して立上がり、口唇部は屈曲状に丸く作っている。体部外表面には煤が付着し、刷毛目は使用による擦れで消えている部分もある。内面にも炭化物が付着している。	粗 良 黄	粗 良 通 色 褐
278 土 土	-37 寶 塵	7-827-1 Al5hS VII	17.6 - 全体の1/2が残り下半部を欠く。口縫部外表面が丁寧に横ナデで調整される。体部外表面は粗い刷毛の凹凸があり、内面には横の繋ぎ目が残るが、斜め機械の刷毛整形。窓壁の内面はそれ程大きではなく、軽く刷毛形になる。外面全体に煤が薄く付着し、内面にも炭化物が付着して、灰褐色になる。胎土に砂粒が多い。	粗 普 亦	粗 普 通 色 褐

番号 写真図版	登録番号	法量cm II 径 高 器 底	枝法・調整等の特徴		胎土 焼成色
			出土位置		
			器種・形態		
279	-37	7 1479-2	14.8 14.6 — —	全体の2/3が残り、体部下半を欠く。口縁部の外表面を横ナデで仕上げる。体部外表面には刷毛目が残り、内面はナデ仕上げしている。外面の肩部以上には煤が全面に付着、以下は付着しない。内面上半にも炭化物が付着している。胎土は砂がまじる。	やや粗い褐色 普通灰褐色
280	-37	7-729-2	15.4 16.5 ? —	全体の1/3が残り、体部の下部を欠いている。口縁部は内外から横ナデされる。体部は内外共に刷毛整形がされている。撫て肩の体部にくの字に彫かる口縁部を持ち、口縁部をやや肥厚させる。長脚で平底の器形である。体部外表面には煤が付着し、内面には炭化物が器底を基準としている部分もある。	やや粗い褐色 良灰褐色
281	-37	7 760	15.1 18.5 — —	口辺部の1/4が残る。口縁部は内外から横ナデされる。体部内面は横に、外表面は横に刷毛整形されている。撫て肩の体部からやや肥厚した口縁部が外側で立上っている。口唇部は丸く作っている。外表面全面に煤が厚く付着し、内面も炭化物の付着で黒ずんでいる。	良黄褐色
282	-37	7 1469-1	18.8 — — —	口縁部の1/4が残る。口縁部の外表面は横ナデ仕上げ、体部は内外共に刷毛目を残す。体部外表面に全面に煤が付着する。口縁部の内側にも薄く炭化物が染み付いている。口縁部は先端を水平近くまで横方向に折り曲げ、口縁部を丸く作る器形になる。胎土は砂、雲母が混じる。	粗良灰褐色
283	-37	7 1190-8	22.3 — — —	口縁部の1/8が残されている。口縁部内表面は横ナデされ、外表面は横に刷毛整形がされている。頭部で大きく肩曲する。口縁部は、外反して立ち上がり先端部を内脣気味に丸く作る。胎土は粗く砂・雲母が混じる。外表面は黒褐色だが内面は肌色に近い黄褐色。	粗良黑褐色
284	-37	7-1166-4	19.4 — — —	口縁部の1/4を残す。体部の外表面は継の刷毛仕上げ、内面は刷毛目が薄く残り刷毛整形した後にナデ仕上げしたことが伺える。撫て肩の体部から、大きく外反して立ち上がる口縁部は、先端部を内脣気味に丸く作っている。胎土はやや粗く雲母を含む。	や良黄褐色
285	-37	7-1226-1	18.6 — —	口縁部の1/4が残る。横ナデされるが刷毛整形が薄く残る。頭部外表面は継に刷毛整形され、内面はナデ仕上げ。外反する口縁部は、先端部を内脣気味に曲げ、口縁部を丸く作る。器壁には炭化物などが付着しない。胎土はやや粗く砂を含む。	粗良黄褐色
286	-37	7-1175-4	22.5 — — —	口縁部の1/5が残る。口縁部の内外共に横ナデされ外反気味に立ち上がり口縁部はやや内脣気味に終わる。頭部外表面には指印状の凹凸が残る。体部はナデ仕上げされる。胎土はやや粗く砂を含まない。器壁の外表面は赤褐色、内面は灰褐色。	や良黄赤褐色
287	-37	7-1156	18.0 — — —	口縁部の1/4が残る。口縁部の内外が横ナデされる。体部の外表面は継に刷毛整形され、内面は横に刷毛整形している。撫て肩の体部から頸部で肩曲する口縁部は、先端部をさらに外方に外反させる。外表面には煤状の炭化物が付着しない。	良赤褐色
288	-37	7-1176-2	18.0 — — —	口縁部の1/4が残るだけ。口縁部の内外共に横ナデされるが、刷毛目が薄く残る部分がある。体部の外表面は継の刷毛整形され、内面はナデ仕上げされる。胎土は粗く砂も多く含む。撫て肩の頭部からくの字に彫かる口縁部はやや外反し、先端部を内脣気味に丸くする。内面は暗褐色だが外表面は黄褐色。	普通良黄褐色
289	-37	7-773-2	— — — —	底部が残る。体部外表面はナデ仕上げしている。内面には刷毛目が残り、底部内面はナデマッキンで器面を調整している。内外共に煤は付着していないが、器壁が崩壊している部分がある。器壁は比較的薄く、底部は平底に作っている。	や良灰褐色
290	-37 -32	7-944 A15eN VIIc	12.1	体部を欠き、脚部の3/4が残る。外表面は継、内面は横に刷毛整形している。脚部は内外から横ナデし、体部と接する上半部にはナデの痕跡がある。ハの字に直線的に開く脚である。体部底面と脚の外表面に煤が付着している。	粗普灰褐色
291	-37	7-1009	— — —	体部を欠き、底部が1/4残る。脚部は内側に折り重ねている。外表面とも刷毛整形される。脚の付け根には、煤が付着している。内面の天井添付近にも同様に煤が付着している。破損断面の様子から体部の底に脚を貼り付けたことが知られる。	良良灰褐色
292	-37 -32	7-964 A15fS VIIb	14.9	体部を欠き、脚が残る。ハの字に開く脚で脚部は折り重ねている。外表面とも刷毛整形されている。脚外表面の付け根の部分に煤が厚く付着している。内面にも煤の付着する部分がある。	良良灰褐色
293	-37	7-1176-5	— — —	脚付窓の脚部が残るだけ。ハの字に開く脚で全体に分厚い作りである。外表面とも整形時の刷毛目や指印痕を残す。体部の底面にあたる部分には炭化物が厚く付着している。胎土は粗く砂が多く含む。	粗良灰褐色
		A15hs VIII	11.7		

番号	写真図版	登録番号	法量cm 口 径 高 度 径 深 度 器 種 ・形 態	山土位置	技法・調整等の特徴		粘 土 成 性 色	
A16区								
294	-38	7-1324-4	12.0 13.8	受部が退化して破となってしまう撓曲部で、口縁部の1/2が残る。口縁部の内外面が横ナデされる。他は器歯の摩耗が進んで観察できない。胎土には赤色粘土粒を含み、整形時のシワが残る部分もある。	良軟赤	い質色 福		
土	杯	身	A16aN WB					
295	-38	7-913-1	- -	坏部の1/3と脚下半を欠く。口縁部の内外面が横ナデ仕上げ、内面はナデ仕上げ。体部外面に粘土の繊毛目が残り未調整。内面には煤状の炭化物が付着する。器壁の表面はあばた状に小さな孔がある。	良や 黄	い質色 福		
土	高	坏	A16aS WA	14.0				
296	38	7-1327-2	14.8	坏部の1/2が残り脚を欠く。口縁部の内外面が横ナデ。体部の内面はナデ仕上げ、外表面は整形時のシワも残り未調整。胎土には砂を多く含み器壁の表面に砂のブツブツが目立つ。坏部の内面は黄褐色。	良 良 赤	い 良 色 福		
土	高	坏	A16aN WB					
297	38	7-849-2	-	坏部の大半を欠き、脚部が残る。脚の外面は横ナデされるが、ナデツケの整形範囲を消すまでは至っていない。内面は粗い刷毛目が残り、坏部との接合部は指で押さえている。撓曲高坏の脚となるものである。胎土には砂粒を含む。	粗 や 赤	い 良 色 福		
土	高	坏	A16aN VII	9.8				
298	-38	7-1328	16.6	坏部の1/2が残り脚を欠く。口縁部は外表面が横ナデし、坏部内面はナデ仕上げで平滑にしている。底盤の外面には凹凸が残り未調整。器壁の荒れがひどく、その他の調整法が不明。胎土には砂が多い。	粗 不 赤	い 良 色 福		
土	高	坏	A16aN WB	-				
299	-38	7-886-1	31.0	口縁部が1/4残る。口縁部の先端の内外面は横ナデし、下部との境に低い稜を作っている。稜より下は刷毛目を残し粘土の繋ぎ目の凹凸も残る。内面はナデ仕上げされ、刷毛目を残さない。器壁外表面には全体に煤が厚く付着している。	粗 普 黄	い 通 色 福		
土	壺	A16aS VII						
300	-38	7-849-5	17.8	口縁部の3/4と調節部下半を欠く。L字縫内外面から肩部にかけては横ナデ仕上げ。肩部内面には擦拂ける様な指痕模様が残る。肩部の内外面には粗い刷毛目が残る。L字縫部は中ほどで後を作るよう肩出し重厚に作られる。胎土はやや粗く砂粒を含む。	粗 や 黄	い 良 色 福		
土	壺	A16aN VII						
301	-38	7-1321-1	19.5	L字縫部のほぼ1/2が残る。口縁部の内外面は横ナデ仕上げだが、内面には刷毛目が残る。体部は内外面共にナデ仕上げ。肩部でくの字に曲がり肩部で脇らむ器形となる。口縁部外表面に煤が付着する。L字縫部は丸みを持った角形になる。内面はクリーム色。	良 不 黄	い 良 色 灰		
土	壺	A16aS VII						
302	-38	7-849-8	13.5	L字縫部の2/3が残る。口縁部内外面は横ナデされ、厚手に作っている。内面に刷毛目が残る。器壁が内外面共に荒れている。胎土には砂粒を多く含む。	粗 不 肌	い 良 色		
土	壺	A16aN VII						
303	-38	7-886-3	18.8	口縁部の1/3が残る。口縁部内外面は横ナデ仕上げている。肩部は内外面共に刷毛仕上げとなる。器壁は比較的厚く、口縁部は丸みを持った角形になる。器壁には内外共に煤状の炭化物が付着する部分がある。胎土には粗い砂粒があり、赤褐色の焼き上がりとなっている。	粗 良 赤	い 良 色 福		
土	壺	A16aS VII						
304	-38	7-1323-3	24.8	全体で1/2程度が残り底部を残す。口縁部は内外面共に横ナデ、体部はナデ仕上げ。外表面は整形時の凹凸を残す。器壁の外表面と口縁部内面の一部に煤が付着する。特に胴部には煤が層として付着する。体部下半には一次火力により器壁が赤走する部分もある。内面も炭化物のためか黒色になっている。	粗 良 赤	い 良 色 福		
土	壺	A16aN WB	31.0 29.0					
305	-38	7-871-2	15.0	光形品。口縁部は内外面から横ナデされる。体部外表面は斜めに刷毛整形され、	粗 普 灰	い 通 色 福		
土	壺	A16aS VII	18.6 14.0	整形時の凹凸も残る。底部は粗い作りだが平底で作っている。体部内面には細かな刷毛目が横方向に残り、底面近くには粗い刷毛目が残されている。				
306	-38	7-886-2	28.8	口縁部の1/3が残る。口縁部の内外面が横ナデされるが、外表面に刷毛目が残る。口縁部は外反しながら立上がり、口肩部は丸く仕上げられる。器壁外表面には全体に煤が付着する。胎土は粗く砂が多く含まれ、器壁内面はクリーム色となっている。	粗 普 黄	い 通 色 福		
土	壺	A16aS VII	-					
307	38	7-906-1	28.0	口縁部の1/4が残る。口縁部内外面は横ナデ仕上げているが、刷毛目を消し去るんではなくては至っていない。胴部は内外面共に刷毛仕上げとなる。口縁部は薄手で外反しながら開く、肩は丸みを持って窓、器壁も薄手。器壁外表面には全体に煤が付着し、内面は黄褐色となる。	粗 良 黄	い 良 色 福		
土	壺	A16aS VII						

種 図 番号	登 記 号 写真版面	法量cm	胎 塗 色
		L 径 横 径 器 器 高 度 底	成 調
器種・形態	出 土 位 置	技 法・調 整 等 の 特 徵	
308 土 鉢	7-809 A16aN VII	17.6	良 や 不 い や 良 色
		18.4 12.0 -	良 や 不 い や 良 色
309 土 鉢	7-822 A16aN VII	18.2 20.0 30.7	粗 良 灰 暗 良 良 灰 暗 い い 色
		全体の3/4が残る。LII縫部は内外から横ナデしている。体部の内面は細かな目の刷毛で整形している。外面も同様な刷毛整形がされているが、整形時の凸凹を残している。体部外端の下半部から底面に瘤付着している。内面にも炭化物が付着する。口縫部がやや内腫し底部を丸底に作る彌形である。	
310 土 鉢	7-904 A16aS VII	16.6	粗 良 黄 暗 良 良 黄 暗 い い 色
		口辺部の1/3程度が残る。口縫部は内外面から横ナデされる。外面は縦方向の刷毛整形、内面はナデ仕上げされ、刷毛目は残っていない。口縫部は彌て前の体部から緩やかに外腫して立ち上がり、口縫部を丸く作っている。内外面共に煤や炭化物が付着していない。	
311 土 鉢	7-1323-2 A16aN VIIb	14.2	粗 良 灰 暗 良 良 灰 暗 い い 色
		口縫部の部分が1/4が残る。口縫部は内外面共に横ナデされ、体部は刷毛仕上げとなっている。口縫部は頭部でくの字に曲がり口縫部は外縦する坦面を作る。外面には一面に煤が付着する。	
312 土 鉢	7-880-2 A16a VIIc	13.5	粗 良 黄 暗 良 良 黄 暗 い 通 色
		脚の2/3が残り、体部を欠いている。ハの字に開く脚で、脚輪は折り返して肥厚させている。内外面とも刷毛整形されている。外面の脚付け根と内面天井部に瘤が付着している。胎土は粗く、砂が多い。体部底面にも刷毛目が残っている。	
313 土 鉢	7-1171-1 A15hs S VII A16bs S VII	- - 12.1	粗 良 灰 暗 良 良 灰 暗 い い 色
		台付脚の脚部に当たるもの。器邊の外端は整形痕と見える刷毛状整形具や指揮痕等の圧痕が残る。内面は平滑なナデ仕上げ。次次の火力を受けていたために脚部外端、脚の付け根の断面、蓋の底面内面のいずれにも炭化物が付着して黒光りしている。破損後の一次的な使用によるものか?	
314 土 鉢	7-906-3 A16aS VII	- - 11.9	粗 良 黄 暗 良 良 黄 暗 い 通 色
		脚付の蓋の脚。器壁が厚くどっしりと作られている。表面はナデ仕上げ。脚輪や内面には指輪による整形痕がそのまま残る。胎土は粗く灰褐色となる。	

伊場遺跡発掘調査報告書 第7冊

伊場遺跡遺物編5

1990年3月31日 発行

編集 浜松市博物館
浜松市蜆塚四丁目22番1号

発行 浜松市教育委員会
浜松市元城町103-2

印刷 株式会社開明堂

写真図版 I



A 大溝イ・ロ・ハ区 VII層発掘状況（北から）



B 大溝八区 VII層、イ・ロ区VII層発掘状況（北から）

写真図版 2



A 大溝口・ハ区 Ⅶ層発掘状況（南から）



B 大溝断面（Ⅶ層）（ハ4区付近）

写真図版 3



A 大溝断面（Ⅶ層）（ハ1区北壁）



B 大溝断面（イーホ区大溝西縁）

写真図版 4



A 大溝A 15・16区 VII層 発掘状況（北から）



B 大溝イ・ホ・A 15-16区 VIII層 発掘状況（南から）

写真図版 5

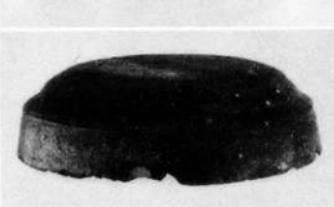
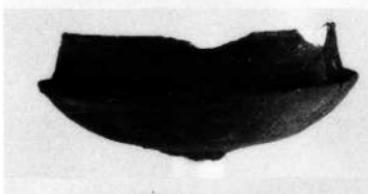


A 大溝A 15・16区 VIII層発掘状況（北から）

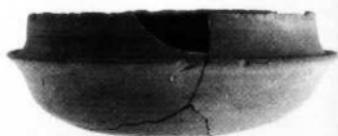


B 大溝イ・ホ・A 15-16区 VIII層発掘状況（南から）

写真図版 6



写真図版 7



19



20



24



21



26



25



27



28



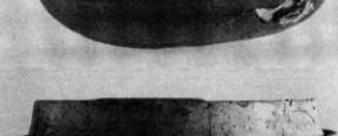
30



29



32



33



35



34

写真図版 8



36



37



39



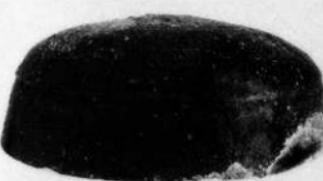
58



41



66



43



44



70



68

写真図版 9



69



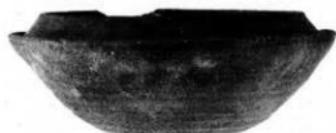
72



76



82



84



85



94



91



95



97



107



98



99



103

写真図版 10



写真図版 II



149



150



152



154



157



162



159



166



168



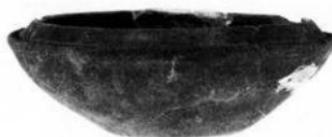
169



170



173



180



175

写真図版 12



195



196



198



199



202



207



208



209



214



215



217



218

写真図版 13



225



228



229



230



237



240



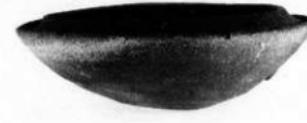
242



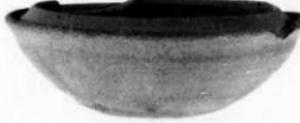
245



246



249



251



253

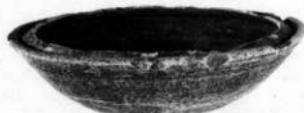


255



256

写真図版 14



257



258



259



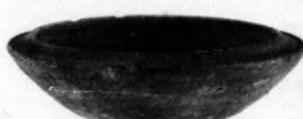
260



261



262



263



264



266



267



280



273



284

写真図版 15



287



289



288



295



291



300



294



307



297



305



314

写真図版 16



324



316



326



318



330



325



332



329



341



342

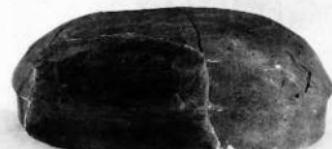
写真図版 17



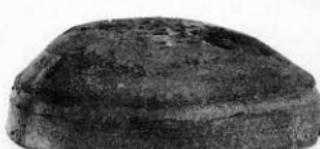
348



350



351



353



356



357



361



363



364



370



375



377



379



380

写真図版 18



381



382



413



386



387



414



394



415



398



409



416

写真図版 19



419



422



431



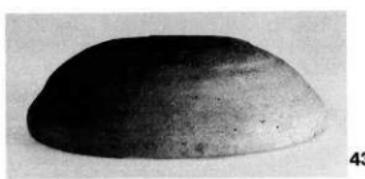
437



440



441



439



443



442



446



444



454



448

写真図版 20



461



465



462



466



471



470



474



480



483



484



493



498

写真図版 21



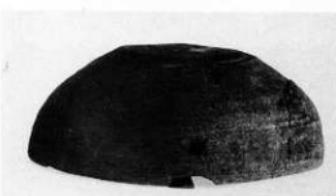
500



502



505



506



511

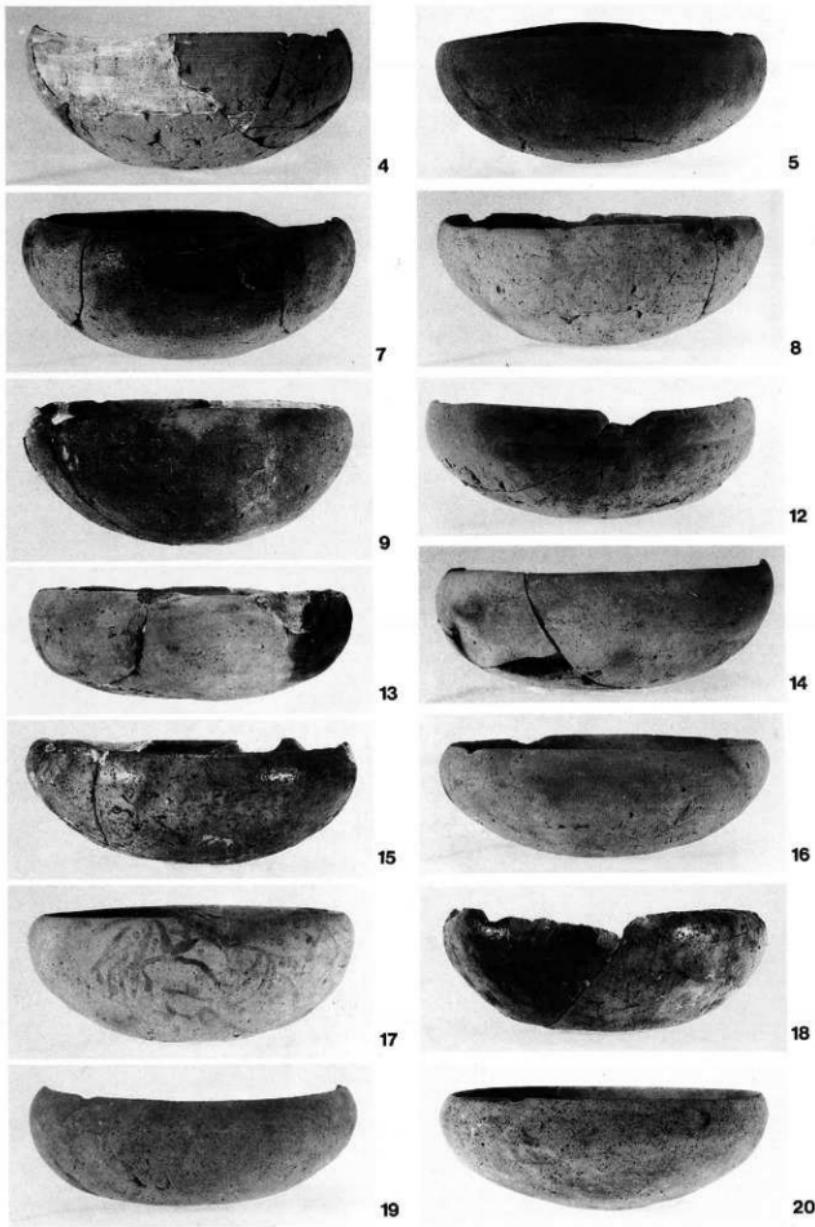


510

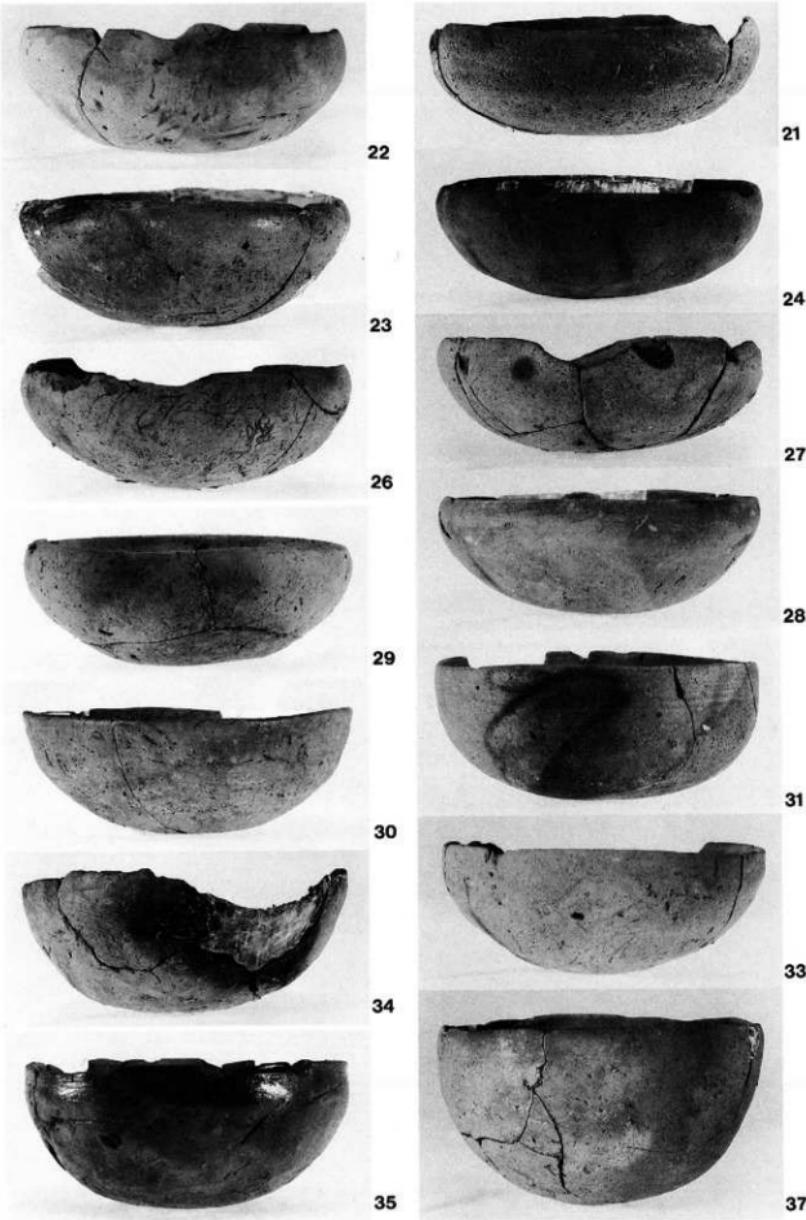


1

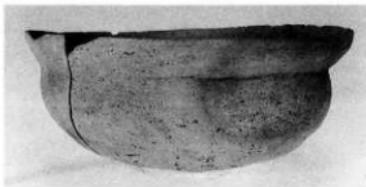
写真図版 22



写真図版 23



写真図版 24



38



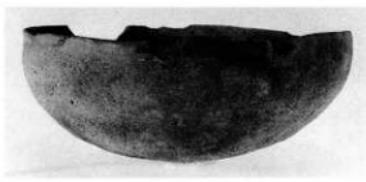
39



40



41



42



43



46



47



48



49

写真図版 25



50



51



52



53



54



55



56



57

写真図版 26



58



59



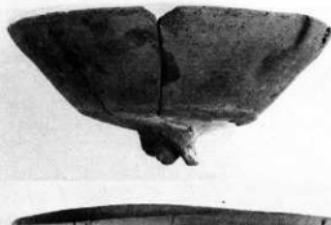
60



61



63



64



65



66



71



73



74



80



76



83



72



82

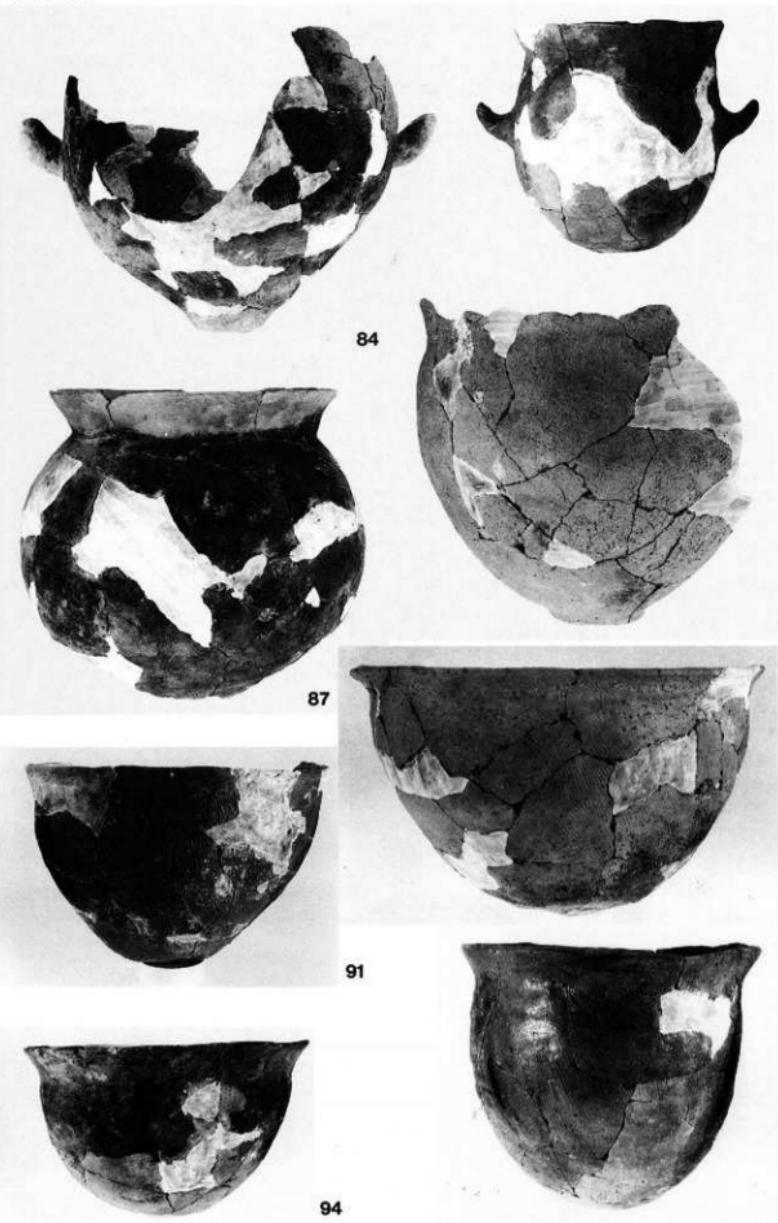


79

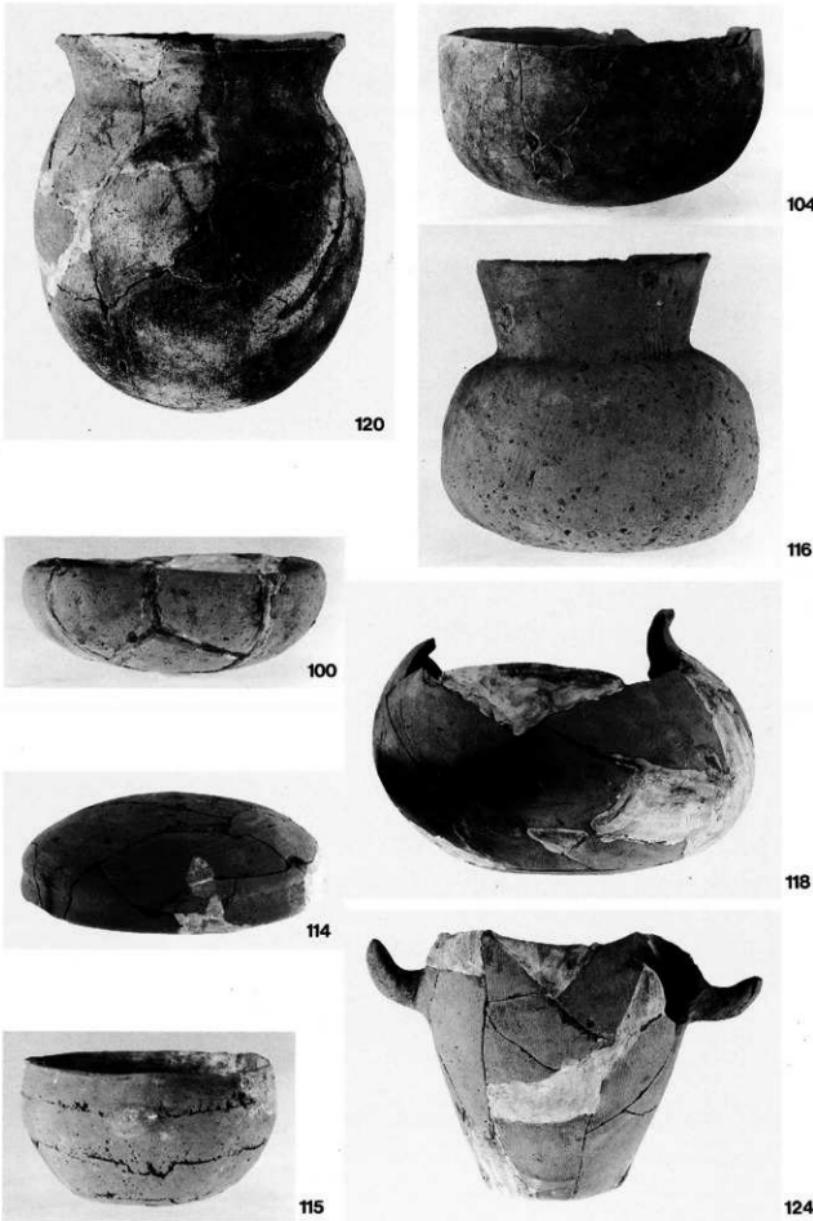


78

写真図版 28



写真図版 29



写真図版 30



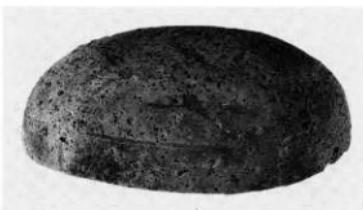
125



126



130



139



137



142



143

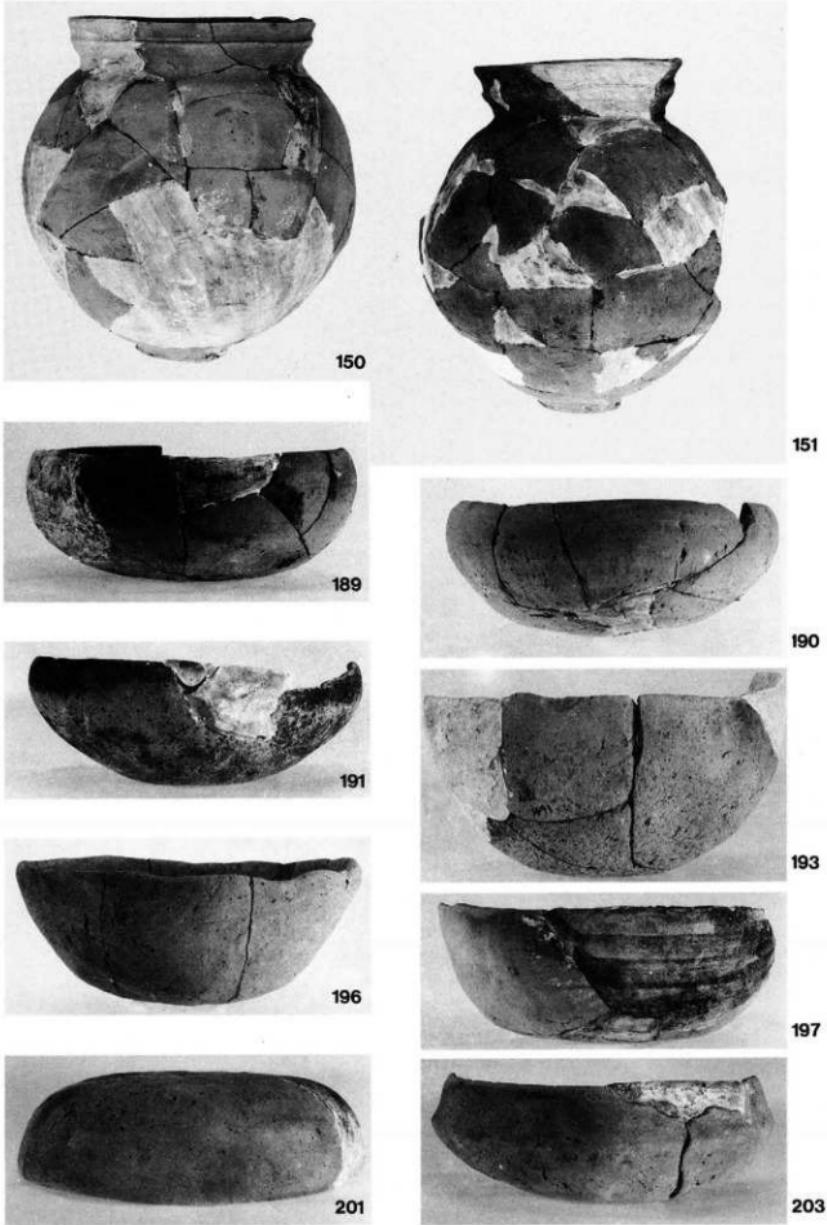


148

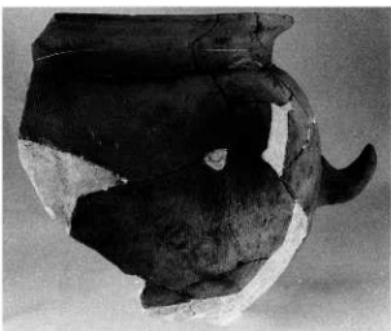


145

写真図版 31



写真図版 32



写真図版33



308



305



304



309

